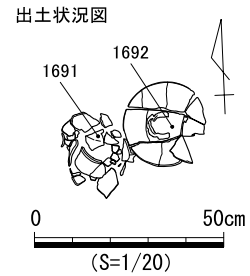
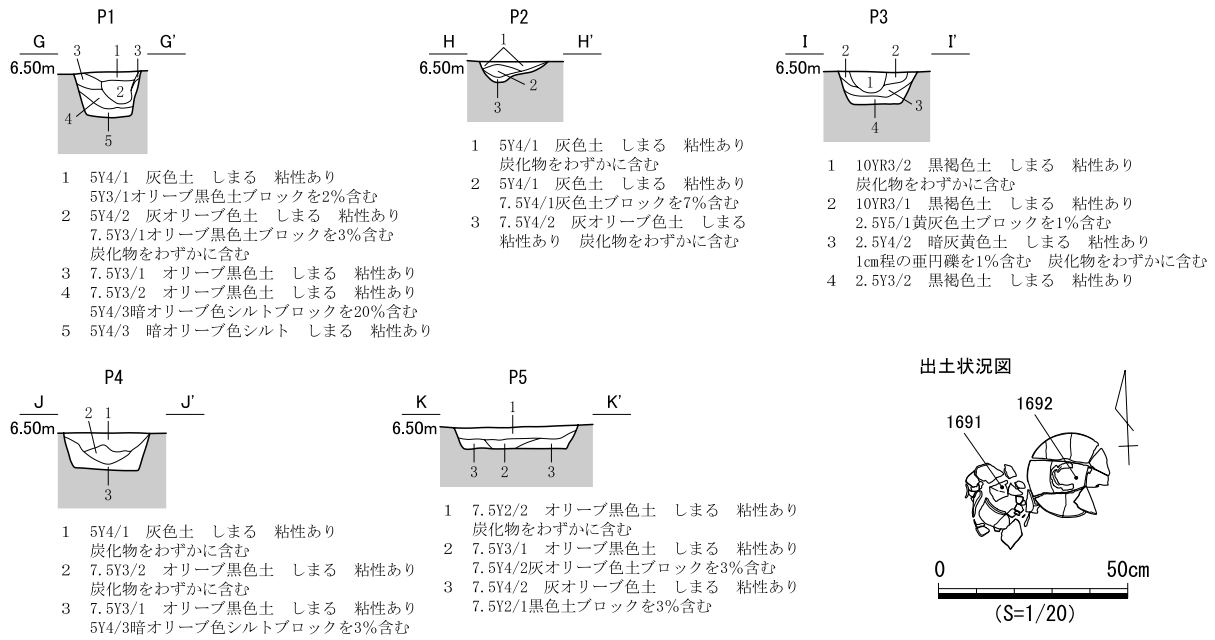


図 614 SB352 遺構図 (1)



掘形完掘状況

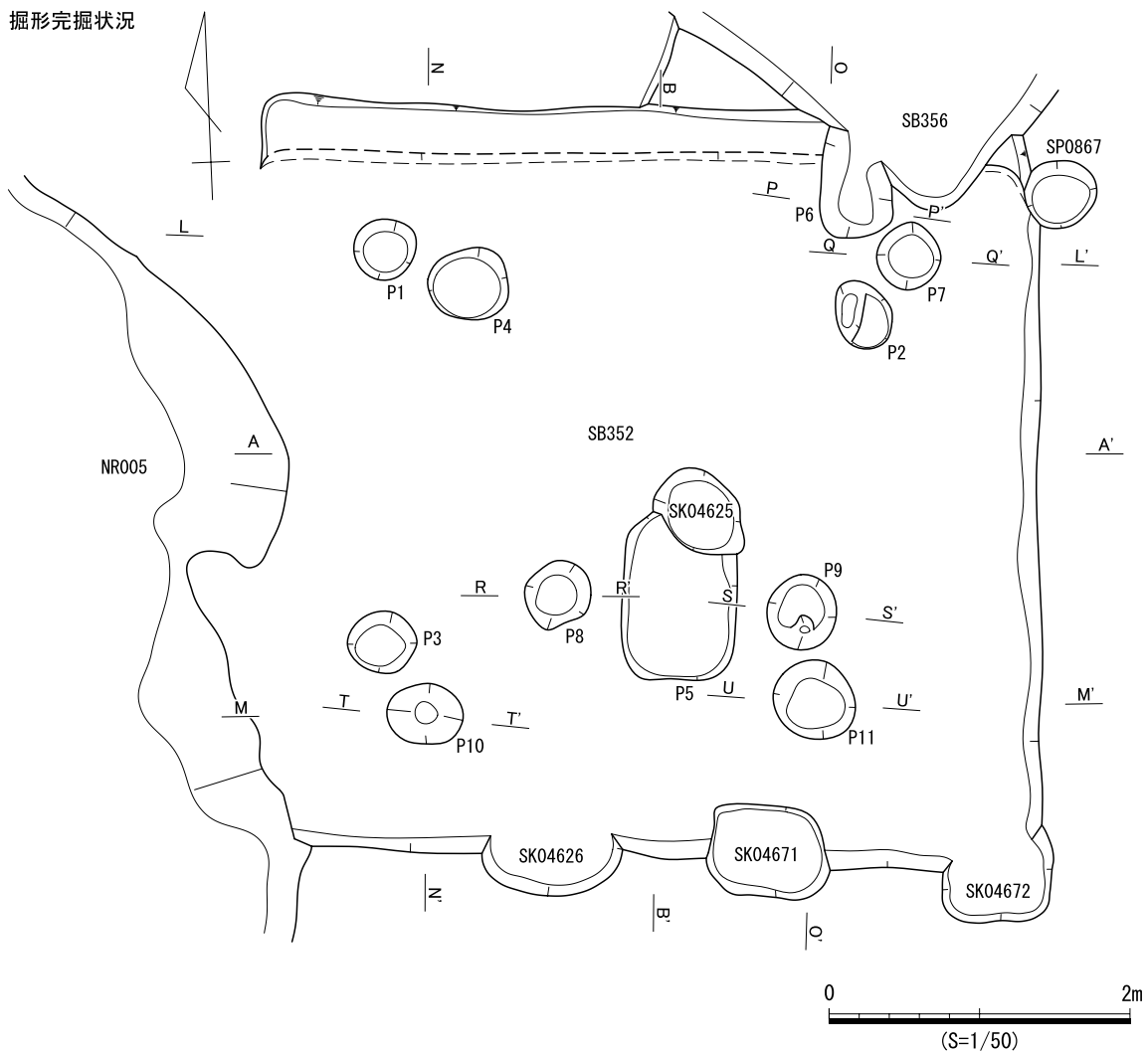


図 615 SB352 遺構図 (2)

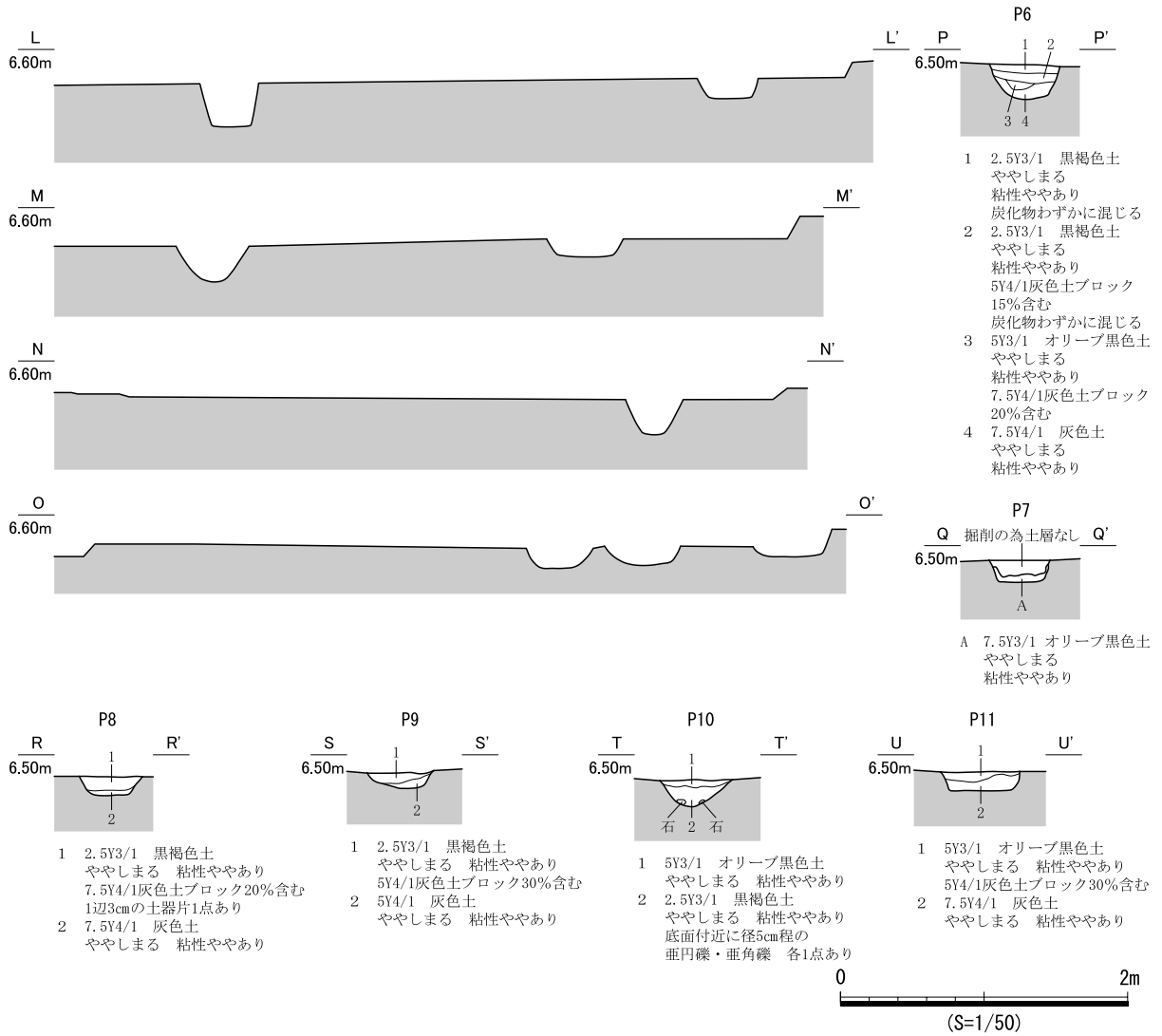


図 616 SB352 遺構図 (3)

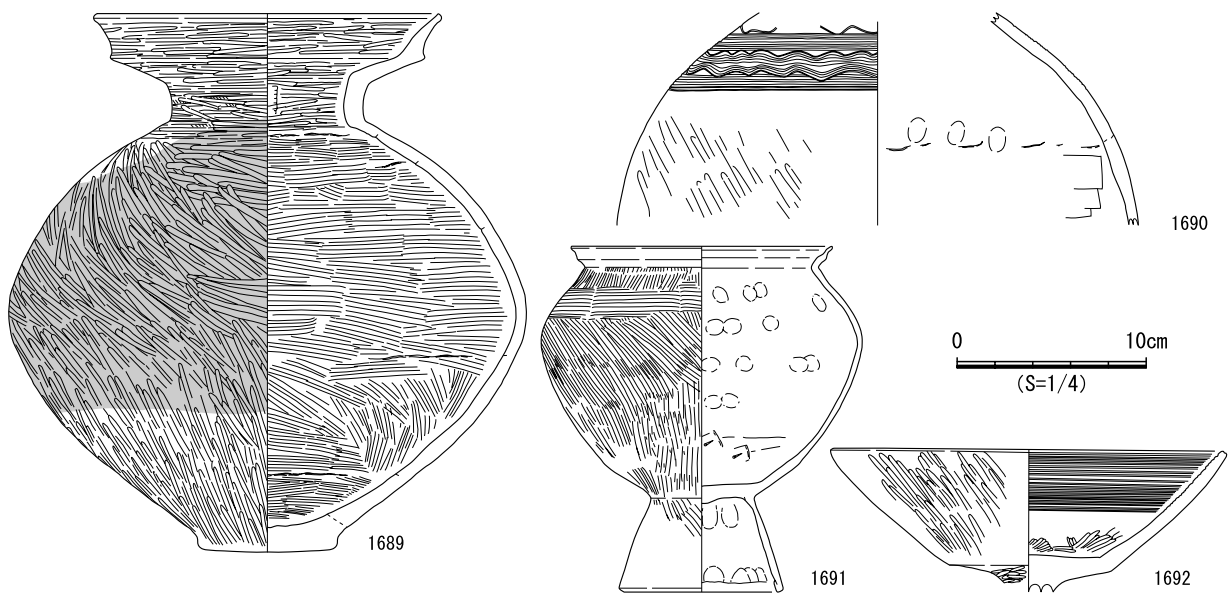


図 617 SB352 遺物実測図

SB353 (遺構：図618)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB351、SB352、SB354に切られ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。

形状 東西長約4.5mで、南北長は不明である。各辺とも直線気味で、南西隅部は丸みをもつ。壁面の深さは約0.2mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 埋土の残存部分はわずかであったが、3層に分層した。ブロック土の混入が目立つ。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認した。いずれも直径約0.4mの小穴で、P1は深さ0.4mで壁面の傾斜が急であり、P2は柱痕跡状の堆積が認められる。平面的な位置関係からP2は柱穴の可能性のあるものの、SB352とSB354の床面で検出した小穴を含めて検討しても、他の柱穴は推定できなかった。

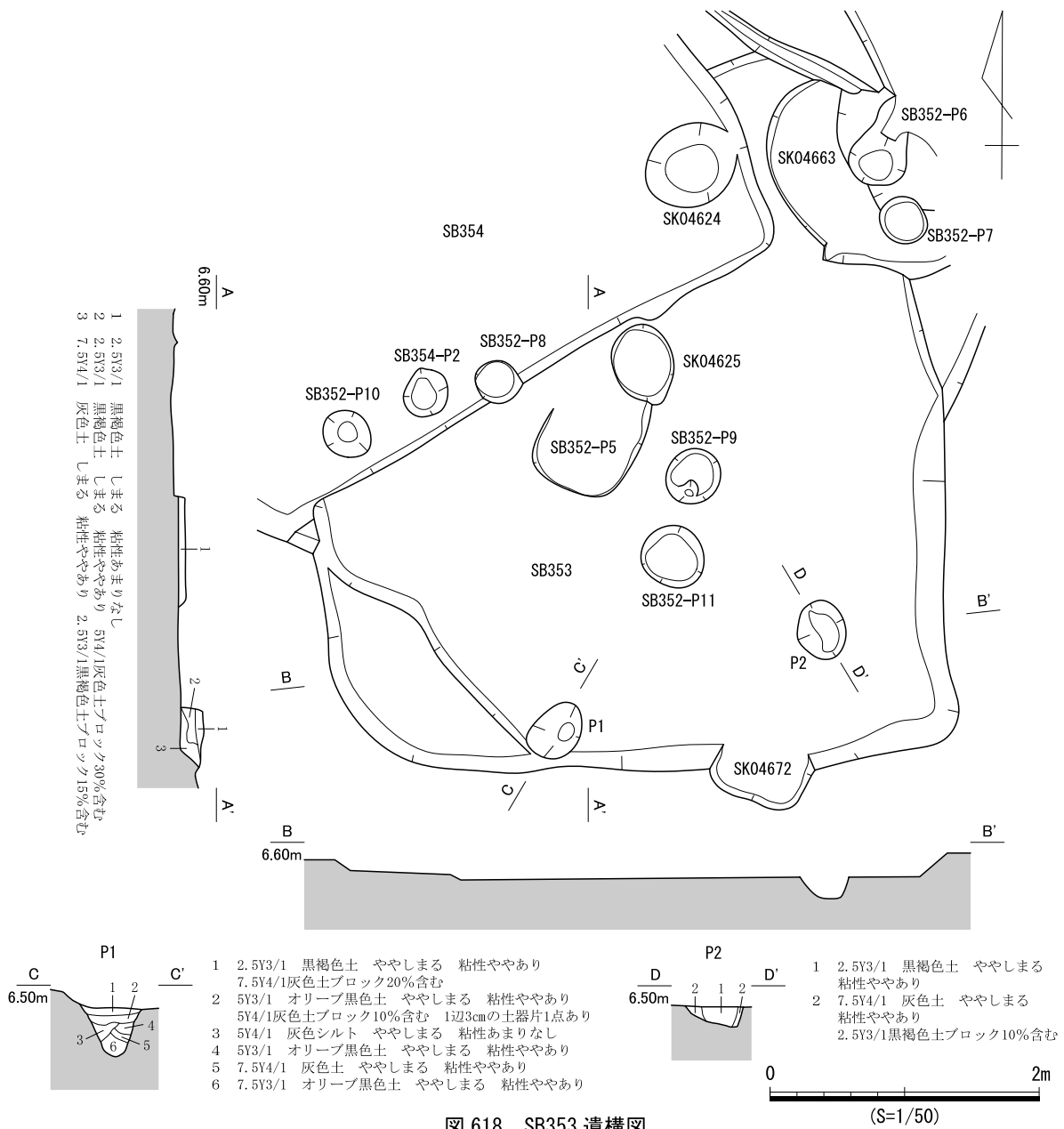


図 618 SB353 遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器256点、小穴から土器8点が出土した。土器はⅦ期の小片が多く認められ、わずかにⅠ期の小片も出土した。しかし、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期とⅦ期～Ⅷ期のSB352より先行することから、Ⅶ期と考えられる。

SB354 (遺構：図621、遺物：図619)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB351とSB352に切られ、SB353とSB355を切る。周囲の遺構との重複のため、平面形は不明瞭であった。

形状 北東-南西長約5.1mであり、南東辺は直線的だが、他の辺は弧状もしくは蛇行しており、全体形は不定形である。壁面は約0.1mで、壁面傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。ブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて3基の小穴を確認した。いずれも直径0.4m以下の小穴で、P2のみ柱痕跡状の堆積が認められた。

遺物出土状況 埋土中から土器560点、小穴から土器28点が出土した。Ⅶ期の土器片が多く、わずかに縄文時代晩期後半、Ⅴ期～Ⅵ期、Ⅷ期の土器片もある。また、P1～P3からはⅦ期の土器片がわずかに出土した。

出土遺物 1693はⅠ期の深鉢胴部片。横走する条痕と右下がりの条痕の組み合わせが認められる。

時期 出土遺物の時期と、Ⅵ期のSB353より後出しⅦ期のSB352より先行することから、Ⅶ期と考えられる。

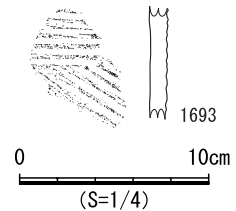


図619 SB354 遺物実測図

SB355 (遺構：図622、遺物：図620)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB351～SB354に切られ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。

形状 南北長約4.5m、東西長約3.6mで、平面形は不整形である。北辺は直線的だが、南辺と東西両辺は蛇行し、南辺は大きく歪んでいる。南東隅部は角を有するが、他の隅部は丸みを帯びている。深さは0.1mにも満たないほど浅い。

埋土 4層に分層した。最下層には礫混じりの砂が堆積している。1～3層はブロック土を多く含み、人為堆積と考えられる。

床面 やや凹凸が認められる。硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴(P1～P4)を確認した。いずれも壁面が垂直気味で、深さは約0.3mであり、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器137点、小穴から土器17点が出土した。土器の多くはⅤ期～Ⅵ期に属する。

出土遺物 1694はⅤ期～Ⅵ期の高坏B3b類。口縁部が強く外反して、端部は尖り気味である。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB353、SB354に切られることから、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

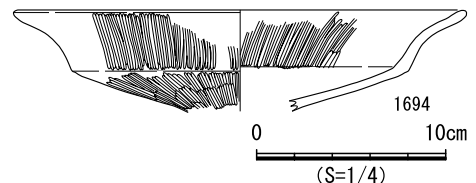


図620 SB355 遺物実測図

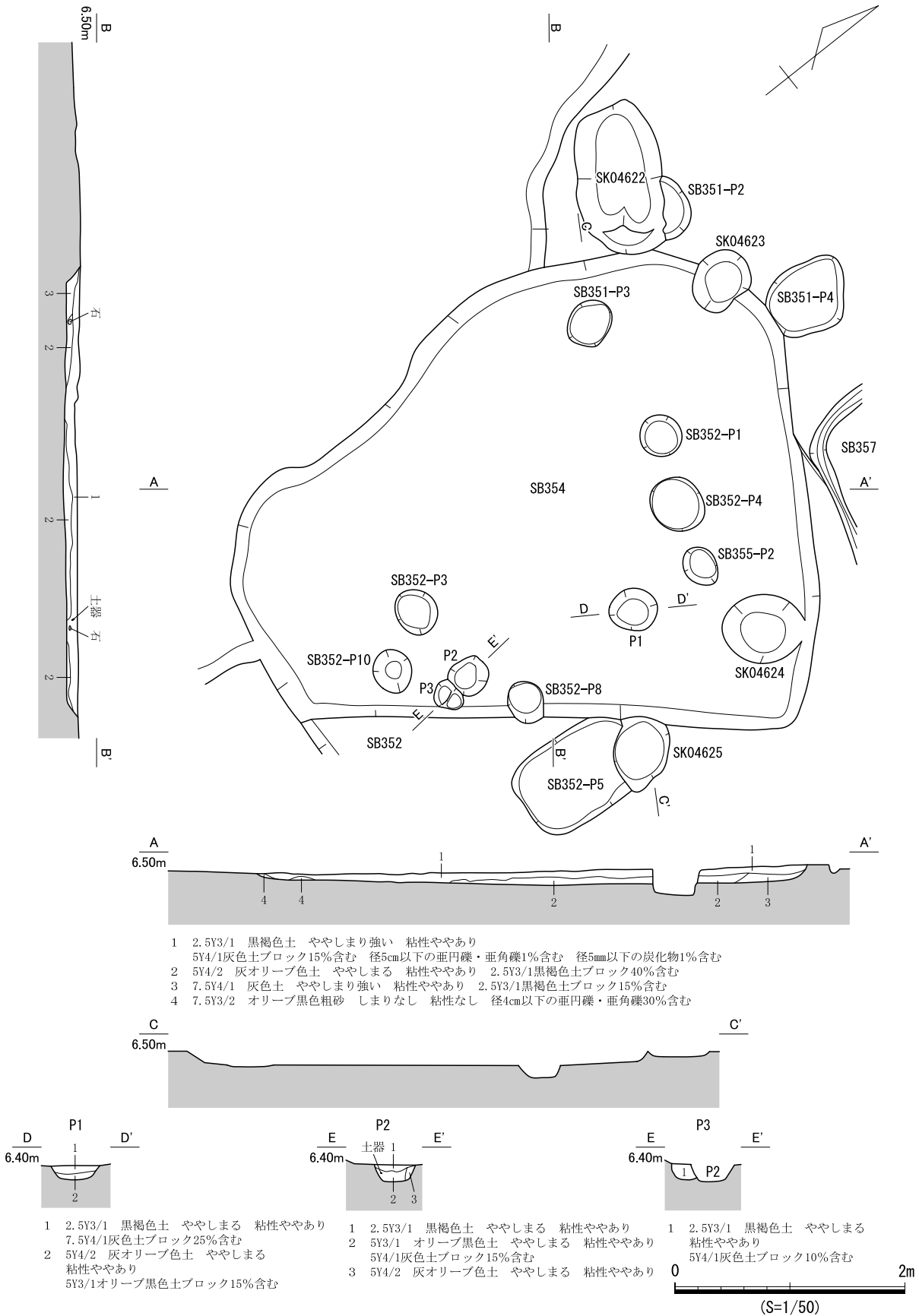


図 621 SB354 遺構図

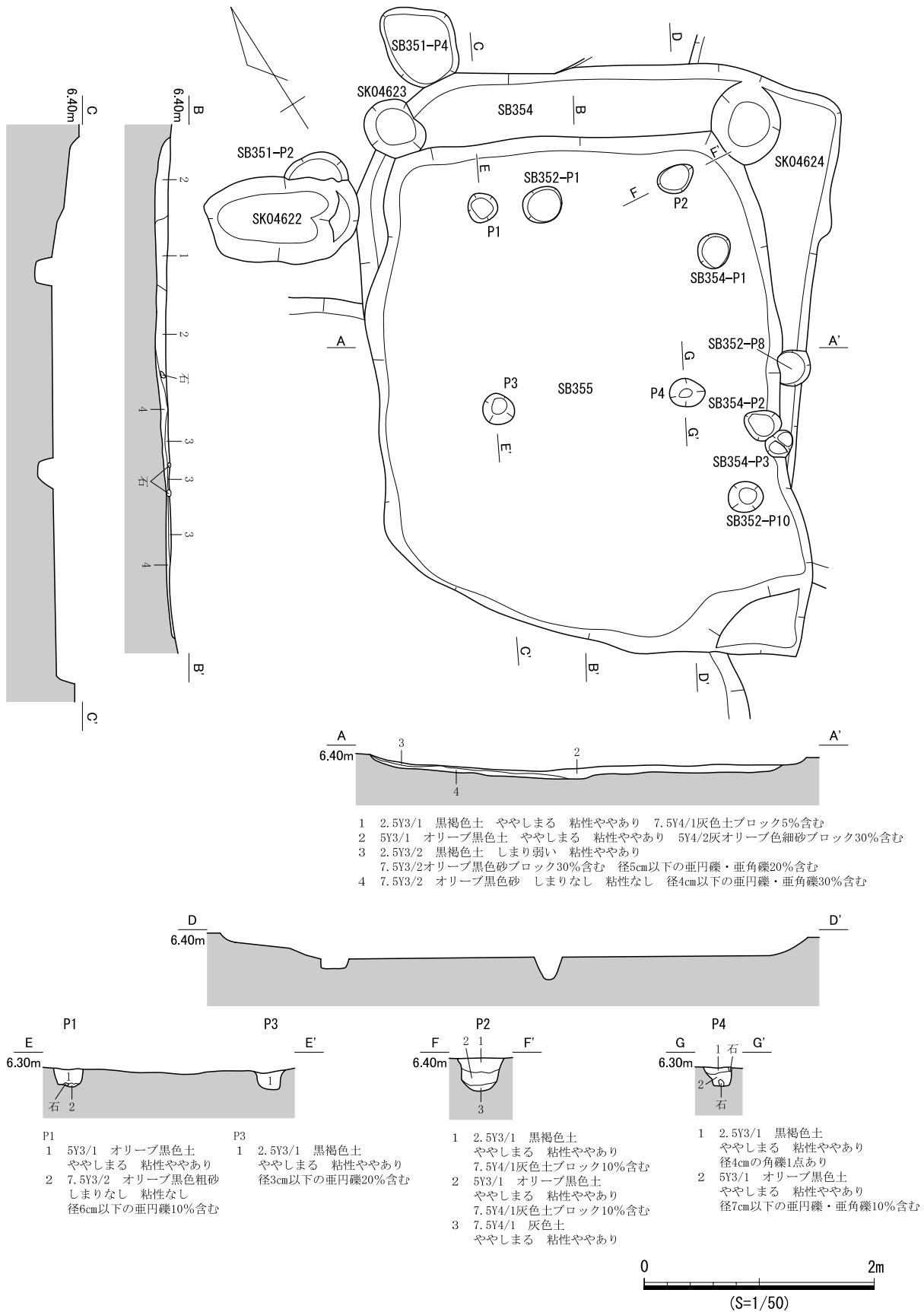


図 622 SB355 遺構図

SB356 (遺構：図 623・624、遺物：図 625)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB345、SB348、SB349、SB351、SK04617に切られ、SB352、SB359を切る。

形状 北西側をSB348とSK04617に切られているが、東西長約4.9mの隅丸方形と考えられる。各辺は直線的であり、壁面の高さは約0.2mあり、その傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

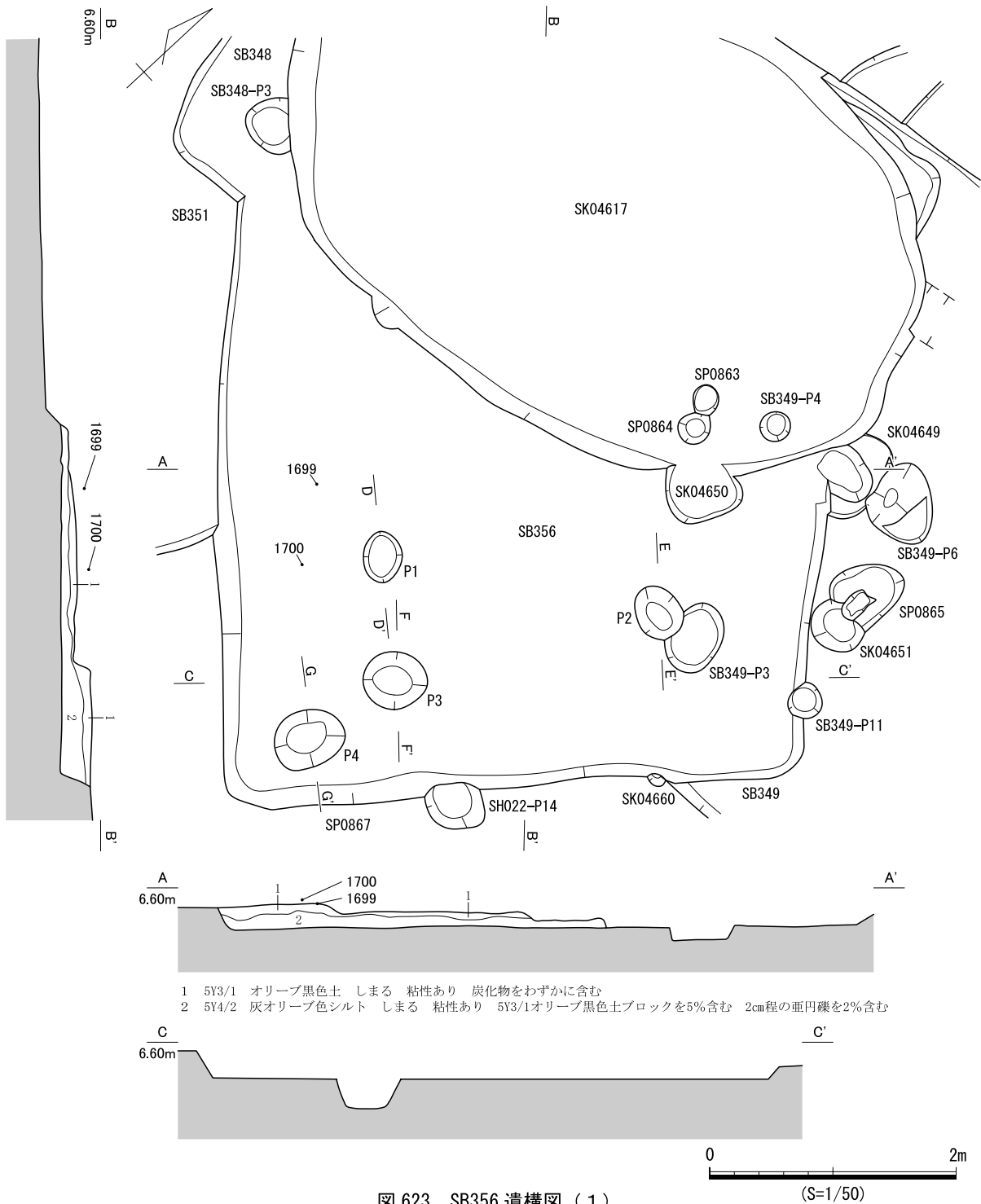


図 623 SB356 遺構図 (1)

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認した。いずれも直径約0.4mで、明瞭な柱痕跡は認められなかった。そのため、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,134点、小穴から土器31点が出土した。土器はVI期～VII期に属し、なかでもVII期後半のものが多い。P4からVII期小型の鉢(1698)が出土した。

出土遺物 1695はVII期甕B3類。やや小型品で口縁部がわずかに内湾して、端部に断続的な強いナデが認められ、外傾する面を形成する。器面の凹凸が著しく、胴部の膨らみが弱い。1696はVII期甕D2b類。口縁部が短く屈曲する。上段が直立気味に短く外反する。1697、1699はVII期～VIII期の甕D類胴部。1698はVII期鉢G類。口縁部が短くわずかに内湾し、端部はやや尖り気味である。胴部はなだらかに底部に向かい、最大径は頸部径とほぼ同じである。底部は小さな平底で、胴部下半には丁寧なミガキが認められる。1700はVIII期高杯。径の小さい杯底部から口縁部が直線的に外傾する。内面の段が認められる。

時期 出土遺物の時期とVIII期のSB348、SB349、SB351に切られることから、VII期～VIII期と考えられる。

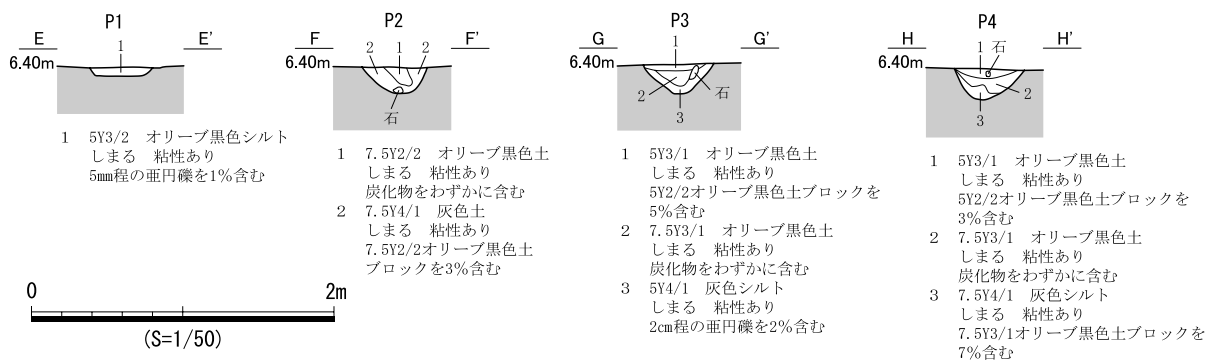


図 624 SB356 遺構図 (2)

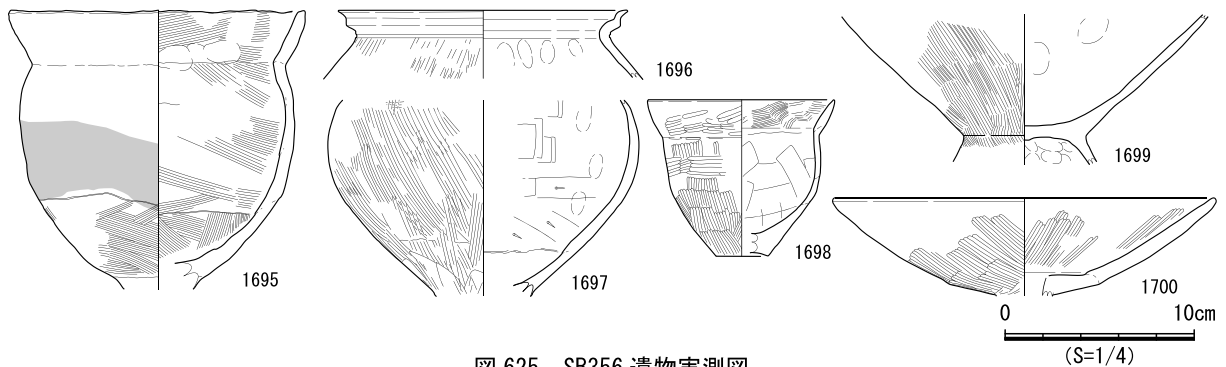


図 625 SB356 遺物実測図

SB357 (遺構：図 626、遺物：図 627)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB348、SB349、SB351、SB356、SB359に切られ、重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。北側の大半は後出するSB356によって滅失するが、南側の約半分を検出した。

形状 東西長約5.6mの隅丸方形と考えられる。東辺と南辺は直線的だが、西辺は東側にわずかに曲がっている。壁面は南壁で高さ約0.3mが残り、遺存状況がよい。壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層し、1～2層に炭化物の混入が目立つ。また、2～3層にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて3基の小穴を確認した。その大きさは直径0.2m～0.4mで、底面はやや丸みを帯び、P2のみ柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP2は柱穴の可能性のあるものの、他の柱穴はSB349とSB356底面を含めて検討したが推定できなかった。なお、幅0.1mの壁溝が壁面に沿って全周する。

遺物出土状況 埋土中から土器800点、石器類4点、小穴から土器5点が出土した。土器はVI期～VII

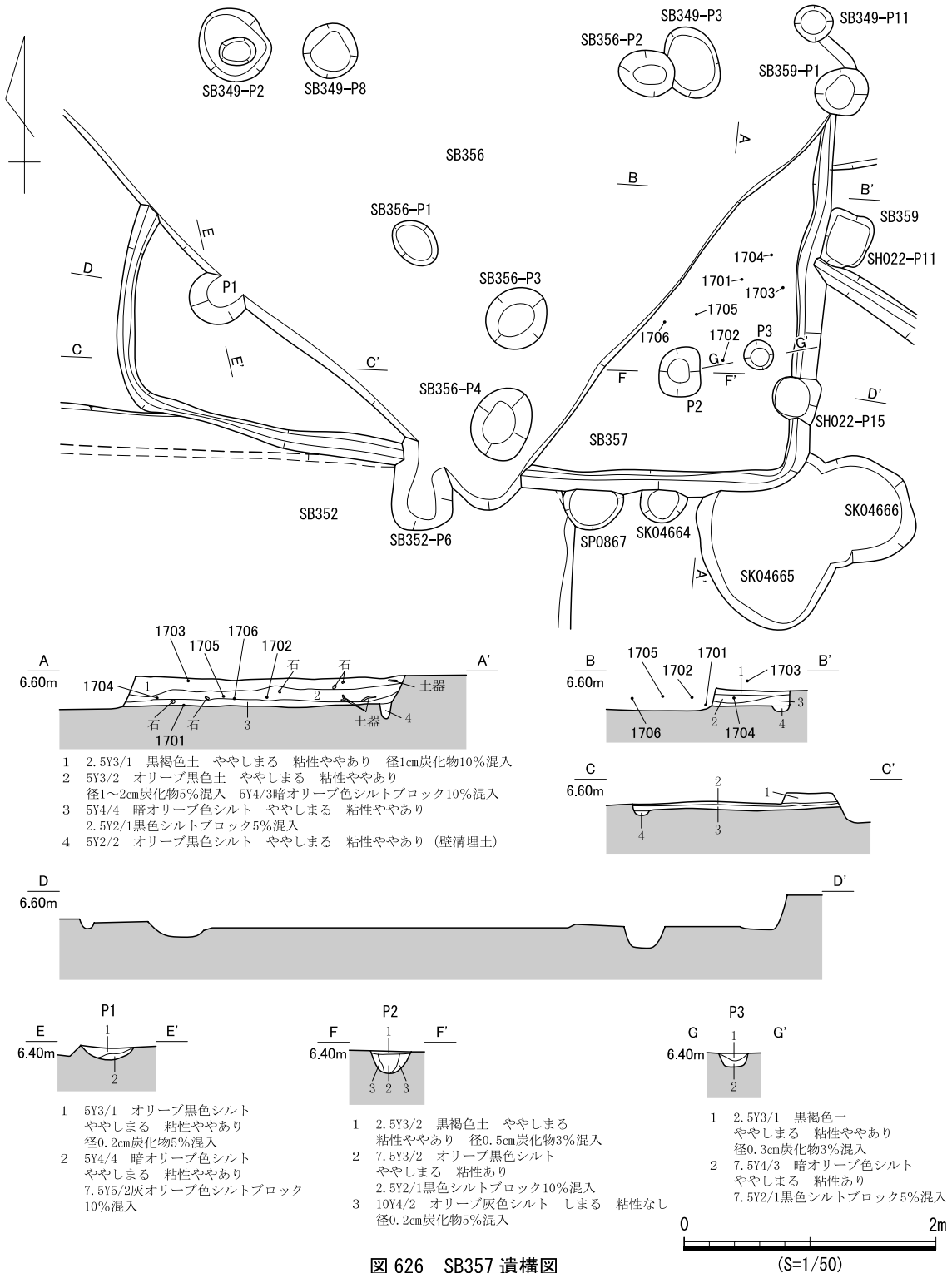


図 26 SB357 遺構図

期のものが多く、X期の土器片もわずかに出土した。このうち、X期の土器（1703）は検出面で出土し、VI期～VII期の土器（1701、1702、1704～1706）は人工層位のc～e層と埋土3層から出土していることから、X期の土器は他から混入している可能性が高い。

出土遺物 1701はVI期～VII期壺底部。平底の小さな底部から、胴部が大きく開く。1702はVI期甕A3類。口縁部が短く直立するが、内面の屈曲が弱い。端部はやや平坦で、外面屈曲部ちかくに刺突文を施文する。頸部直下に直線文が認められる。1703はX期の宇田型甕。口縁部が短くわずかに屈折して、端部をやや肥厚する。頸部に太い沈線が認められる。胴部は強く膨らみ、粗いハケ目が認められる。1704はVI期高坏I類。脚部が強く外反して、端部は丸くおさめる。1705はVI期～VII期の高坏。直線的に口縁部が開く受部の上部に、直立する口縁部が認められる。脚部は強く外反して、端部に平坦面が認められる。1706はVII期器台B類脚部。脚裾部が強く外反する。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

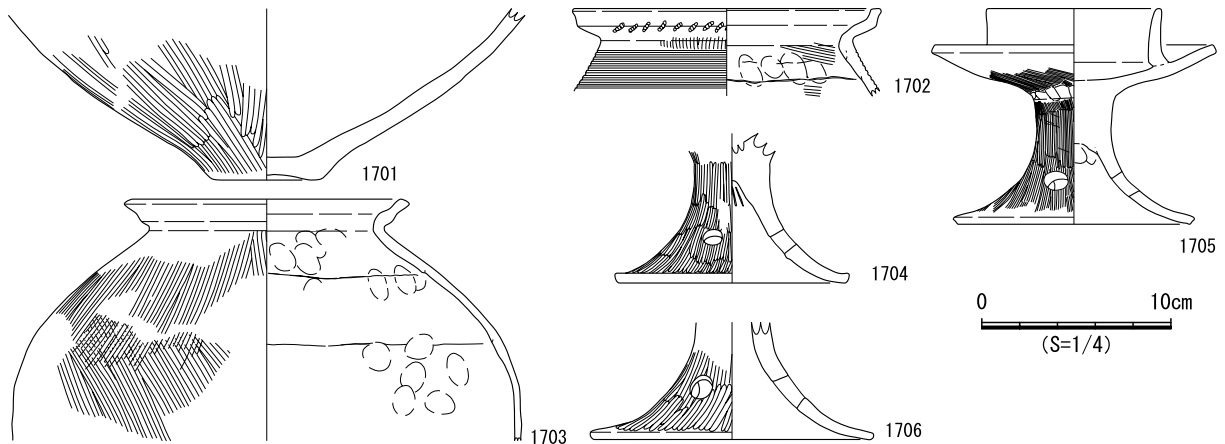


図 627 SB357 遺物実測図

SB358（遺構：図 628）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB344、SB360に切られ、SB346、SB347、SB350、SB359を切る。北辺の一部を後出するSB344、西辺の一部を攪乱によって滅失するが、ほぼ全形を確認した。

形状 南北長約4.0m、東西長約4.1mで、平面形は隅丸方形である。東辺はやや弧状を呈するが、残る3辺は直線的である。各壁面とも高さ約0.1mが残り、ほぼ直立する。

埋土 2層に分層した。層界の凹凸が顕著でブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認した。P1～P4は直径約0.4m～0.5mであり、P1～P3では柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP2とP4は柱穴の可能性のあるものの、西側の対応する穴は検出できなかった。また、P5は長軸長約1.4mの不整形を呈するが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器555点、小穴から土器27点が出土した。土器はVI期～VII期に属し、わずかにI期のものも出土した。しかし、いずれも摩耗した小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB360に切られ、VII期のSB346、SB347、SB350を切ることから、VII期と考えられる。

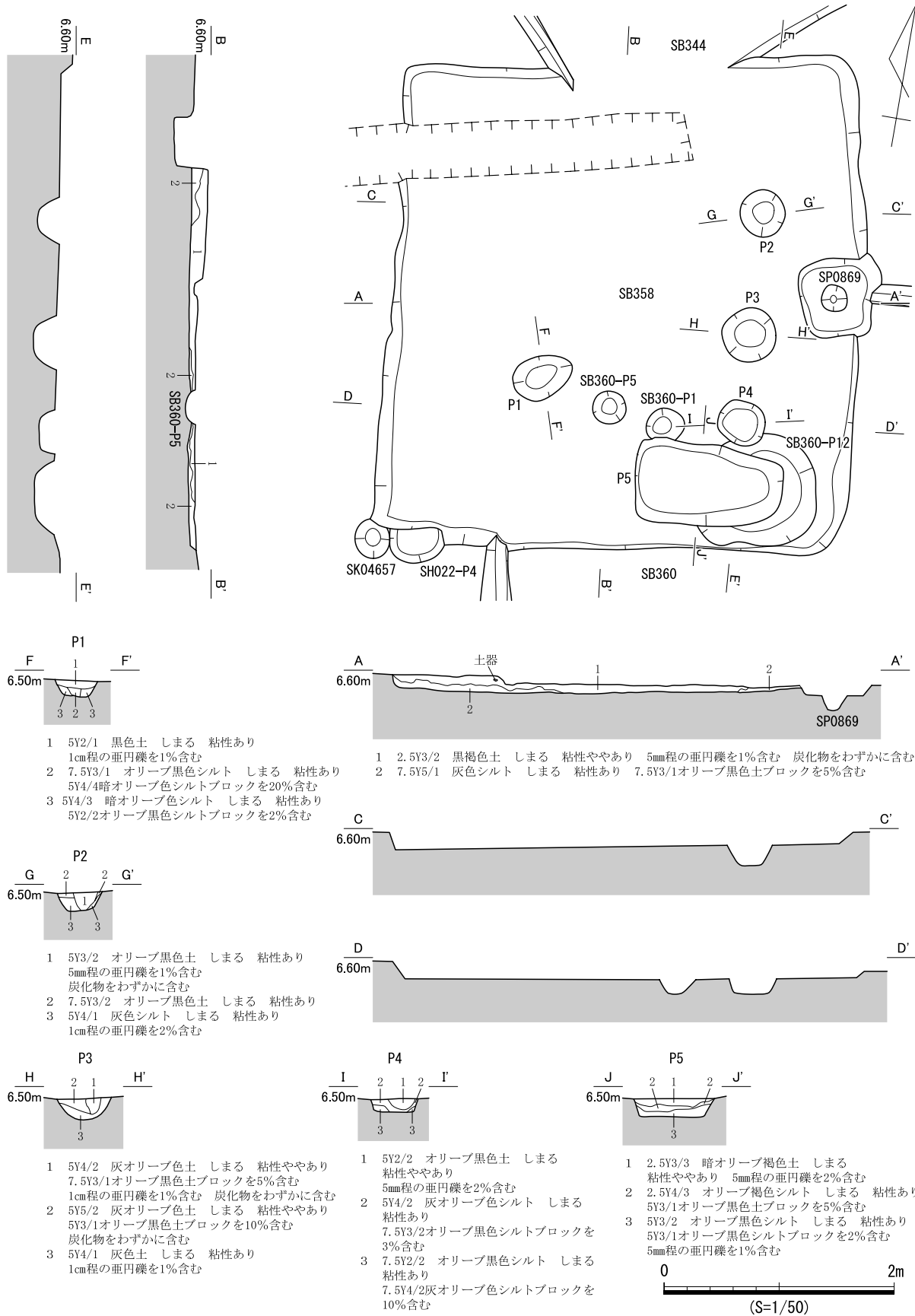


図 628 SB358 遺構図

SB359 (遺構：図 631、遺物：図 629)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB345～SB347、SB349、SB356、SB358、SB360に切られ、SB357、SB408を切る。北側の約半分を重複するSB345、SB349、SB358などによって滅失する。東辺は壁面が失われ、壁溝のみを確認した。

形状 北東-南西長約5.0mの隅丸方形を呈する。確認した各辺は直線的で、比較的残りの良い東壁は高さ約0.1mである。

埋土 2層に分層した。層界の凹凸が顕著でブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認した。直径約0.4m～0.5m、深さ約0.2mと形状が類似する。平面的な位置関係からP1～P3が柱穴の可能性のあるものの、北部の柱穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器912点、石器類1点、小穴から土器3点、壁溝から土器8点が出土した。V期～VII期の土器片が多く、南隅部の床面付近にVII期の土器片がまとまって出土した。

出土遺物 1707はV期～VI期壺A1b類。口縁部が外反して、端部下端をわずかに拡張して、擬凹線を施文する。頸部直下に直線文、刺突文が認められ、口縁部の外面に赤彩が認められる。1708はVII期鉢B2類。口縁部が内湾し、端部に断続的なナデが認められる。1709はVII期器台B3類。口縁部が直線的に大きく開き、端部に強い平坦面を形成する。脚部はやや短脚で、付根から外反する。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB360に切られVI期SB357を切ることから、VII期と考えられる。

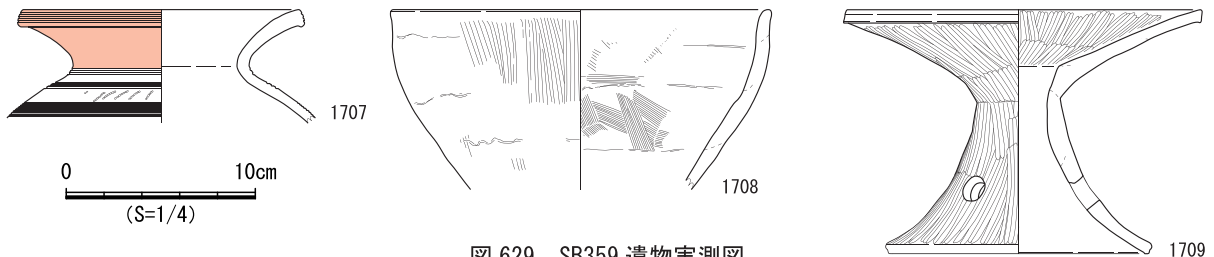


図 629 SB359 遺物実測図

SB360 (遺構：図 632・633、遺物：図 630)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB358、SB359、SB395、SB408を切り、重複する竪穴住居跡なかでは最も後出する。

形状 南北長、東西長ともに約5.0mであり、隅丸方形を呈する。各辺とも直線的で、壁面の高さは0.1mにも満たない。

埋土 2層に分層した。1層が住居埋土、2層が掘形埋土であり、住居埋土はブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて12基の小穴を確認した。そのうち、P8～P10で柱

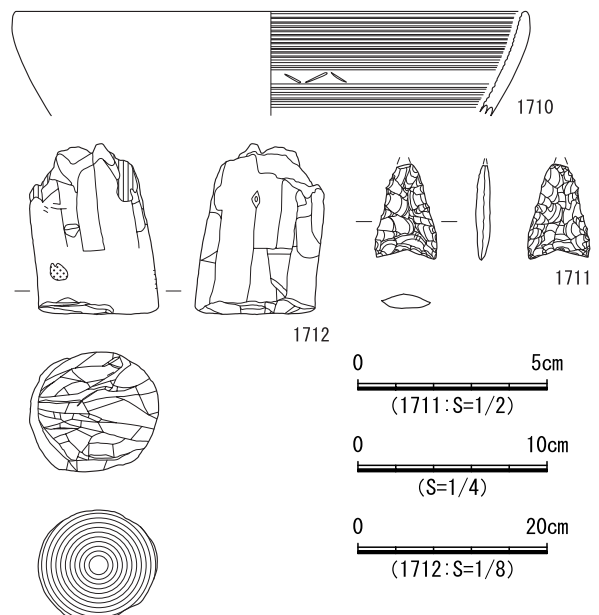


図 630 SB360 遺物実測図

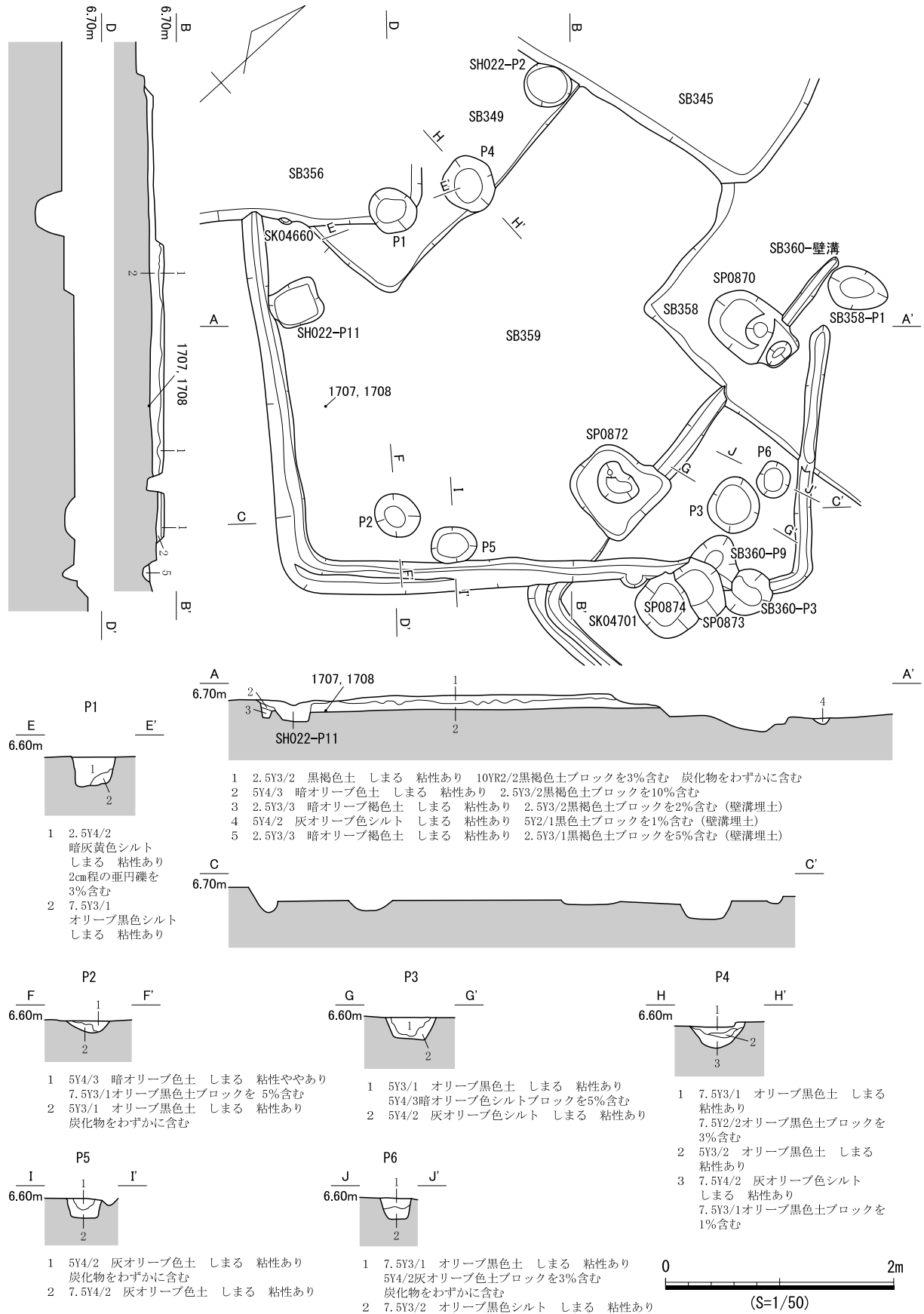


図 631 SB359 遺構図

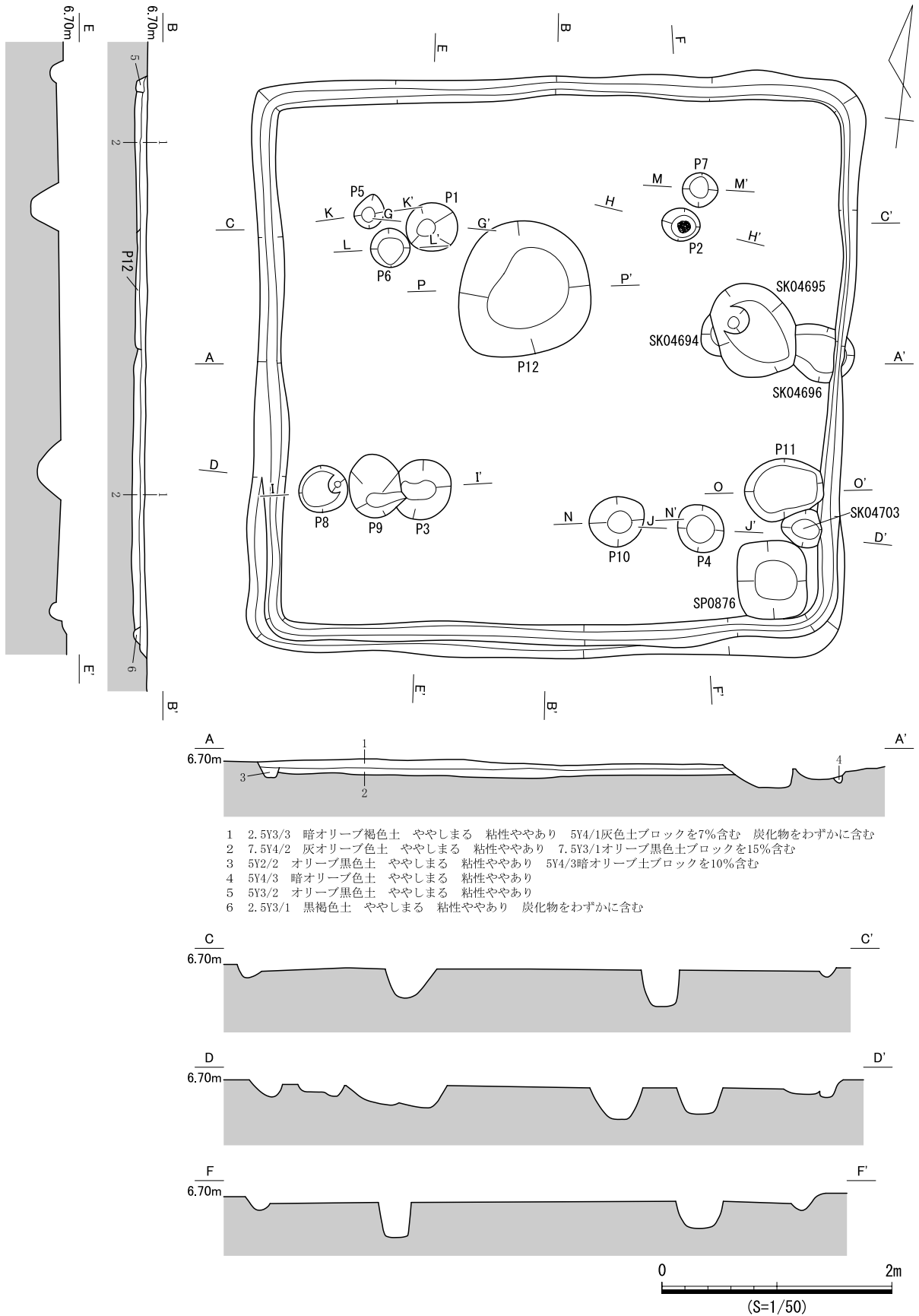


図 632 SB360 遺構図 (1)

痕跡を確認し、P2は直径13cmの柱根(1712)が残存していた。また、P4は底面が平坦で、壁面の傾斜は急である。平面的な位置からP1~P4が柱穴と考えられる。なお、P1とP3の西側にはP5、P9があり、P2の北側にはP7が位置することから、建て替えの可能性もある。P12は直径約1.2mの穴で、底面が丸みを帯びている。埋土に炭化物を含むものの、焼土や壁面の被熱が認められなかったため、炉の可能性は低い。なお、壁溝は壁面に沿って全周する。

遺物出土状況 埋土中から土器1,489点、石器類5点、小穴から土器168点、石器類4点、木製品1点、壁溝から土器52点が出土した。VI期~VII期の土器片が多く、P12からVII期高坏(1710)が出土した。石鏃(1711)が出土した。

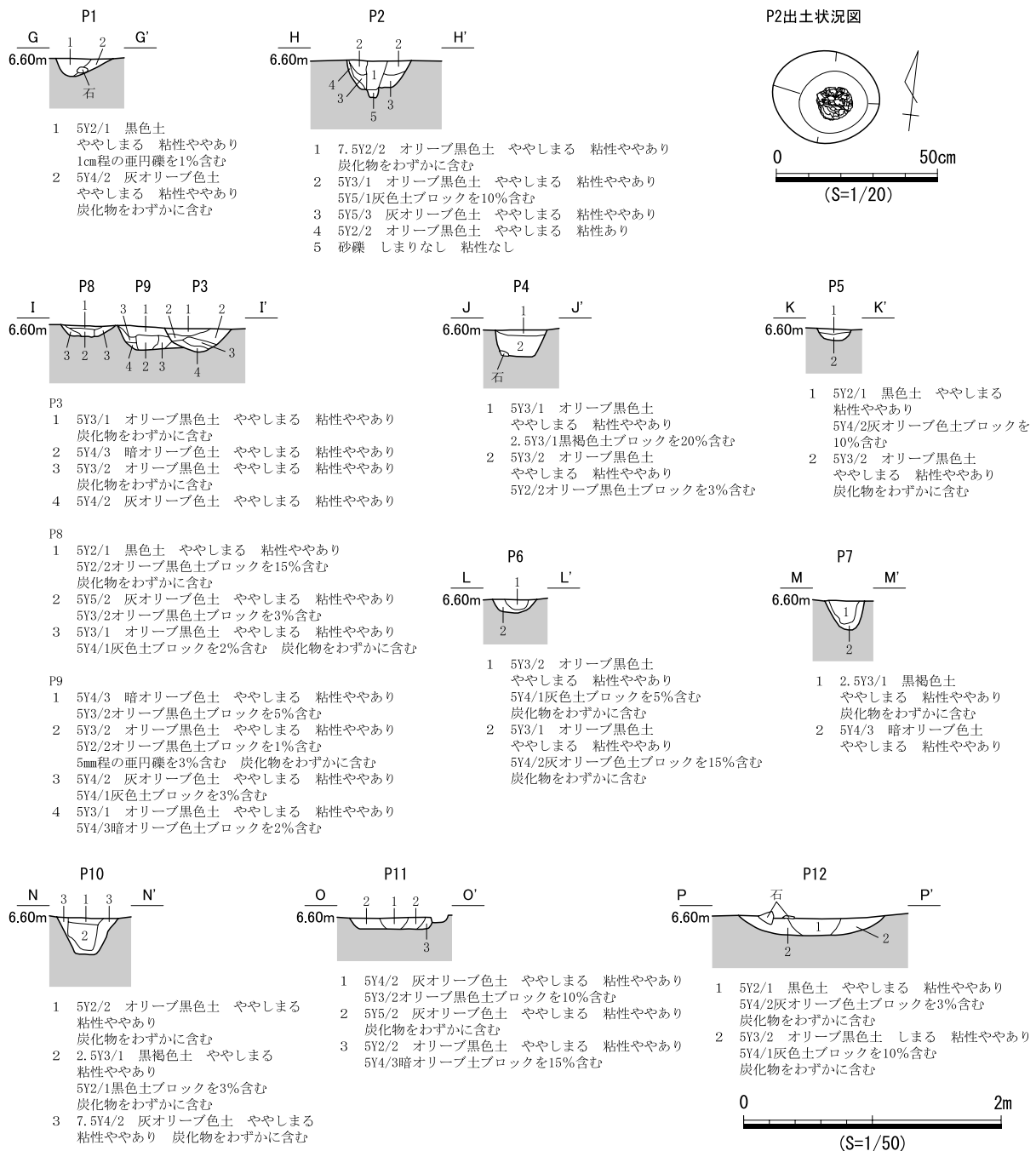


図 633 SB360 遺構図 (2)

出土遺物 1710はⅦ期高坏C4d類。多条沈線と大ぶりの山形文が認められる。1711は打製石鏃。先端部は折損し、基部には浅い抉りが入る。1712は柱材。底面は平坦に加工されている。

時期 出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

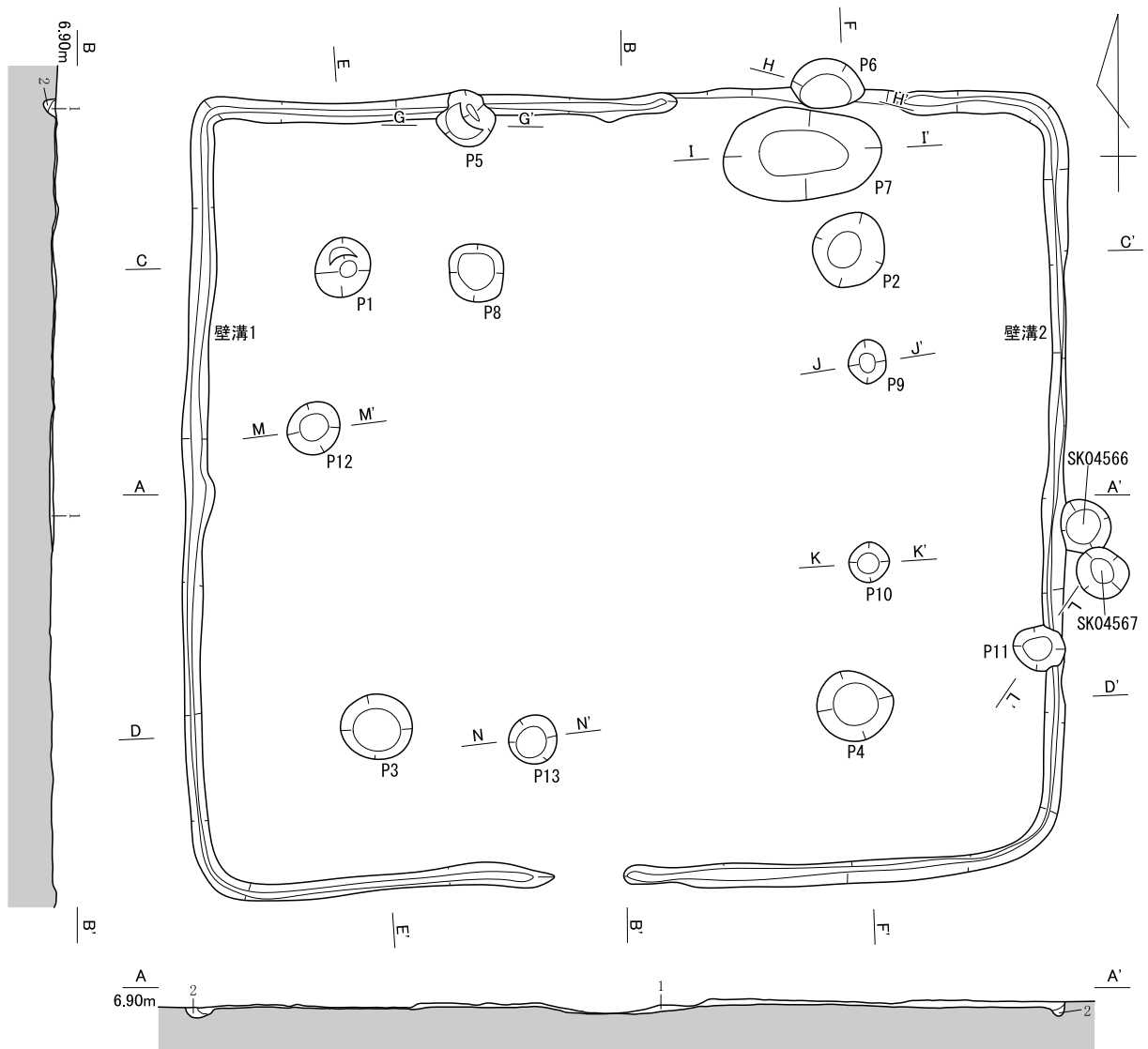
SB361 (遺構：図634・635、遺物：図636)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB362、SB363、SB374、SB375を切り、重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。検出面にて、すでに壁溝がみえている箇所もあった。

形状 南北長約5.6m、東西長約6.2mであり、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、北西隅は直角気味である。

埋土 上部が削平されており、数cmのみ残存していた。オリーブ黒色土の単層である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて13基の小穴を確認した。P1～P4が、平面的な位置関係から柱穴と考えられ、いずれも柱痕跡を確認した。P8～P10、P12、P13は



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm程の亜円礫1%程含む
- 2 5Y3/2 オリーブ黒色土 やや淡色 ややしまる 粘性あり 礫含まず(壁溝埋土)



図 634 SB361 遺構図 (1)

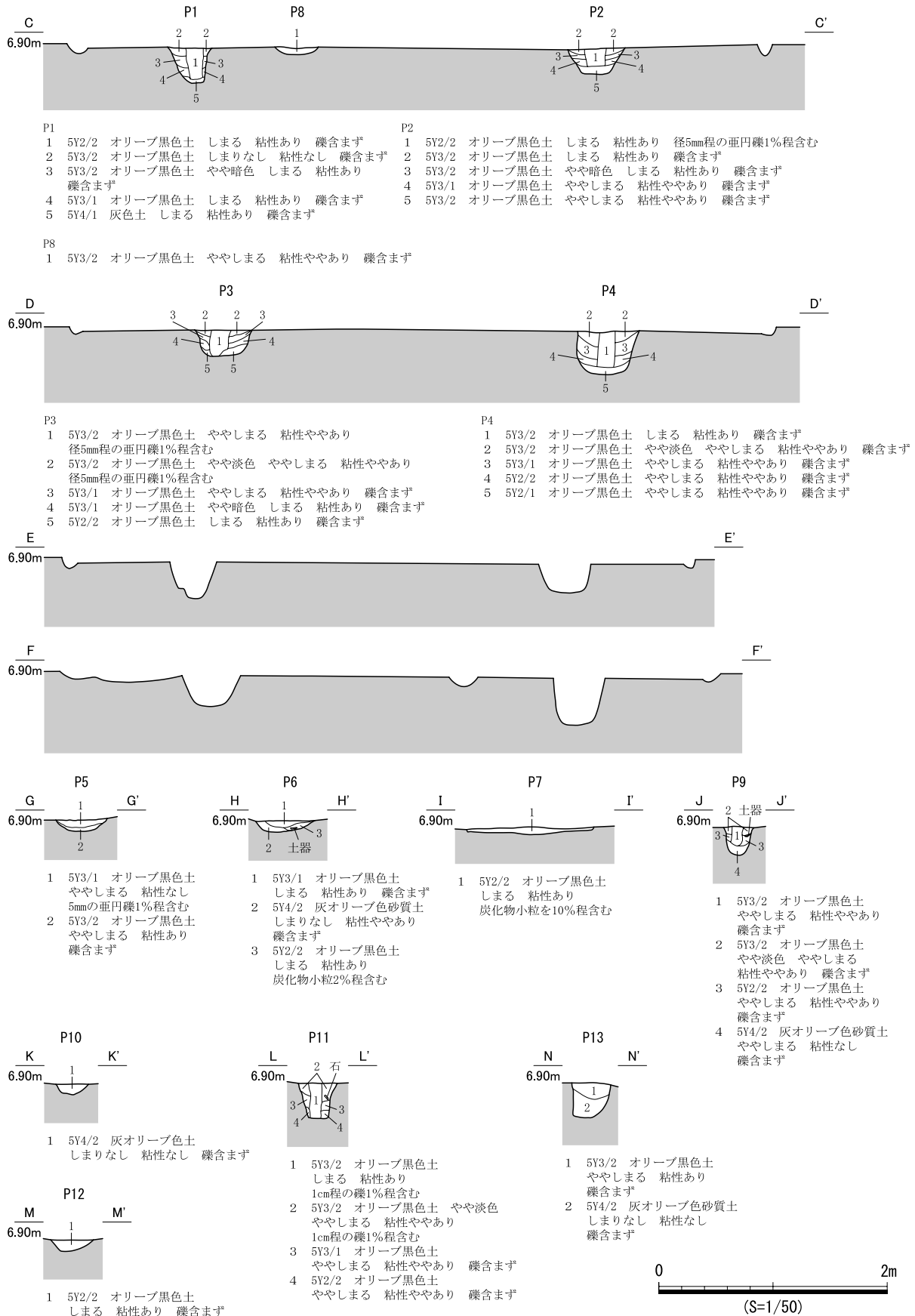


図 635 SB361 遺構図 (2)

P1～P4の柱間に位置するため、上部構造を支えるための小穴かもしれない。P9・P11では柱痕跡を確認した。P7は長軸1.0mの楕円形を呈する浅い穴であり、埋土には炭化物が認められる。壁溝はP7の北側と南壁中央付近を除いて全周する。

遺物出土状況 埋土中から土器1,346点、小穴から土器257点、壁溝から土器56点が出土した。大半がVI期～VII期である。VI期の高坏(1713)がP2から、VII期の高坏(1714)がP3から、壁溝から縄文時代晩期中葉の土器片(1715)が、それぞれ出土した。

出土遺物 1713はVI期前半の高坏B3b類。口縁部が強く外反し、端部は丸くおさめる。1714はVII期高坏D類の脚部。透孔が上下2段あり、千鳥状に配置される。1715は縄文時代晩期中葉の深鉢で、口縁部が短く外反する。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB362を切ることから、VII期と考えられる。

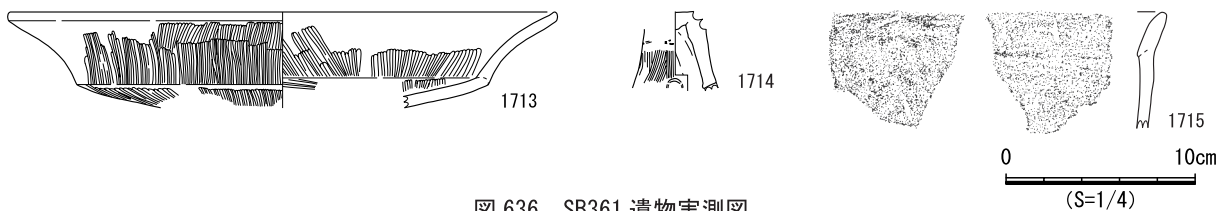


図 636 SB361 遺物実測図

SB362 (遺構：図 638・639、遺物：図 637)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361に切られ、SB365とSB367を切る。南西側は壁面が残存しておらず、壁溝のみを確認した。なお、壁溝の北溝は、住居の北壁からやや離れた位置で検出した。

形状 南北長約4.7m、東西長約5.0mであり、隅丸方形を呈する。各辺とも直線的で、北東隅部は直角気味に屈折する。

埋土 単層であり、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて19基の小穴を確認した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられ、いずれも柱痕跡を確認した。P1～P4は住居の北・南壁から約1.2m内側に位置する。また、P5とP6は南壁から約0.6m北側で検出でき、P5では柱痕跡を確認した。壁溝は全周するが、北溝は住居の北壁からやや離れており、P1・P2との距離は約0.6mで、P5・P6と南壁との距離とほぼ同じである。P1の埋土は3層が1・2・4層に切られているようにもみえ、再掘削している可能性がある。これらのことから、本住居は建て替えられたと考えられる。なお、P7～P19が壁溝にそって位置し、直径0.1～0.2mと大きさが揃うことから、壁材を留めるための杭跡と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器381点、小穴から土器53点、壁溝から土器44点が出土した。VI期～VII期の土器が大半であり、P1からVII期高坏(1716)が出土した。

出土遺物 1716はVII期高坏C4d類。口縁部が内湾し、内面に多条沈線と山形文で施文する。

時期 出土遺物の時期からVII期と考えられる。

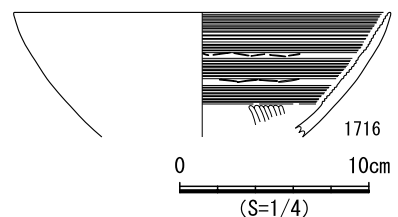


図 637 SB362 遺物実測図

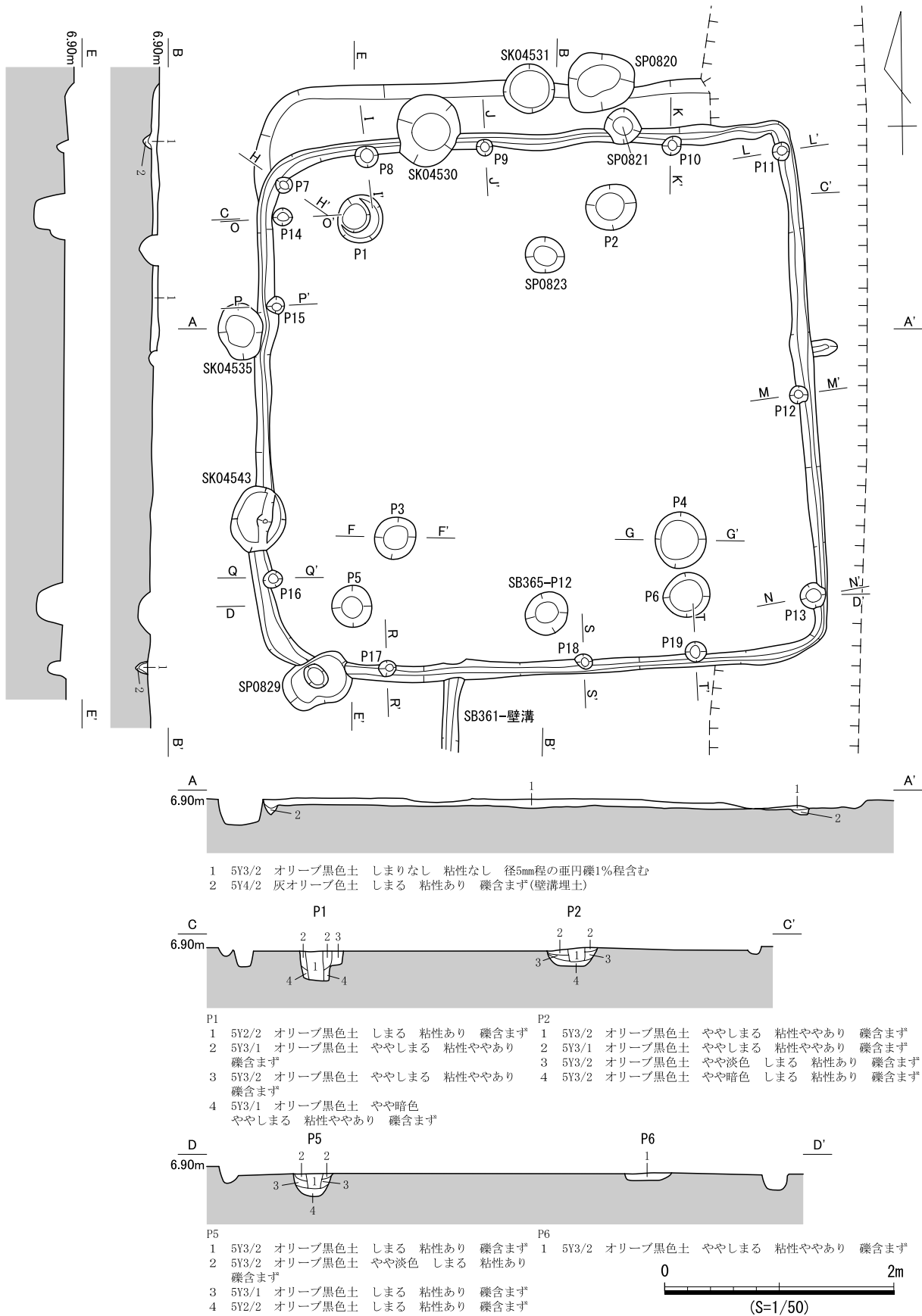


図 638 SB362 遺構図 (1)

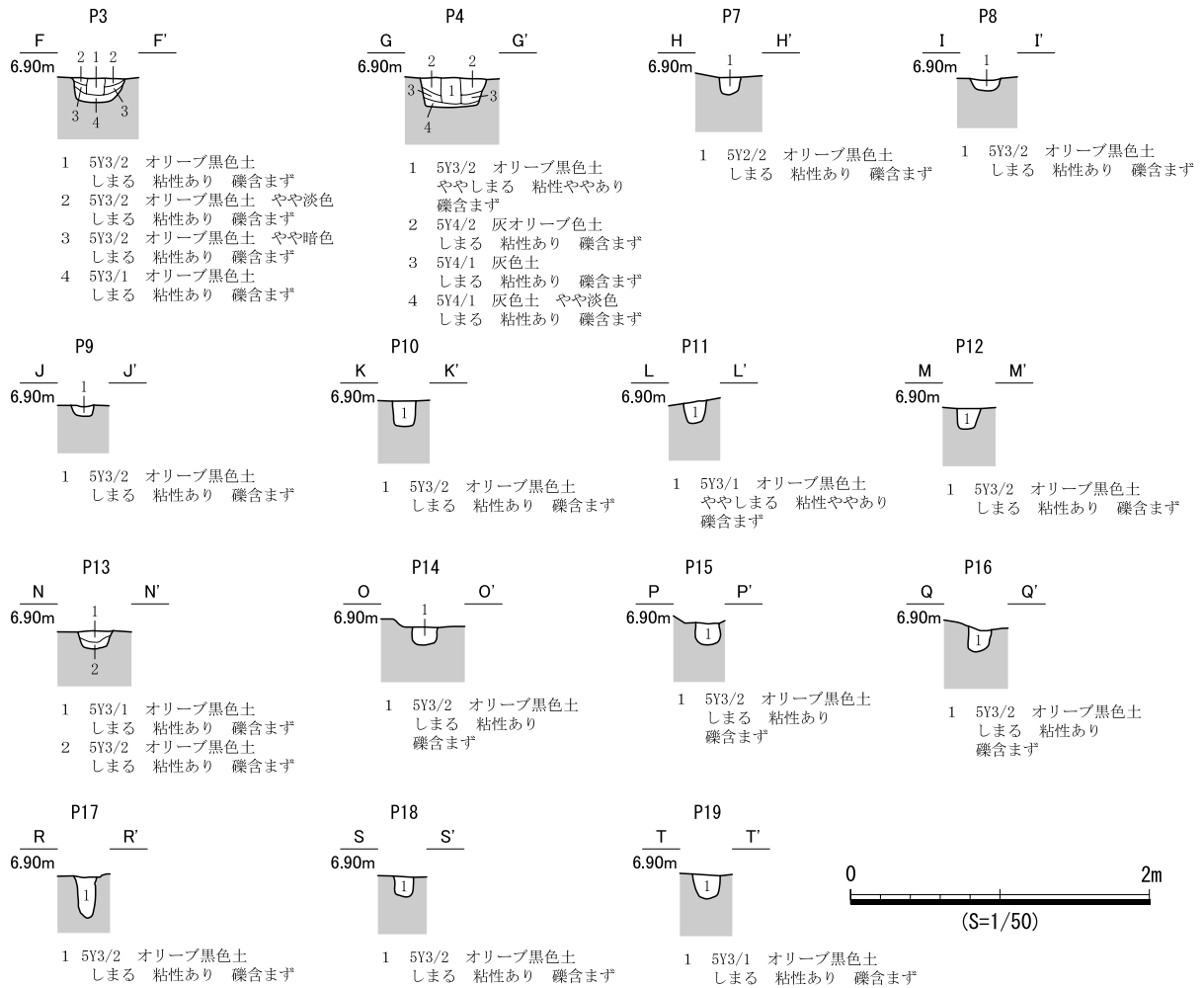


図 639 SB362 遺構図 (2)

SB363 (遺構：図 640・641、遺物：図 642)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361、SB364、SB365、SB370、SB376に切られ、重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。

形状 南北長約 5.5 m、東西長約 6.1 m で、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的だが、北辺、東辺がわずかに外側に膨らむ。壁面は高さ約 0.2 m であり、その傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。3層は壁面際の堆積である。埋土中にブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認し、いずれも明瞭な柱痕跡が認められた。P1～P4は平面的な位置関係から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器 3,721 点、石器類 9 点、小穴から土器 72 点が出土した。その多くは V 期末から VI 期前半の土器である。P1 周辺から比較的遺存状況のよい土器が多数出土した。また砥石 (1733～1735) が、いずれも埋土上層から出土した。なお、IX 期の土器片が 1 層から出土したが、混入の可能性はある。

出土遺物 1717 は V 期壺 A1a 類。口縁部下端を拡張して、内面には 2 帯の羽状文を施文する。内外面には赤彩が認められる。1718 は V 期壺 B1 類。口縁部が外反して立ち上がり、端部はやや平坦である。

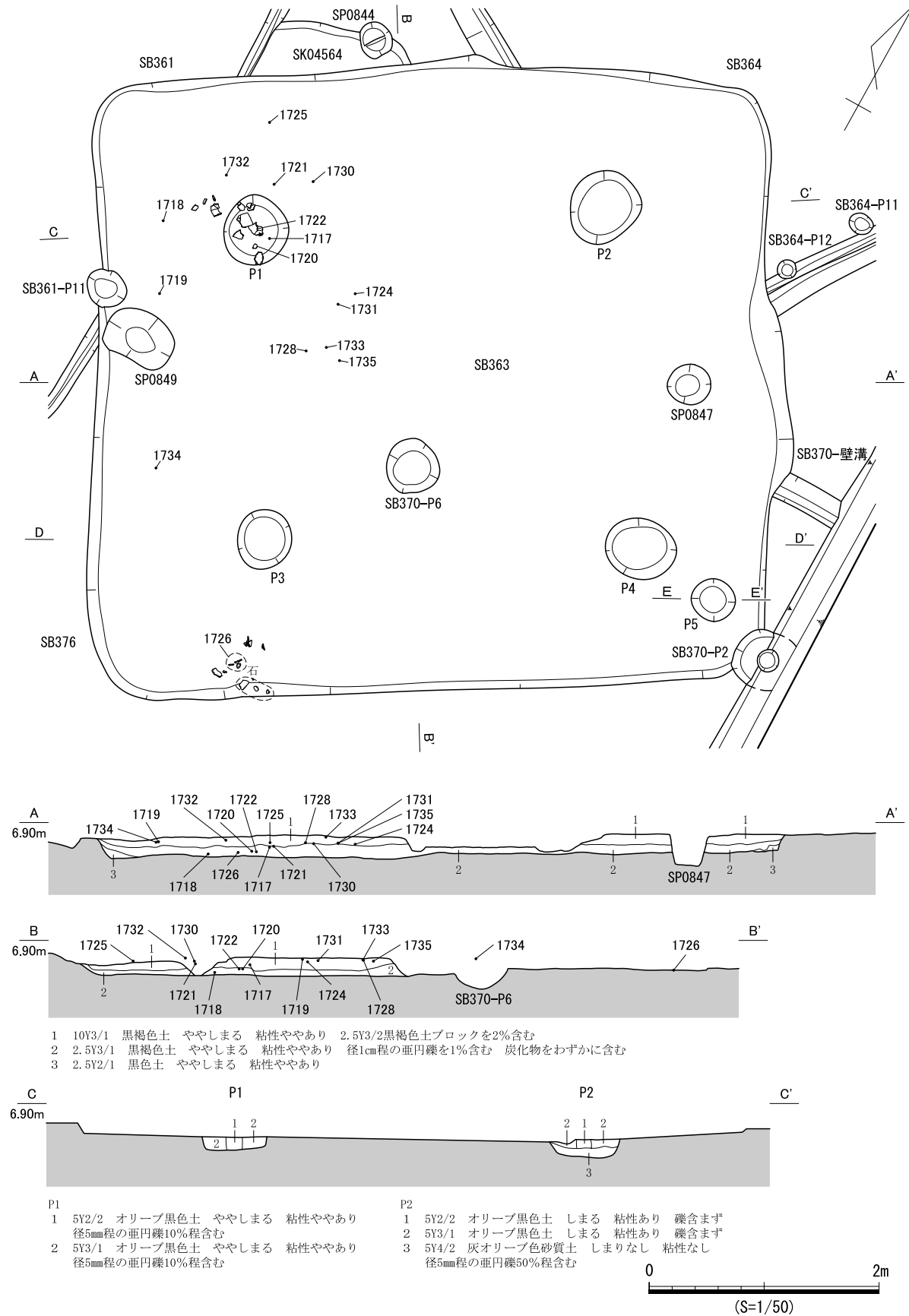


図 640 SB363 遺構図 (1)

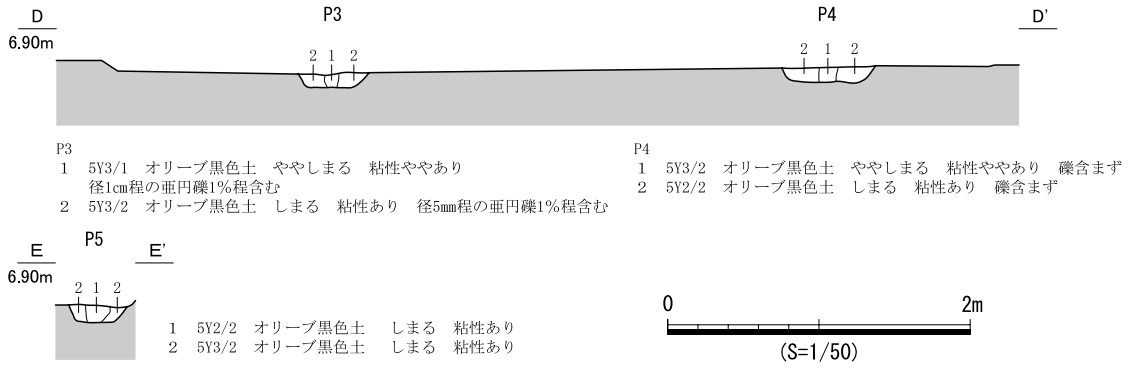


図 641 SB363 遺構図 (2)

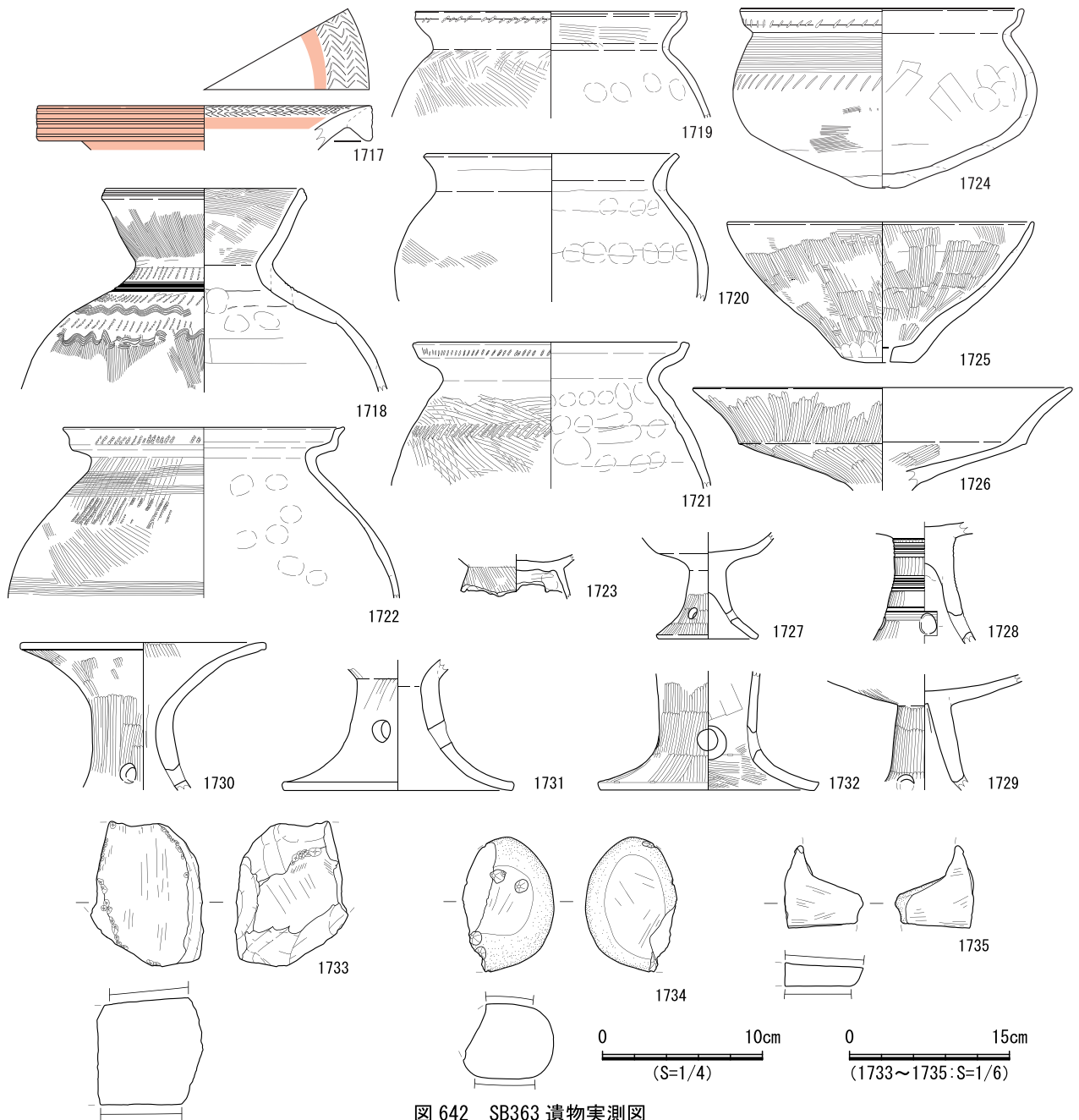


図 642 SB363 遺物実測図

頸部直下に刺突文を3帯施文する。刺突文は上から縦方向、斜位方向、縦方向で、その下に直線文、波状文2帯を施文する。1719、1721はVI期甕A3類。1719は口縁端部が直立して、刺突文を施文する。1721は口縁端部の刺突文のほかに、胴部にも大ぶりの刺突文が認められる。1720はVI期甕B2類。口縁部が頸部で屈折して、短く外反する。端部はやや平坦である。1722はIV期甕B2類。口縁部が短く屈曲し、端部に強い凹面を形成する。口縁部に刺突文、頸部直下に直線文、刺突文を施文する。胴部中位にも直線文らしき文様が認められる。1723はVI期～VII期の甕D類脚部。打ち欠きが認められる。1724はV期～VI期鉢A2類。口縁部が頸部で屈折して、短く外反し端部がわずかに直立する。端部に刺突文、頸部直下に直線文、刺突文を施文する。1725はVI期～VII期の鉢B2類。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がる。1726はV期高坏B3b類。口縁部が短くやや外反して、立ち上がる。1727はV期～VI期高坏F類脚部。透孔付近から裾部が強く開く。裾端部は平坦である。1728はV期高坏B類脚部。直線文3帯が施文される。1729はIX期高坏。脚部が柱状を呈す。内外面に煤が付着する。1730～1732はV期器台A1b類。1730は口縁部が強く外反する。1731、1732は基部が直立して、脚裾部が強く外反する。1733～1735は砥石。いずれも砂岩製であり、1733は重量2.19kgの大型品であるが、1735は0.14kgの小型品である。

時期 出土遺物の時期から、V期末～VI期前半と考えられる。

SB364 (遺構：図644・645、遺物：図643)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB363、SB365、SB366、SB373、SK04530を切り、重複する遺構のなかでは最も後出する。なお、北東隅部は調査区域外にある。

形状 南北長約5.4m、東西長約4.8mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面は最も遺存状況がよい西壁付近で約0.2mが残存し、その傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。1～2層が住居埋土、4層が掘形埋土である。住居埋土はほぼ水平堆積であり、礫をわずかに含むが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて15基の小穴を確認した。P2～P4、P6が平面的な位置関係から柱穴と考えられ、いずれも明瞭な柱痕跡が認められた。P5は底面中央が深く掘り込まれ、柱痕跡が明瞭に残る。壁面の周囲には壁溝が巡り、P8～P15は壁溝に接して検出した。北壁際に類似した小穴は認められないが、壁材を支えた杭の痕跡と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器4,374点、石器類3点、小穴から土器133点、壁溝から土器71点が出土した。多くの土器片がV期～VI期に属するが、P1からはVIII期高坏(1740)が出土した。

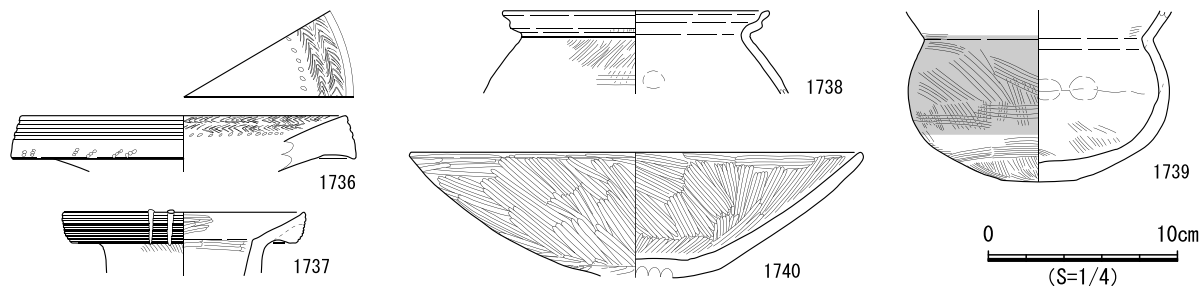


図643 SB364 遺物実測図

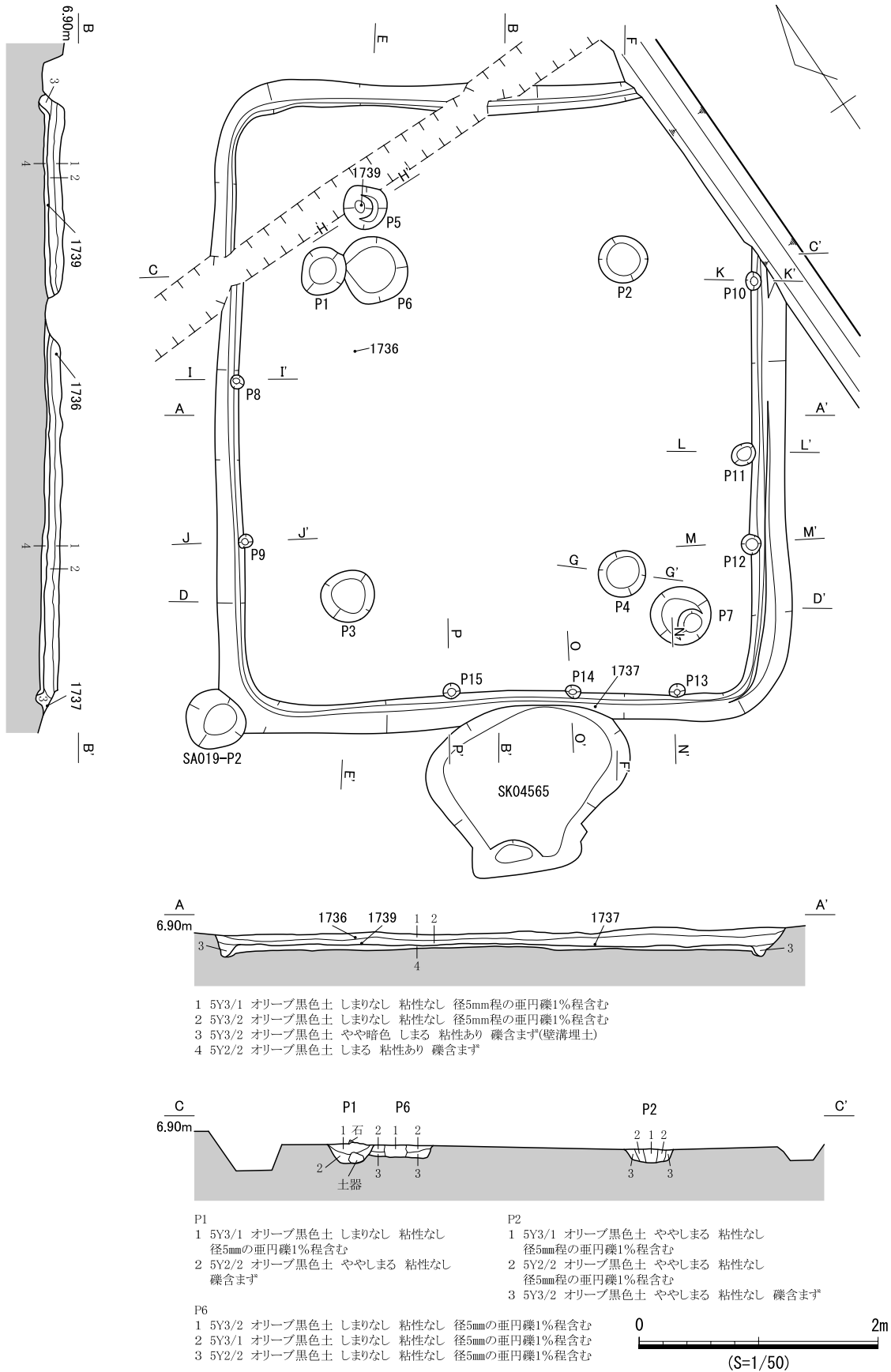


図 644 SB364 遺構図 (1)

出土遺物 1736はV期～VI期壺A1b類。口縁部下端をわずかに拡張し、内面には羽状文が認められる。1737はVII期壺A3類。口縁部が直立気味の頸部で屈折して強く外反し、端部下端を拡張する。棒状浮文が施文される。1738はVII期甕D2b類。口縁部上段が強く屈曲する。1739はVI期～VII期の鉢A類胴部。1740はVIII期高坏。口縁部がわずかに内湾しながら大きく開き、坏部内面には径の小さい段が認められる。

時期 VIII期のSB365を切ることとP1出土遺物の時期から、VIII期と考えられる。

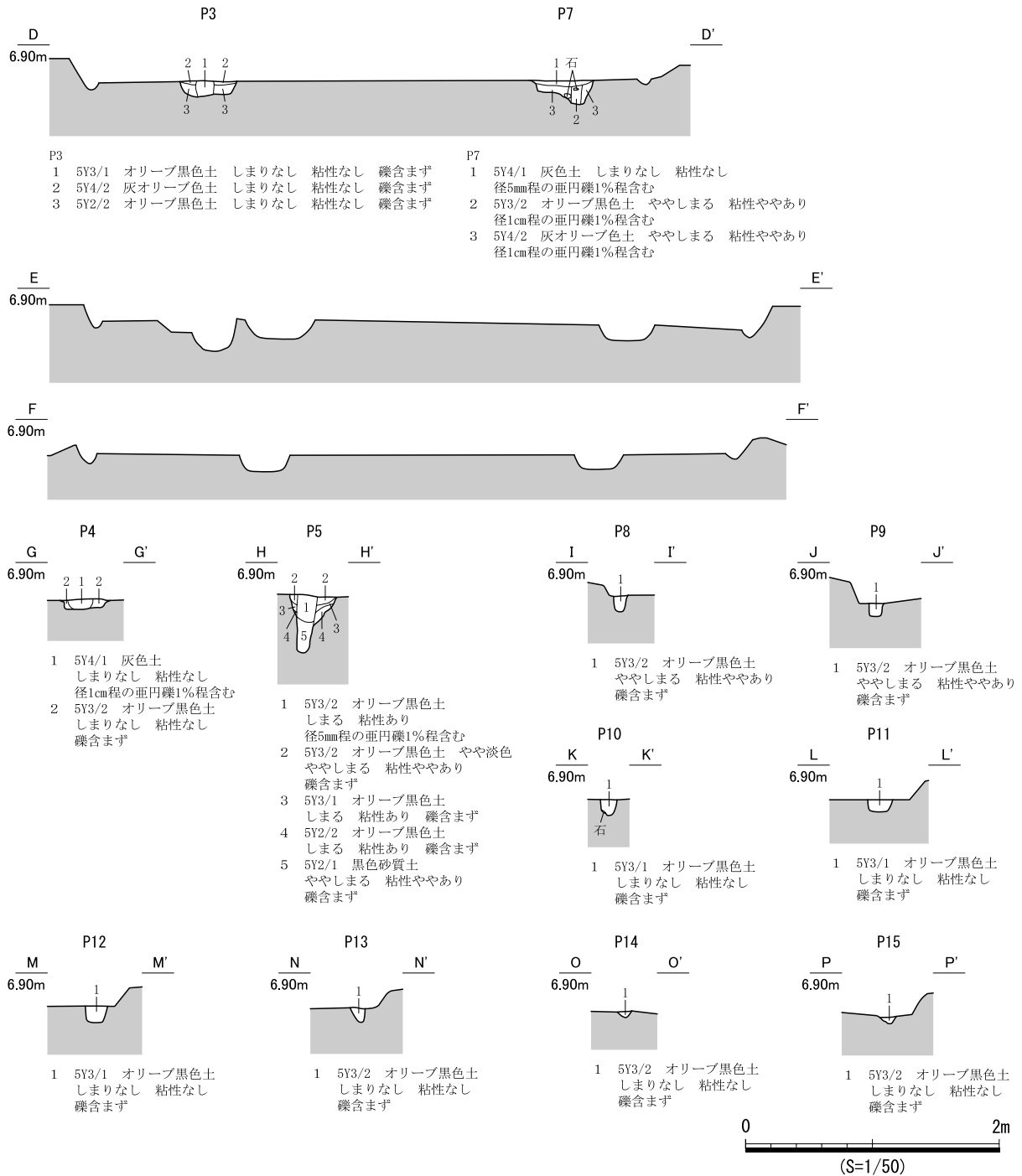


図 645 SB364 遺構図 (2)

SB365 (遺構：図 646・647、遺物：図 648)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB361、SB362、SB364に切られ、SB363を切る。

形状 南北長約5.2m、東西長約5.1mで、平面形は方形である。各辺とも直線的だが、北西隅部と南東隅部はやや丸みをもつ。壁面は最も遺存状況がよい北壁付近で約0.2mが残存し、その傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。2層上面が床面であり、2～4層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認した。P1～P4が平面的な位置関係から柱穴と考えられが、明瞭な柱痕跡が認められたのはP3のみである。P5は明瞭な柱痕跡を伴うが、その性格は不明である。

掘形 3層に分層し、V層のブロック土の混入が目立つ。底面はやや凹凸がみられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,416点、石器類11点、小穴から土器50点が出土した。土器の多くは

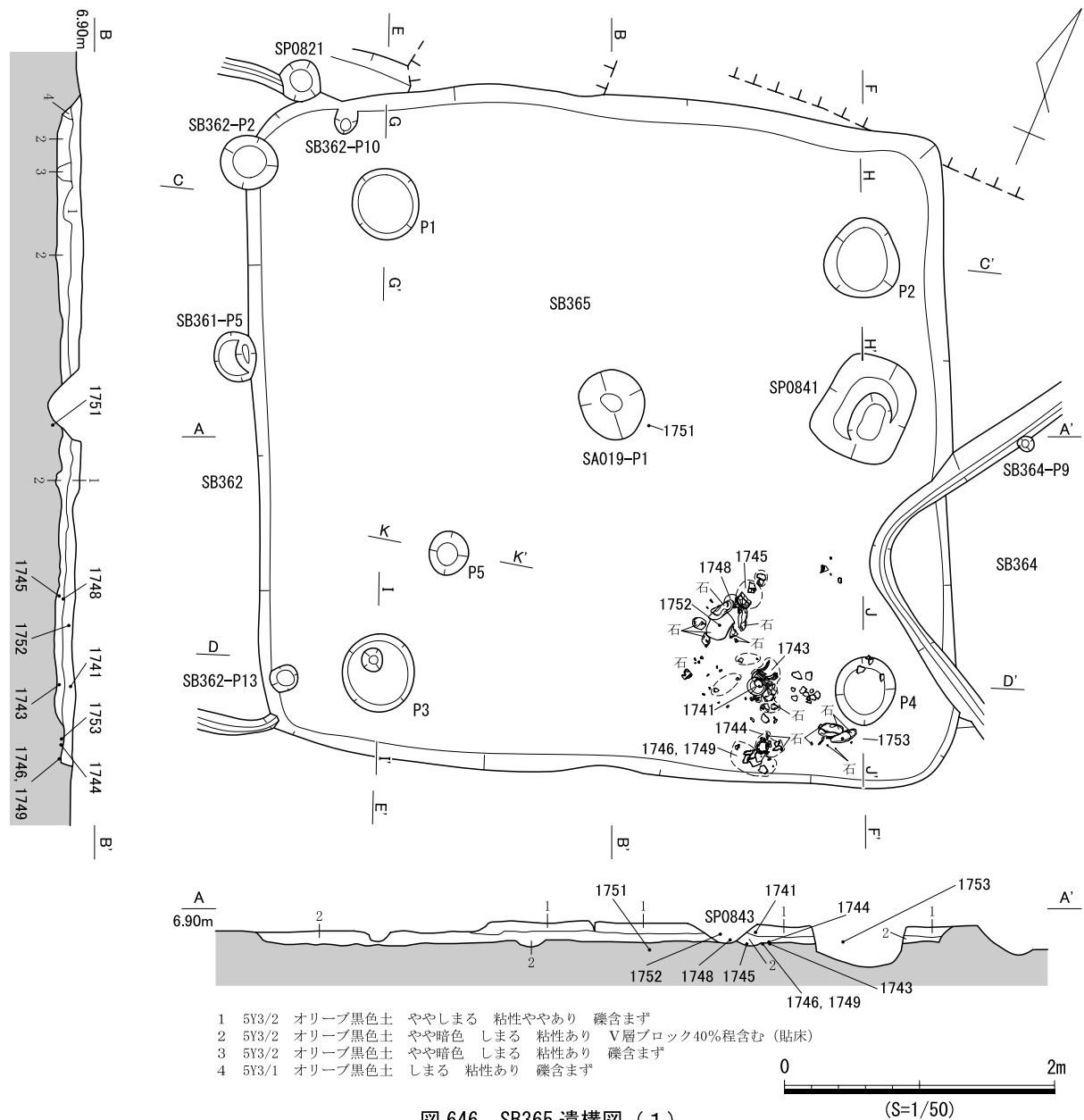


図 646 SB365 遺構図 (1)

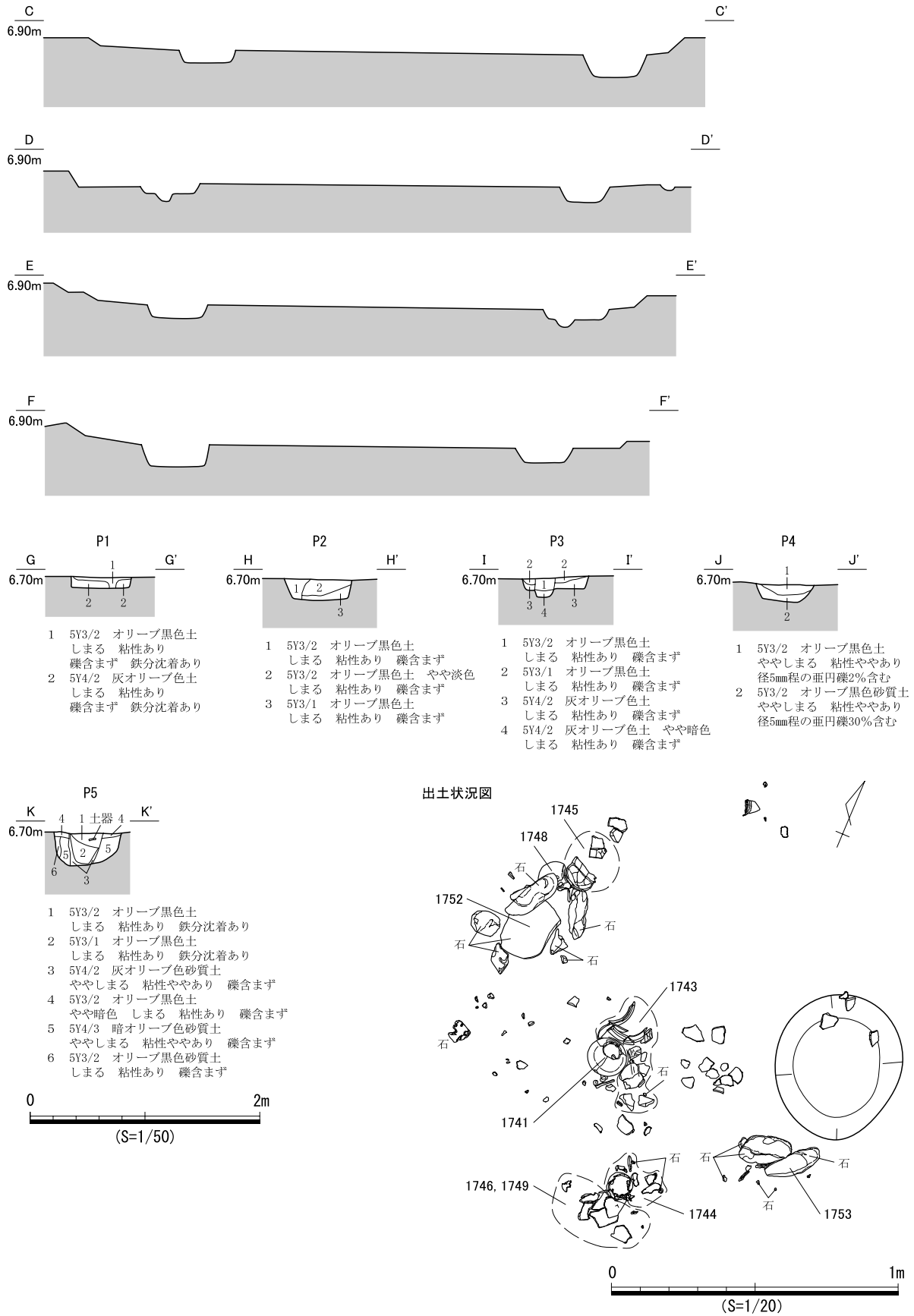


図 647 SB365 遺構図 (2)

Ⅶ期～Ⅷ期に属する。P4の西側では多数の土器片と拳大の礫が散在していた。また、P1からⅦ期甕(1742)が、P5からⅦ期高坏(1747)が出土した。

出土遺物 1741はⅦ期壺H2a類のほぼ完存品。口縁部が短く内湾して、端部に打ち欠きが認められる。胴部は中程が強く膨らみ、穿孔が認められる。1742はⅦ期甕B3類。1743はⅦ期甕D2b類。口縁部上段の外面が強く屈曲し、短く外反する。内面の屈曲は外面ほど強くない。胴部は肩部が強く張り、肩部より上にヨコハケが認められる。1744はⅧ期鉢G類の小型品。口縁部が短く立ち上がり、外面には粗いハケ目が認められる。1745はⅧ期脚付の鉢。口縁部が短く直線的に立ち上がり、頸部にわずかな段をもって、胴部へ移行する。胴部の膨らみは弱く、最大径は口径とほぼ同じである。脚部は付根から円錐形に広がり、端部には打ち欠きが認められる。外面には全体に煤が付着する。1746はⅦ期高坏C4b類。口縁部がわずかに内湾する。1747はⅦ期高坏D2類。口縁端部が内傾し、数条の多条沈線を施文する。1748はⅧ期高坏。径の小さい坏底部から口縁部が直線的に伸び、坏底部には比較的明瞭な段が認められる。1749はⅧ期高坏脚部。細身の付根から脚部がやや外反する。1750はⅦ期器台B4類。

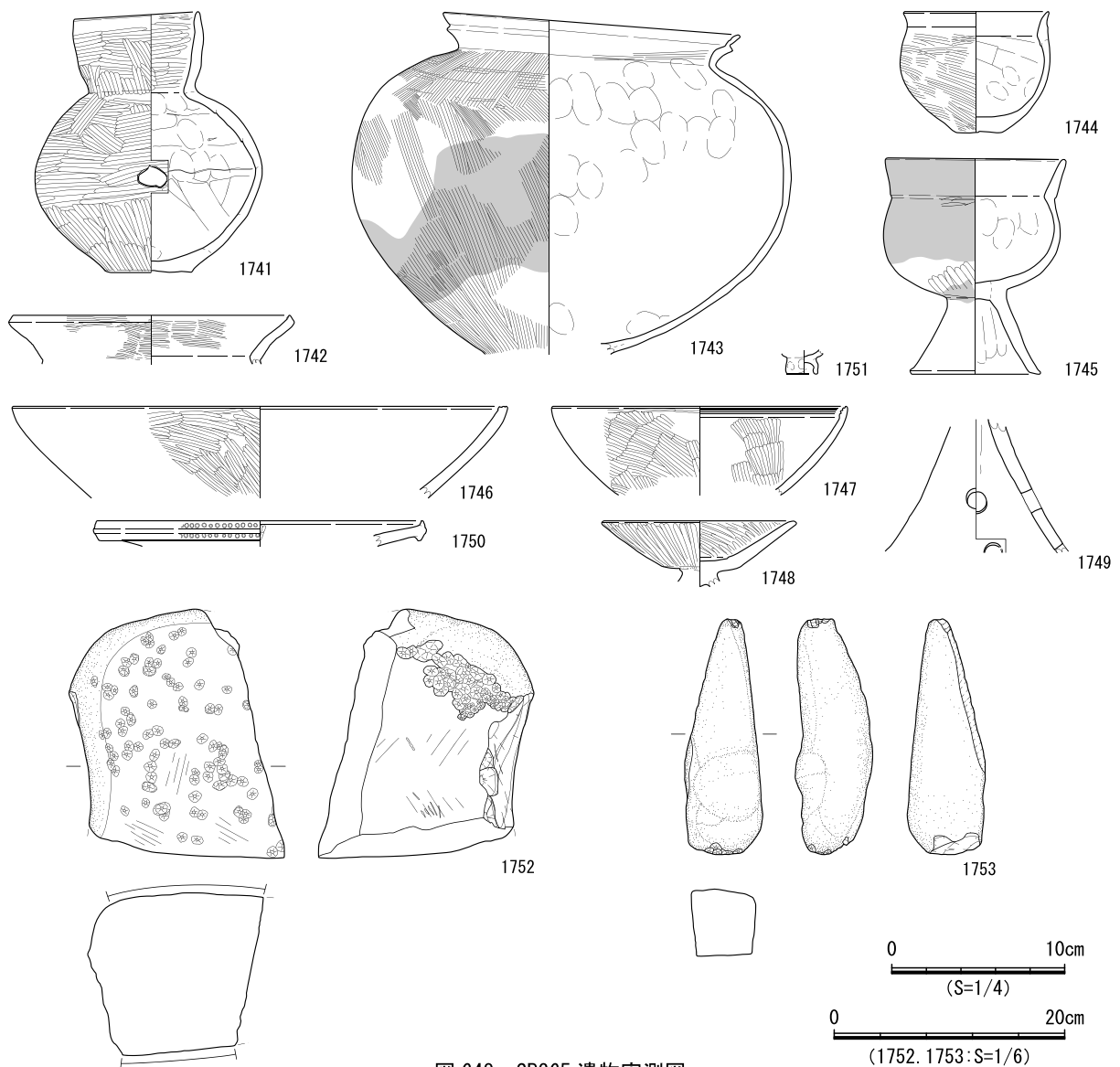


図 648 SB365 遺物実測図

口縁部を上下に拡張して、2帯の円形刺突文を施文する。1751はⅦ期手捏ねE類。小さな脚台状で、上部を欠損するため、全形は不明である。1752は砥石。表裏面に砥面があり、砥面の周縁には多くの敲打痕が観察できる。1753は叩石。断面方形の楕円礫を素材とし、下端に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。しかし、Ⅶ期のSB361とSB362に切られていることから、出土遺物の時期と重複関係から推定できる時期とに矛盾がある。

SB366 (遺構：図650、遺物：図649)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側をSB364に切られ、北側は調査区域外にある。

形状 確認した東辺と南辺は直線的で、隅部は丸みを帯びる。壁面の傾斜は急である。

埋土 6層に分層した。4層上面が床面であり、1～3層が床面までの埋土、4～6層が掘形埋土である。床面までの埋土は中央に向かって緩やかに凹み、礫や炭化物をわずかに含む。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて明瞭な柱痕跡を伴う小穴（P1）を確認したが、住居の全形が不明であるため、その性格は不明である。

掘形 3層に分層でき、礫をわずかに含む。底面はやや凹凸がある。

遺物出土状況 埋土中から土器185点、石器類1点、小穴から土器9点、壁溝から土器10点が出土した。その多くはⅥ期～Ⅶ期の土器片である。

出土遺物 1754、1755はⅦ期高坏D類。1754は口縁部が大きく開き、坏部内面周縁に段が認められる。1755は脚部。裾部が内湾し、端部は面取りされている。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

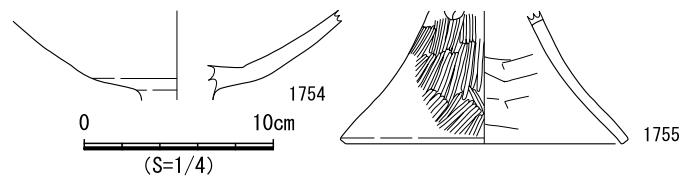


図649 SB366 遺物実測図

SB367 (遺構：図651～653、遺物：図654)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361、SB362、SB374、SB375に切られ、重複する竪穴住居跡のなかでは最も先行する。

形状 南北長約5.6m、東西長約5.9mで、平面形は長方形である。東辺と南辺は直線的で、北辺と西辺はやや蛇行する。北西隅部と南西隅部はやや丸みを帯びる。壁面の高さは約0.1m～0.2mで、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、礫をわずかに含む。複数の竪穴住居跡に切られるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて22基の小穴を確認した。P1～P4が平面的な位置関係や柱痕跡が認められたことから、柱穴と考えられる。柱痕跡を確認した小穴は他にP5、P8、P11、P14、P15、P16、P18、P20、P22の9基である。P14とP15はそれぞれP3、P4の北東側に隣接する。位置的に建替えの可能性のあるものの、P1とP2の周辺には同様な小穴が確認できなかった。

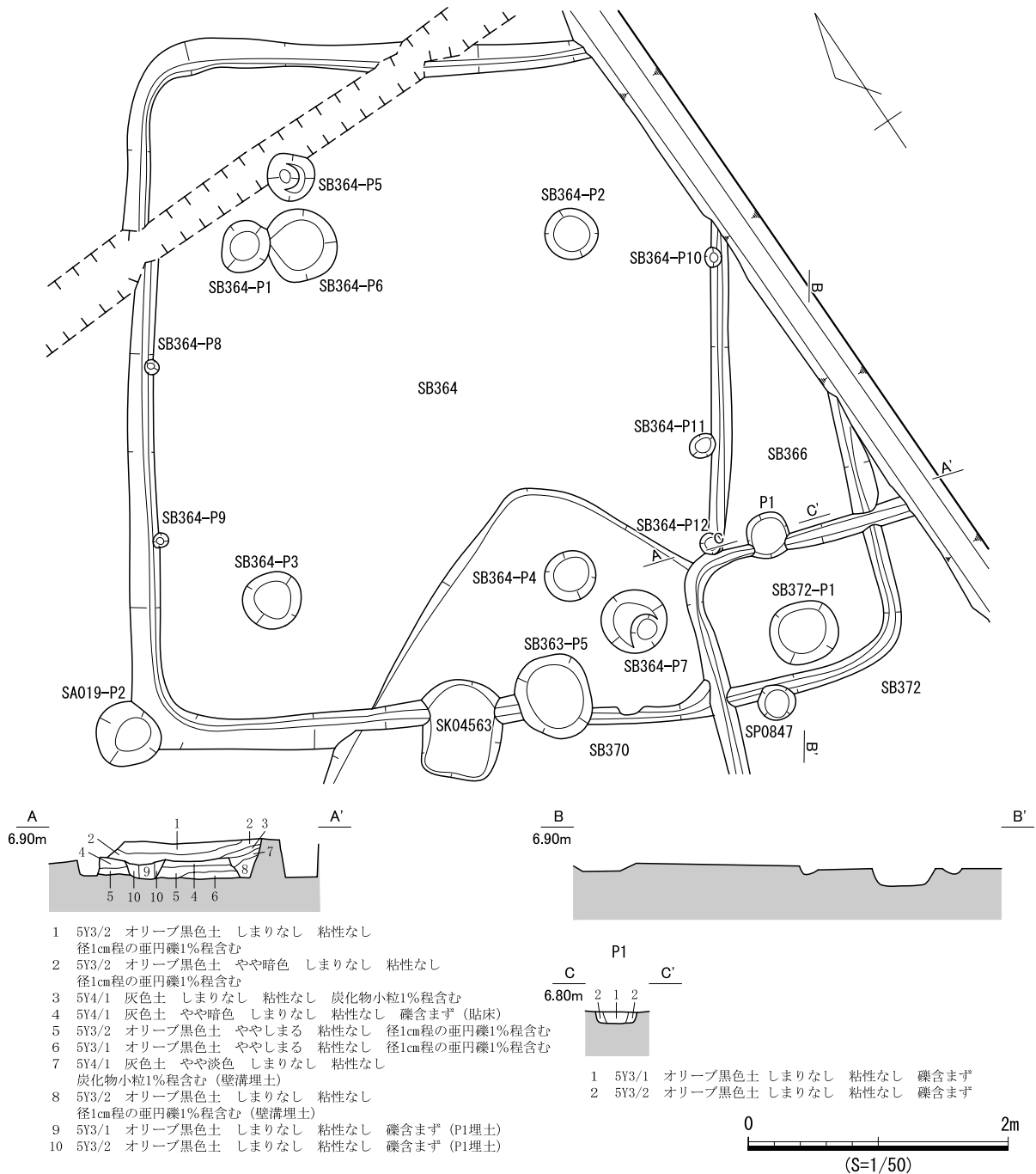


図 650 SB366 遺構図

遺物出土状況 埋土中から土器4,264点、石器類4点、小穴から土器217点、壁溝から土器39点が出土した。土器の多くはV期～VII期に属する。P2からV期高坏(1767)が出土した。

出土遺物 1756はV期壺B1類で例外的に円形刺突文が認められる。口縁部が外反して、端部に強い平坦面を形成する。端部、内面は2帯の円形刺突文が認められる。1757は線刻のあるV期～VI期の壺胴部。対向する3本1組の円環状の描画が認められる。左側にある中央の線刻は、途切れる箇所があり、断続的な描画である。3本1組の線刻間には斜位の線刻が加えられるが、書き順は斜位の線刻が先である。1758はIV期壺A類胴部。打ち欠きが認められる。1759、1760はV期壺K類。頸部が外反し、口縁部が短く屈折する。端部は平坦面を形成する。1761はV期甕B1b類。口縁部が短くくの字に屈曲

して、端部は平坦で刺突文が認められる。1762はⅦ期～Ⅷ期Ⅱ類脚部。打ち欠きが認められる。1763はⅥ期鉢A3a類。端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。底部は小さな平底である。口縁部が短く屈折して、端部がやや尖り気味である。1764はⅦ期高坏C4d類。幅広の多条沈線、

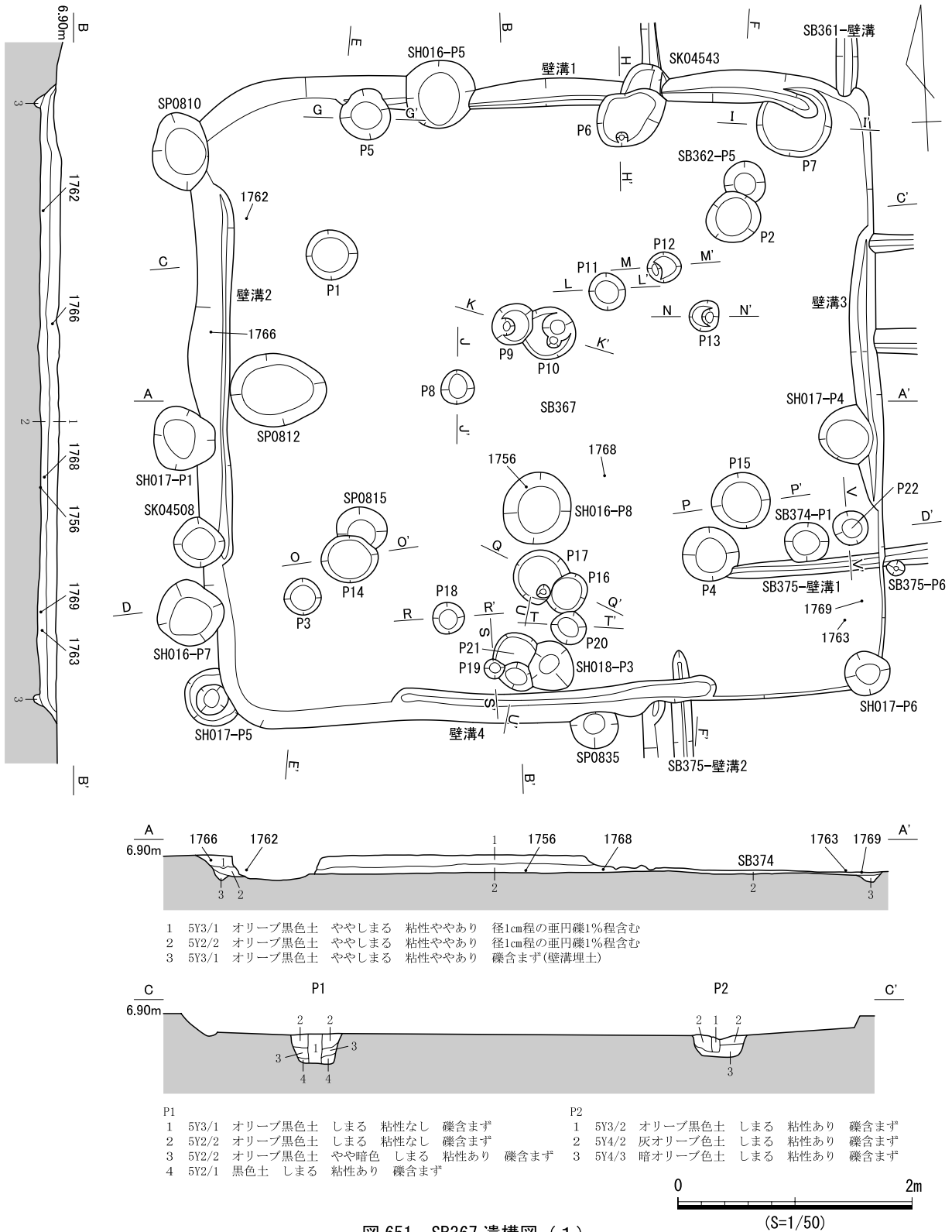


図 651 SB367 遺構図 (1)

山形文、羽状文によって施文される。1765はⅦ期高坏D2類。内傾する口縁端部に、数条の多条沈線を施文する。1766はⅦ期高坏D類脚部。細身の付根から脚部が円錐形に広がり、透孔が上下2段に認められる。1767はⅤ期高坏B類脚部。付根の直下に直線文が認められる。1768、1769は砥石。いずれも砥面が2面あり、1769は表面の多くに煤が付着している。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB361、SB362に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

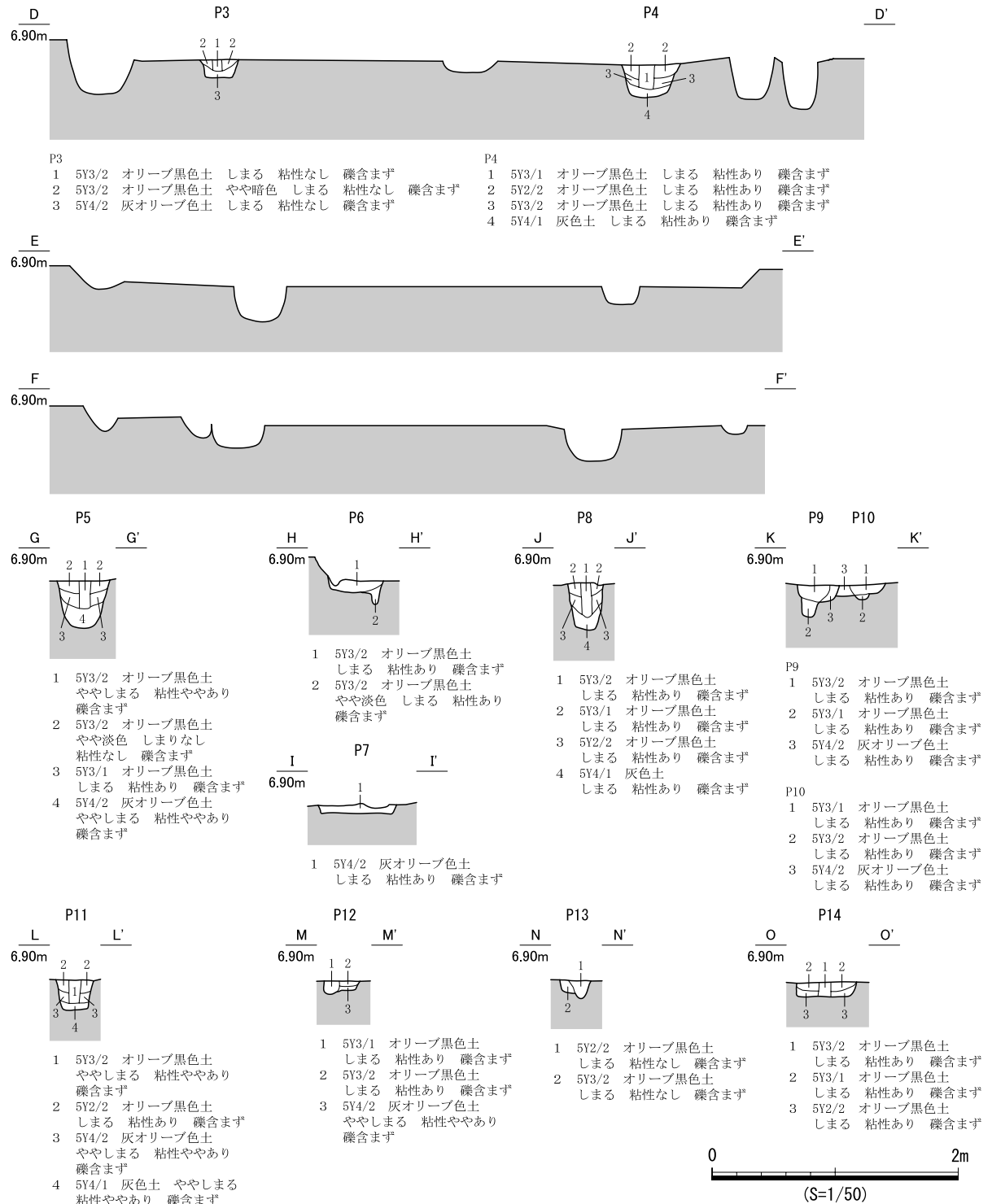


図 652 SB367 遺構図 (2)

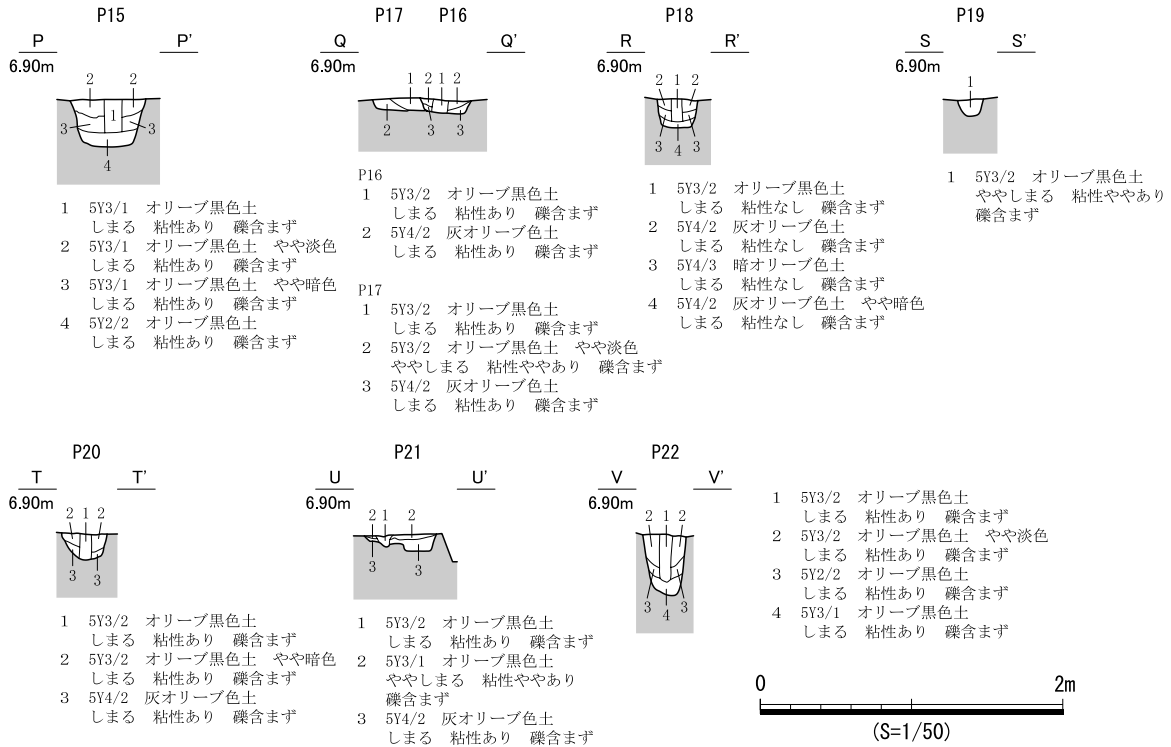


図 653 SB367 遺構図 (3)

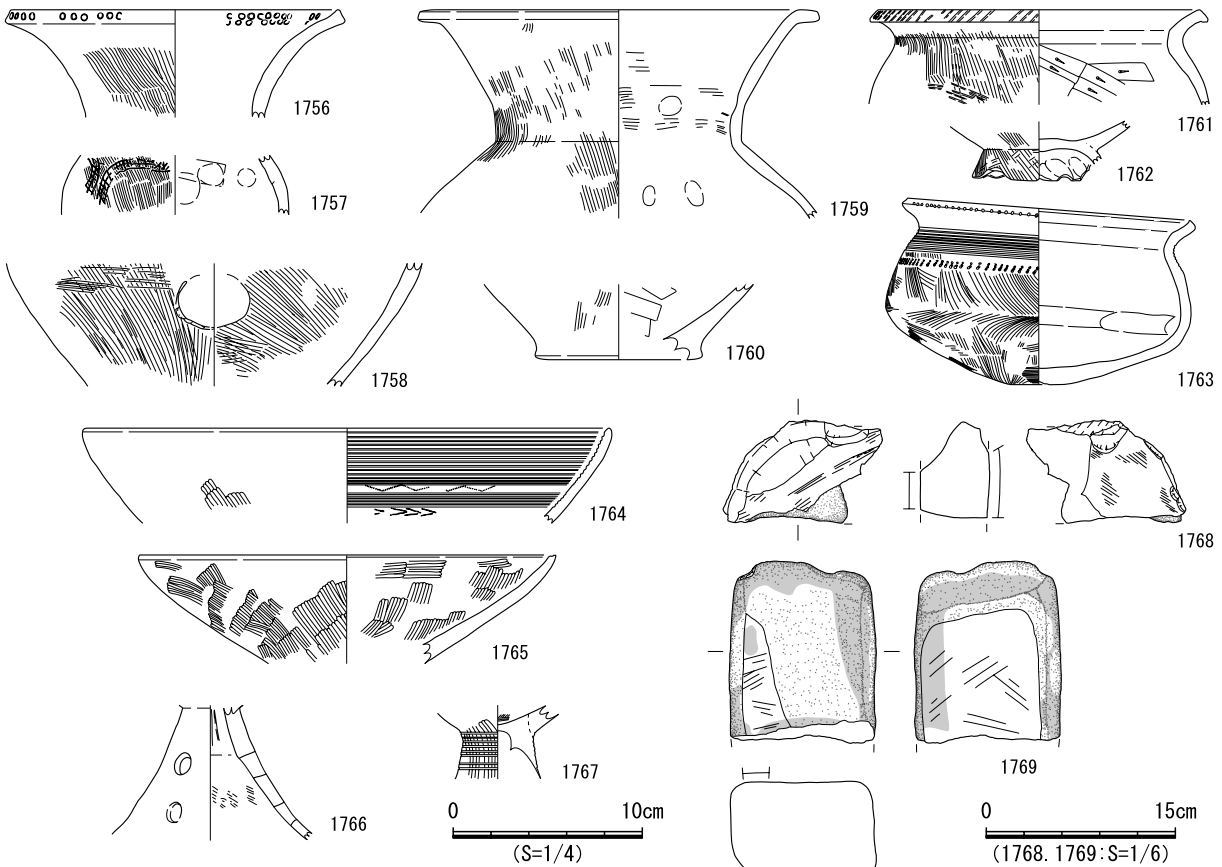


図 654 SB367 遺物実測図

SB368 (遺構：図 655)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB369を切る。西隅部を検出したのみで、大半は調査区域外にある。壁面に沿って壁溝を検出したので、竪穴住居跡と判断した。

形状 大きさは不明であるが方形と考えられ、隅部は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。礫を含むが、その成因は不明である。

床面 やや凹凸があり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上で小穴は検出できなかったが、隅部を除いて壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器161点が出土した。土器はV期～IX期に属するが、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期とIX期のSB369を切ることから、IX期と考えられる。

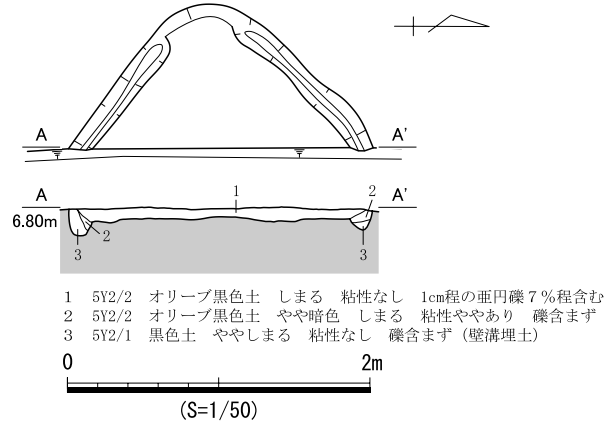


図 655 SB368 遺構図

SB369 (遺構：図 657、遺物：図 656)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB368に切られ、SB370～SB372を切る。東半分は調査区域外にあり、南辺は攪乱によって失われている。

形状 大きさは不明で、北辺と西辺は直線的にのびる。壁面の高さは約0.1m、壁面傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、層界に凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認したが、いずれも単層であり、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,680点、小穴から土器5点が出土した。VI期～VII期の土器片はわずかで、VIII期～IX期の土器片が多く出土した。また、SB368埋土出土土器と接合した土器片もある。

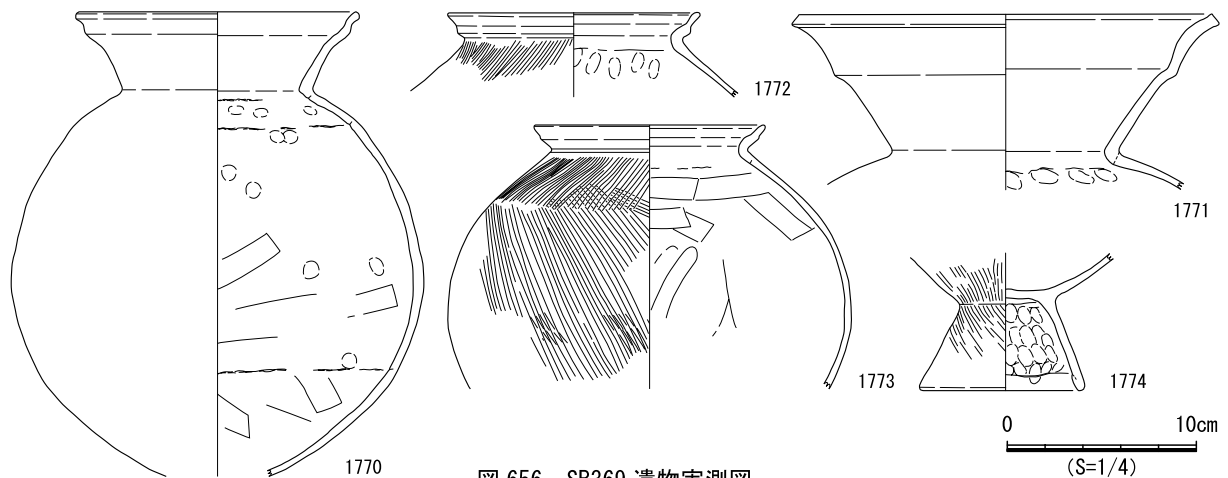


図 656 SB369 遺物実測図

出土遺物 1770、1771はⅨ期壺。頸部がなだらかに外反し、口縁部がわずかに屈曲する。1770は端部がやや肥厚気味である。胴部は球形にちかく、外面には煤が強く付着する。器壁が全体に薄く整えられた精緻なつくりである。1771は口縁部が1770より長く外反して、端部は平坦である。1772、1773はⅨ期甕D類。1772は口縁部が短く屈曲して、端部をわずかに肥厚する。1773は口縁部の屈曲が弱く、端部はやや尖り気味である。頸部には太い沈線が認められ、胴部は肩部が強く張り、粗い羽状のハケ目が認められる。1774はⅨ期甕D類脚部。脚部はハの字に開き、端部を肥厚させて折り返す。

時期 出土遺物の時期から、Ⅸ期と考えられる。

SB370 (遺構：図658・659、遺物：図660)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東辺は調査区域外にあり、SB369に切られ、SB363、SB372、SB373を切る。

形状 南北長約5.5mであり、隅丸方形を呈する。各辺とも直線的であり、壁面は0.15mの高さが残る。

埋土 2層に分層した。下層は壁面沿いの堆積である。埋土の大半は1層であるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。確認した壁面には

SK04569によって削平される部分を除いて、幅約0.1mの壁溝がめぐる。床面上にて10基の小穴を確認した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴の可能性が高く、P3を除いて明瞭な柱痕跡が認められる。また、P5～P9も明瞭な柱痕跡が確認でき、その多くがP1の周囲に位置する。なお、北東隅部付近では炭化物が堆積していた。

遺物出土状況 埋土中から土器2,986点、石器類1点、小穴から土器292点、壁溝から土器97点が出土した。土器はⅤ期～Ⅷ期に属するが、その多くはⅥ期～Ⅶ期である。床面付近から出土した遺存状

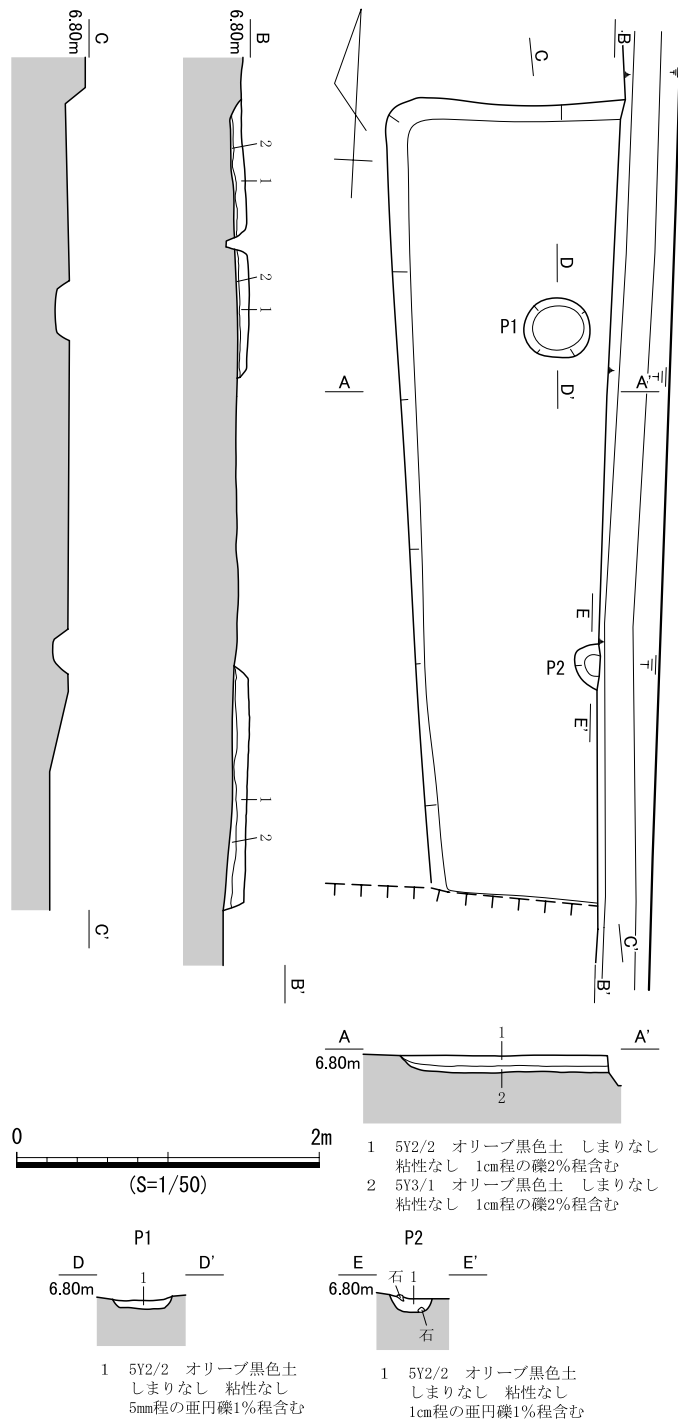


図 657 SB369 遺構図

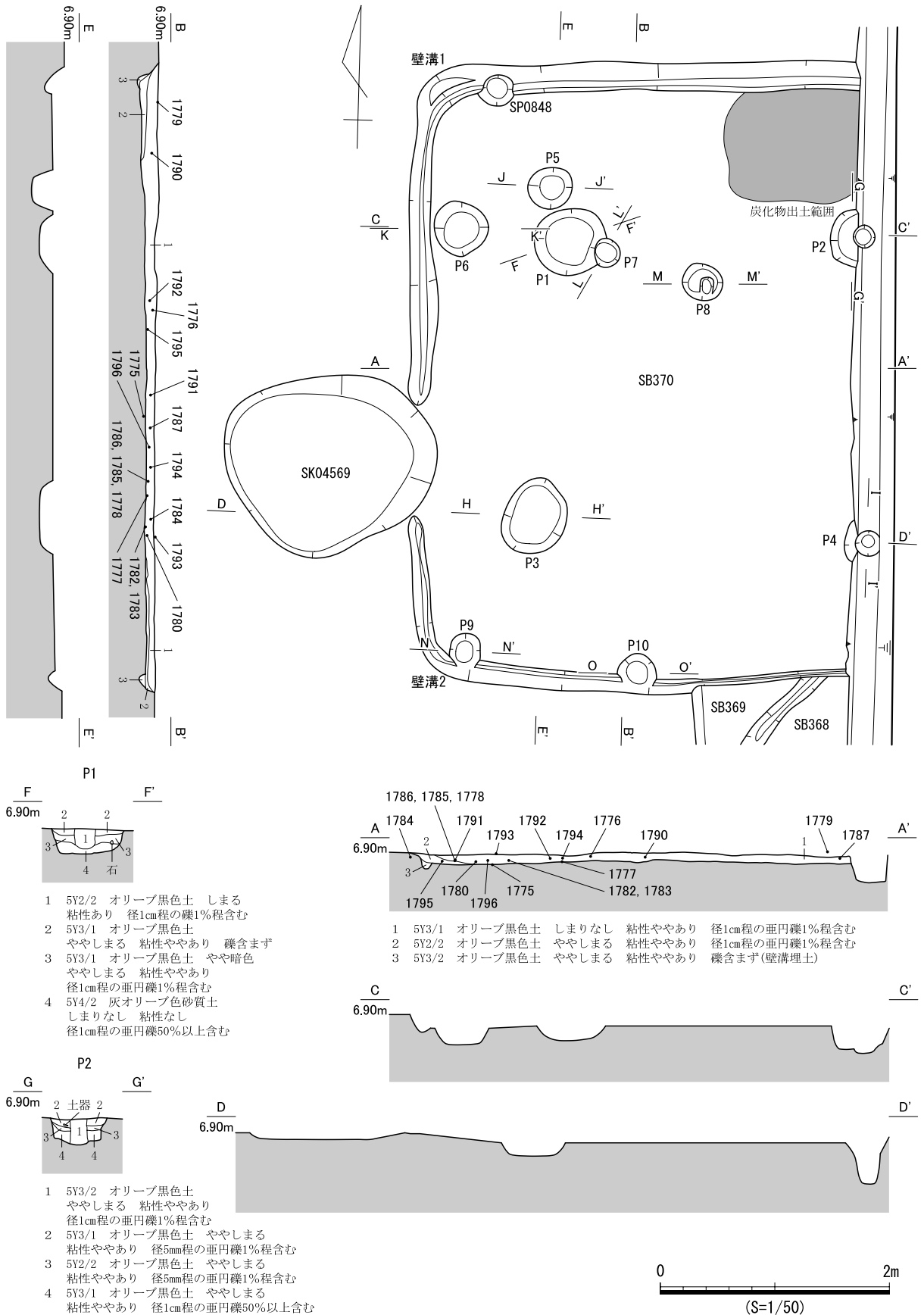


図 658 SB370 遺構図 (1)

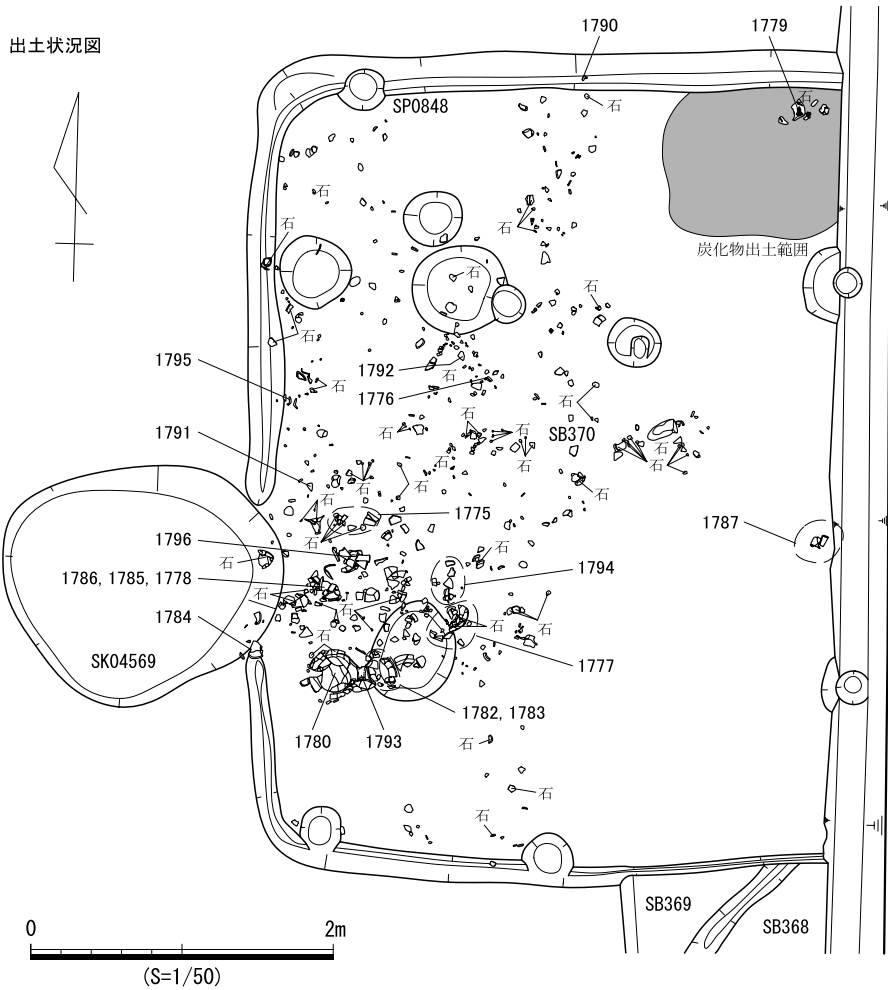
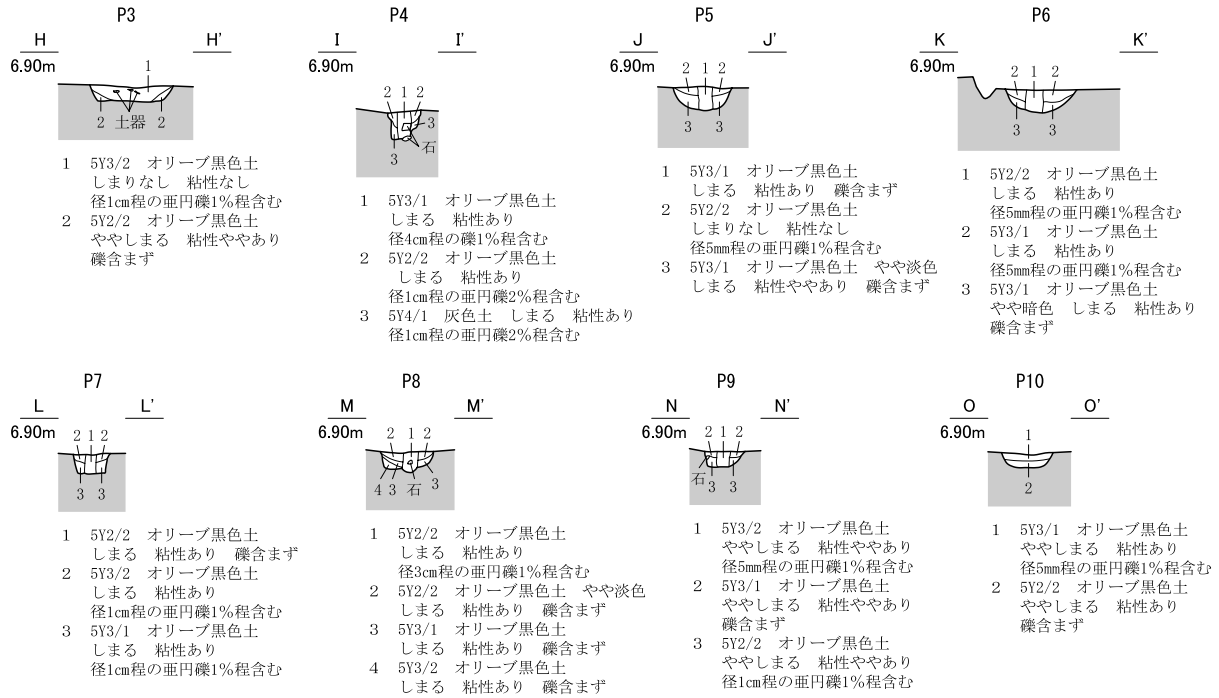


図 659 SB370 遺構図 (2)

況のよい土器はP3付近に集中して分布し、その多くはVI期の土器である。また、P1の4層からVI期器台(1794)が出土した。

出土遺物 1775はVI期壺H1b類。口縁部が頸部から直線的に立ち上がり、端部に直線文が認められる。1776はV期壺K類。頸部片で胎土に角閃石が認められ、生駒西麓産と考えられる。1777はVI期壺胴部。球形の胴部で、小さな平底である。1778はVI期~VII期壺底部。1779はVIII期の柳ヶ坪型壺。内外面に羽

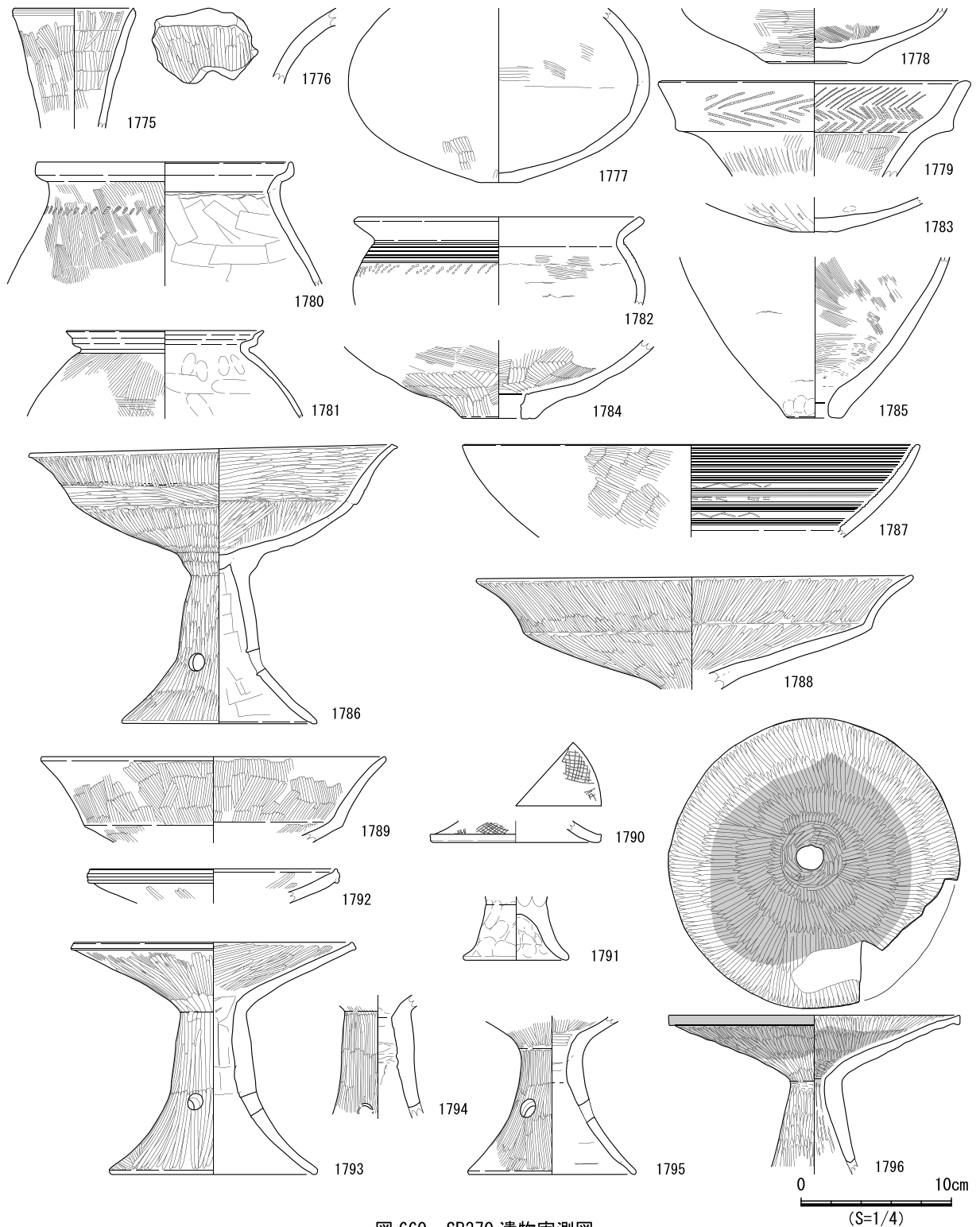


図 660 SB370 遺物実測図

状文が認められる。1780は口縁部が短く屈曲するV期甕A2a類。頸部直下に刺突文が認められる。1781はⅧ期甕D3類。口縁部上段が短く屈折して直立する。胴部は肩部が強く張り、ヨコハケが認められる。1782、1783はⅥ期鉢A3a類。口縁部が短く屈折して、端部がわずかに直立気味となる。1782には頸部直下に直線文と刺突文が施文される。1784、1785はⅥ期～Ⅶ期鉢B2類。1785は小さな底部から口縁部が内湾しながら立ち上がる。1786はV期～Ⅵ期高坏B4類。口縁部がやや長く外反して、端部は丸みをもつ。脚部は透孔付近までは柱状気味で、裾部が円錐形に広がる。1787はⅦ期高坏C4d類。内面を幅広の多条沈線と山形文によって施文する。1788はV期高坏B3b類。大きく外傾する坏底部から口縁部が短く外反する。1789は口縁部が坏底部からなだらかに外反するV期～Ⅵ期高坏B4類。外面は全体、内面は口縁端部付近にのみ煤が付着する。1790はV期高坏J類。脚裾部にあたり、複合鋸歯文が認められる。1791はⅥ期～Ⅶ期甕E類もしくは鉢の脚台。短く裾部が外反する。1792はⅥ期器台B1c類。口縁端部上下端を拡張して、直線文を施文する。1793、1794、1796はⅥ期器台B1a類。1793は口縁部が直線的に開き、端部は平坦である。脚部は付根から透孔付近までは柱状を呈し、裾部が円錐形に広がる。1794は脚部。1796は裾部を欠損するが、口縁部内面ちかくが円環状に煤が付着する。蓋として転用された可能性がある。1795はⅥ期器台B2類脚部。脚部が短く外反する。

時期 出土遺物の最新時期とⅦ期のSB372、SB373より後出することから、Ⅷ期と考えられる。

SB371 (遺構：図661)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB368～SB370、SB372、SB379、SB381に切られ、重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。東側の約半分は調査区域外にあり、わずかに残る西辺を確認した。

形状 南北長、東西長ともに不明であるが、確認できた範囲から隅丸方形を呈すると考えられる。

埋土 複数の竪穴住居跡に切られるため埋土は部分的にしか確認できていないが、3層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認し、P2は柱痕跡が伴うが、P1には認められなかった。住居の全形が不明であるため、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,367点、石器類1点、小穴から土器15点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期に属するが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB372 (遺構：図662、遺物：図663)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側の約半分は調査区域外にある。SB364、SB369、SB370に切られ、SB371を切る。

形状 南北長約4.9mで、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面は北壁の遺存状況が良く、壁面の傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。ほぼ水平堆積であり、層界の凹凸がややみられる。しかし、その成因は不明である。

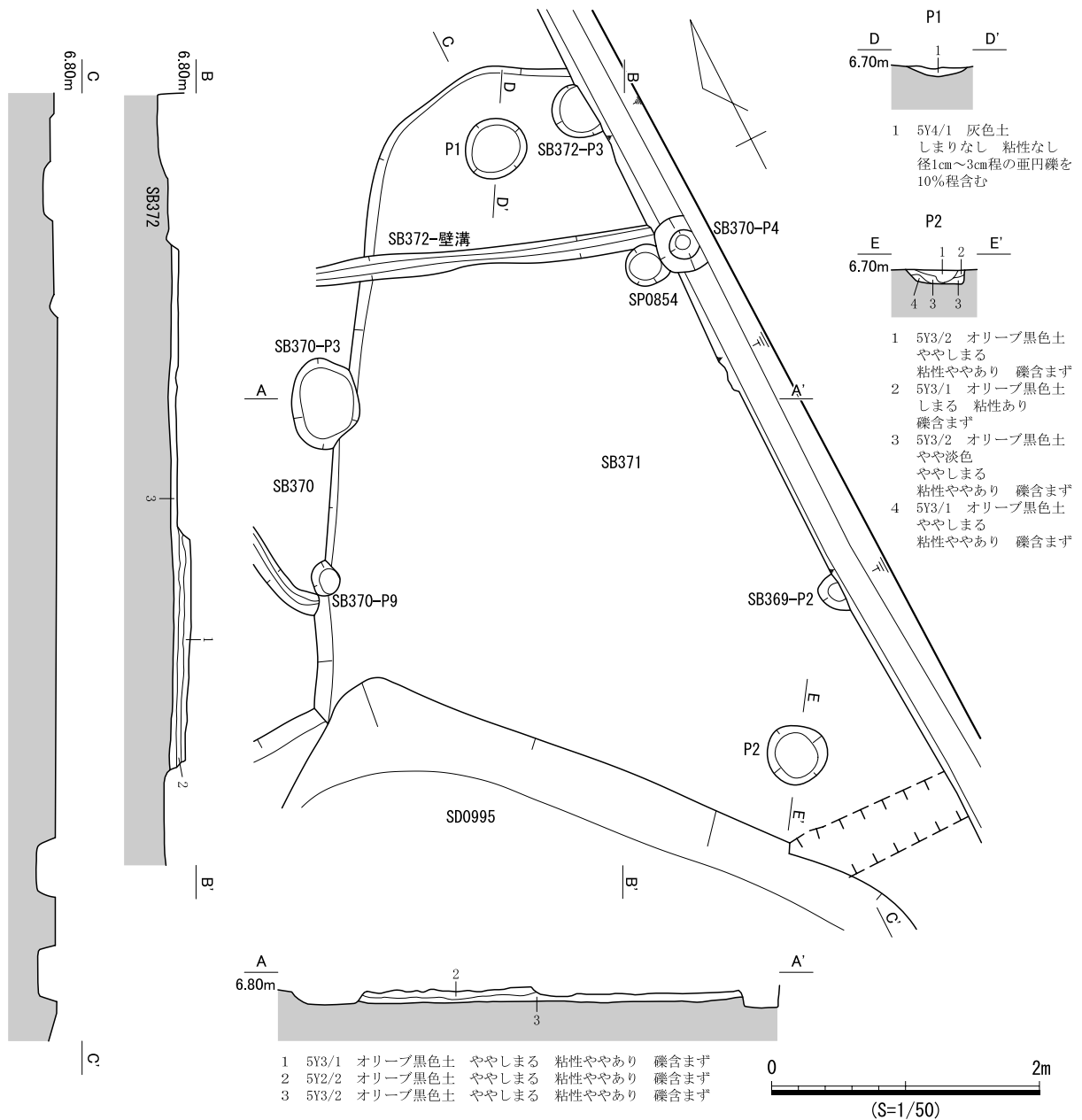


図 661 SB371 遺構図

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて3基の小穴を確認した。明瞭な柱痕跡はP1のみしか認められなかったが、P1とP2は平面的な位置関係から柱穴の可能性はある。なお、幅約0.1mの壁溝が残存する壁面に沿って巡る。

遺物出土状況 埋土中から土器1,186点、小穴から土器64点が出土した。土器の多くはVI期～VIII期に属する。

出土遺物 1797はVI期甕D1b類の口縁部片。端部に刺突文が認められる。1798はVIII期甕D3類の口縁部片。1799はVII期高坏G類坏部。

時期 出土遺物の時期と、VIII期のSB364、SB370に切られ、VII期SB371を切ることから、VIII期と考えられる。

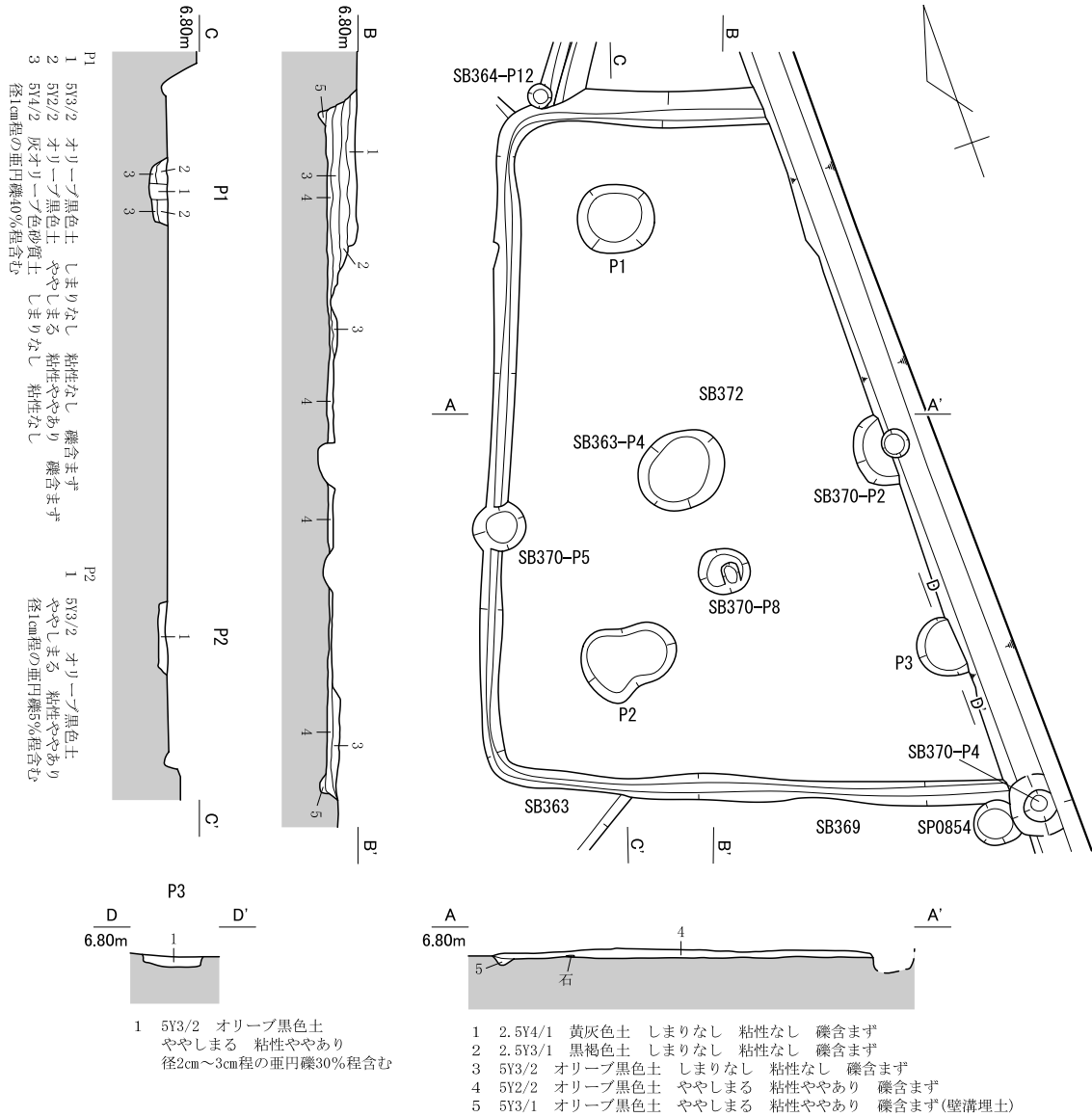


図 662 SB372 遺構図

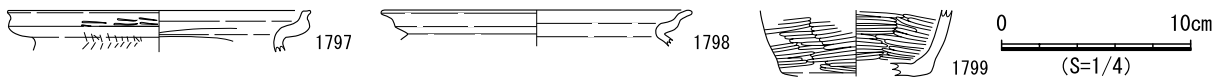
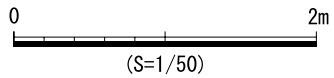


図 663 SB372 遺物実測図

SB373 (遺構：図 664・665、遺物：図 666)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB364、SB370、SB372に切られ、SB363を切る。なお、東辺は調査区域外にある。

形状 南北長約5.3mで、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面は0.1mが残存する程度である。

埋土 単層であり、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて9基の小穴を確認した。明瞭な柱痕跡を伴う小穴は認められなかったが、P1～P4、もしくはP1～P3、P9が平面的な位置関係から柱穴と考えられる。なお、幅約0.1mの壁溝が北西隅部付近のみに認められる。

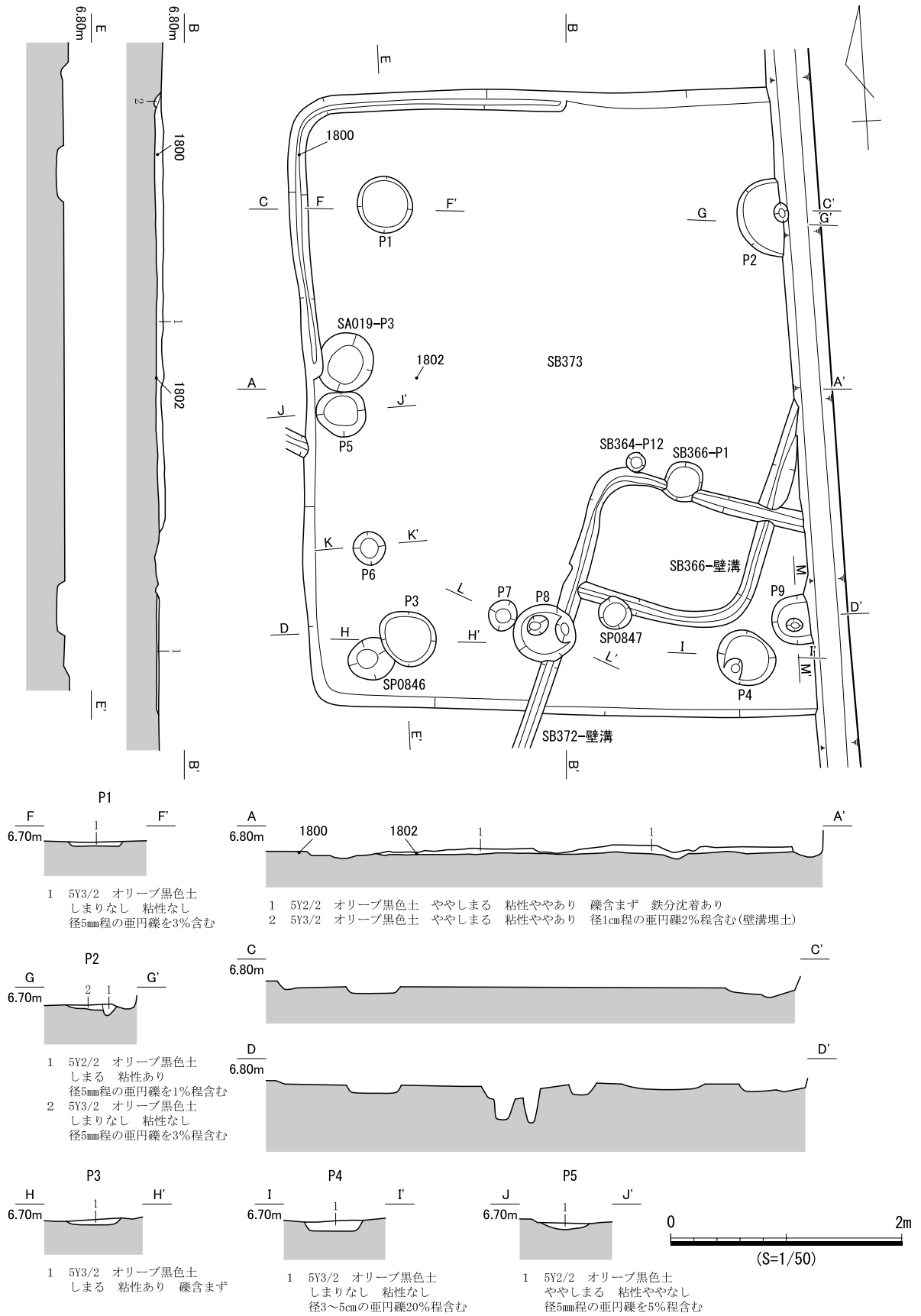


図 664 SB373 遺構図 (1)

遺物出土状況 埋土中から土器775点、小穴から土器44点、壁溝から土器20点が出土した。土器の多くはVI期～VIII期に属し、遺存状況のよいVII期～VIII期の壺(1802)は床面上から、VII期～VIII期の甕(1801)はP1から出土した。

出土遺物 1800はV期～VI期壺A1b類。口縁端部下端をわずかに拡張して、内面には羽状文を施文する。内外面には煤が付着する。外面に円環状の煤が付着する。1801はVII期～VIII期甕B4類。口縁部が外反する。1802はVII期～VIII期壺底部。底部から胴部が内湾しながら立ち上がり、底部がやや突出する。内面に未貫通の円形の凹みが複数みられる。

時期 出土遺物の時期と、VIII期のSB364、SB370、SB372に切られることから、VIII期と考えられる。

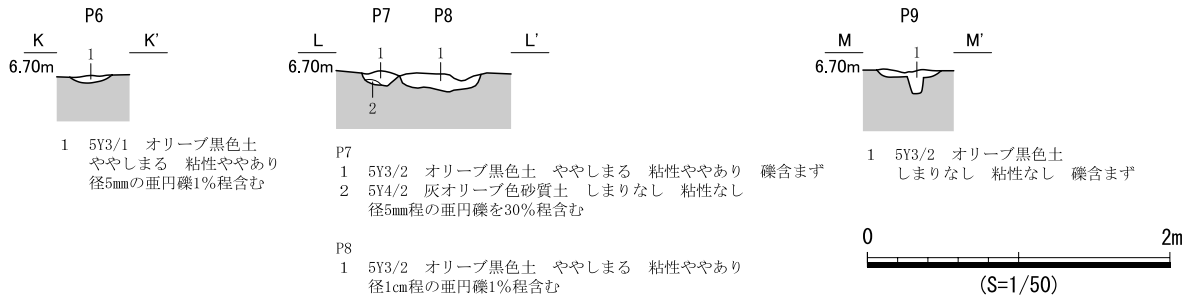


図 665 SB373 遺構図(2)

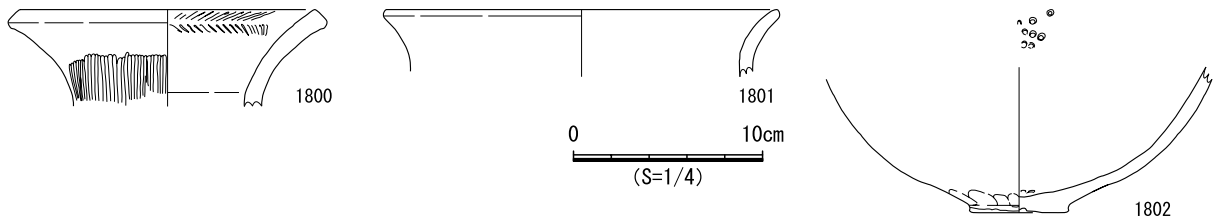


図 666 SB373 遺物実測図

SB374 (遺構：図 667・668、遺物：図 669)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361、SB379に切られ、SB367、SB375、SB376を切る。南東隅部は攪乱によって失われている。

形状 南北長約5.6m、東西長約5.8mであり、平面形は隅丸方形を呈する。各辺とも直線的で、壁面の残存高は約0.2mである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、その成因は不明である。

床面 中央は平坦である。南北両端がやや高いものの、図示できていない。硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴を12基確認し、P7、P10～P12を除いた小穴で、柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からするとP1、P2、P4、P5が柱穴と考えられる。また、P4とP5は、P3とP6と重複関係にある。P7とP8は北壁際に位置しており、北壁と軸を揃える。なお、各辺に沿って壁溝を検出したが、断続的である。また、壁溝に沿って壁材を留めるためと考えられる杭の痕跡を確認した(P10～P12)。

遺物出土状況 埋土中から土器2,485点、石器類2点、小穴から土器69点、壁溝から土器48点が出土した。V期～VII期の土器が大半で、なかでもVI期の土器が多くを占め、遺存状況がよい。なお、わずかに縄文時代晩期後半、I期の土器片が認められた。

出土遺物 1803はVI期～VII期の甕A4類。1804はVI期～VII期の甕脚部。付根から脚部がわずかに内湾

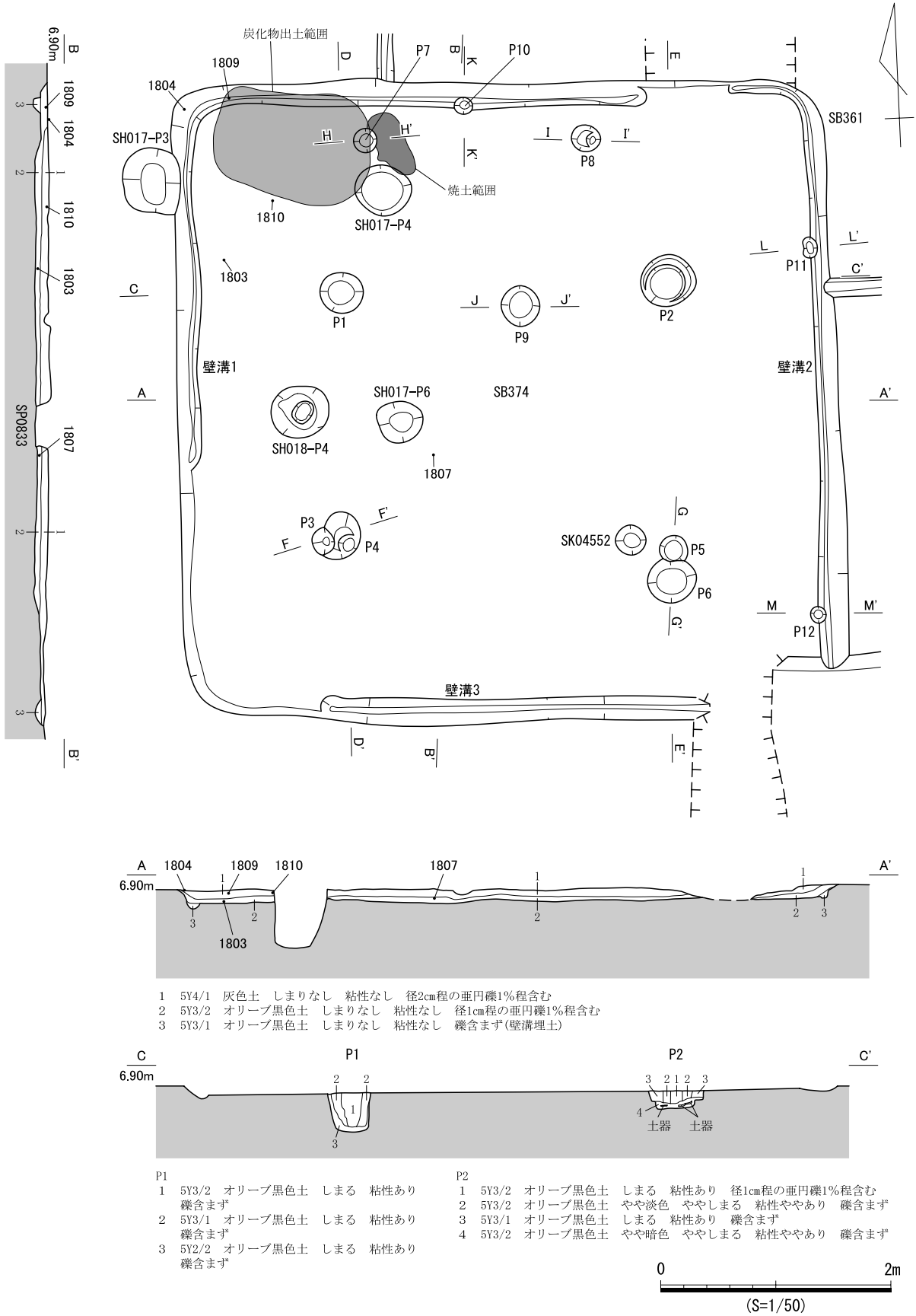


図 667 SB374 遺構図 (1)

して、短く伸びる。1805はVI期鉢A2類。口縁端部がわずかに直立する。口縁端部がわずかに屈曲する。1806はV期～VI期の高坏B3b類。口縁部が強く外反する。1807はV期高坏B類脚部。脚部が付根から円錐形に広がる。1808はV期～VI期の小型の高坏脚部。1809はV期器台A1b類。基部が直立気味で、脚部が外反する。1810はVI期器台B1a類。付根から脚部が直線的に伸び、裾部で円錐形に広がる。

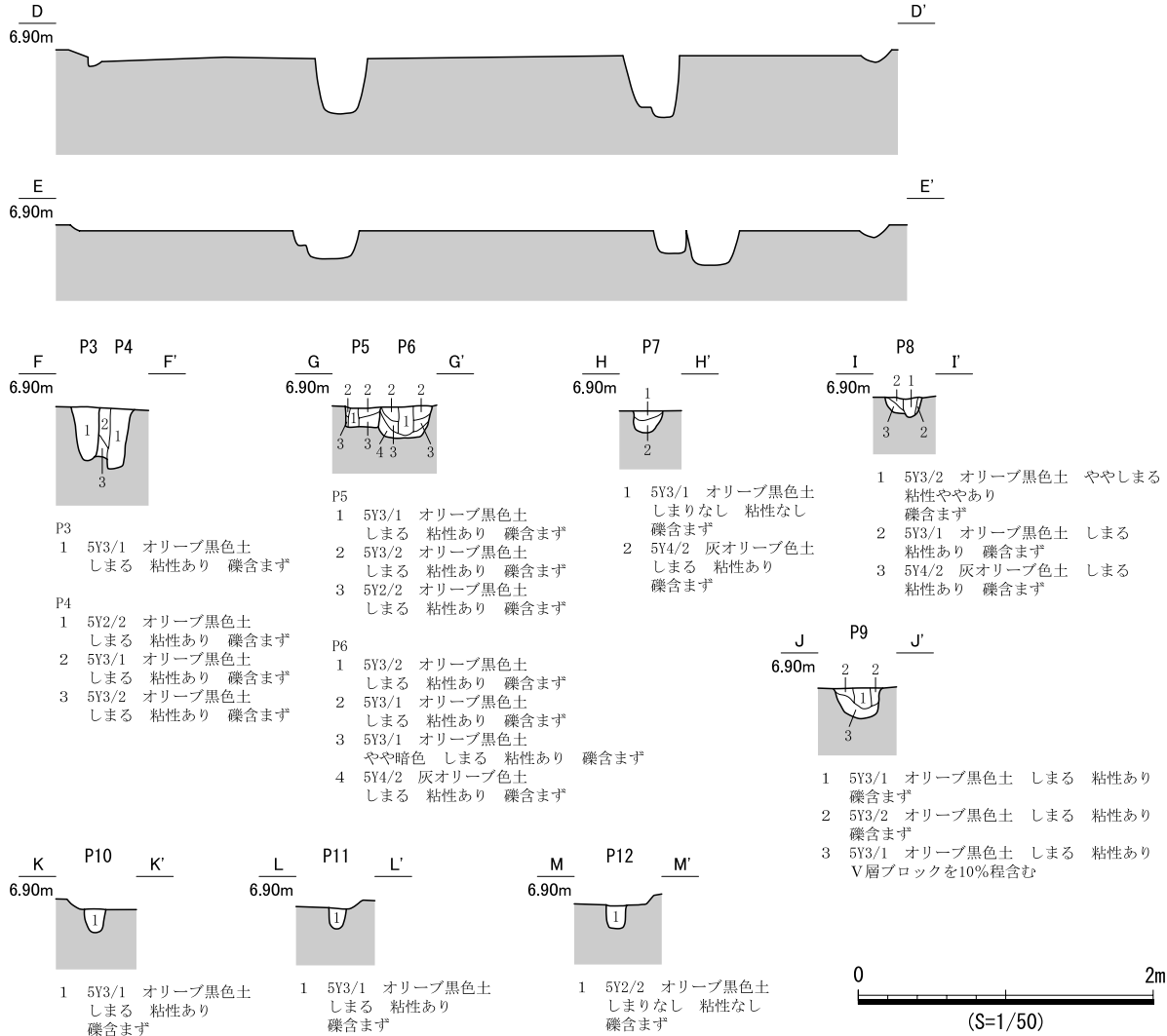


図 668 SB374 遺構図 (2)

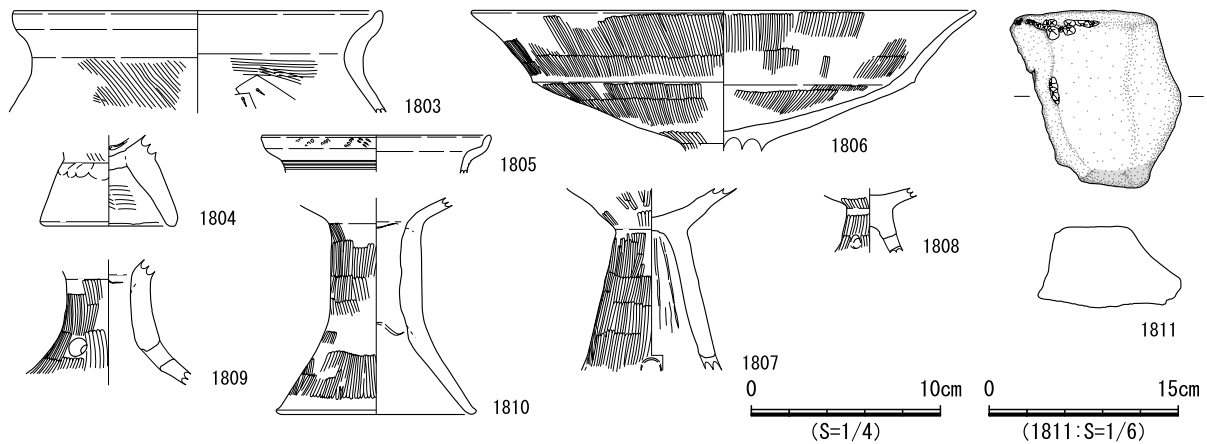


図 669 SB374 遺物実測図

1811は叩石。垂円礫の上端と側面に敲打痕が観察できる。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB361に切られ、Ⅶ期のSB367を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

SB375 (遺構：図670・672、遺物：図671)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361とSB374に切られ、SB367、SB376、SB377を切る。

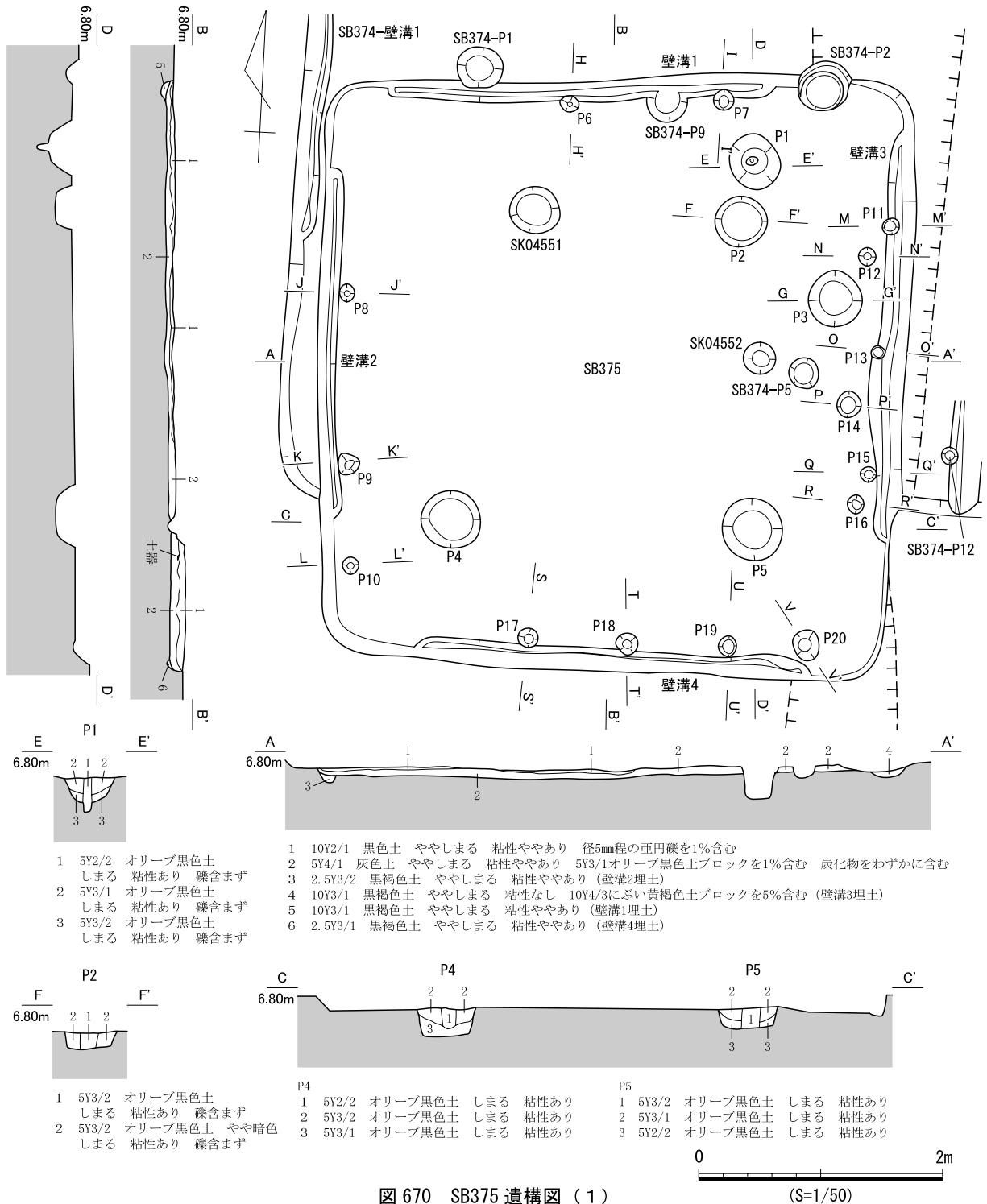


図 670 SB375 遺構図 (1)

形状 南北長約4.9m、東西長約4.8mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的であり、南壁を除いて壁面の残存状況は悪い。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、層界の凹凸が顕著でありブロック土が混入するため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて20基の小穴を検出し、そのうちP1～P5で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP2、P4、P5が柱穴と考えられるが、北西隅の柱穴が検出できなかった。また、幅約0.1mの壁溝が各壁面に沿って検出できたが、住居の各隅部のみ途切れている。壁溝に隣接もしくは近接して、壁材を留めるための杭跡と考えられるP6～P20を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,031点、小穴から土器80点、壁溝から土器38点が出土した。VI期～VII期の土器片が大半を占め、わずかに縄文時代晩期後半の土器片とI期の土器片が出土した。

出土遺物 1812はI期壺。口縁部が短く外反して、端部は平坦で1本の沈線が認められる。1813はVI期鉢A3a類。口縁部がくの字に屈折して、



図 671 SB375 遺物実測図

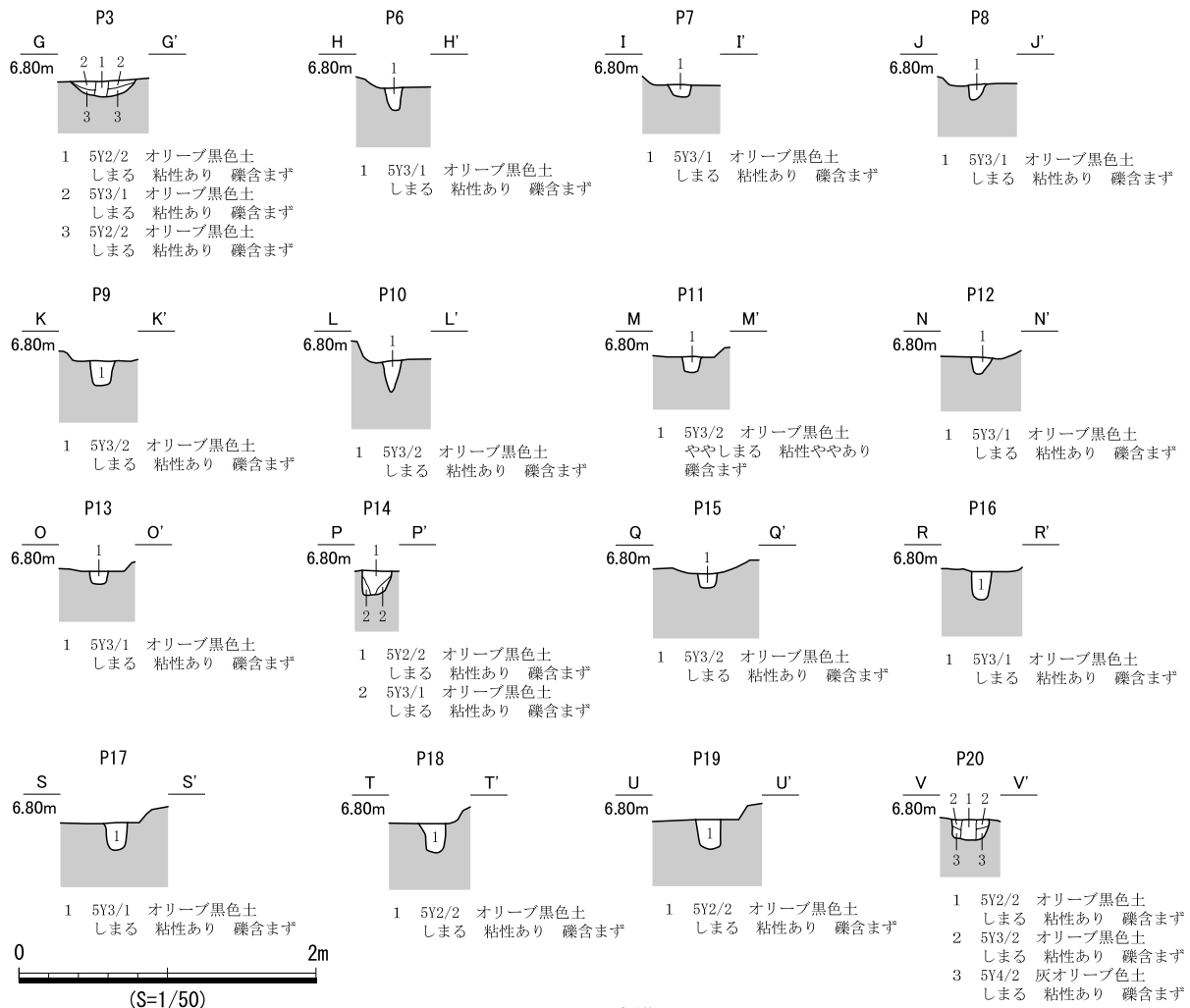


図 672 SB375 遺構図 (2)

端部がわずかに直立する。端部に刺突文、頸部直下に直線文と刺突文を施文する。胴部中程に振幅の大きい連弧文状のハケ目が認められる。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB361、SB374に切られ、Ⅶ期のSB367を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

SB376 (遺構：図674・675、遺物：図673)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB361、SB374、SB375、SB377に切られ、SB363を切る。各壁面とも約0.2mの壁高が認められ、周囲の竪穴住居跡と比べると遺存状況がよい。

形状 南北長約5.4m、東西長約5.8mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面の傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であり、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて22基の小穴を確認した。P4には柱痕跡が認められないが、P1～P3には柱痕跡が伴い、平面的な位置関係からP1～P4は柱穴と考えられる。P5～P8はP1～P4の内側に隣接して位置する。いずれも柱痕跡が認められ、P1～P4より後出する。位置関係、重複関係、柱痕跡を伴うことからみて、P1～P4を建て替えた柱穴と考えられる。各壁面にそって幅約0.1mの壁溝が巡るが、北東隅部で途切れる。壁溝に隣接してP9～P22の小穴が位置し、壁材を支えるための杭跡と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,432点、石器類2点、小穴から土器69点、壁溝から土器78点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期に属し、わずかに縄文時代晩期後半、Ⅰ期、Ⅴ期の土器片も認められた。遺存状況の良いⅠ期甕(1818、1821)、Ⅵ期～Ⅶ期甕底部(1817)は床面付近で出土した。

出土遺物 1814はⅤ期壺K類の生駒西麓産の壺。口縁部が大きく外反して、端部下端を拡張する。端部には擬凹線と円形刺突文を施文する。1815はⅥ期高坏C2a類。口縁部が坏底部で屈曲して、内湾しながら立ち上がる。1816はⅦ期高坏C類。口縁部が直線的に開き、内面には段が認められる。

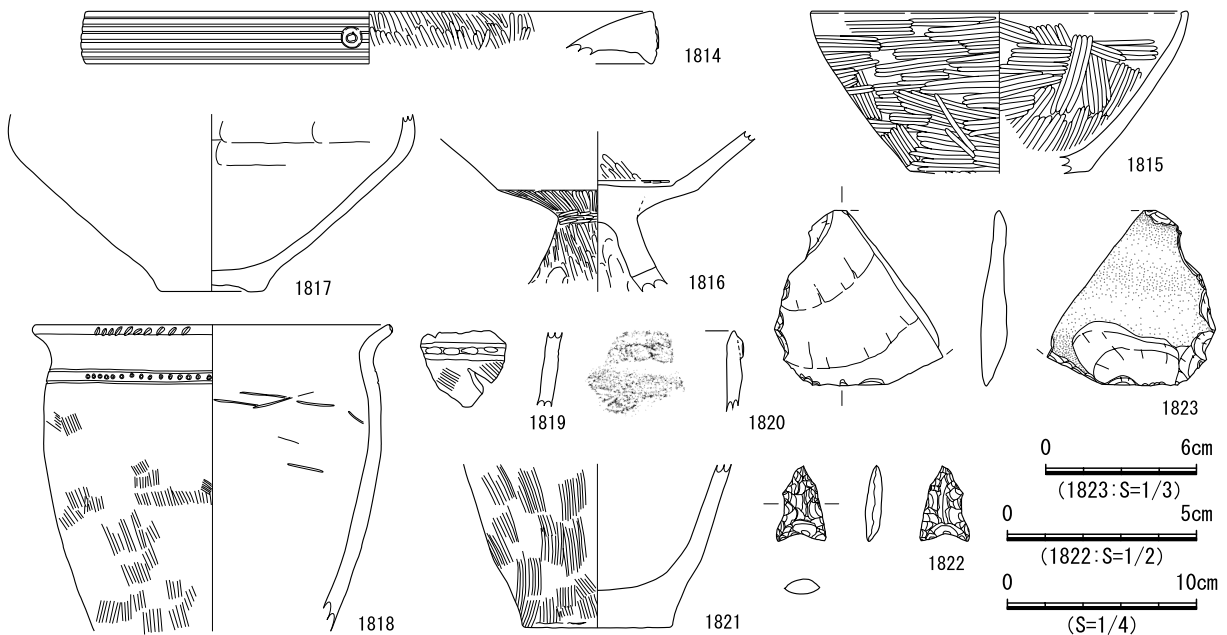


図 673 SB376 遺物実測図

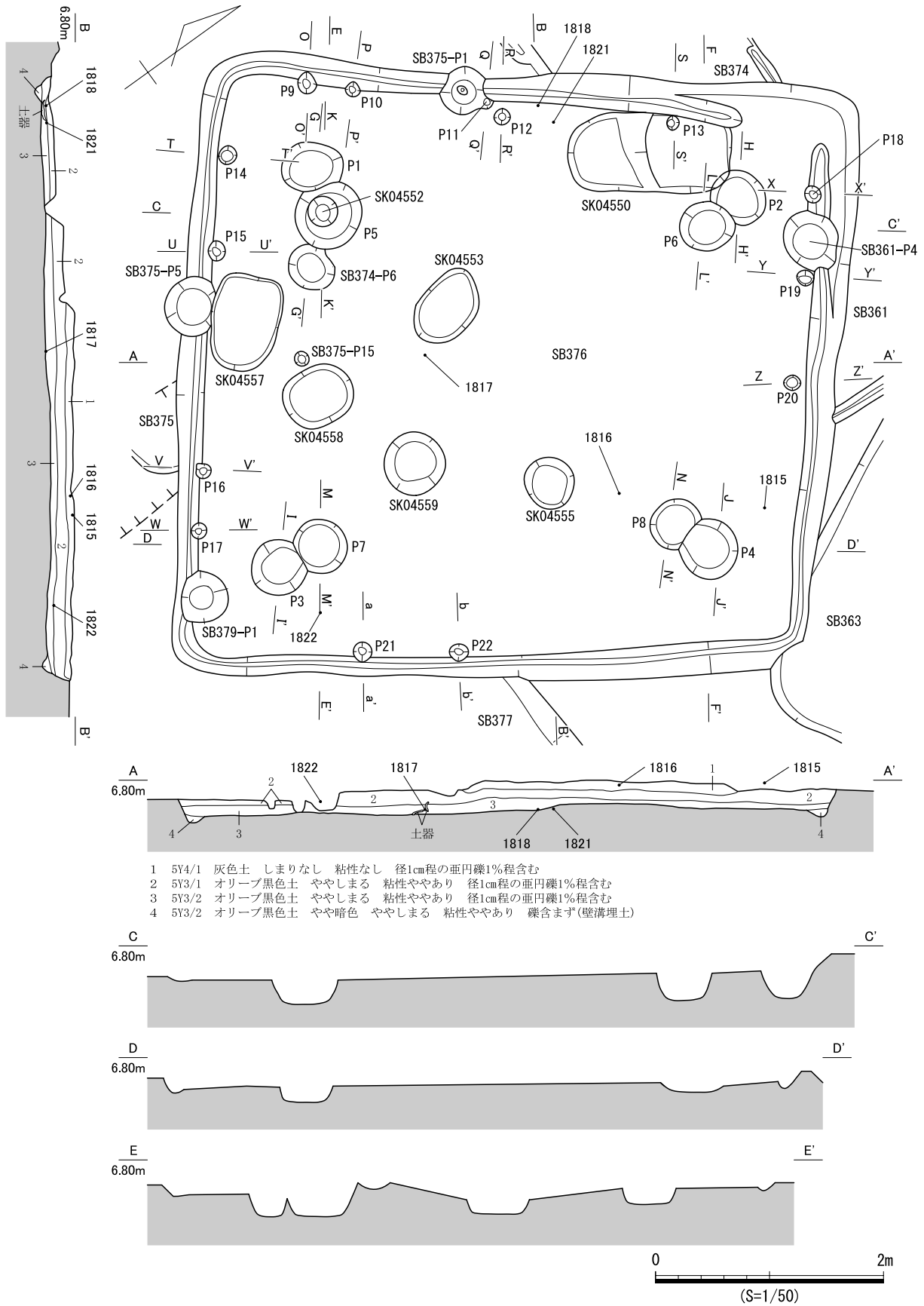


図 674 SB376 遺構図 (1)

1817はV期～VI期甕A類底部。小さな底部から胴部が大きく開く。被熱による摩耗が著しい。1818はI期甕。口縁部が弱く短く外反して、端部にキザミが認められる。頸部には2本の沈線間に円形刺突文を充填する。胴部は頸部からなだらかに膨らむ。1819はI期甕の頸部片。2本の太い沈線が認められる。1820は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部がやや内湾して、端部はやや尖り気味である。端部か

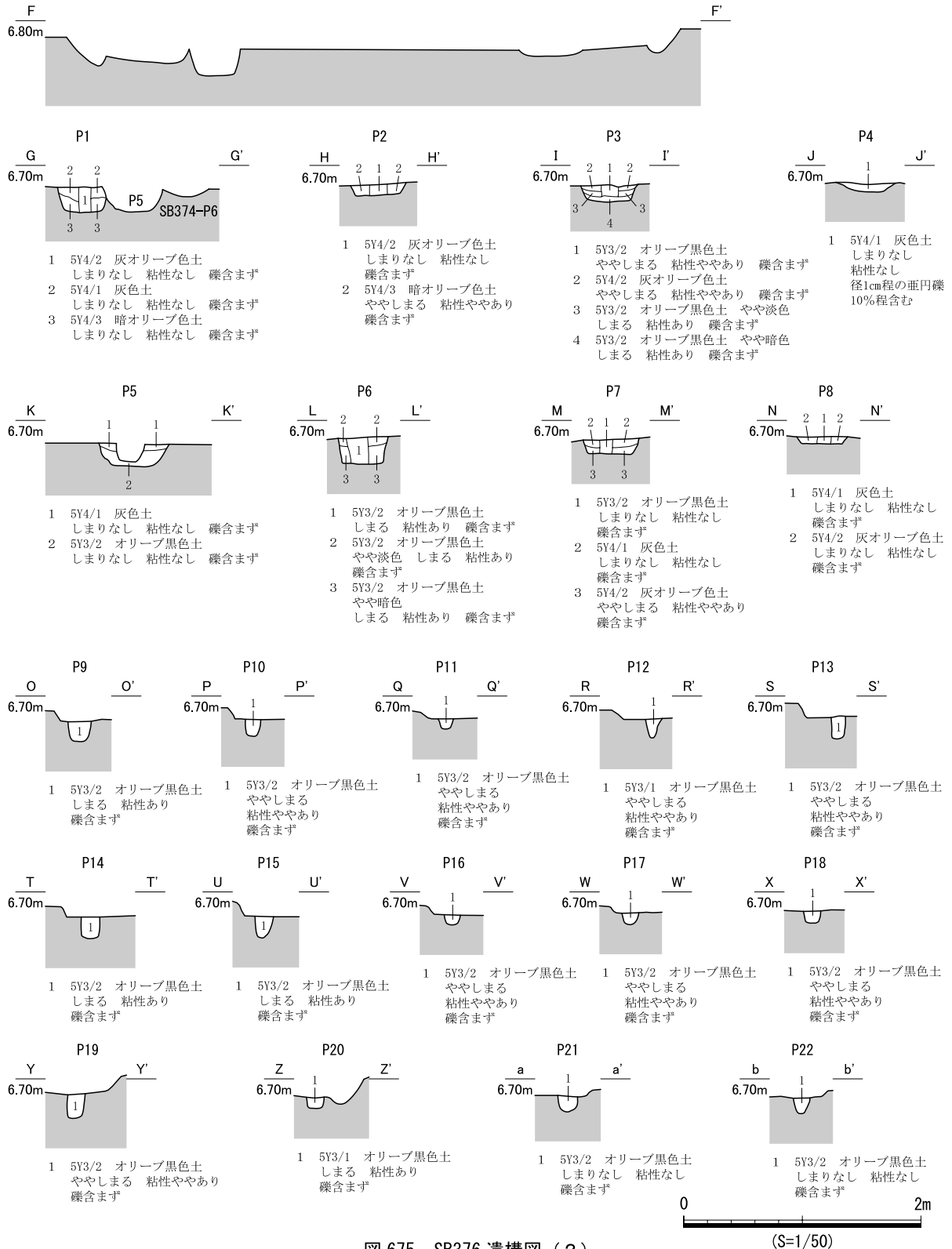


図 675 SB376 遺構図 (2)

らわずかに下がった位置に、O字状の押圧のある突帯が貼付される。1821はI期甕底部。1818の同一個体の可能性がある。1822は打製石鏃。両側縁が段をなし、五角形となる。基部には浅い抉りが入る。1823は刃器。素材となる横長剥片の縁辺に連続する剥離を施す。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB361、SB374、SB375に切られることから、VII期と考えられる。

SB377（遺構：図677・678、遺物：図676）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB376、SB378、SB381を切る。各辺で部分的に重複する遺構によって壁面の一部が失われているが、ほぼ全形を確認した。

形状 北西-南東長約5.2m、北東-南西長約5.0mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面の高さは約0.1mで、その傾斜は急である。

埋土 5層に分層した。3層や5層はブロック状に入り込み、他の土層の層界は凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認した。平面的な位置関係から、P1～P4が支柱穴と考えられ、P1とP3には明瞭な柱痕跡が認められる。壁溝は幅約0.2mで、ほぼ全周する。

遺物出土状況 埋土中から土器2,615点、石器類1点、小穴から土器123点、石器類1点、壁溝から土器175点が出土した。V期～VII期の土器片が認められ、とくにV期の土器片が多い。P3からVI期高坏(1824)が出土した。

出土遺物 1824はVI期高坏I2類。口縁部がわずかに直立する。1825、1826はVIII期甕D3類。口縁部が外方に屈曲する。端部上段を外方に伸ばし、わずかに肥厚させる。1825の頸部には細い沈線が認められ、胴部が強く膨らむ。1827はVII期高坏C4d類。1828、1829は砥石。1828は楕円礫の平坦面を砥面として使用している。1829は断面方形を呈し、砥面は4面である。

時期 V期～VI期の遺物が多いものの、埋土出土遺物の最新時期とVII期のSB376を切ることから、VIII期と考えられる。

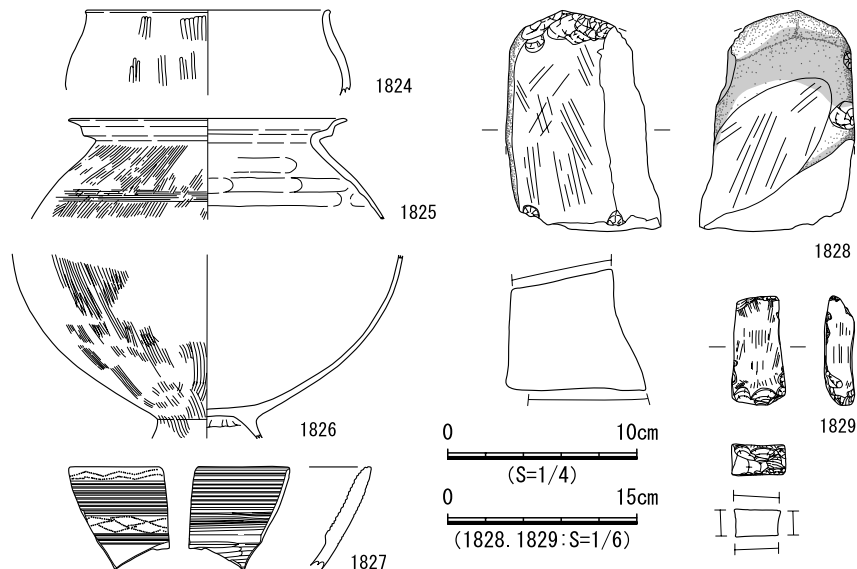


図 676 SB377 遺物実測図

SB378（遺構：図680・681、遺物：図679）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB377とSB379に切られる。

形状 北東-南西長約4.6m、北西-南東長約5.0mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面は約0.1m残存し、その傾斜は比較的緩やかである。

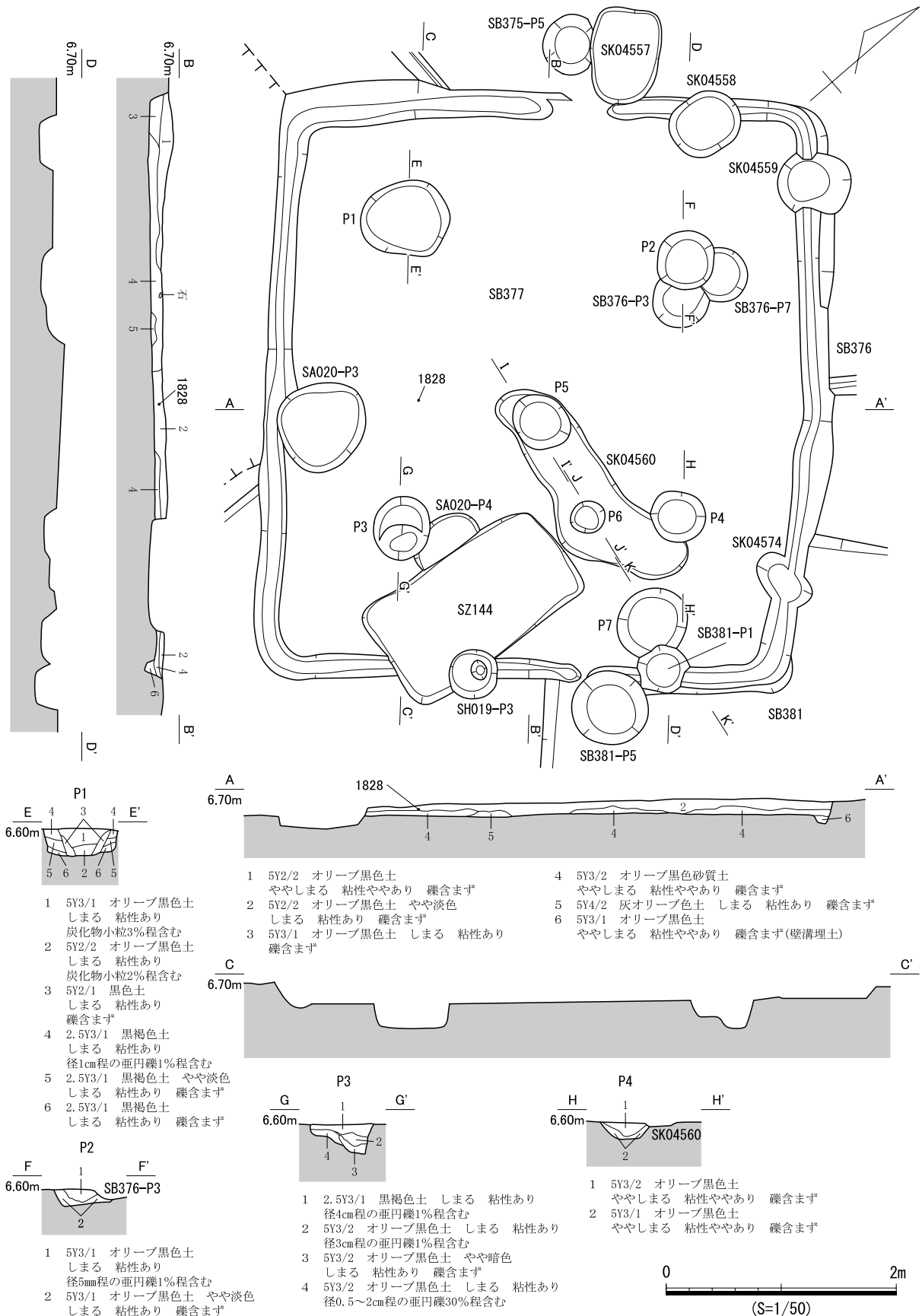


図 677 SB377 遺構図 (1)

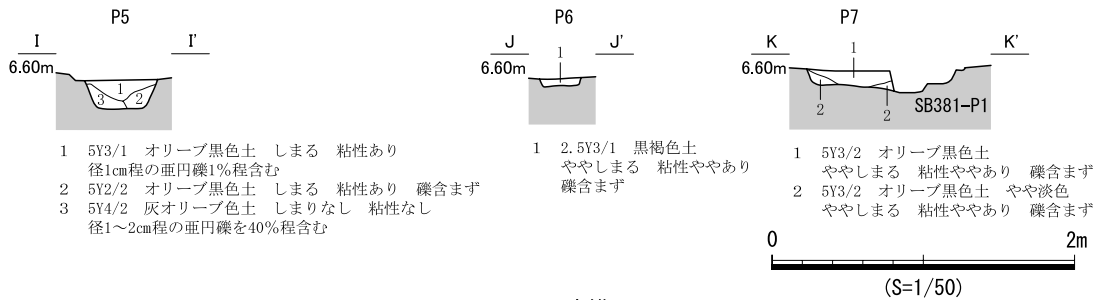


図 678 SB377 遺構図 (2)

埋土 床面までは2層に分層した。ほぼ水平堆積であり礫をわずかに含むが、その成因は不明である。4層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて9基の小穴を確認したが、P6を除いて明瞭な柱痕跡は認められなかった。P1～P4は平面的な位置関係や掘形の形状から柱穴と考えられる。しかし、P1とP2、P3とP4の距離の差は約0.8mであるため、柱穴はP1、P2、P6、P7とした方が妥当かもしれない。

遺物出土状況 埋土中から土器1,400点、金属1点、石器類5点、小穴から土器179点、石器類1点、壁溝から土器11点が出土した。土器はV期～VI期のものが多く、P6からVI期甕(1833)、VI期器台(1837)が、掘形埋土からVI期甕(1831)が、住居埋土から銅鏃(1838)が、それぞれ出土した。

出土遺物 1830はV期～VI期壺B1類。口縁部が外反して、端部に強い平坦面を形成する。頸部直下には直線文が認められる。1831はVI期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部には断続的な強いナデが認められる。1832はV期甕A2b類。口縁部が短く屈曲して、端部は平坦である。頸部直下には、直線文と刺突文を施文する。1833はVI期甕脚部。脚部が直線的にハの字に開く。1834はV期高坏B3b類。口縁部が短く強く外反して、端部はわずかに尖り気味である。1835はV期高坏B3a類。口縁部が短く外反して、端部はやや平坦である。1836はV期高坏B類脚部。1837はVI期器台B1a類。基部が直立して、裾部で強く開く。1838は銅鏃。鏃身は平面五角形状、断面菱形で、基部は鋳型段階の腸袂が明瞭に残る。

時期 出土遺物の時期から、VI期と考えられる。

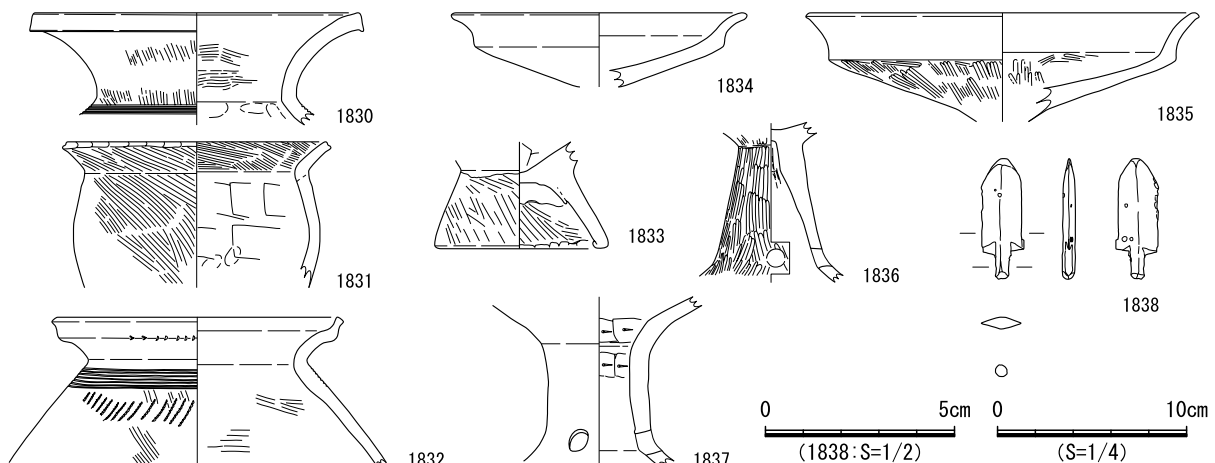


図 679 SB378 遺物実測図

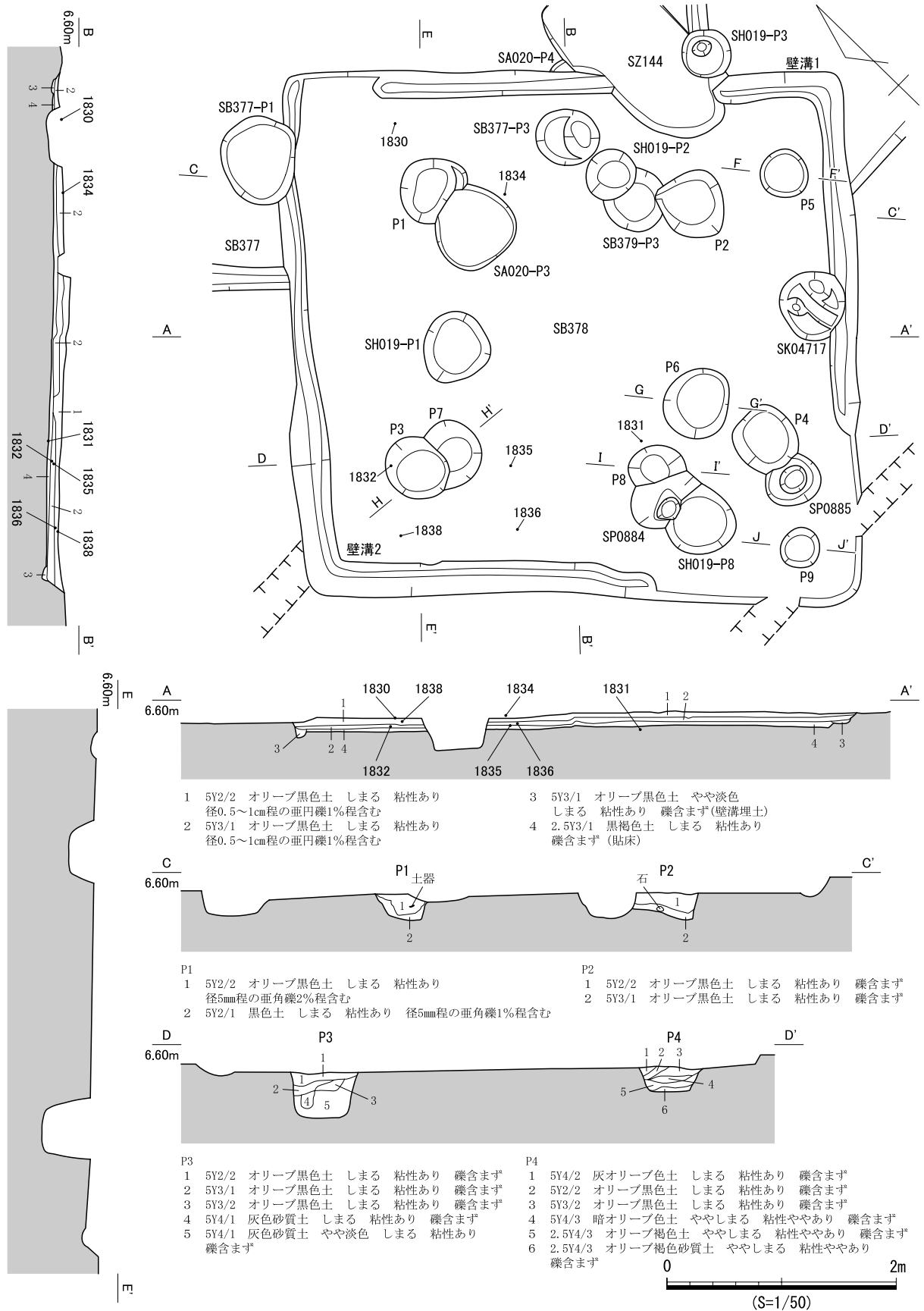


図 680 SB378 遺構図 (1)

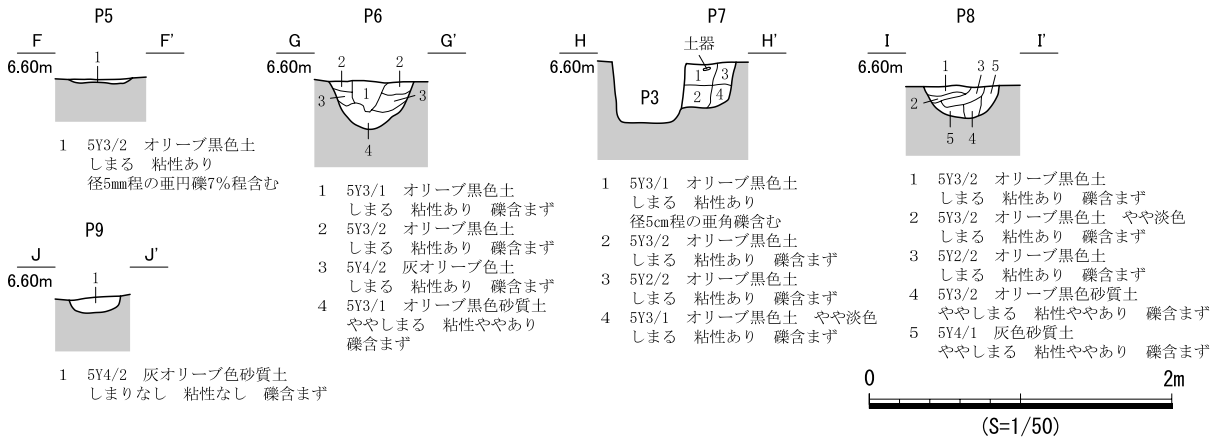


図 681 SB378 遺構図 (2)

SB379 (遺構：図 683・684、遺物：図 682)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB380に切られ、SB376～SB378を切る。東壁及び西壁の一部が攪乱に、南東隅部はSB380により失われている。

形状 南北長約6.4m、東西長約6.0mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面は南壁や東壁の遺存状況がよく、高さは0.15mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 7層に分層した。ほぼ水辺堆積であり、ブロック土がわずかに混入するが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴 (P1～P4) を確認した。すべての小穴で、明瞭な柱痕跡が認められ、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器6,220点、木製品1点、小穴から土器198点、石器類1点が出土した。土器は主にVI期～VII期に属し、床面上にて遺存状況のよいIX期甕 (1840)、壺底部 (1841)、高坏 (1845) が出土した。

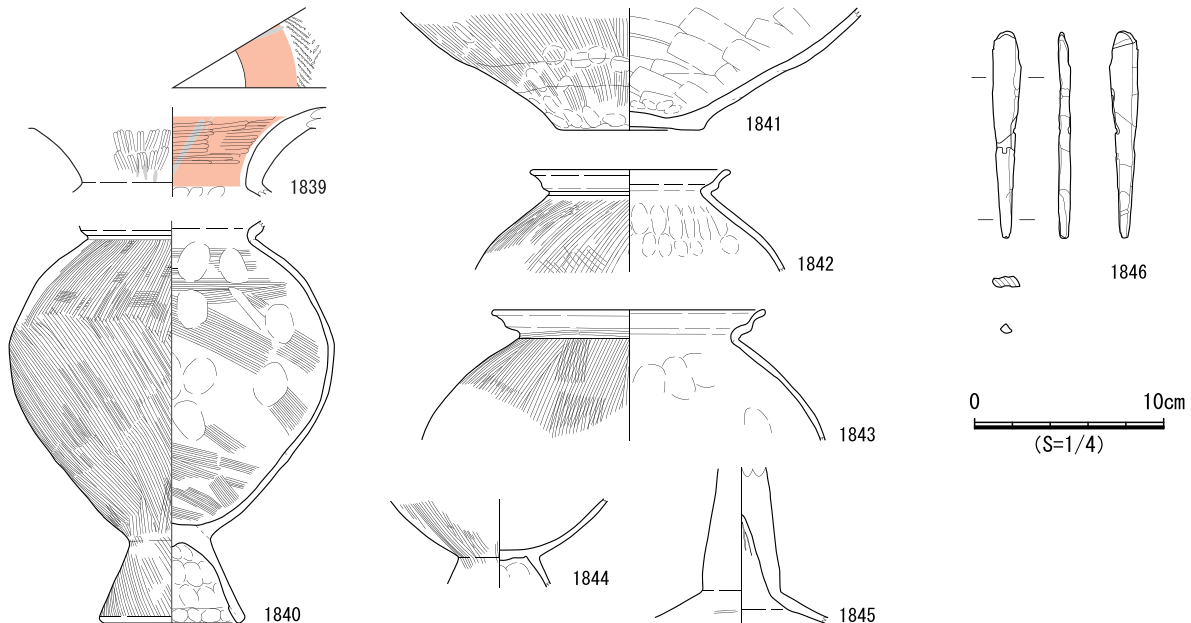


図 682 SB379 遺物実測図

出土遺物 1839はⅦ期～Ⅷ期壺A類。口縁部内面に羽状文が認められる。また、煤が頸部に沿うように、ほぼ等間隔、縦方向に付着する。1841は大型のⅨ期壺の底部。外面に強く煤が付着する。1840、1842、1843はⅨ期の甕D類。1840は口縁部上段を欠損する。頸部に沈線が認められ、胴部は肩部が強く張り、最大径は胴部中程より上位にある。胴部下半は直線的に細身の脚部付根に移行する。頸部から肩部まで斜め方向の下にヨコハケが認められる。脚部はハの字に開き、端部折り返しがやや肥厚して、雑である。1842、1843は口縁部が弱く屈曲して、頸部に沈線が認められる。端部は外傾して、わずかに

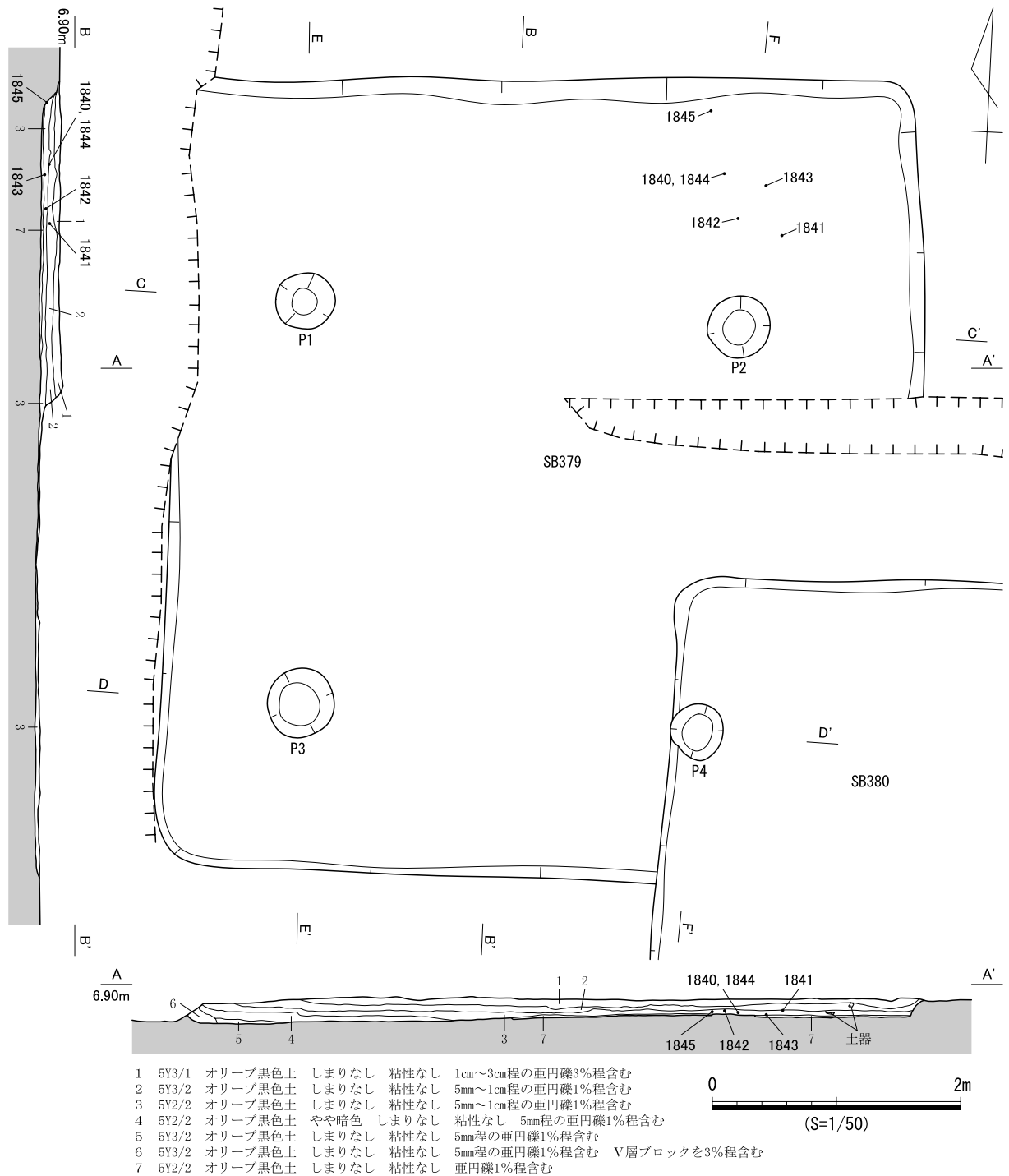


図 683 SB379 遺構図 (1)

平坦である。1844はⅨ期甕D類脚部。1845はⅨ期高坏脚部。柱状の脚部から裾部が強く外反する。1846は板材。表面に加工痕が残る。

時期 床面上の出土遺物からⅨ期と考えられる。

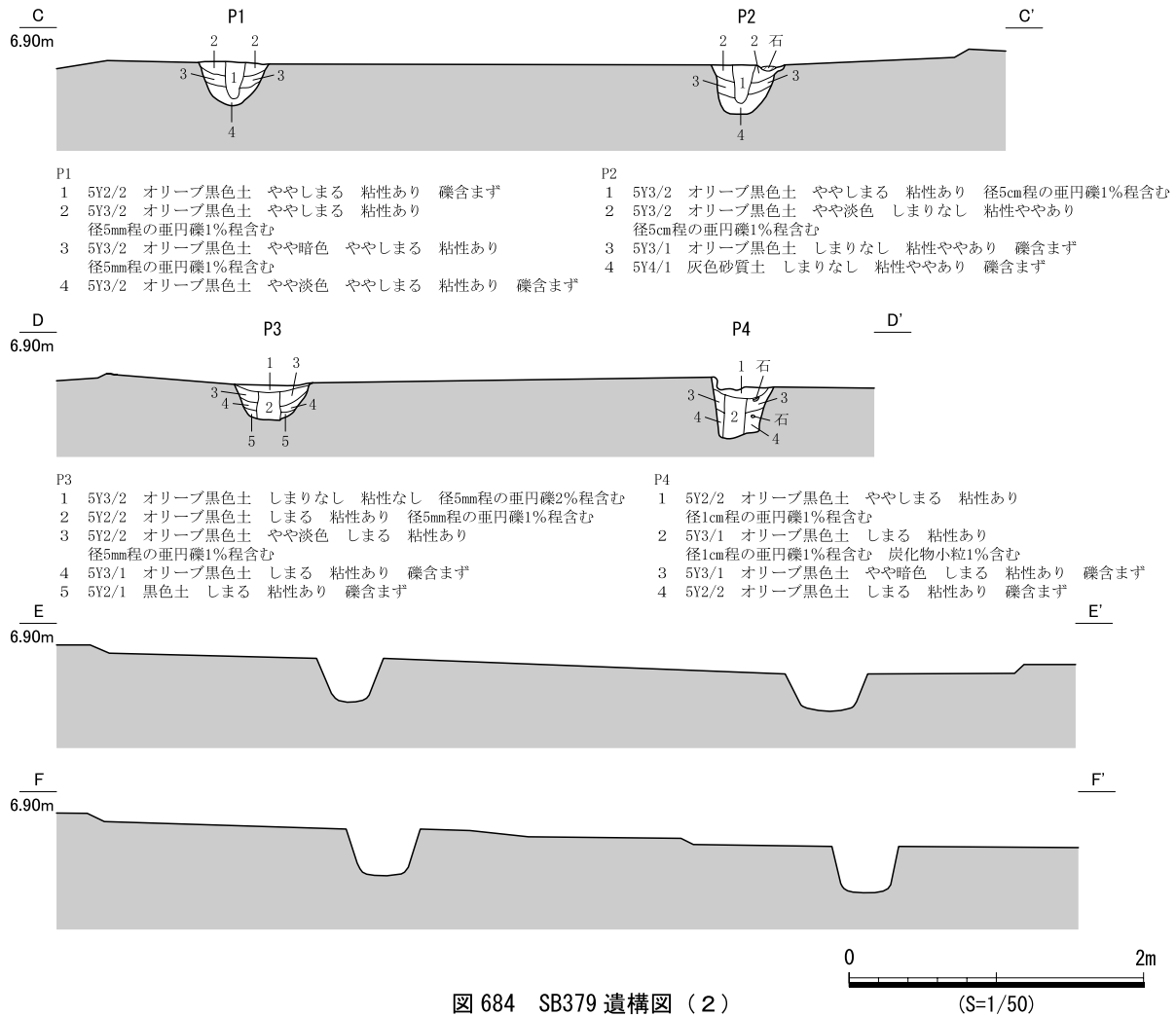


図 684 SB379 遺構図 (2)

SB380 (遺構：図 685、遺物：図 686)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB379とSB383を切る。

形状 南北長約4.5m、東西長約4.4mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的で、壁面は高さ約0.1mと浅く、その傾斜も緩やかである。

埋土 10層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸も顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認し、いずれも明瞭な柱痕跡が認められる。平面的な位置関係から、P1～P4が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,798点、石器類4点、小穴から土器151点、石器類1点が出土した。土器は主にⅥ期～Ⅶ期のもので、特にⅦ期の土器が多い。

出土遺物 1847はⅦ期壺E類。内面に精緻な文様が認められる。上段に山形文状の波状文、その直下に刺突文、屈折部位より下に単位の小さい羽状文を施文する。外面には刺突文のある円形浮文が認められる。1848はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部は断続的なナデによって平坦面が形成

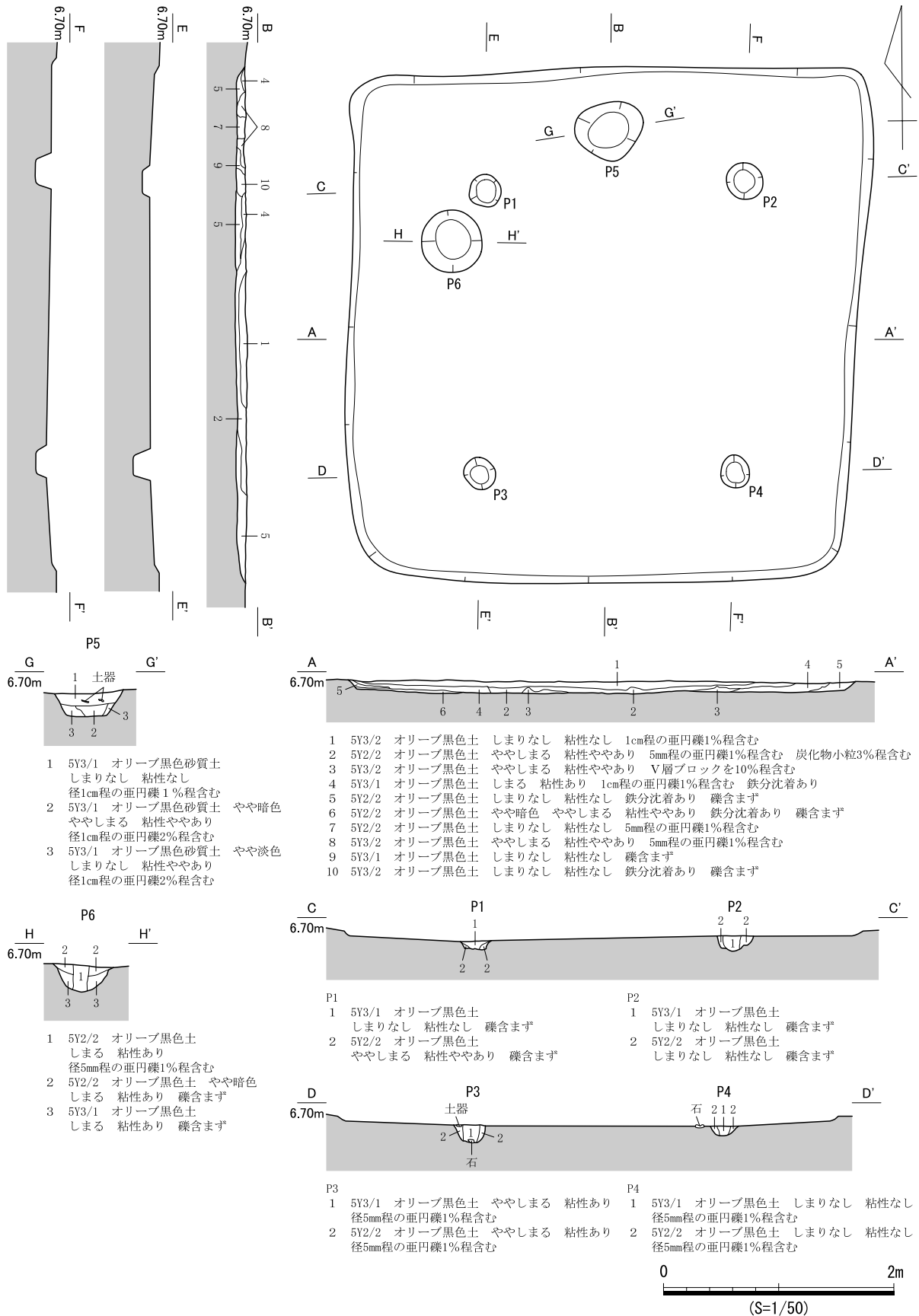


図 685 SB380 遺構図

される。1849はⅦ期甕D2b類。口縁部は強く屈曲して、上段が直立気味となる。1850はⅦ期鉢A4b類。口縁部が短くくの字に屈曲する。胴部は強く膨らみ、口径を上回る。1851はⅦ期高坏D3類。口縁部が内湾しながら、大きく開く。内面には幅広の多条沈線と振幅の小さい山形文で施文する。1852は打製石斧。自然面を表裏両面に残す素材剥片を用いている。

時期 出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。しかし、本遺構はⅨ期のSB379を切っており、出土遺物の時期と遺構の重複関係から推定できる時期とに矛盾がある。

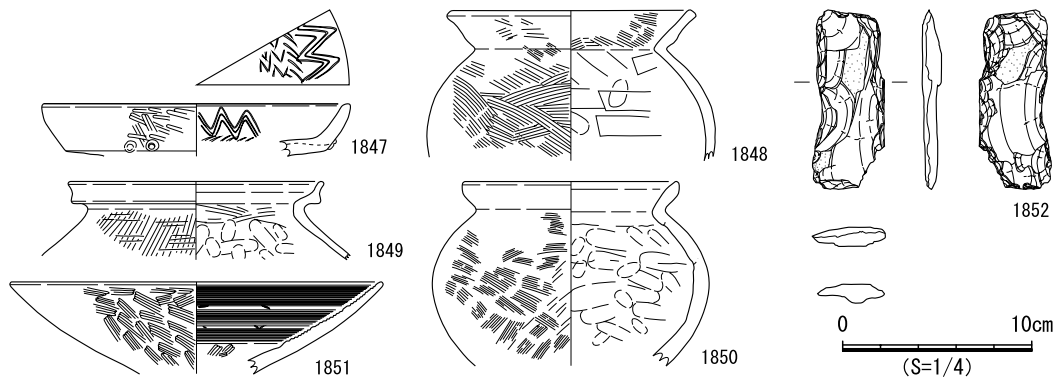


図 686 SB380 遺物実測図

SB381 (遺構：図 688・689、遺物：図 687)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB379とSB380に切られ、SB371を切る。遺構の重複により、南西から南東側の壁面が失われている。

形状 北西-南東長約5.3m、北東-南西長約5.0mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的で、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層した。3層と4層はブロック状に混入し、1層と2層の層界には凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて9基の小穴を検出し、いずれも明瞭な柱痕跡を確認した。P1～P4は平面的な位置関係から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,859点、石器類1点、小穴から土器64点が出土した。土器は主にⅥ期～Ⅶ期のものである。

出土遺物 1853はⅤ期～Ⅵ期壺B1類。口縁部が頸部から強く外反して、端部は内傾する強い平坦面を形成する。端部、口縁部内面には赤彩が認められる。胴部は頸部から強く膨らみ、上半に直線文、刺突文を交互に施文する。刺突文は上段が縦方向、下段が横方向であり、下段の刺突文以下に赤彩を施す。1854はⅤ期～Ⅵ期高坏B3b類。口縁部が強く外反する。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB371を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

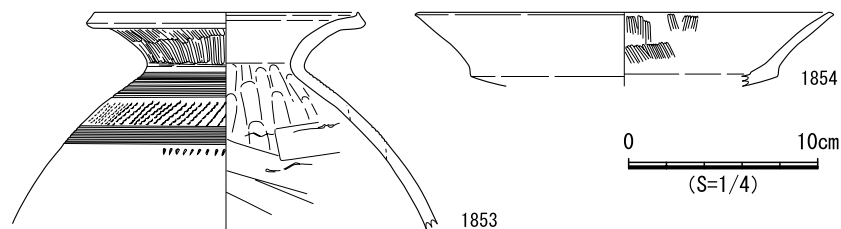


図 687 SB381 遺物実測図

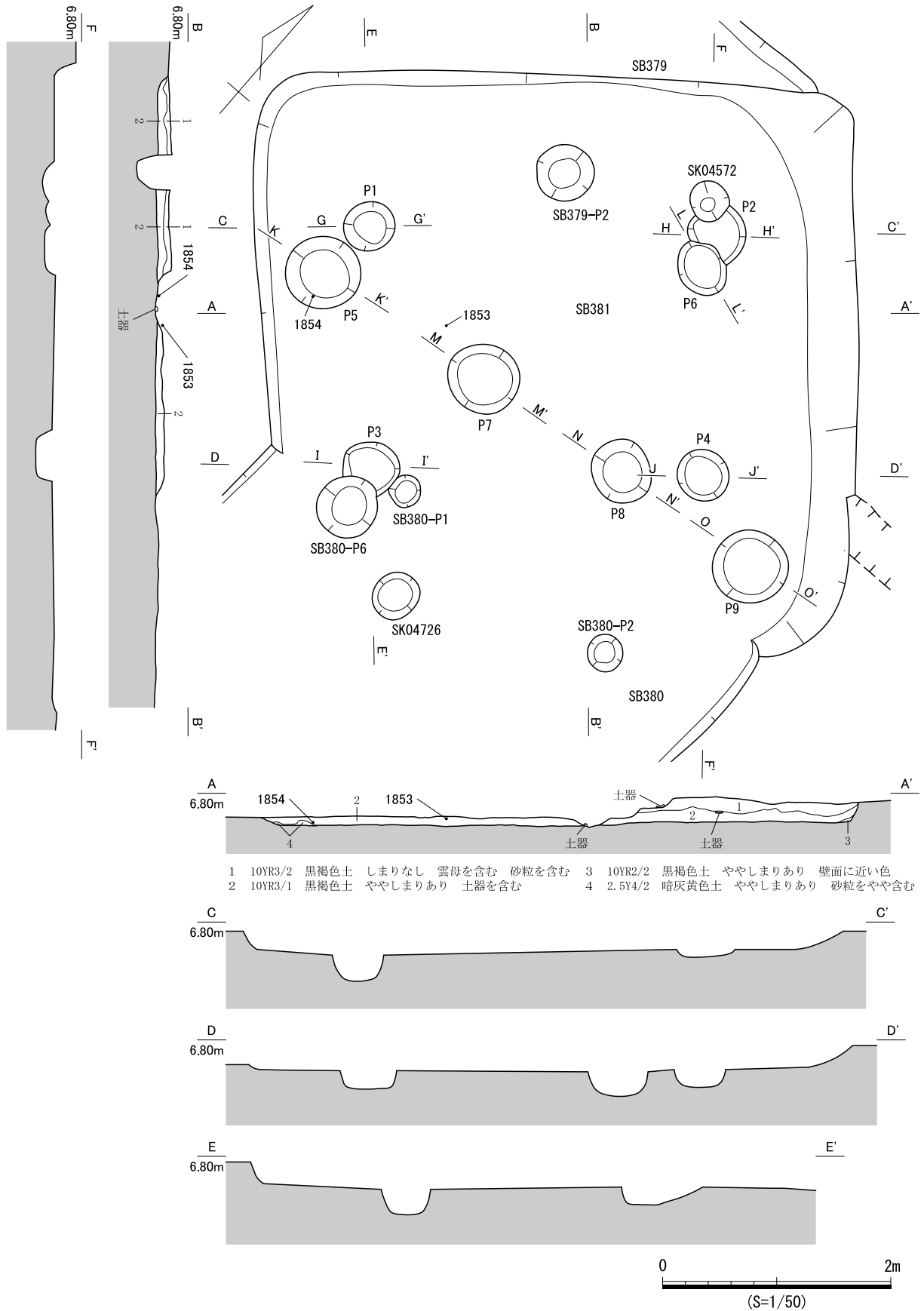


図 688 SB381 遺構図 (1)

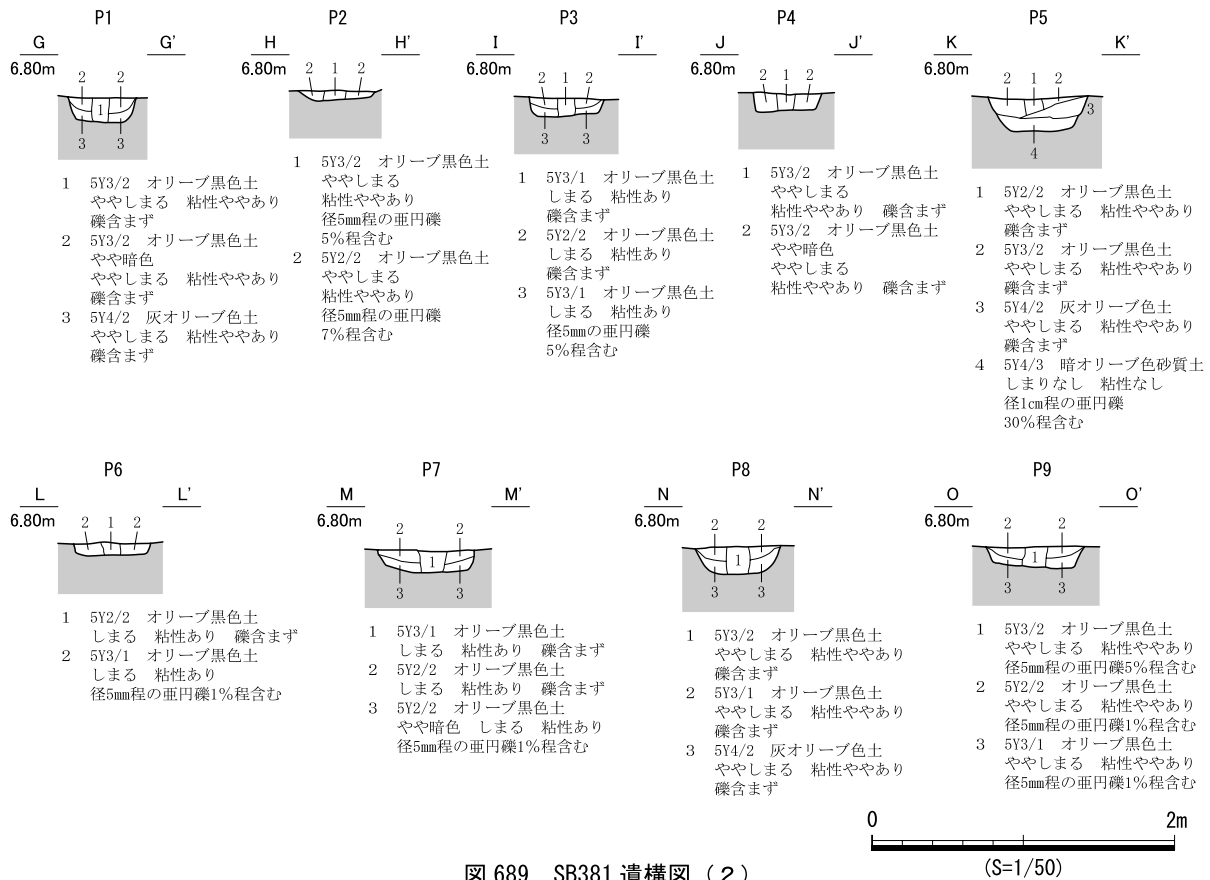


図 689 SB381 遺構図 (2)

SB382 (遺構：図 691、遺物：図 690)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB380、SB384に切られ、SB383、SB385、SB387、SB388を切る。なお、東辺は調査区域外にある。

形状 南北長約5.2mであり、隅丸方形を呈する。壁面の高さは0.1mにも満たないほど浅い。

埋土 2層に分層した。礫をわずかに含むが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて直径0.4m～0.5mの4基の小穴を検出し、いずれも柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から柱穴の推定は困難であるが、P2とP3は東西壁際の中央やや南寄りに位置することから、二本柱建物の可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,427点、小穴から土器64点が出土した。土器はVI期～VII期に属し、P1からVII期甕(1856)が出土した。

出土遺物 1855はVII期甕D2b類。口縁部が短く鋭く屈曲する。上段はわずかに直立してから外方へ屈曲し、端部はわずかに平坦である。1856はVII期甕D類胴部。煤が強く付着する。1857は胎土から判断してVI期～VII期の土製品。平面が長軸3.3cmの楕円形を呈し、厚みは0.5cmである。煤が付着する。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB380に切られることから、VII期と考えられる。

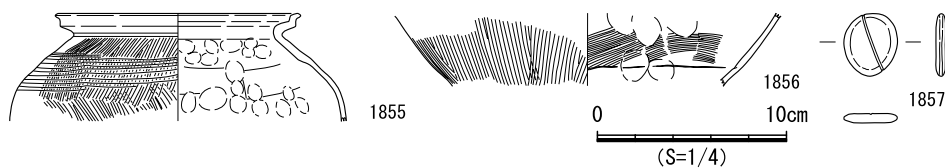


図 690 SB382 遺物実測図

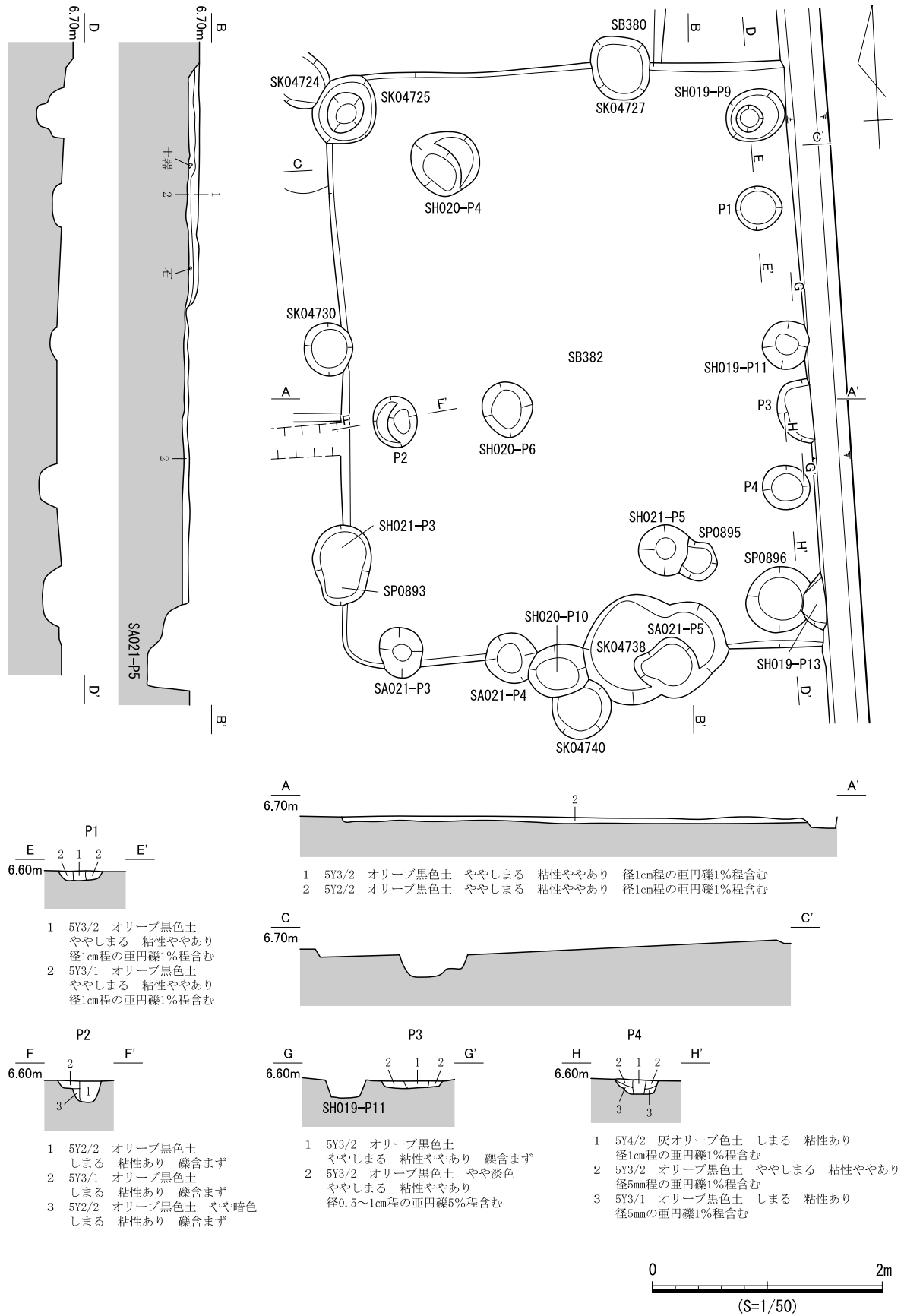


図 691 SB382 遺構図

SB383 (遺構：図 692・693)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB380、SB382、SB384、SB386、SB387に切られ、重複する竪穴住居跡のなかでは最も先行する。なお、南東隅部が調査区域外にある。

形状 北西-南東長約5.9m、北東-南西長約6.7mで、平面形は長方形である。各辺は直線的であり、隅部は西隅が丸みを帯びているものの、他は不明である。なお、壁面の高さは0.1mにも満たない。

埋土 単層であり、礫をわずかに含む。しかし、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認した。南西側に偏在し、直径約0.2m~0.7m、深さ約0.1m~0.3mで、いずれも柱痕跡は認められなかった。

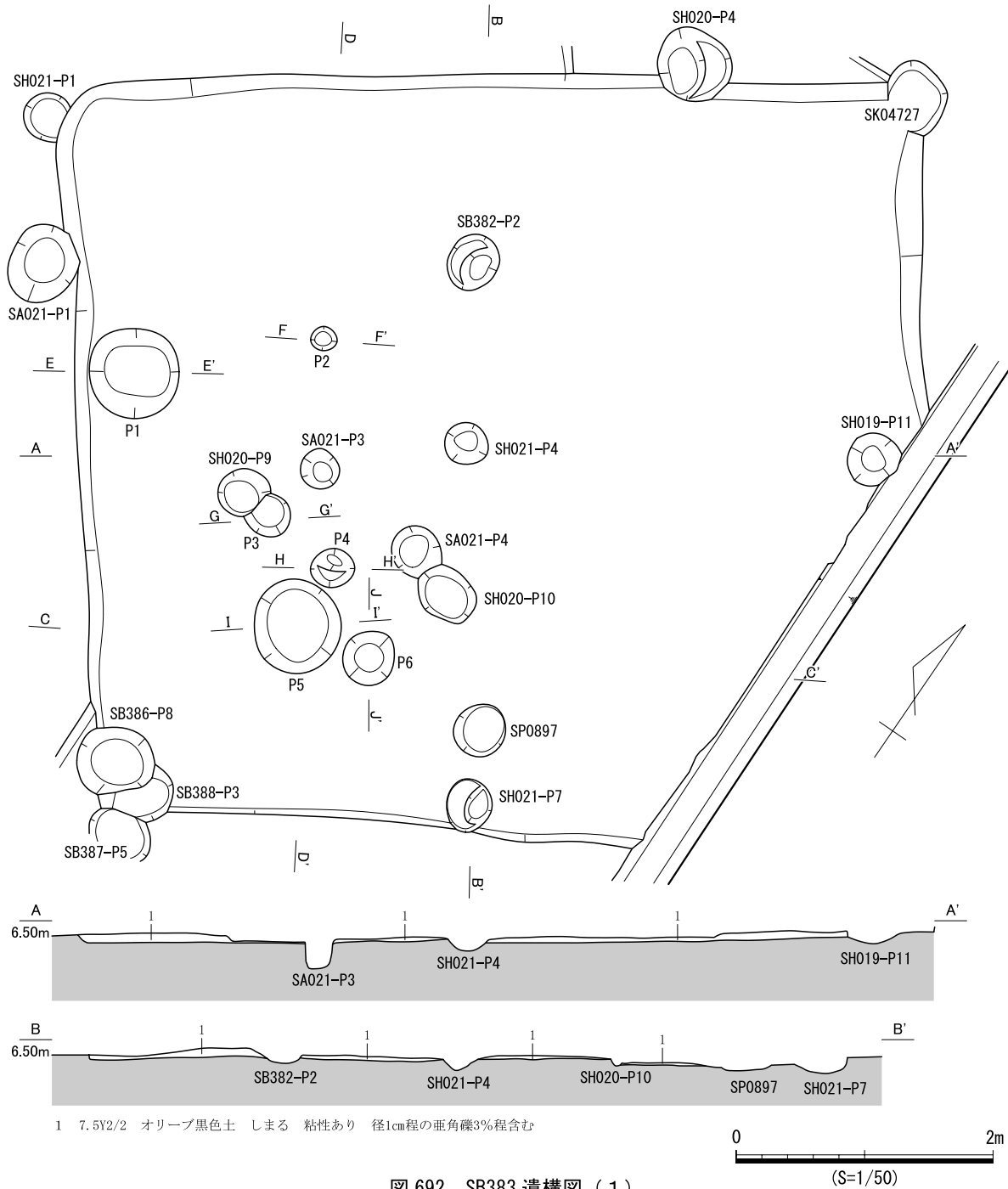


図 692 SB383 遺構図 (1)

遺物出土状況 埋土中から土器142点、小穴から土器92点が出土した。土器はVI期～VII期のものであるが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB380、SB382より先行することから、VII期と考えられる。

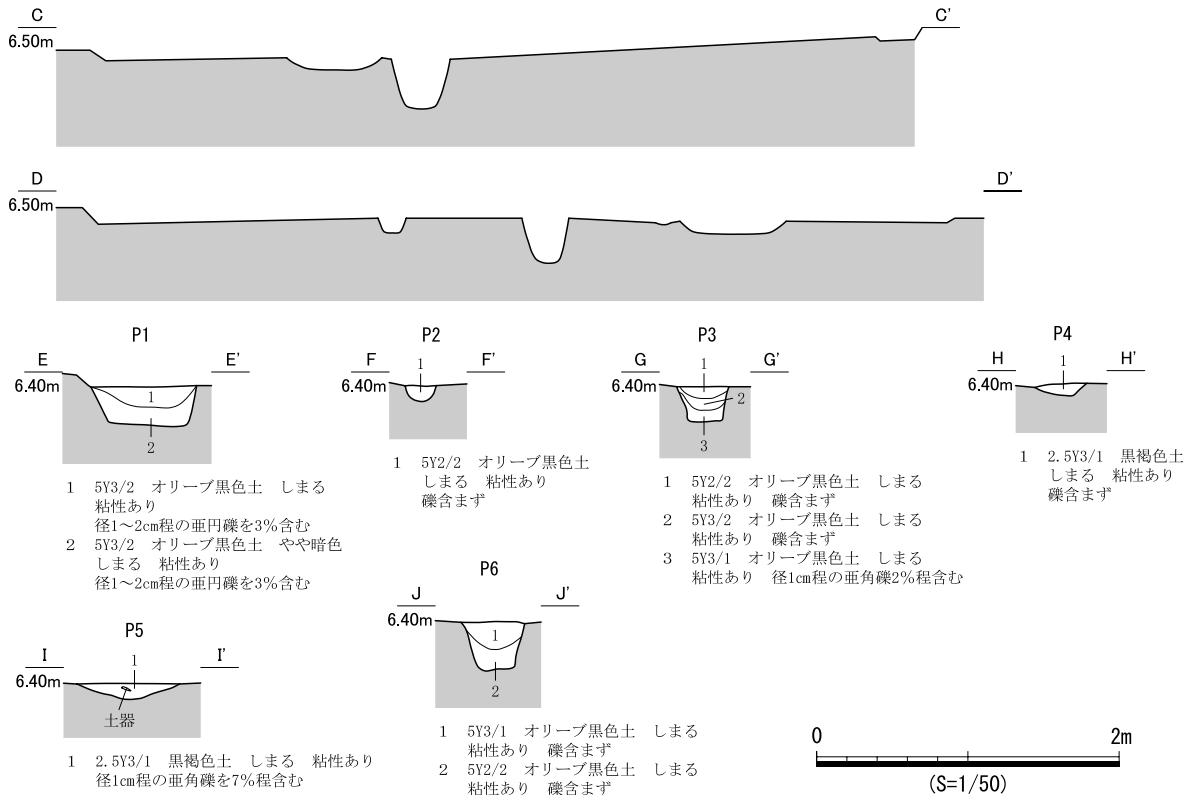


図 693 SB383 遺構図 (2)

SB384 (遺構：図 695・696、遺物：図 694)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB382、SB383、SB387を切り、重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。なお、南東隅部は調査区域外にある。

形状 北西－南東長約5.4m、北東－南西長約5.5mで、平面形は隅丸方形である。南西辺はやや蛇行するが、他の辺は直線的である。壁面の高さは0.05mにも満たない。

埋土 単層であり、礫をわずかに含む。しかし、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認し、P3、P5～P7で明瞭な柱痕跡を確認したが、規則的な配置は認められなかった。平面的な位置関係から、P1、P2、P5が柱穴と考えられ、南東側は調査区域外に位置する。

遺物出土状況 埋土中から土器521点、石器類1点、小穴から土器143点が出土した。土器はV期～IX期の土器が認められ、P1からVIII期～IX期壺(1858)が出土した。

出土遺物 1858はVIII期～IX期壺胴部。上半に直線文と波状文が認められる。

時期 P1出土遺物の時期から、VIII期～IX期と考えられる。

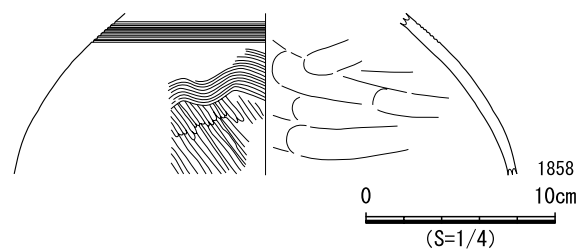


図 694 SB384 遺物実測図

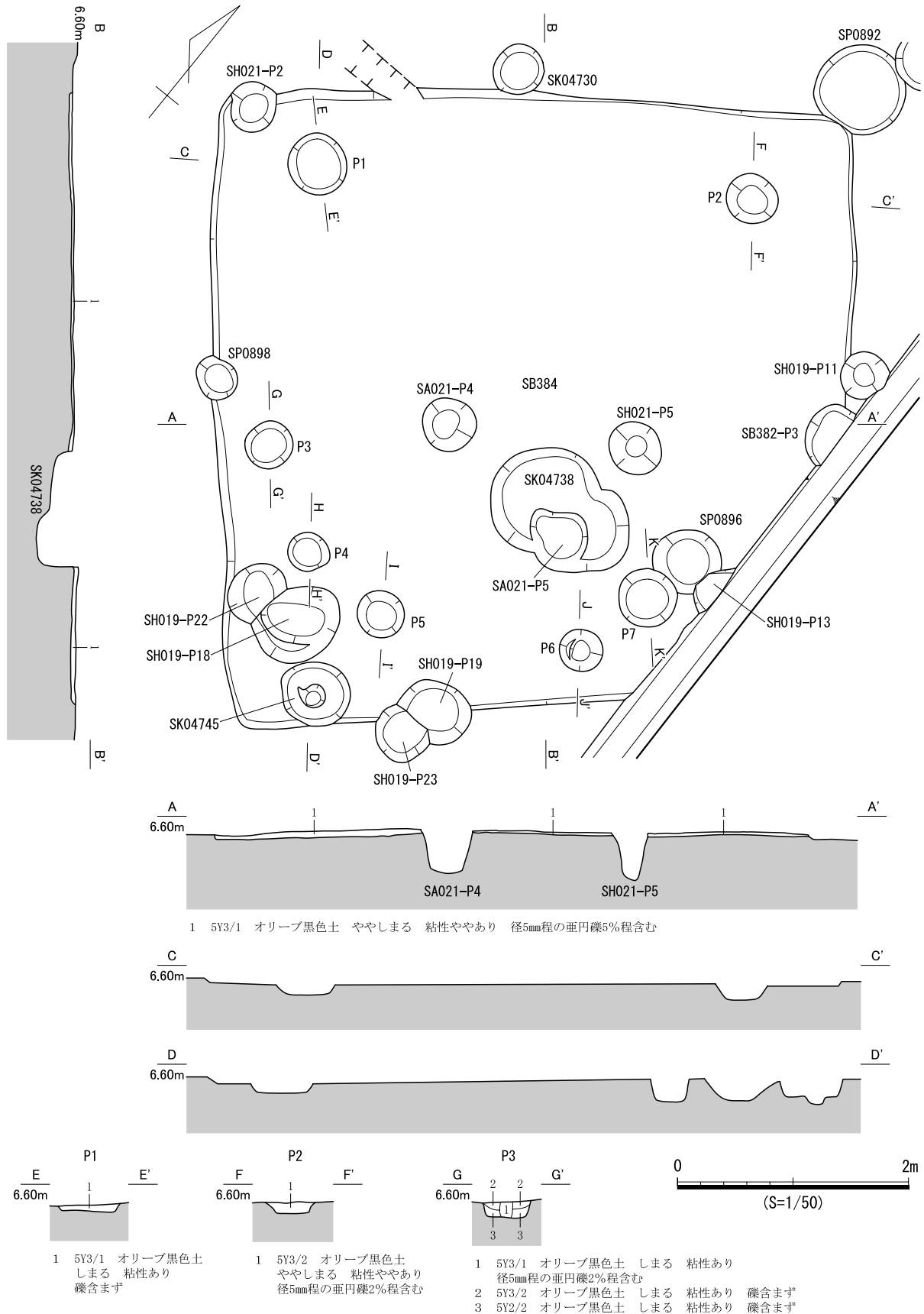


図 695 SB384 遺構図 (1)

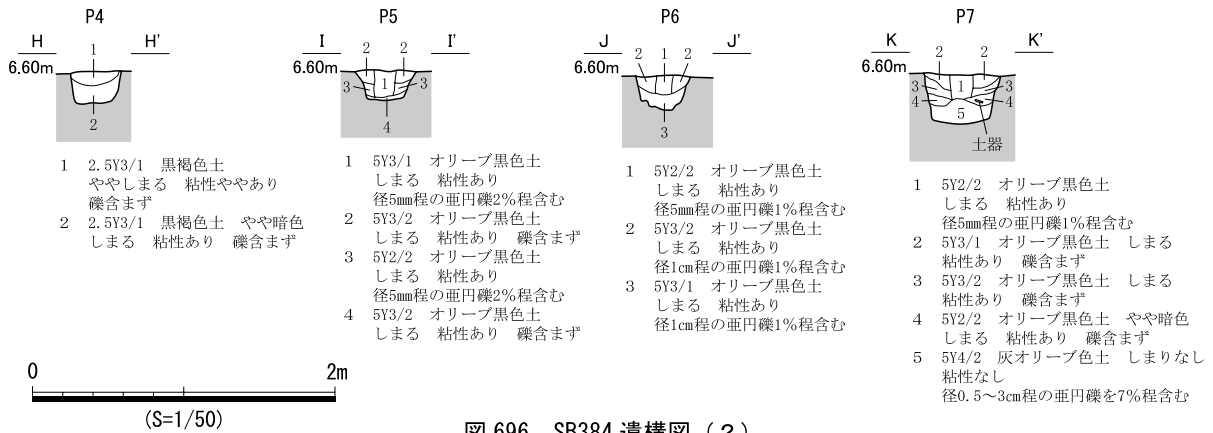


図 696 SB384 遺構図 (2)

SB385 (遺構：図 698、遺物：図 697)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB378、SB382、SB384、SB386～SB388に切られ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。

形状 北東-南西長約6.2mであり、北東辺と南西辺がほぼ平行することから方形を呈すると考えられる。残存している壁面は高さ0.15mで、その傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。埋土4層がブロック状に入り込み層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認したが、いずれも柱痕跡は認められず、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器656点、石器類1点、小穴から土器152点、石器類1点が出土した。土器はVI期～VII期に属する。

出土遺物 1859は口縁端部を欠損するVI期甕D2類。1860はVI期～VII期甕脚部。脚部がやや外反しながら開く。1861はサヌカイトの剥片である。

時期 出土遺物の時期と、VI期のSB378に先行することから、VI期と考えられる。

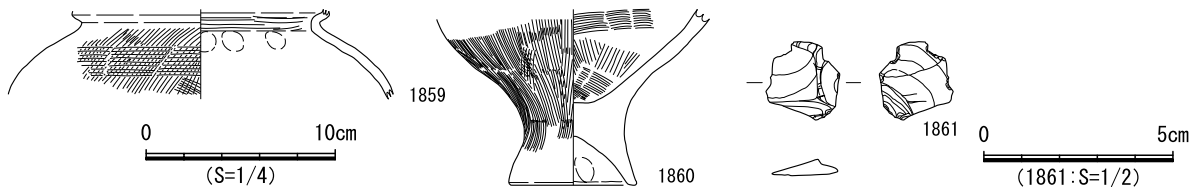


図 697 SB385 遺物実測図

SB386 (遺構：図 699・701、遺物：図 700)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB384に切られ、SB383、SB385、SB387、SB388、SK04748を切る。

形状 南北長、東西長ともに約5.3mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的で、壁高は約0.1mである。

埋土 2層に分層した。上下層ともに炭化物をわずかに含む。層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

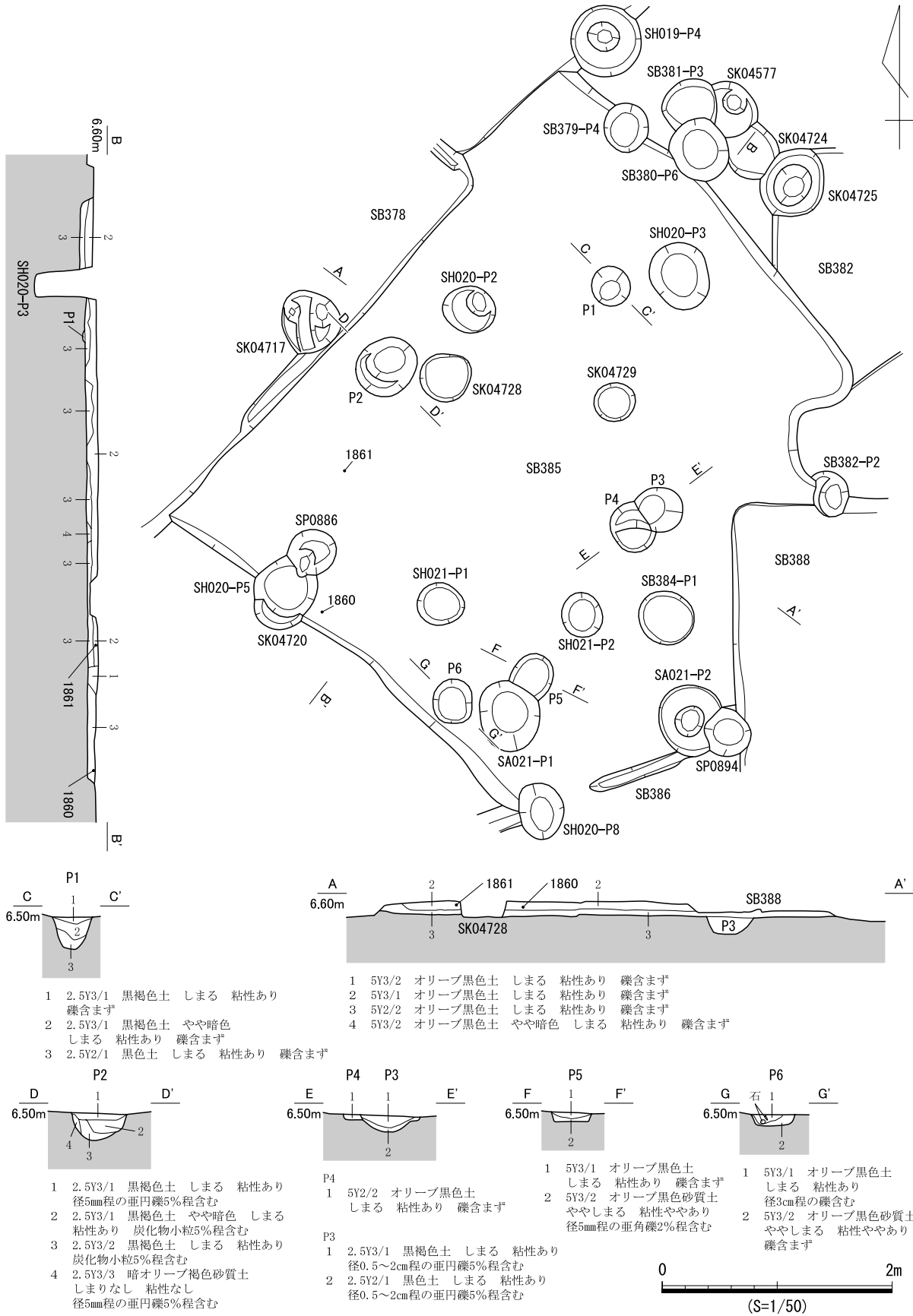


図 698 SB385 遺構図

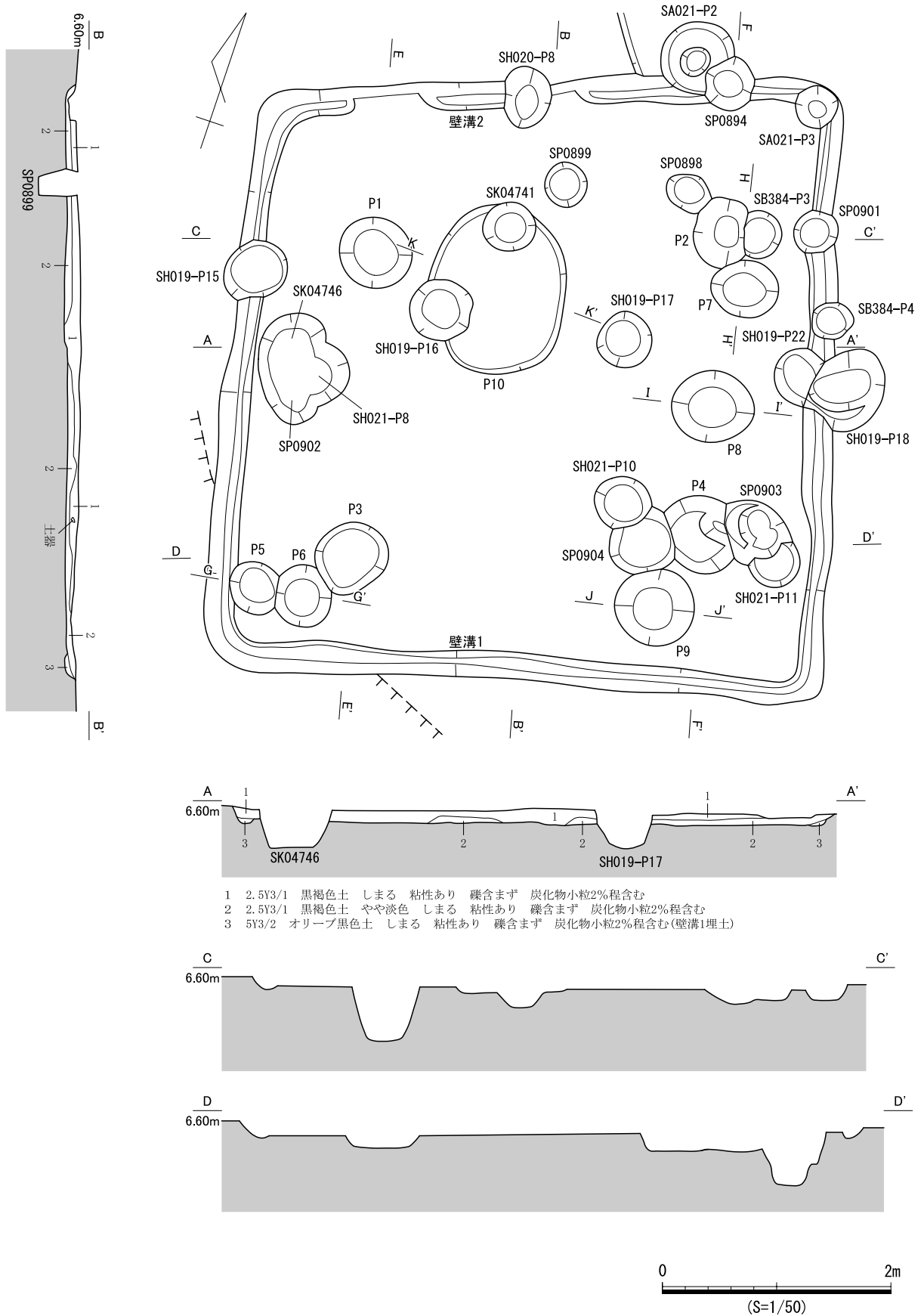


図 699 SB386 遺構図 (1)

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて10基の小穴を確認した。P10を除く小穴は直径約0.5m～0.7mで、壁面付近に位置する。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴の可能性のあるものの、柱痕跡が認められるのはP1とP4のみである。一方、P6、P7、P9でも柱痕跡を確認しており、これらにP1を含めて柱穴と考えることも可能である。P10は長軸約1.5mで、楕円形を呈する浅い穴であるが、その性格は不明である。なお、幅約0.1mの壁溝が壁面に沿ってめぐるが、北壁沿いで部分的に途切れている。

遺物出土状況 埋土中から土器698点、小穴から土器502点、壁溝から土器28点が出土した。土器はV期～VII期のものであり、P4の3層からVII期高坏（1864）が、P6からVIII期～IX期の壺（1862）が出土した。

出土遺物 1862はVIII期～IX期壺胴部。直線文と波状文が認められる。1863は精緻なつくりで、胎土、調整からVII期～VIII期の小型壺胴部と考えられる。外面に精緻な羽状文を施す。1864は

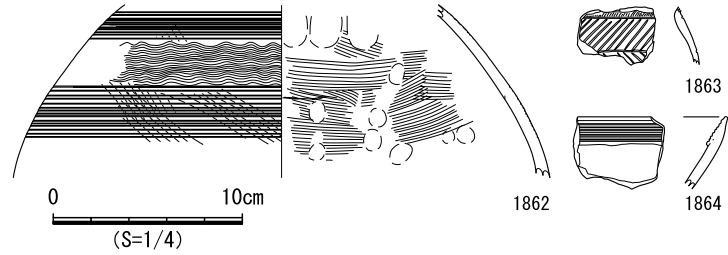


図700 SB386 遺物実測図

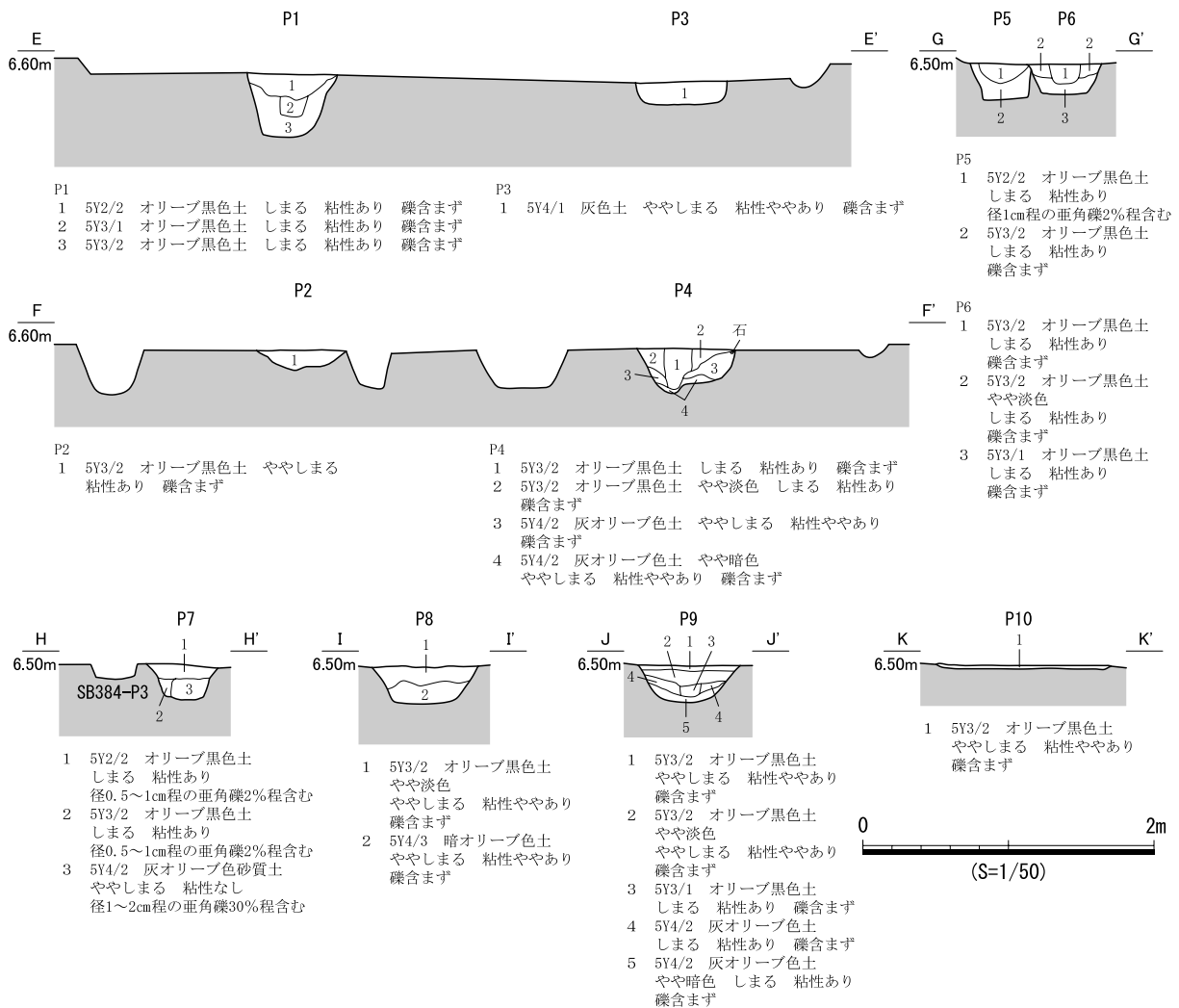


図701 SB386 遺構図(2)

Ⅶ期高坏C3b類の口縁部。端部を肥厚して、少条の多条沈線を施す。

時期 出土遺物の時期とⅧ期～Ⅸ期のSB384に切られることから、Ⅷ期～Ⅸ期と考えられる。

SB387（遺構：図702・704、遺物：図703）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB382、SB386に切られ、SB388、SB392を切り、南東隅部が調査区域外にある。

形状 北東-南西長約7.1m、北西-南東長約6.8mで、周辺の竪穴住居跡のなかでは大型である。平

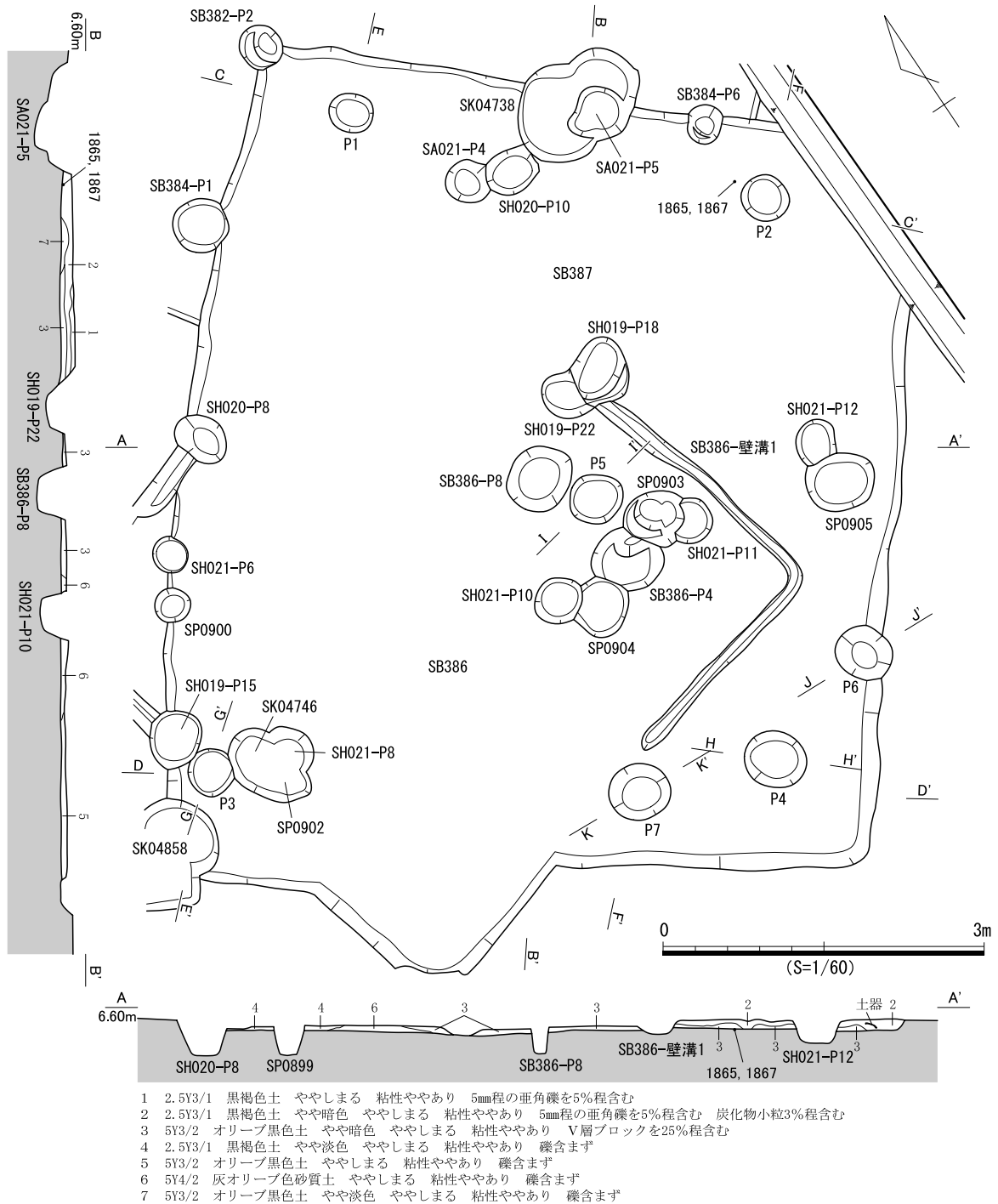


図702 SB387遺構図(1)

面形は方形で、各辺はほぼ直線的である。壁面の高さは約0.1mで、その傾斜は比較的急である。

埋土 7層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認した。いずれも直径約0.4mの小穴で、P1～P4が平面的な位置関係から柱穴の可能性のあるものの、柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器2,638点、石器類1点、小穴から土器29点が出土した。土器の多くはV期～VII期のもので、P7からV期鉢(1866)が出土した。

出土遺物 1865はVII期甕胴部。1866はV期鉢A1類。口縁部が短く直立して、端部は平坦である。端部のヨコナデのため、刺突文が端部下端に残る。胴部には直線文2帯を施文する。1867はVII期甕脚部。脚部が短く内湾する。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB388を切りVII期のSB382に切られることから、VII期と考えられる。

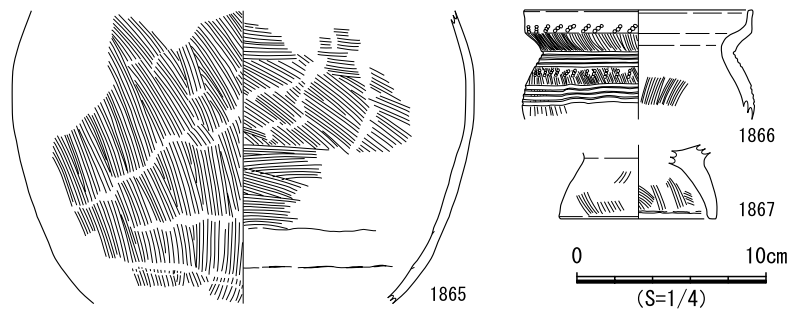


図 703 SB387 遺物実測図

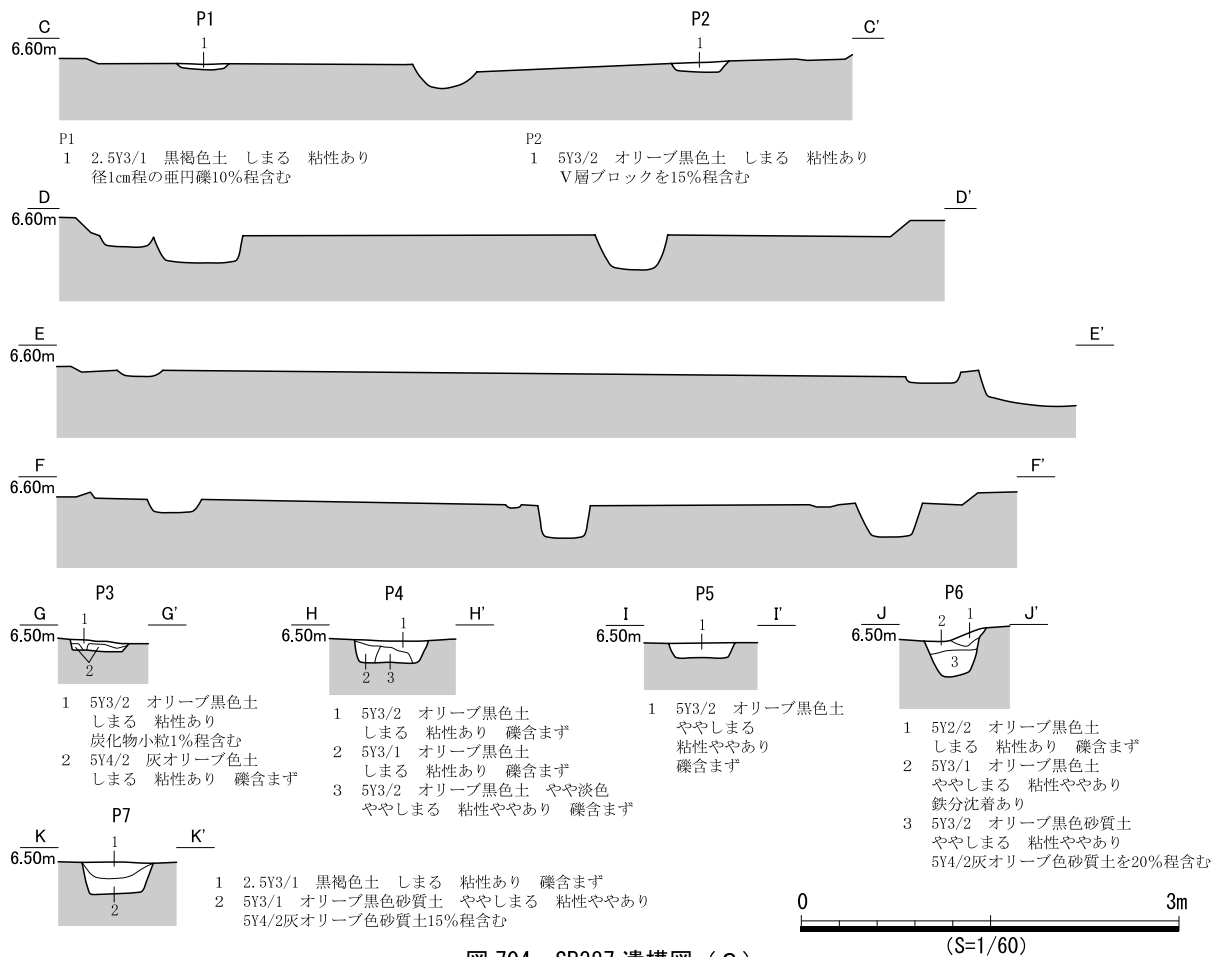


図 704 SB387 遺構図 (2)

SB388 (遺構：図707、遺物：図705)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB384、SB386、SB387に切られ、SB383を切る。なお、東辺が調査区域外にある。

形状 南北長約5.3mで、方形を呈する。各辺は直線的で、壁面の高さは0.1mにも満たない。

埋土 6層に分層した。礫の混入が多く、層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

床面 やや凹凸があり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴の可能性のあるものの、柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器313点、小穴から土器29点が出土した。土器はIV期～VII期のもので、その多くがVII期に属する。なお、P1からVII期高坏(1869)が出土した。

出土遺物 1868はVII期高坏C4d類。多条沈線、山形文、対向山形文や刺突文で施文する。上段の山形文は二重で、最下段の文様帯は多条沈線と山形文が重複する。1869はVII期高坏D2類。口縁端部に内傾面が認められ、多条沈線が施される。

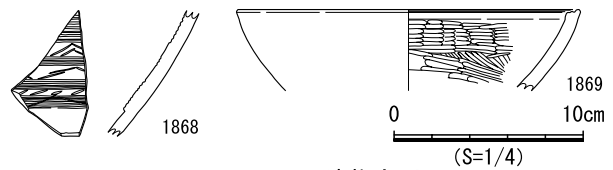


図705 SB388 遺物実測図

時期 出土遺物の時期とVII期のSB387に切られることから、VII期と考えられる。

SB389 (遺構：図708、遺物：図706)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB386、SB387、B404に切られ、周辺の竪穴住居跡のなかで最も先行する。南側はSB404に大きく削平されており、北側の約半分を検出した。

形状 東西長約5.3mであり、各辺は直線的で方形を呈する。壁面は高さ約0.2mで、その傾斜は急である。

埋土 5層に分層した。埋土全体に炭化物を含んでおり、埋土2～4層は5層上面から掘り込まれた別遺構の可能性もある。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認した。いずれも直径約0.6mの穴で、平面的な位置関係から柱穴の可能性のあるものの、柱痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器430点、小穴から土器1点が出土した。縄文時代晩期後半、IV期、V期～VII期の土器であり、その多くがV期～VII期に属する。

出土遺物 1870はVI期～VII期鉢C類。小さな底部から胴部がやや内湾しながら、立ち上がり、口縁部がわずかに外反するが、端部は欠損する。1871は縄文時代晩期後半の変容壺。口縁部がやや内傾し、端部を外方へ肥厚させる。端部からやや離れて、幅が狭い断面三角形の素文突帯を貼付する。

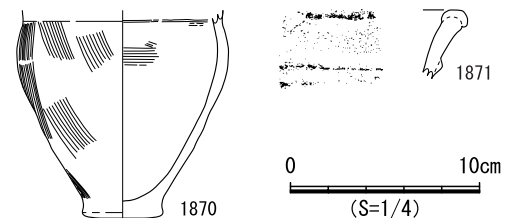


図706 SB389 遺物実測図

時期 出土遺物の時期と、VII期のB387、SB404より先行することから、VI～VII期と考えられる。

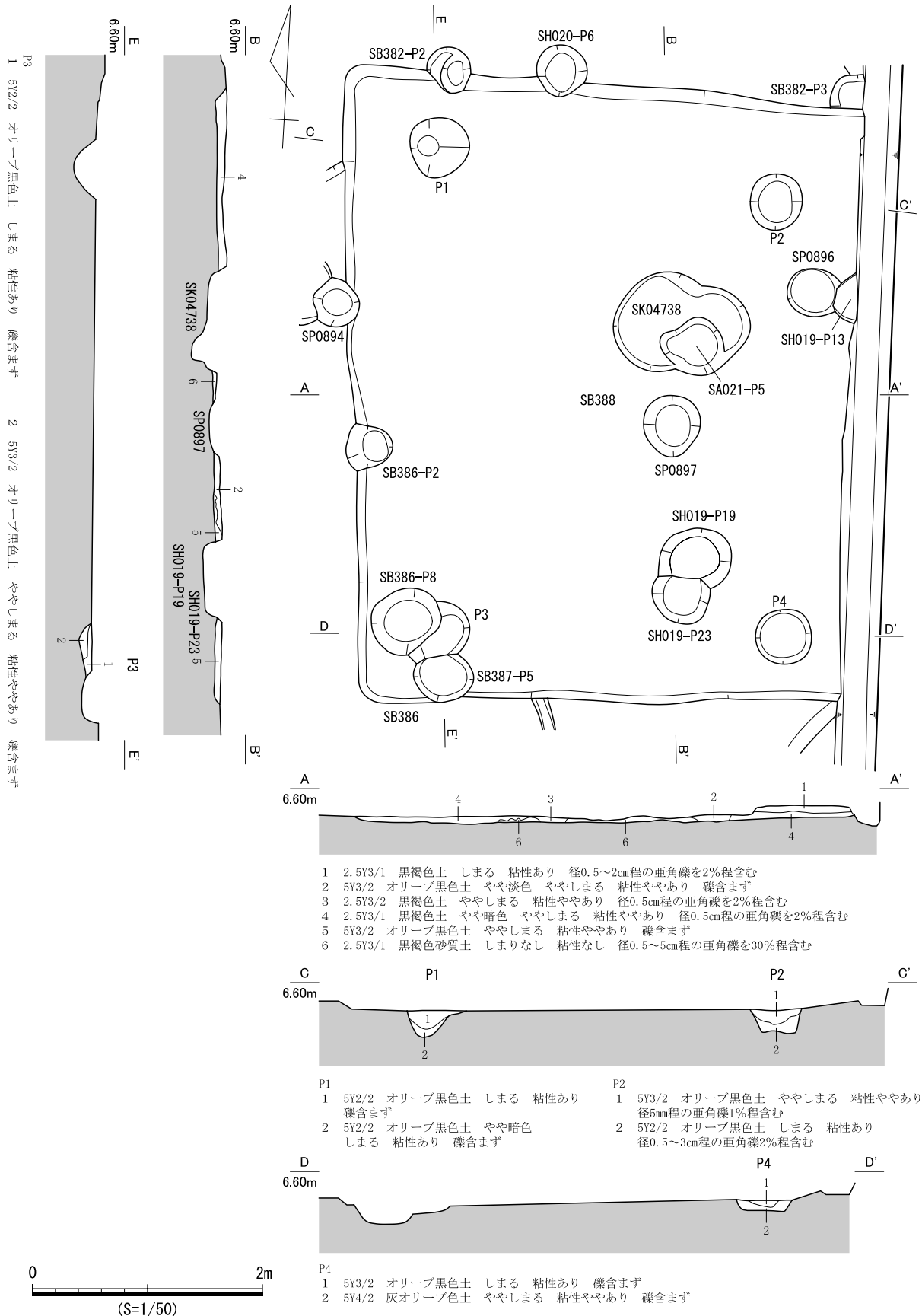


図 707 SB388 遺構図

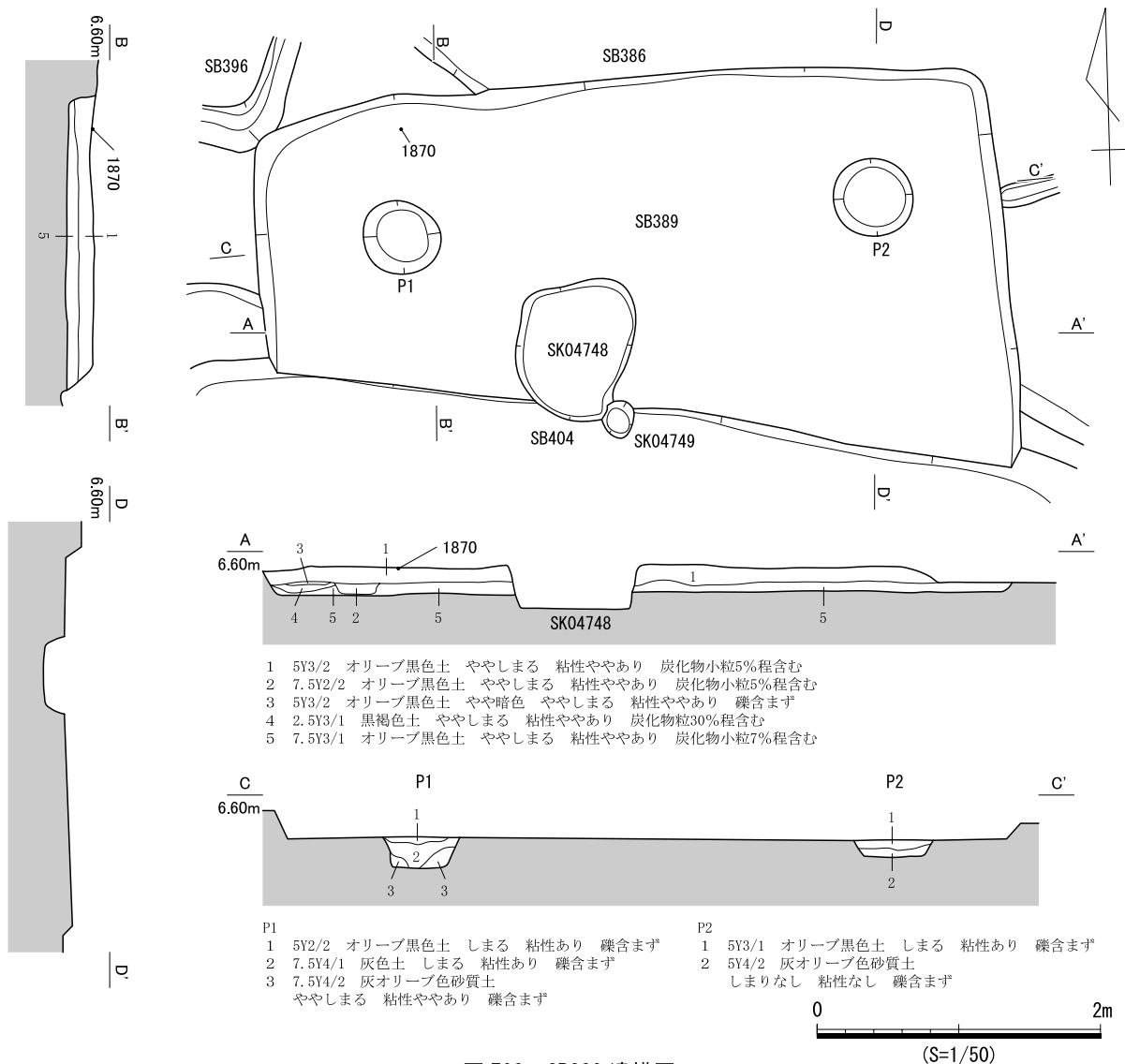


図 708 SB389 遺構図

SB390 (遺構：図 709・710、遺物：図 711)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB386、SB389、SB397、SB404に切られ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。なお、南側をSB389とSB404によって滅失する。

形状 東西長は約5.3mであり、各辺とも直線的で、方形を呈する。西壁は約0.2mの高さが残り遺存状況がよく、その傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。上層は炭化物を含み、床面上でも中央付近で炭化物集中が認められた。しかし、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認した。いずれも直径約1.0mの大きな穴であり、P2は埋土がブロック状に入る。

遺物出土状況 埋土中から土器454点、石器類1点、小穴から土器51点が出土した。土器はV期のものが多い。

出土遺物 1872はV期壺A1a類。口縁部が強く外反する。端部下端を大きく拡張して、端部は外傾する。

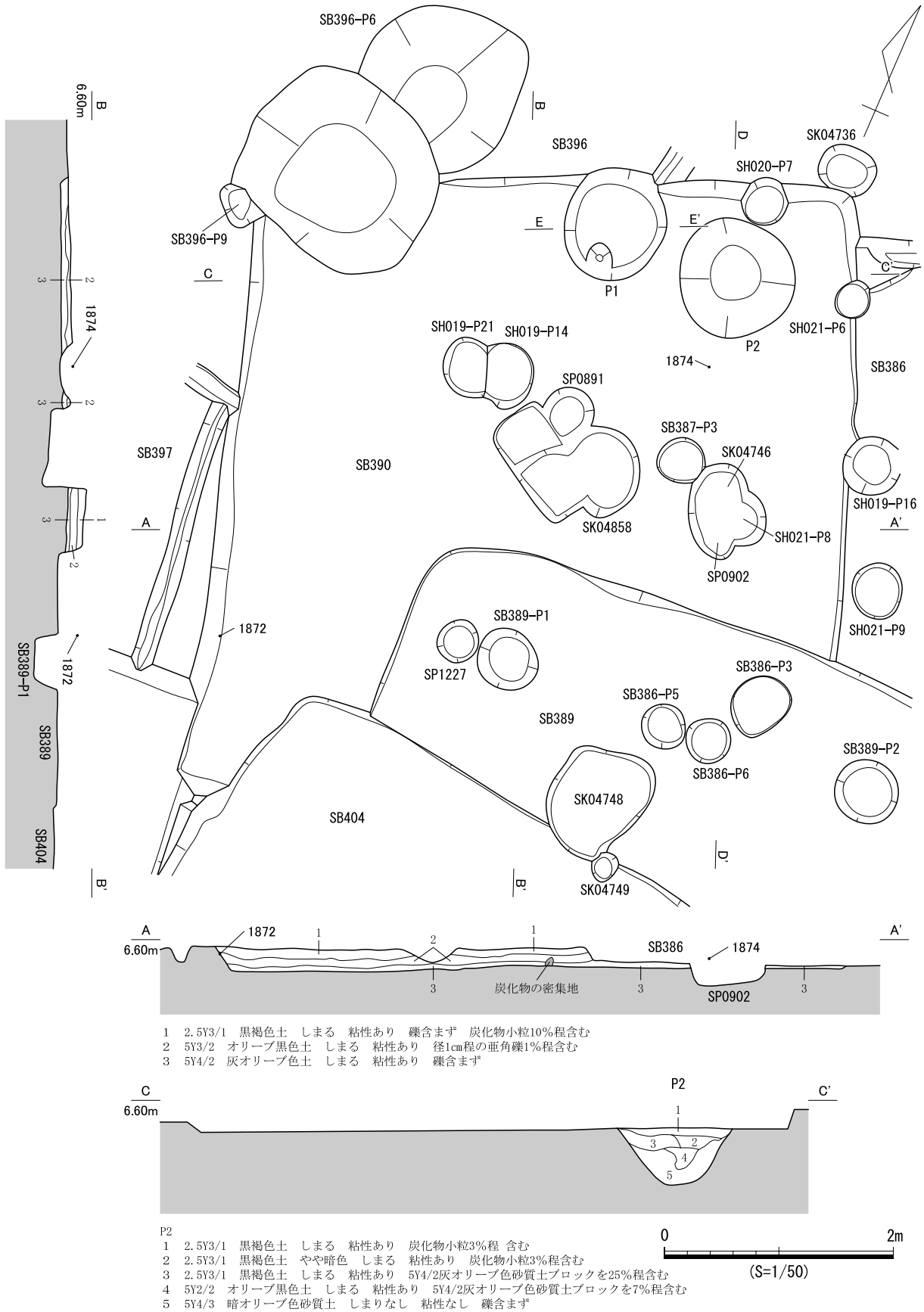


図 709 SB390 遺構図 (1)

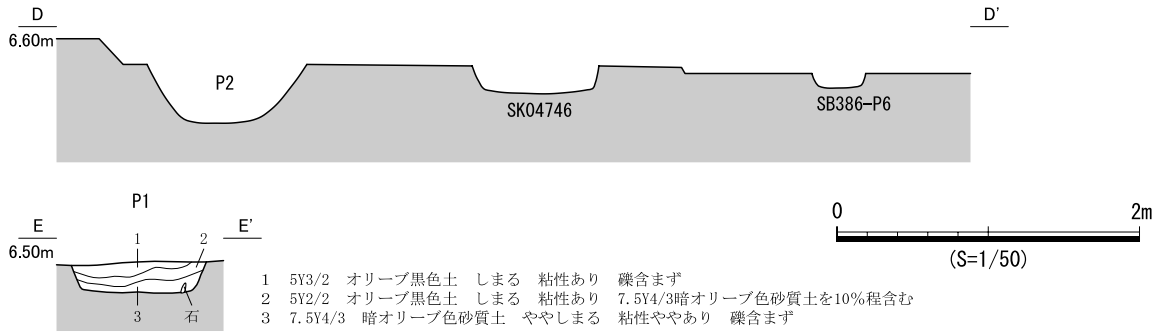


図 710 SB390 遺構図 (2)

文様は認められないが、形状からA1a類とした。1873はV期鉢A1類。口縁部が短く屈曲して、刺突文が認められる。1874は砥石。板状であり、表面のほぼ全面が砥面として使用されている。
時期 出土遺物の時期から、V期と考えられる。

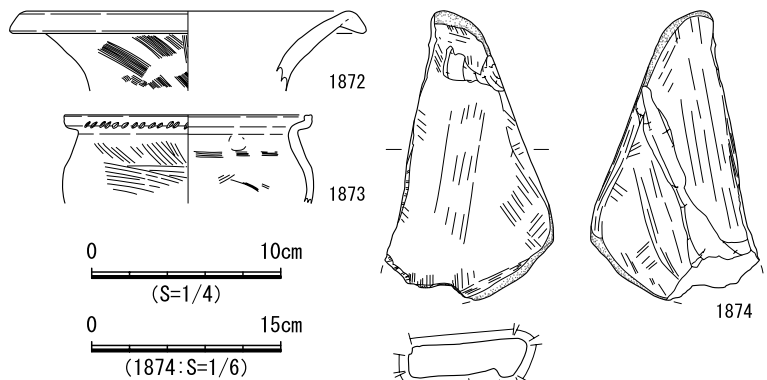


図 711 SB390 遺物実測図

SB391 (遺構：図 712)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB392とSB393を切る。大半が調査区域外にあり、確認した範囲は西隅部付近のみである。

形状 確認できた各辺は直線的でほぼ直角に重なるため、方形と考えられる。

埋土 単層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて1基の小穴を確認した。直径約0.4mで、底面は平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器88点、小穴から土器1点が出土した。土器はVI期～VIII期に属するが、

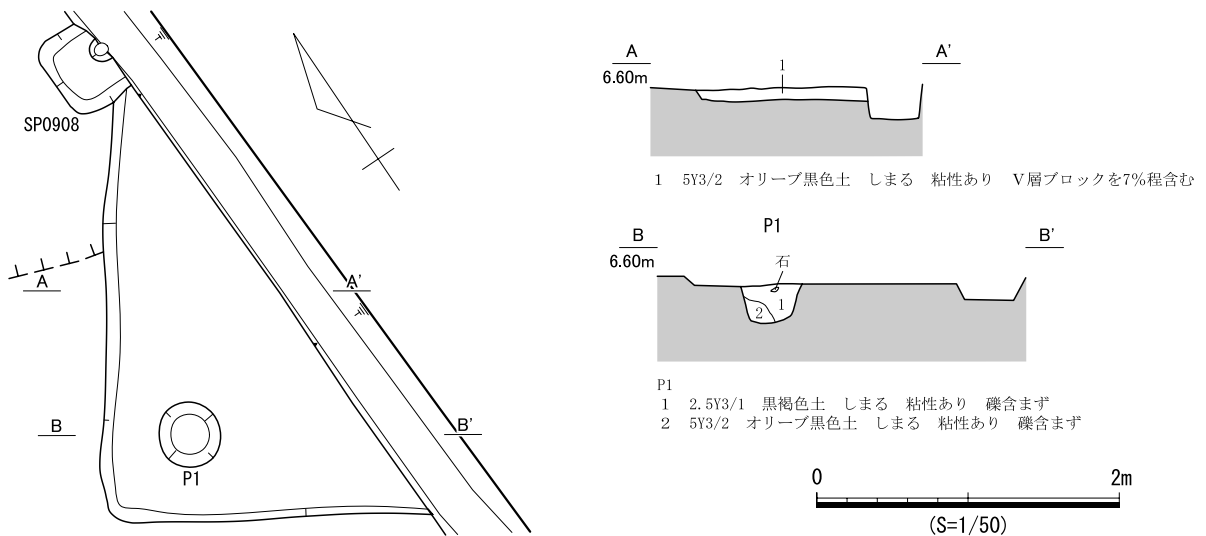


図 712 SB391 遺構図

いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期とⅦ期SB393より後出するので、Ⅷ期と考えられる。

SB392 (遺構：図713・715、遺物：図714)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB387とSB391に切られ、半分は調査区域外にある。

形状 南北長約5.9mで、平面形は長方形である。各辺とも直線的であるが、西辺は南端が壁溝とやや離れる。壁高は約0.1mであり、ほぼ直立する。

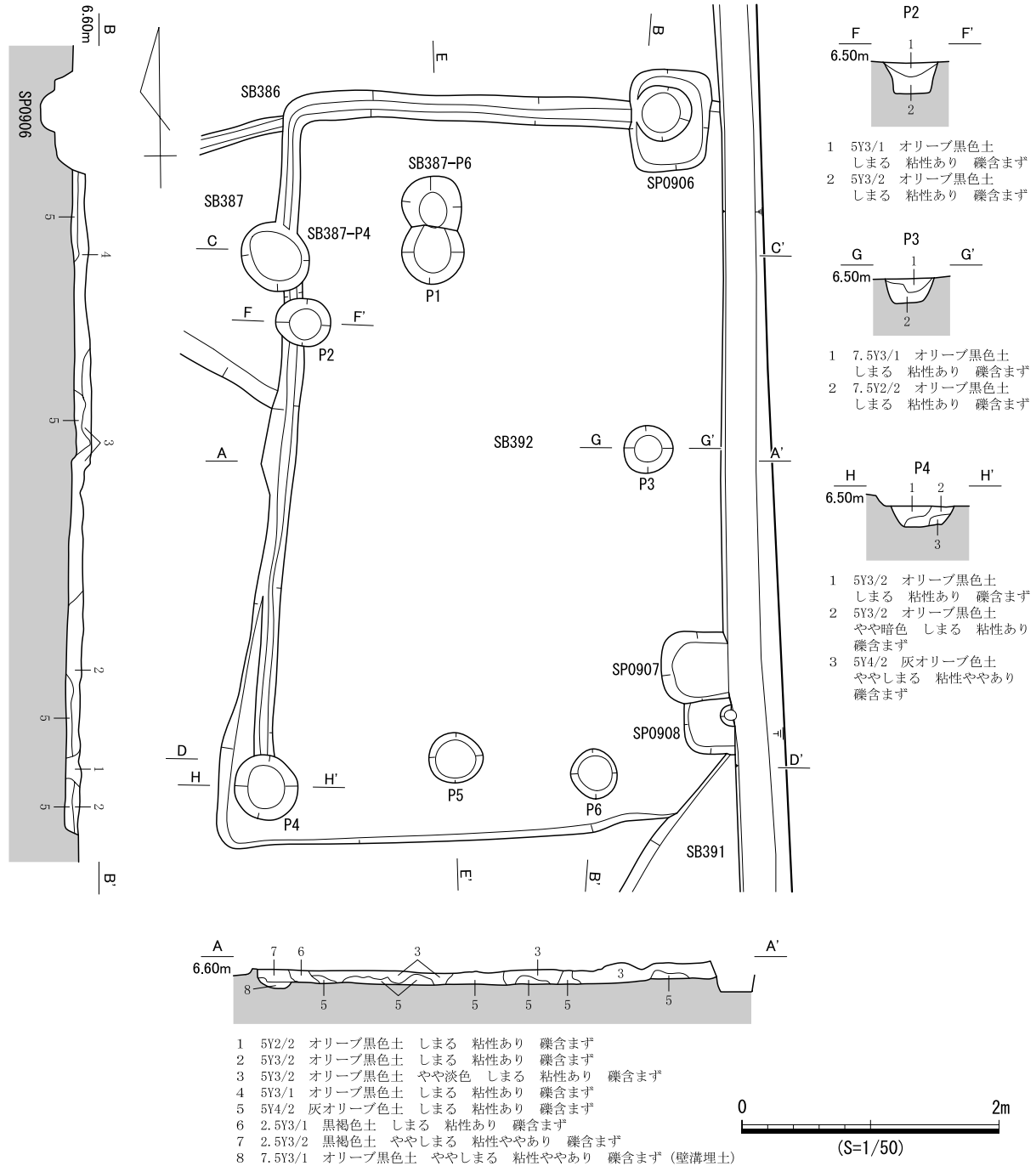


図713 SB392 遺構図 (1)

埋土 7層に分層した。ブロック状に土が混在していることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認した。いずれも直径約0.4m～0.5mで、P5とP6には柱痕跡が認められた。平面的な位置関係から、P1とP5が柱穴と考えられる。なお、壁溝は北辺から西辺にかけて検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器508点、石器類1点、小穴から土器74点が出土した。土器はV期～VII期のものであり、わずかに縄文時代晩期後半の土器片(1876)が出土した。

出土遺物 1875はVI期甕A2b類。口縁部が屈曲する。端部には肥厚する内傾面が形成され、多条沈線を施文する。1876は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部がわずかに肥厚し、端部に凹面を形成する。

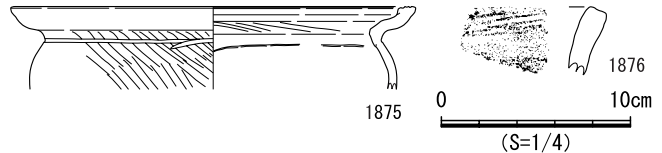


図 714 SB392 遺物実測図

時期 出土遺物の時期とVII期のSB387より先行することから、VII期と考えられる。

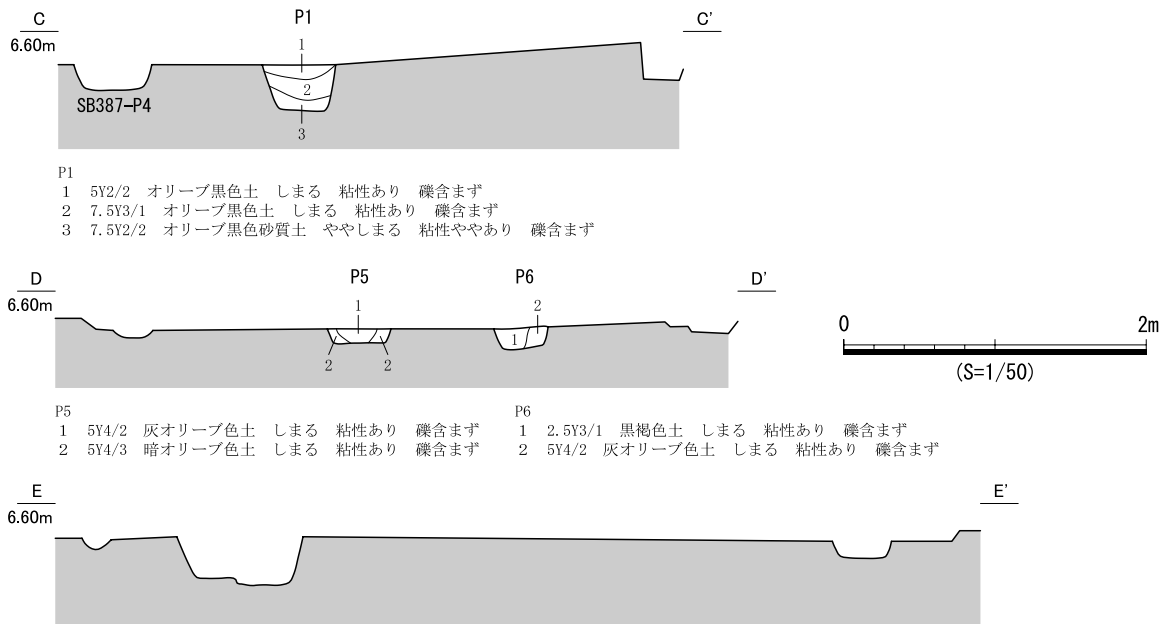


図 715 SB392 遺構図 (2)

SB393 (遺構：図 717、遺物：図 716)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB391に切られ、東半分が調査区域外にある。

形状 南北長約4.2mであり、方形を呈する。確認できた各辺とも直線的であり、壁面の高さは約0.1mで、その傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて1基の小穴を確認した。直径約0.3mで、底面は平坦である。

遺物出土状況 埋土中から土器493点、小穴から土器3点が出土した。土器はIV期～VIII期のものである。

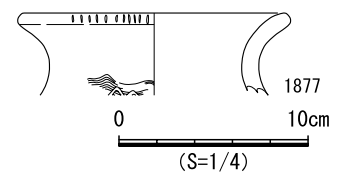


図 716 SB393 遺物実測図

出土遺物 1877はIV期壺H類。古井式にあたり、端部にキザミ、胴部に波状文が認められる。

時期 出土遺物の時期から、VIII期と考えられる。

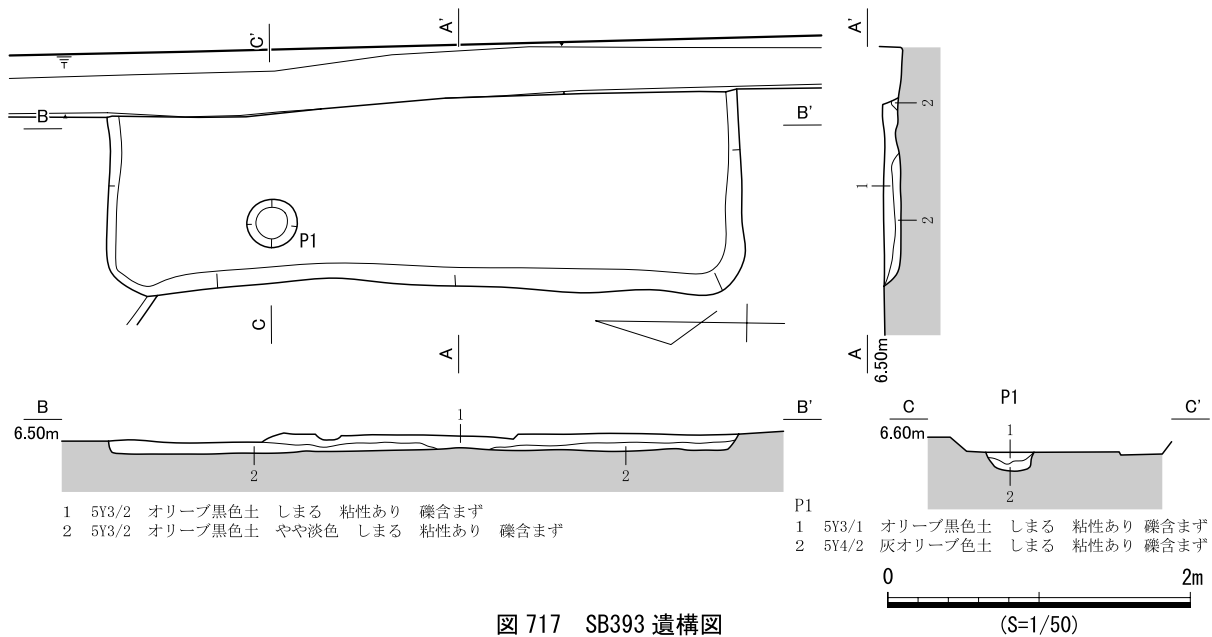


図 717 SB393 遺構図

SB394 (遺構：図 718・719、遺物：図 720)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の西端に位置する。西側を2008年度、東側を2010年度に調査した。他の竪穴住居跡と重複せず、北東側はNR005によって滅失する。

形状 南北長約4.7m、東西長約4.4mであり、隅丸方形を呈する。各辺ともわずかに湾曲しており、深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。埋土4層の上面が床面であり、床面付近は攪拌されたためか、ブロック状の堆積が顕著である。埋土4層は掘形埋土であり、2010年度の調査でのみ確認した。

床面 平坦であり貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。西壁に沿って幅約0.1mの壁溝を確認した。床面上では長さ約0.1mの小穴を多数検出した。その総数はP1～P3を除く64基で、その多くは深さが約0.1mの浅いものばかりである。そのうちP53～P55、P57、P58の5基では足の指の跡を確認できたため、他の穴も足跡の可能性が高い。P1～P3は直径約0.5mで、P3は柱穴と考えられる。P4は南北長約1.0mの浅い穴であるが、2008年度の調査では確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器433点、石器類1点、小穴から土器45点が出土した。土器の多くはVI期～VII期のものであり、P3からVII期甕(1880、1881)が出土した。

出土遺物 1878はVI期甕D1a類。口縁部が短く屈曲し、外面には刺突文が認められる。1879はVII期甕D2a類。口縁端部の屈曲が強く端部は尖り気味である。1880、1881はVII期甕D類。脚部はわずかに内湾しながら伸び、裾部を大きく折り返す。1882はVII期高坏D類脚部。透孔付近で高さを揃うように打ち欠いているのが認められ、破断面には被熱が認められる。坏底部には不整円形の煤が付着する。1883は叩石。長楕円礫を素材とし、側面と下端に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

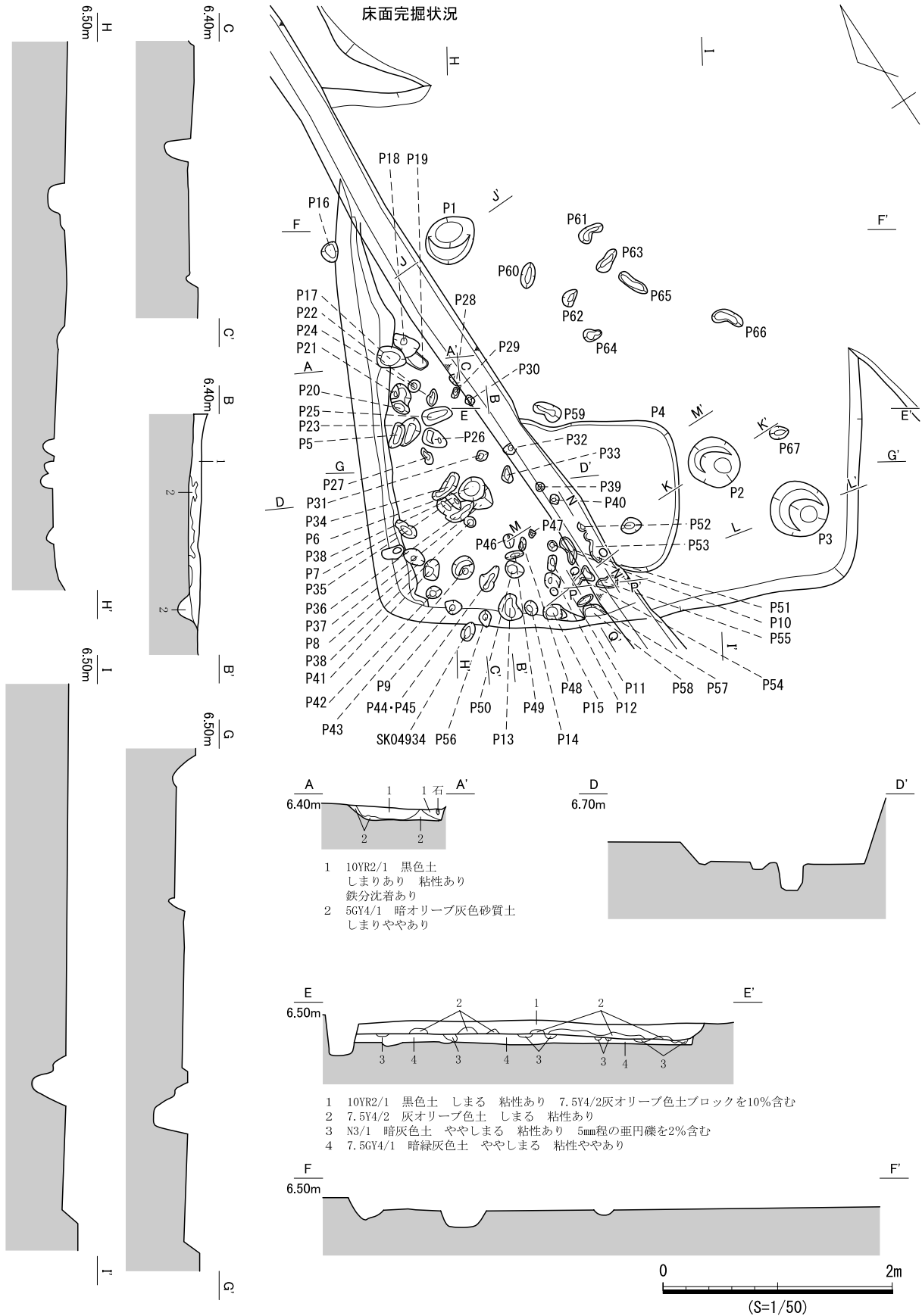


図 718 SB394 遺構図 (1)

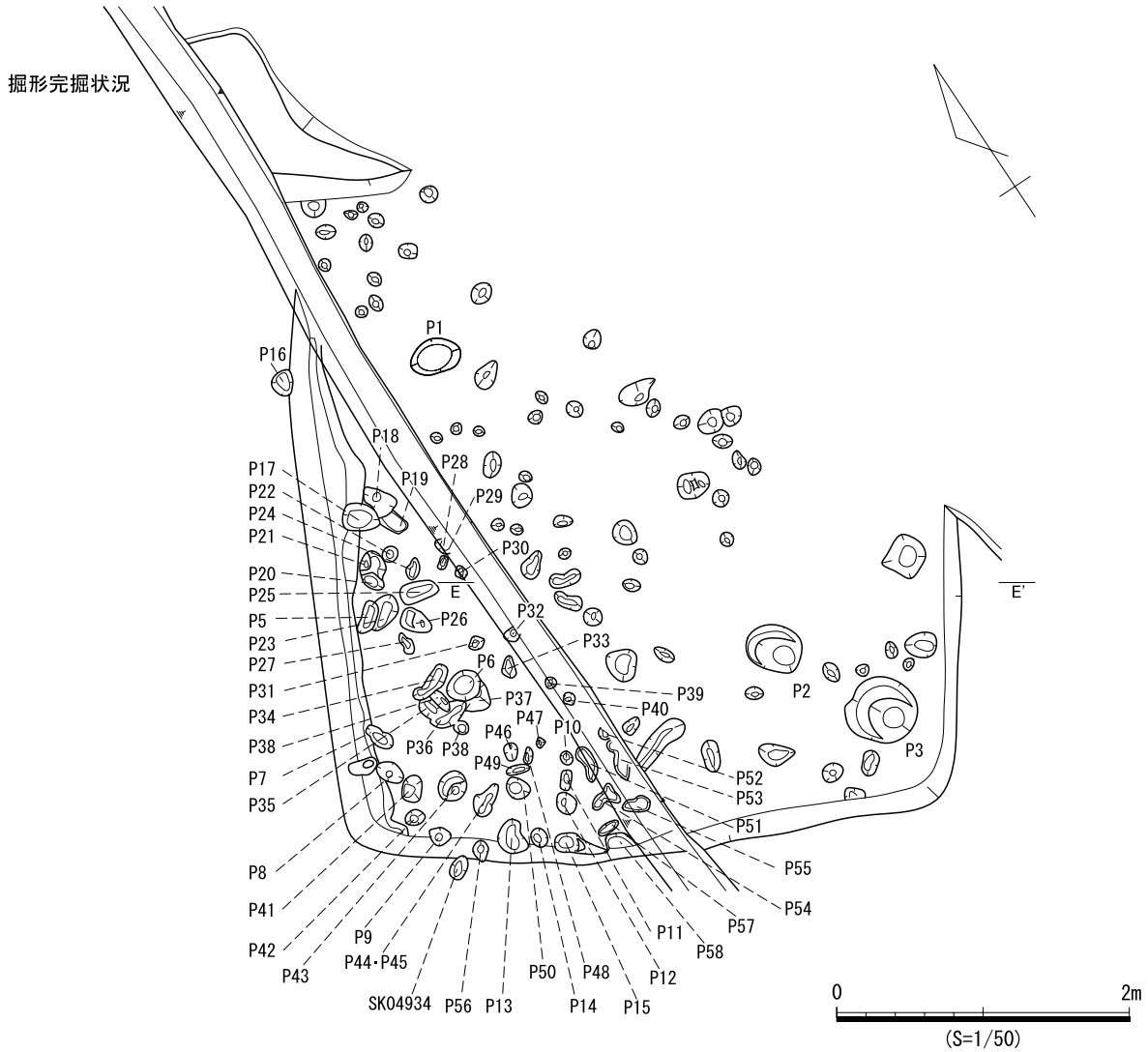
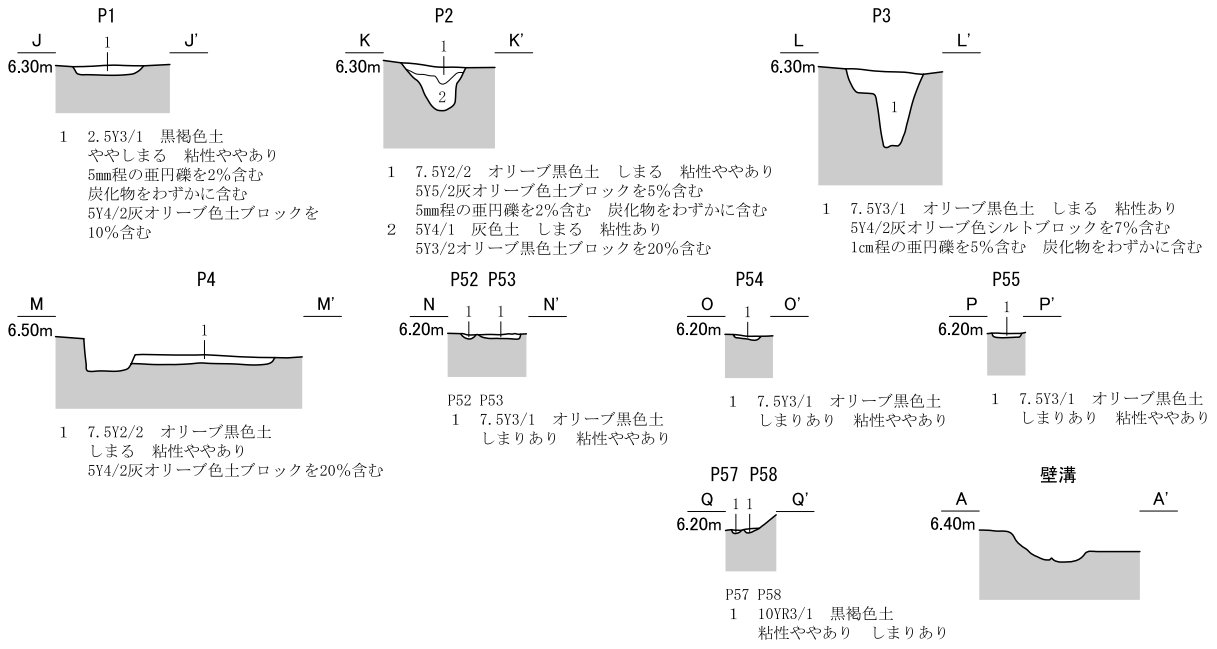


図 719 SB394 遺構図 (2)

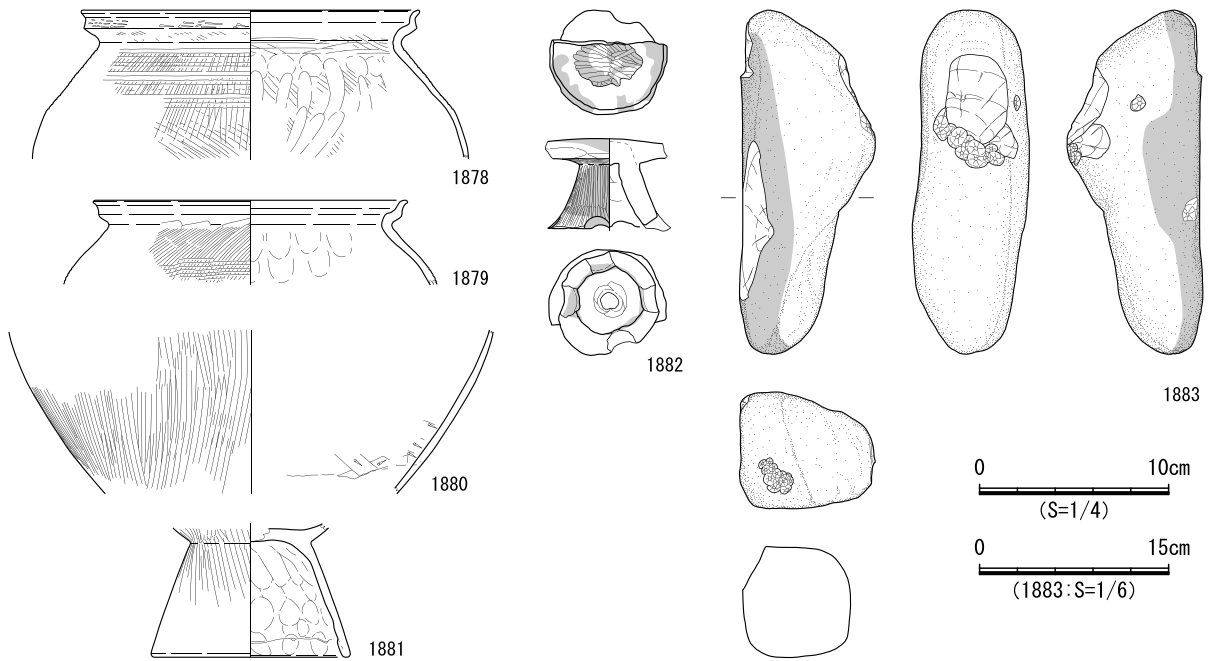


図 720 SB394 遺物実測図

SB395 (遺構：図 722・723、遺物：図 721)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。南西辺をSB360に、北西辺をSE012に切られ、南東辺でSB396を切る。

形状 北東－南西長約4.4m、北西－南東長約4.9mで、平面形は隅丸長方形である。各辺は直線的であり、壁面は高さが0.1mにも満たない。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて17基の小穴を確認した。P17を除いて、いずれも直径約0.5m、深さは約0.1m～0.3mである。明瞭な柱痕跡は認められなかったが、P1、P2、P4は底面が平坦で、壁面の傾斜が垂直に近い形状であり、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。P12とP15は形状が類似し、南東辺と軸を揃えて位置する。P17は長軸1.01mの楕円形を呈する穴である。住居のほぼ中央に位置し、深さは0.05mと浅く底面は平坦だが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器318点、石器類5点、小穴から土器147点、石器類1点が出土した。土器はⅦ期のものが大半で、Ⅰ期のものがわずかに混在していた。

出土遺物 1884はⅦ期高坏C4d類。内面に幅広の多条沈線間に山形文2帯と対向山形文を施文する。山形文はクシ状工具、対向山形文はへら状工具による施文である。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB360に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

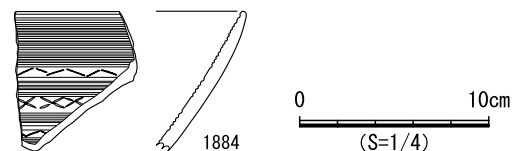


図 721 SB395 遺物実測図

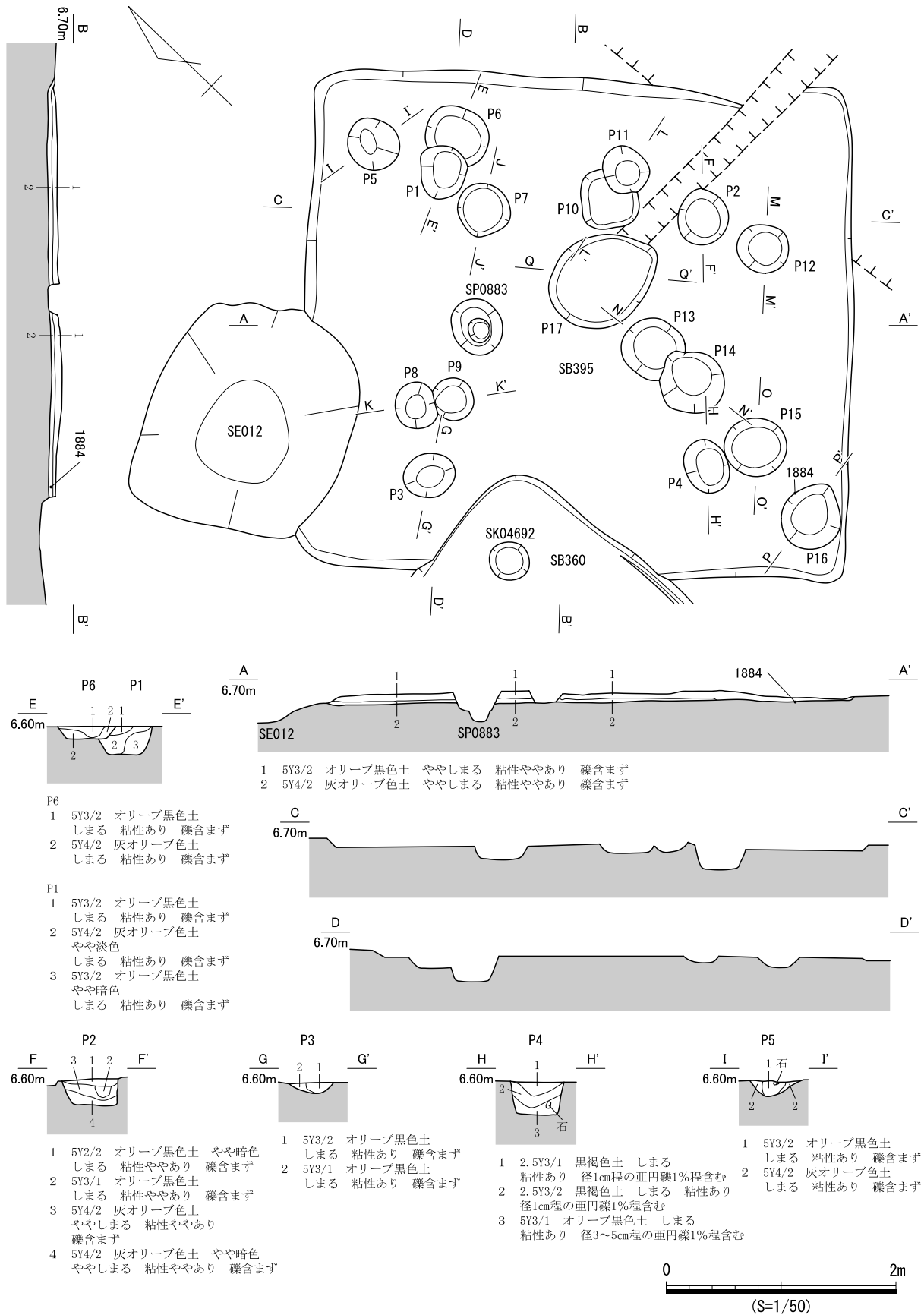


図 722 SB395 遺構図 (1)

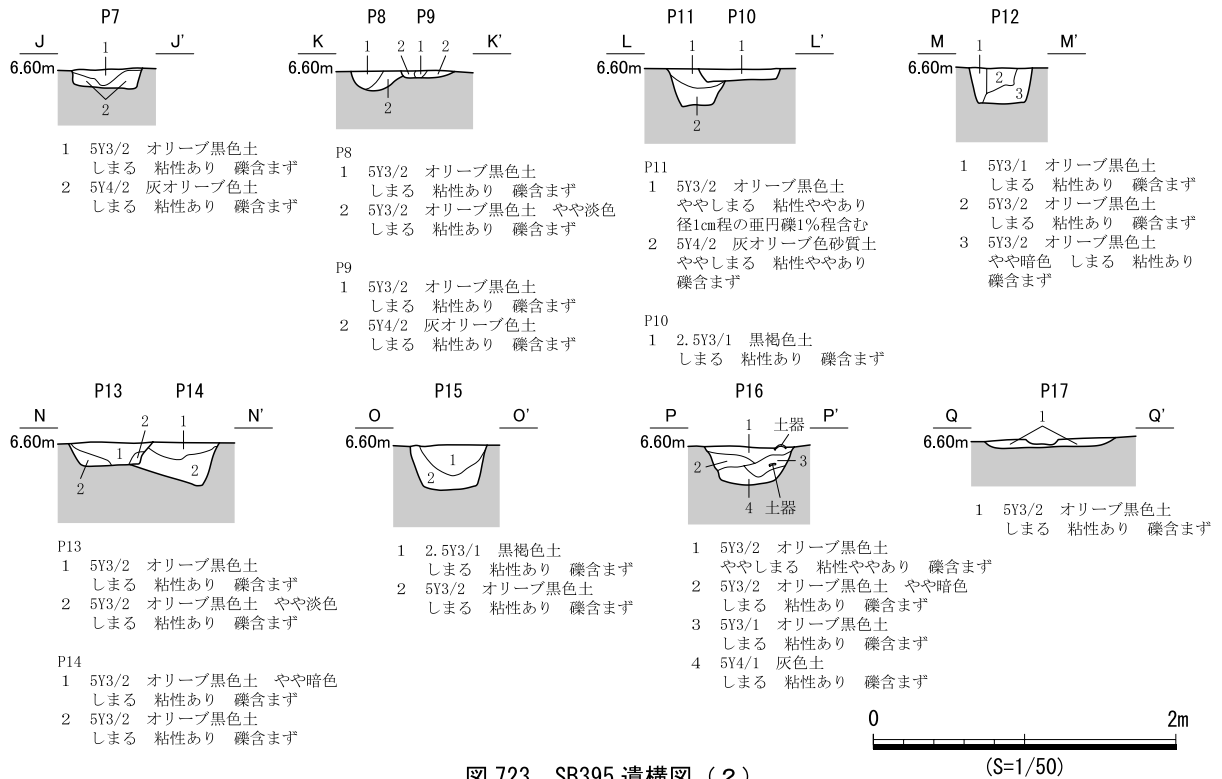


図 723 SB395 遺構図 (2)

SB396 (遺構：図 724・725、遺物：図 726)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB395に切られ、SB390とSB397を切り、中央に大きな攪乱がある。

形状 南北長約5.2m、東西長約4.6mで、平面形は隅丸長方形である。北辺と西辺、南辺は比較的直線的であるが、東辺は中央が外側へやや膨らむ。壁面の高さは約0.2mであり、その傾斜は比較的急である。

埋土 5層に分層した。1層～3層が床面までの堆積土で、5層と6層が掘形埋土である。床面まではほぼ水平堆積であり礫を含むが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）があるものの、硬化面は認められなかった。床面上にて9基の小穴と炉を確認した。P1～P4は平面的な位置から柱穴と考えられる。P2は柱痕跡が認められ、P1とP4は壁面がほぼ垂直に掘り込まれている。また、P3は底面東側が大きく窪む。P5は北壁際に位置し、直径約0.9m、深さ約0.3mの不整形円の大きな穴であるが、その性格は不明である。また、床面中央北寄りで幅1.18mの浅い掘り込みを有する穴を検出した。埋土に炭化粒を含み、北寄りで焼土の広がりを確認したことから地床炉と考えられる。その底面中央では長さ37cmの砥石が南北方向に据えられていた。壁溝は幅約0.3mで、西壁南半分を除いて巡る。

遺物出土状況 埋土中から土器1,491点、石器類7点、小穴から土器157点、石器類7点、壁溝から土器57点が出土した。また、P4からV期高坏(1888)が、炉からV期高坏(1887)と砥石(1890)が、それぞれ出土した。

出土遺物 1885はV期壺B1類。口縁部がわずかに外反して、端部に強い平坦面が認められる。1886～1889はV期高坏B類脚部。脚部が柱状を呈する。1889は未貫通の穿孔が認められ、裾部がわずかに

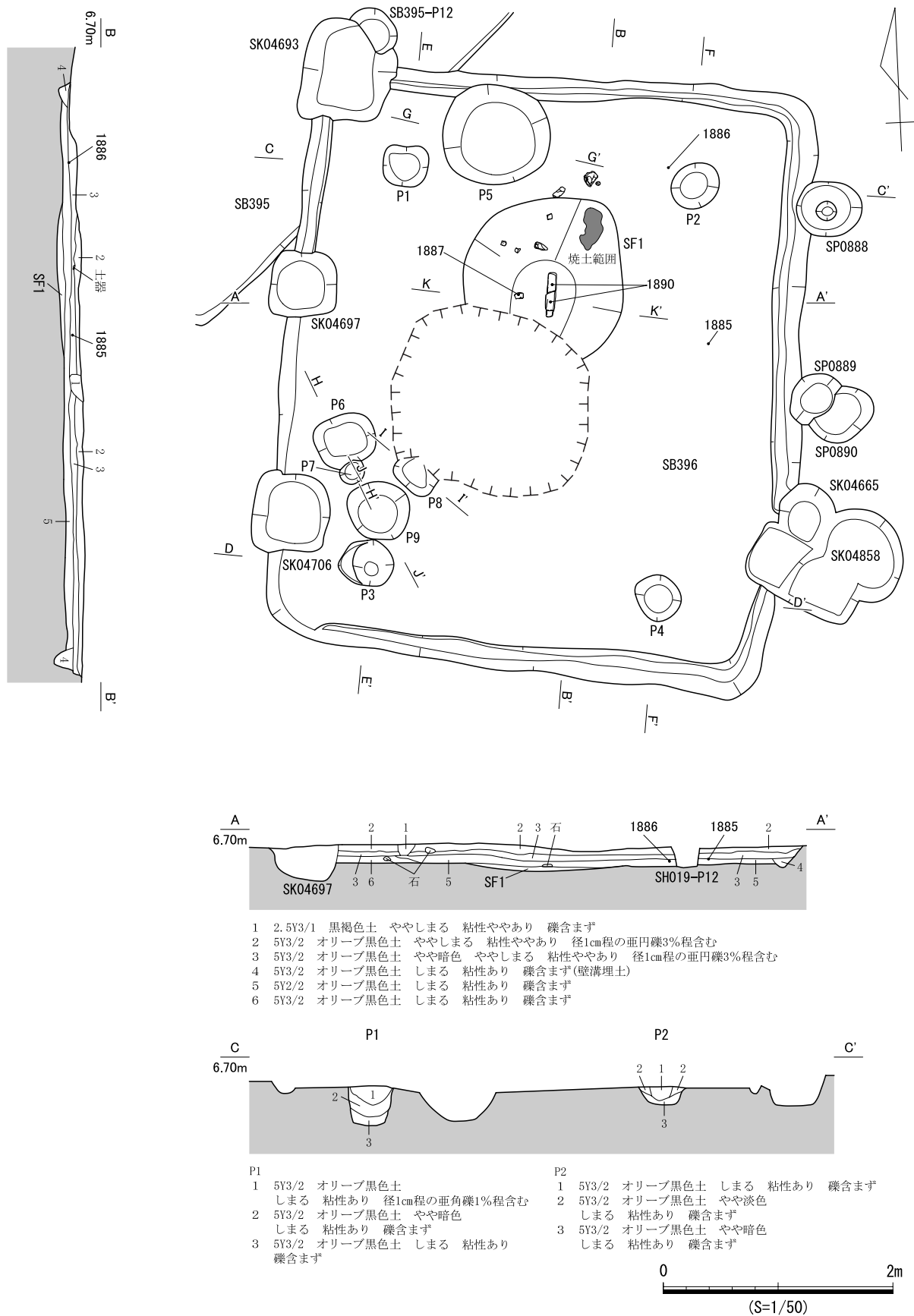


図 724 SB396 遺構図 (1)

円錐形に開く。1890は砥石。断面方形を呈する垂円礫の一部分を砥面に使用している。

時期 柱穴や炉出土遺物の時期からV期と考えられる。しかし、本遺構はVII期のSB397を切っており、出土遺物の時期と遺構の重複関係から推定できる時期とに矛盾がある。

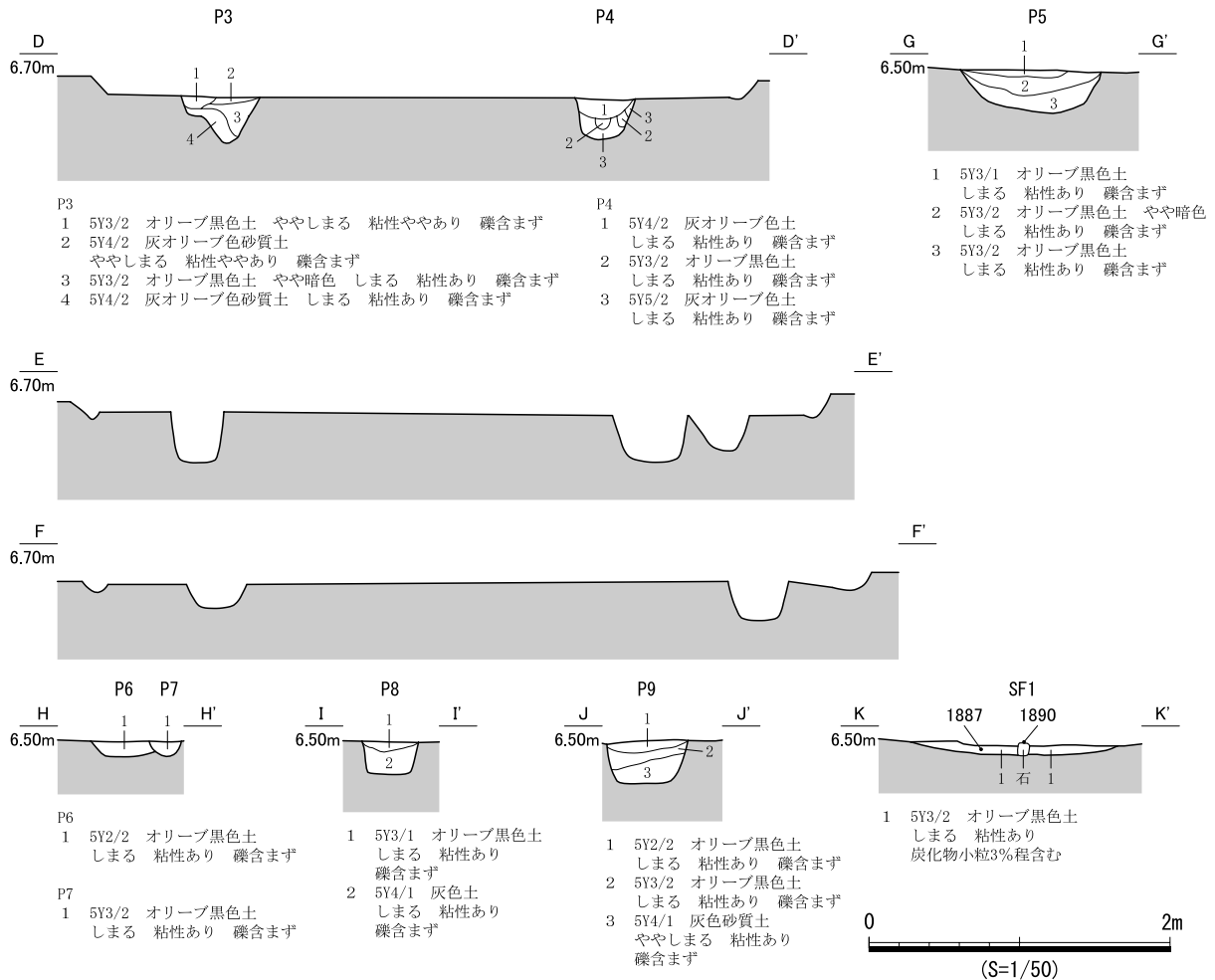


図 725 SB396 遺構図 (2)

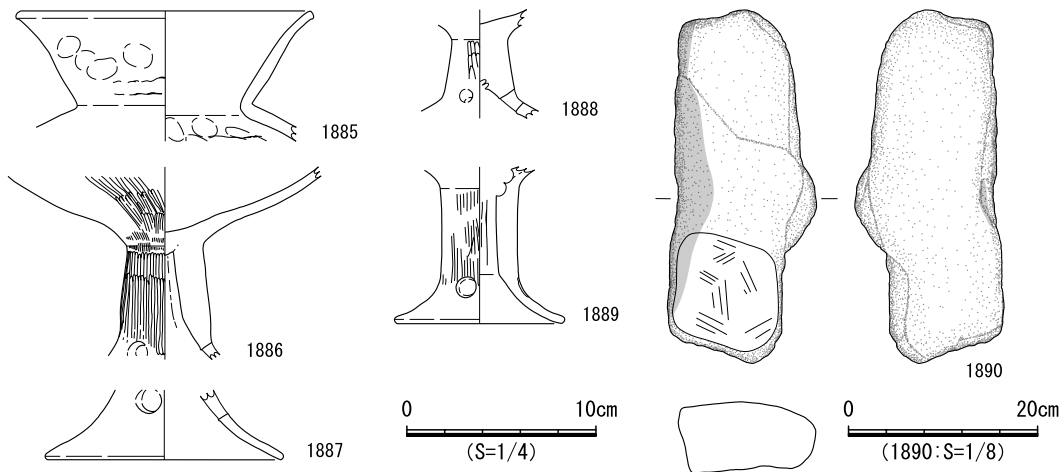


図 726 SB396 遺物実測図

SB397 (遺構：図 728、遺物：図 727)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB396に切られ、SB398とSB399を切る。

形状 南北長約4.7m、東西長約4.2mで、平面形は長方形である。各辺は直線的で、隅部は重複する遺構により切られている。

埋土 単層であり、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認した。P2、P3、P5が平面的な位置関係から柱穴の可能性のあるものの、P2は他より浅く、南東隅の穴は確認できなかった。壁溝は各辺に沿って検出したが、東辺の南側は途切れている。

遺物出土状況 埋土中から土器1547点、石器類2点、小穴から土器91点、壁溝から土器142点が出土した。土器はVI期～VII期に属し、P5からVI期の高坏(1893)と甕(1892)が出土した。

出土遺物 1891はVI期壺H1a類。口頸部が直線的にわずかに外傾する。1892はVI期甕B3類。口縁端部に強いナデが認められる。1893は口縁部が強く外反するVI期高坏B4類。1894はVI期高坏I3類。1895はVI期器台B1a類脚部。脚部が柱状で、裾部が強く外反する。

時期 出土遺物の時期からVI期と考えられるが、本遺構はV期のSB396に切られており、出土遺物の時期と遺構の重複関係から推定できる時期とに矛盾がある。

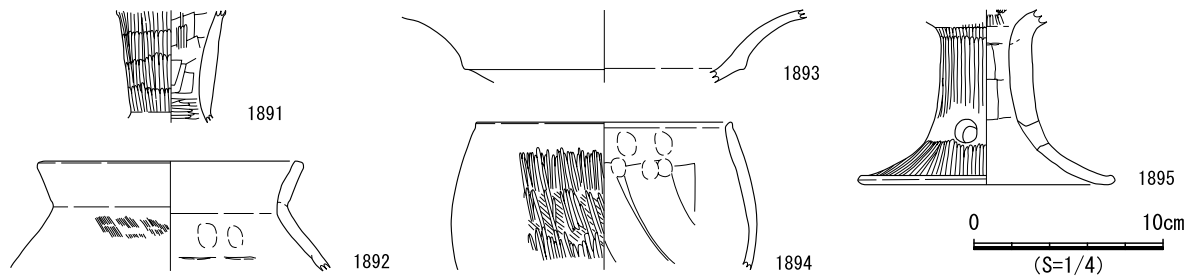


図 727 SB397 遺物実測図

SB398 (遺構：図 729、遺物：図 730)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB397とSB404に切られ、SB399を切る。周囲の竪穴住居跡との重複が著しいものの、全形を検出した。

形状 南北長約4.8m、東西長約3.9mで、平面形は隅丸長方形である。各辺は直線的で、南西隅部のみ直角気味である。周囲の竪穴住居跡のなかでは遺存状況が良く、壁面の高さは約0.2mあり、その傾斜は急である。

埋土 5層に分層した。ほぼ水平堆積であり、全体的に炭化物を含む。しかし、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認した。P5以外は直径約0.4m～0.6mで、大きさが似ている。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられ、P2とP3で壁面に寄った柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 埋土中から土器2,919点、石器類2点、小穴から土器142点が出土した。土器の多くはVI期～VII期であり、中央部と北辺側に分布がまとまる。

出土遺物 1896はV期～VI期壺A1b類。口縁部が強く外反し、端部が外傾して下端を拡張する。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。1897はVII期壺B2a類。口縁部が強く外反して、端部には外傾する平

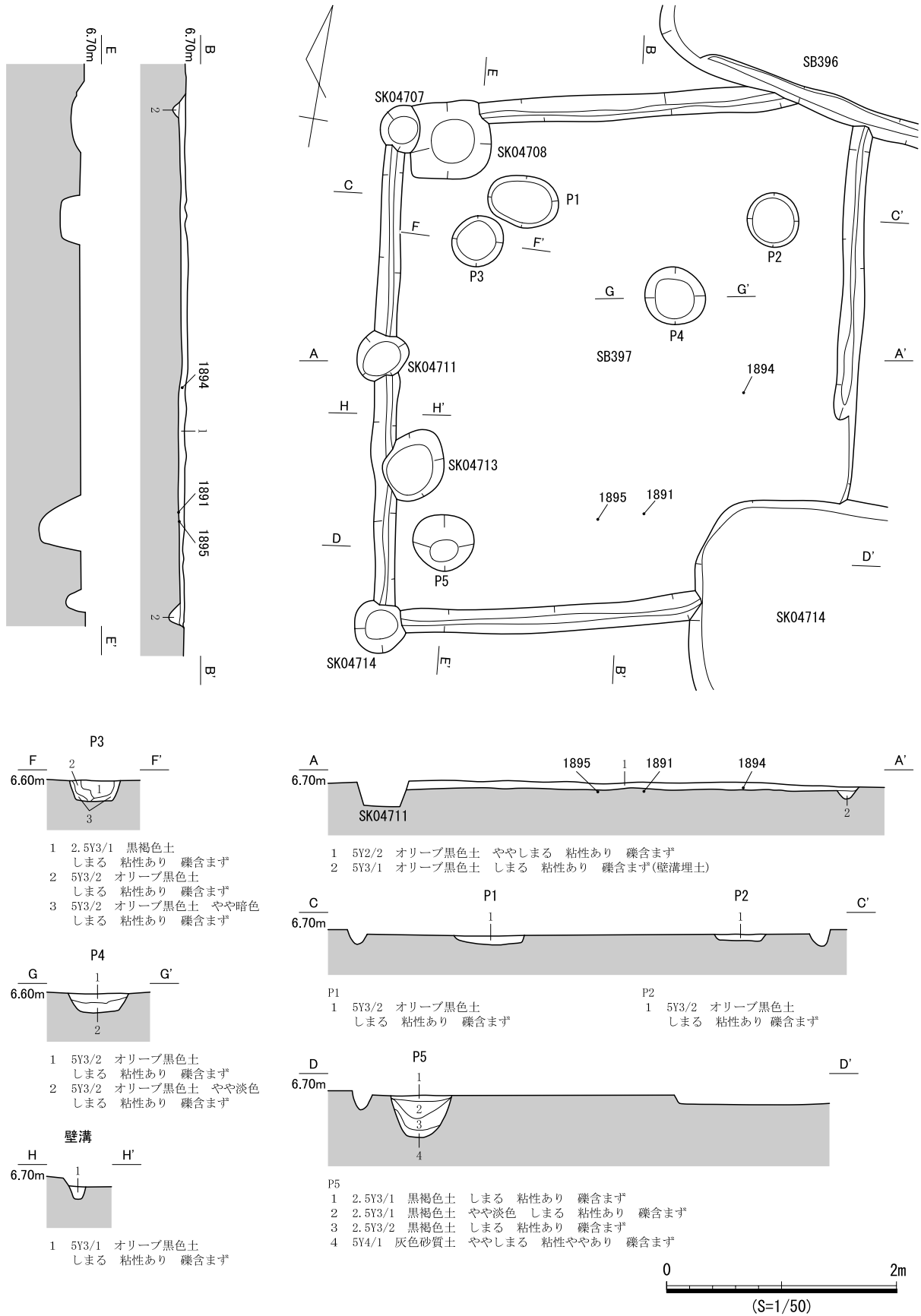


図 728 SB397 遺構図

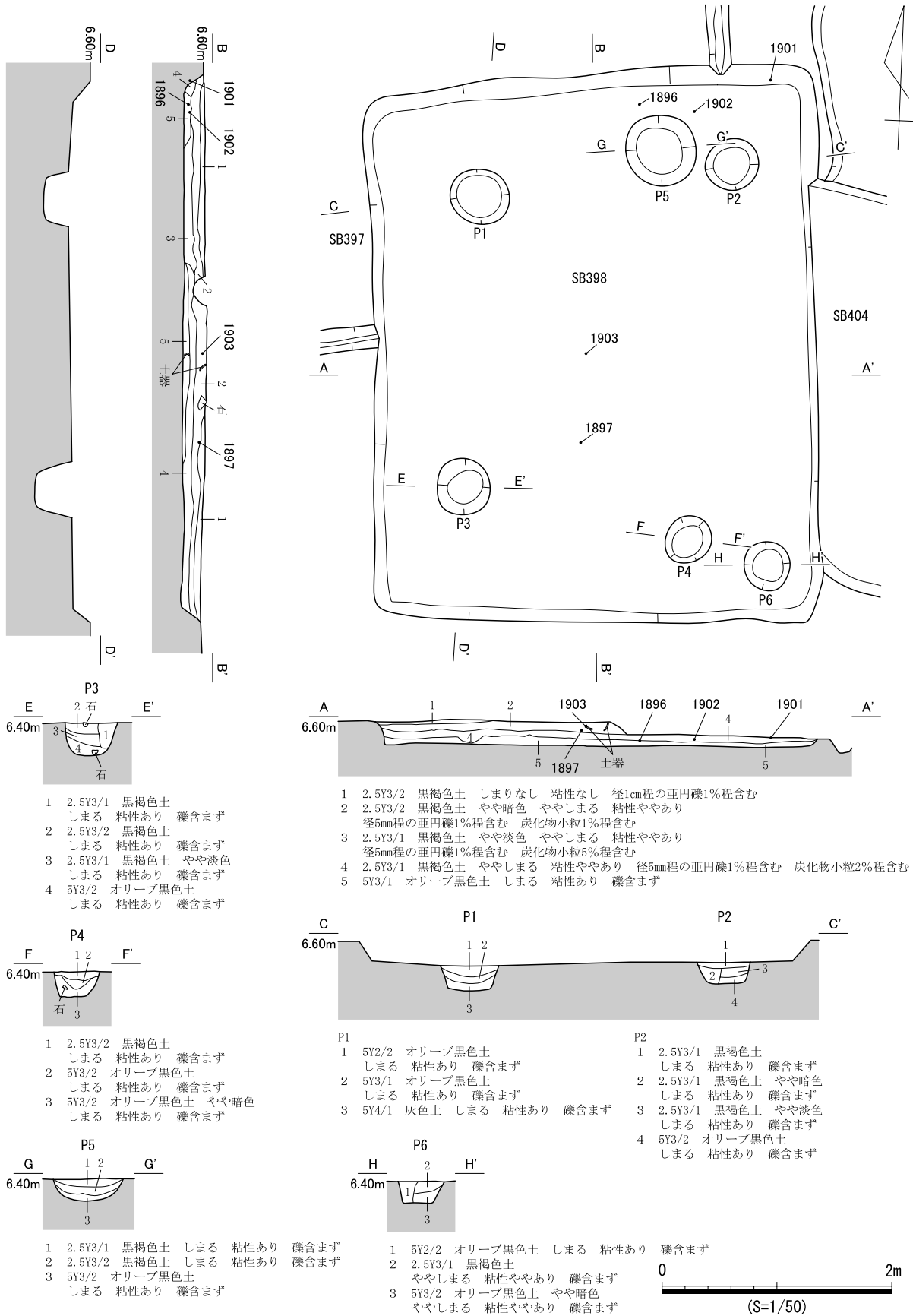


図 729 SB398 遺構図

坦面を形成する。胴部には粗いハケ目が認められる。1898はIV期甕A2類。口縁部がくの字に屈折して、端部にタタキが認められる。上端を沈線にみえるほど強いヨコナデを施したため、タタキの痕跡は下端のみに残る。1899はVII期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部には断続的な強いナデが認められる。内外面に粗いハケ目が認められる。1900はV期高坏B2c類。口縁部が短く外反して、端部をわずかに肥厚する。内外面に煤が付着し、とくに内面全体に強く付着する。1901はVI期高坏I類脚部。脚付裾部が強く外反し、端部はわずかに平坦である。脚裾部内外面ともに円環状に煤が付着する。1902、1903は砥石。いずれも大型の垂円礫を素材としており、1902は扁平で砥面の一部に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB397に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

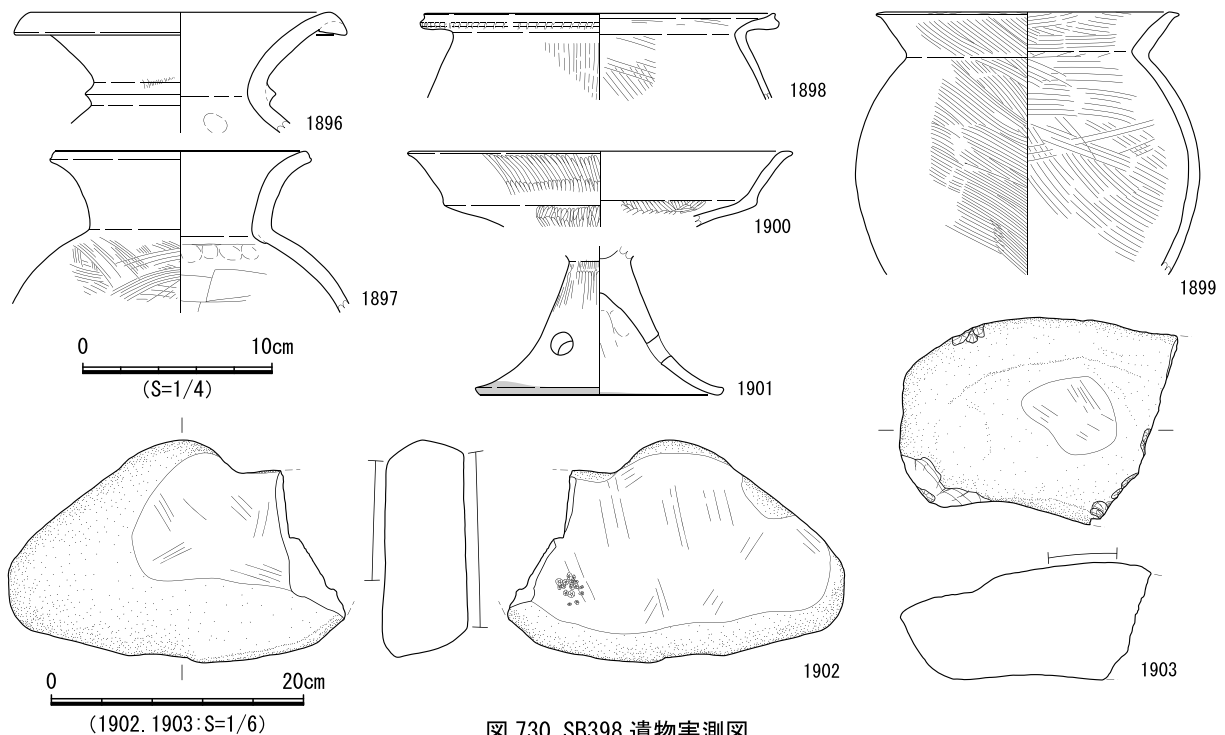


図 730 SB398 遺物実測図

SB399 (遺構：図 731・732、遺物：図 733)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB397、SB398、B403に切られ、SB409を切る。
形状 南北長約5.5m、東西長約5.4mで、平面形はほぼ正方形である。確認した各辺は直線的で、隅部は直角気味に屈折する。壁面の高さは約0.1m～0.2mあり、その傾斜は急である。

埋土 8層に分層した。7層や8層など、埋土がブロック状に入り込むことから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1とP2が柱穴と考えられるが、柱痕跡は確認できなかった。また、対応する東側の柱穴は、SB398底面でも検出できなかった。壁溝は、北壁と東壁沿いの一部分で途切れる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,270点、小穴から土器31点、壁溝から土器41点が出土した。土器はVI期～VII期のもので、わずかにIV期の土器片が出土した。

出土遺物 1904はIV期壺A1類胴部。1905はIV期甕A2類。口縁部がくの字に屈折して端部にキザミ

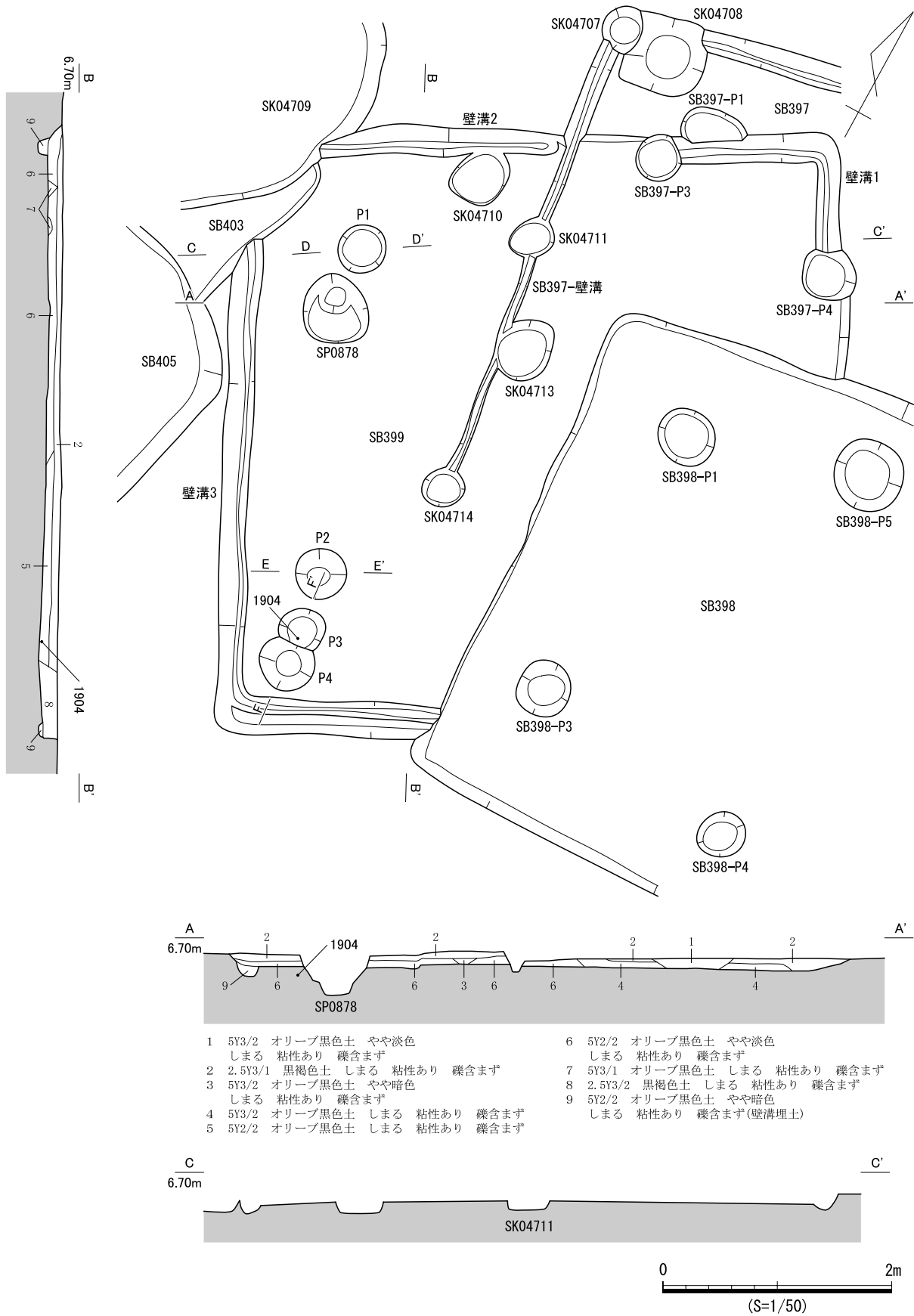


図 731 SB399 遺構図 (1)

が認められる。胴部外面にはハケ調整より後にタタキが施される。1906はIV期壺H類。胴部の破片で連弧状の文様が認められる。1907はVI期～VII期甕胴部。線刻が認められる。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB397、SB398、SB403に切られることから、VI期～VII期と考えられる。

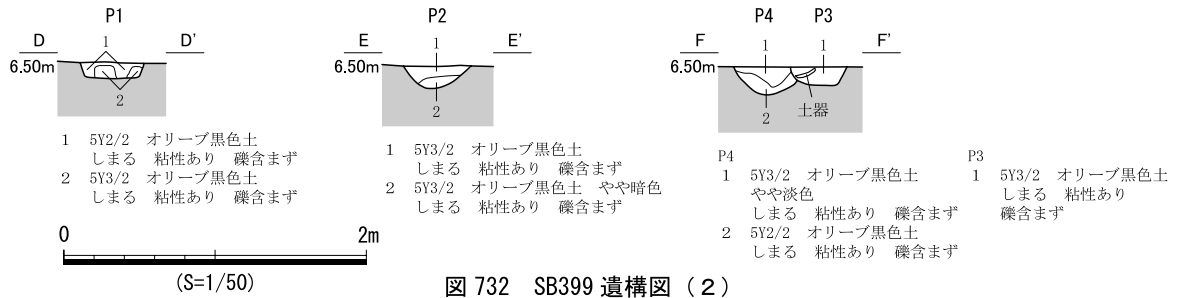


図 732 SB399 遺構図 (2)

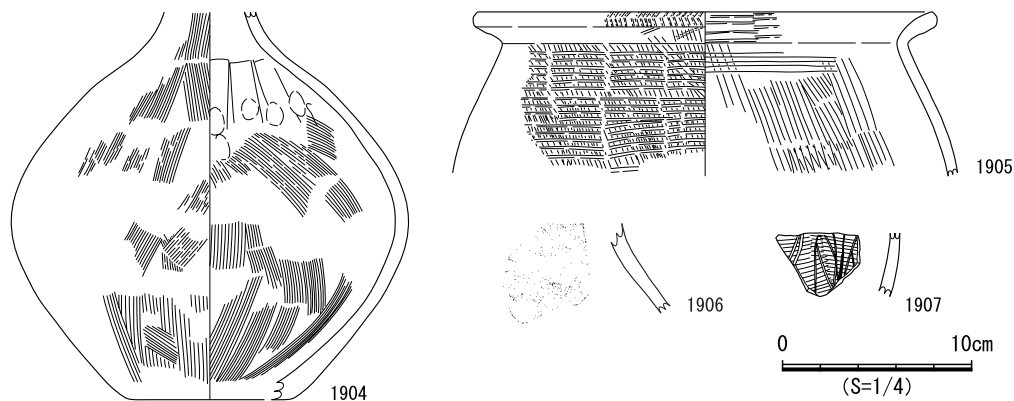


図 733 SB399 遺物実測図

SB400 (遺構: 図 734)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB398とSB404に切られ、SB401を切る。周囲の竪穴住居跡との重複により、住居の南西隅部付近を検出したのみである。

形状 規模は不明であり、確認した各辺は直線的で、隅部はほぼ直角に曲がることから方形と考えられる。壁面の高さは約0.2mであり、ほぼ直立する。

埋土 3層に分層した。層界の凹凸がみられるものの、部分的な検出であるため成因は不明である。

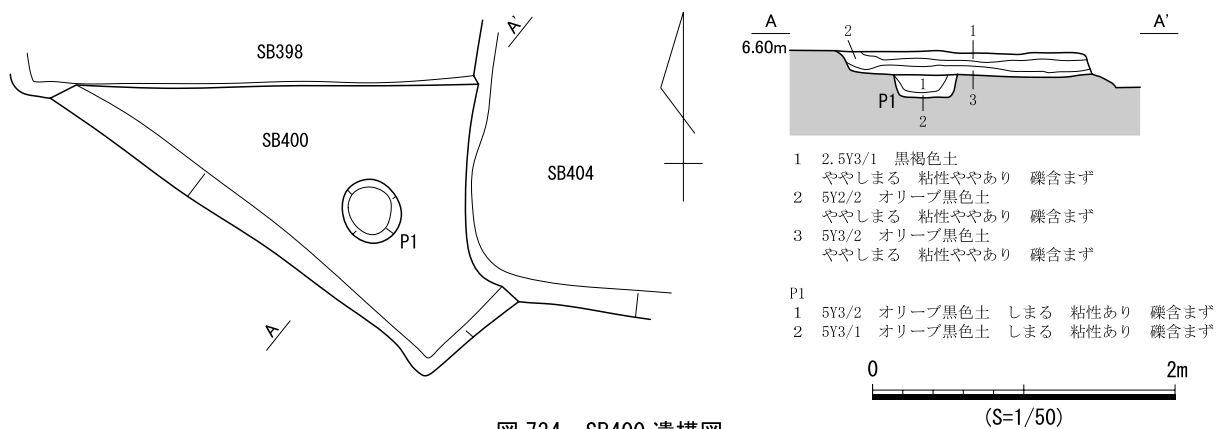


図 734 SB400 遺構図

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて1基の小穴を確認した。P1は底面が平坦で、中央が窪む堆積である。SB398とSB404の床面で検出した遺構も含めて柱穴を検討したが、その推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から土器143点、石器類2点、小穴から土器7点が出土した。土器は摩耗したVI期～VII期のものが多く、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期と、VII期SB398に切られVII期SB404に切られることから、VII期と考えられる。

SB401 (遺構：図735)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB398～SB400、SB404、SB438に切られており、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。周囲の竪穴住居跡との重複により、南西側の一部を検出したのみである。

形状 規模は不明であり、確認した南西辺は直線的である。壁面の高さは約0.2mで、壁面はほぼ直立する。

埋土 3層に分層した。1層は再掘削後の堆積であり、2層と3層は水平堆積である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて1基の小穴を確認した。P1は底面が平坦で、埋土は3層に分層できた。重複する竪穴住居跡の床面で検出した小穴を含めて柱穴配置を検討したが、その推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から土器137点が出土した。土器の大半は摩耗した小片であり、図示していない。

時期 VII期のSB438に切られることから、VII期以前と考えられる。

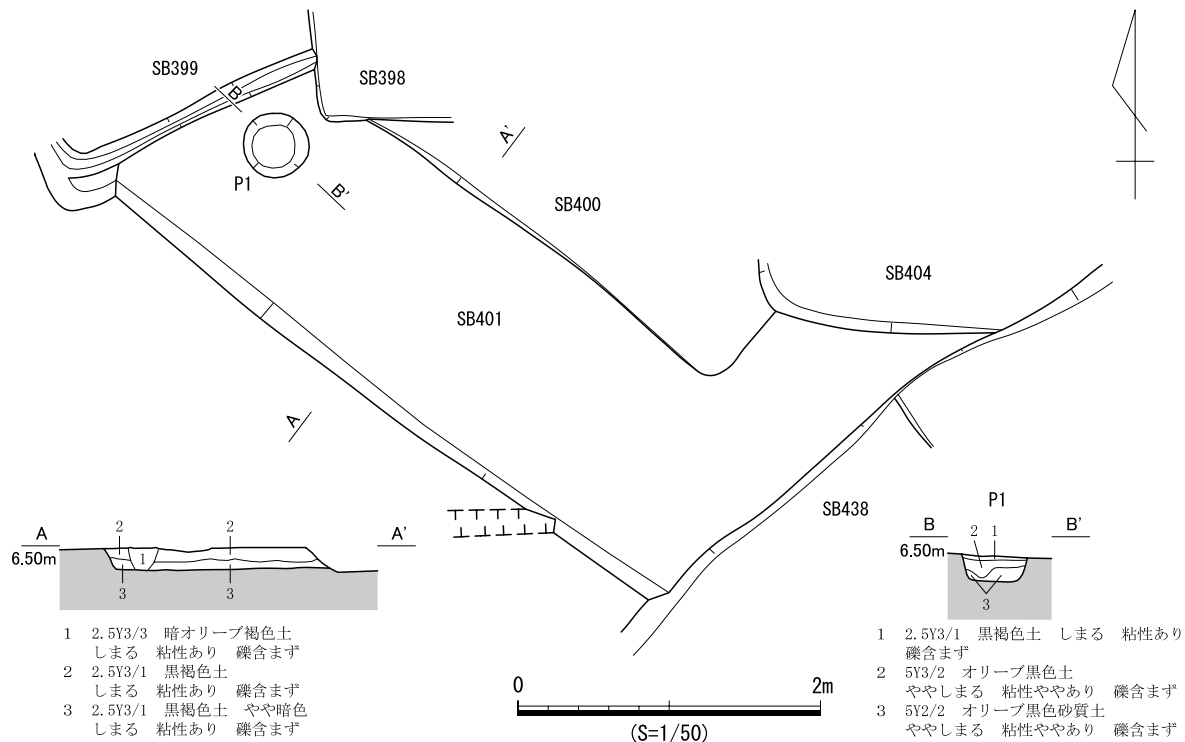


図735 SB401 遺構図

SB402 (遺構：図 736・737、遺物：図 738)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB404、SB425、SB428、SB438を切り、周辺の重複する竪穴住居跡なかでは最も後出する。

形状 南北長約4.8m、東西長約4.9mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的であり、壁面は

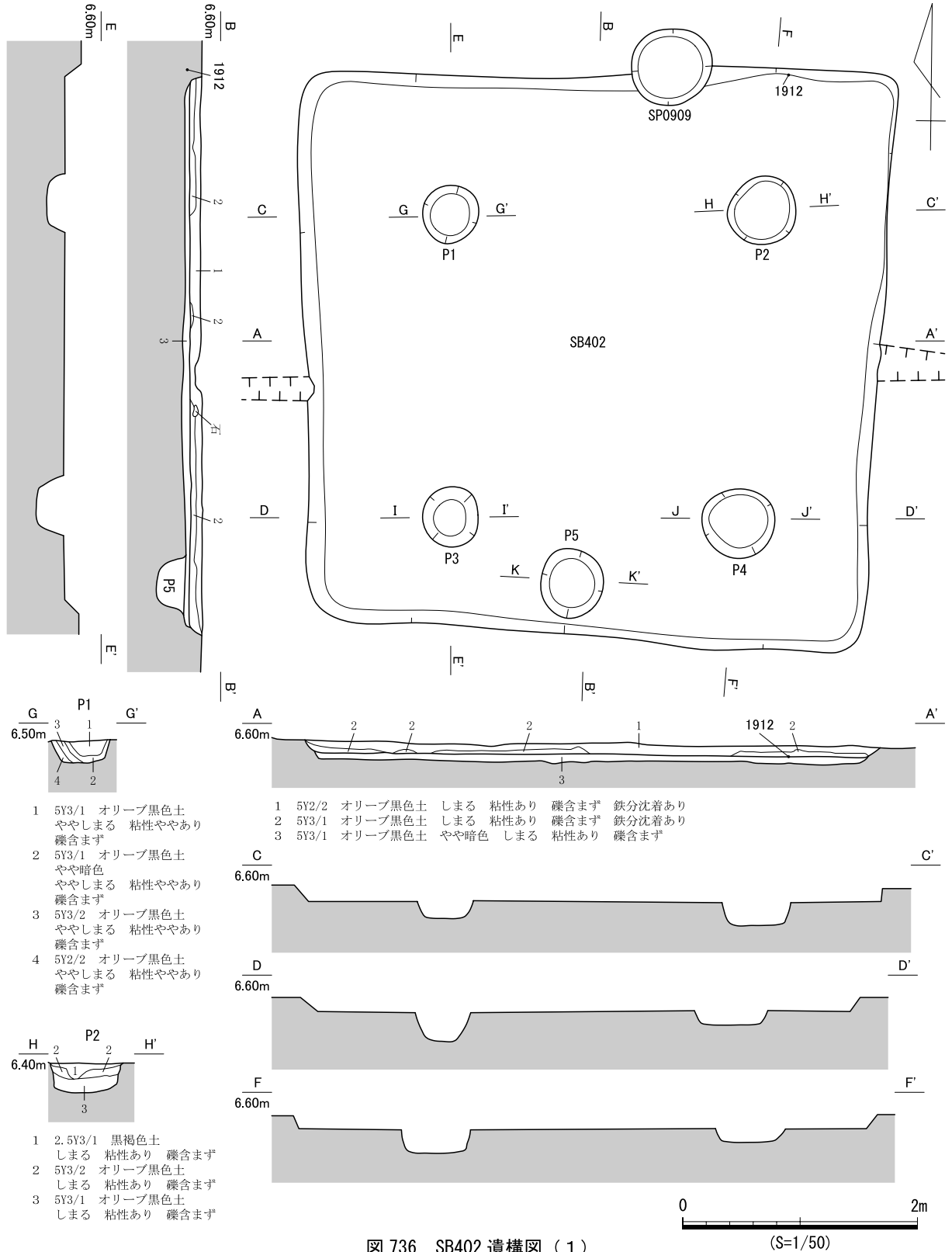


図 736 SB402 遺構図 (1)

高さ約0.2mで、その傾斜はやや急である。

埋土 3層に分層した。床面までは2層に分層し、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。3層は掘形埋土であり、その上面が床面である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴（P1～P4）を確認し、平面的な位置関係からいずれも柱穴と考えられる。その埋土は3層～4層に分層できるが、柱痕跡は確認できなかった。

掘形 埋土は単層で、底面はやや凹凸がある。底面にて柱痕跡のある1基の小穴（P5）を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器1,404点、石器類8点、小穴から土器89点、石器類1点が出土した。土器の多くはVI期～VII期で、I期とIV期の土器片がわずかに含まれる。P2からはV期高坏(1910)が、P5からVII期甕(1908)、VI期器台(1911)が出土した。

出土遺物 1908はVII期D2b類。1909はVII期甕E類脚部。脚裾部がわずかに内湾する。1910はV期高坏I類脚部。直線文が認められる。1911はVI期器台B1類。内外面に円環状に煤が付着する。1912はI期壺。口縁部が短く外反し、口頸部の境に削り出しの段が認められる。1913はI期甕。口縁部が短く弱く外反し、キザミが認められる。頸部直下には2条の太い沈線が認められる。1914は被熱礫。三角柱状の形態で、各辺は丸みを帯びている。そのうち一面が炭化し、他の面は被熱のため褐色を呈する。1915は磨製石斧。両側縁がほぼ平行し、刃部を研磨により作出している。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB404を切ることから、VII期と考えられる。

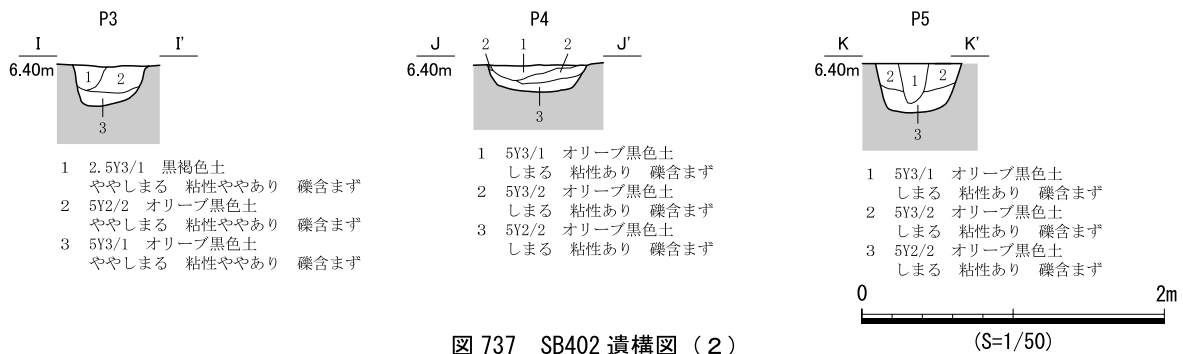


図 737 SB402 遺構図 (2)

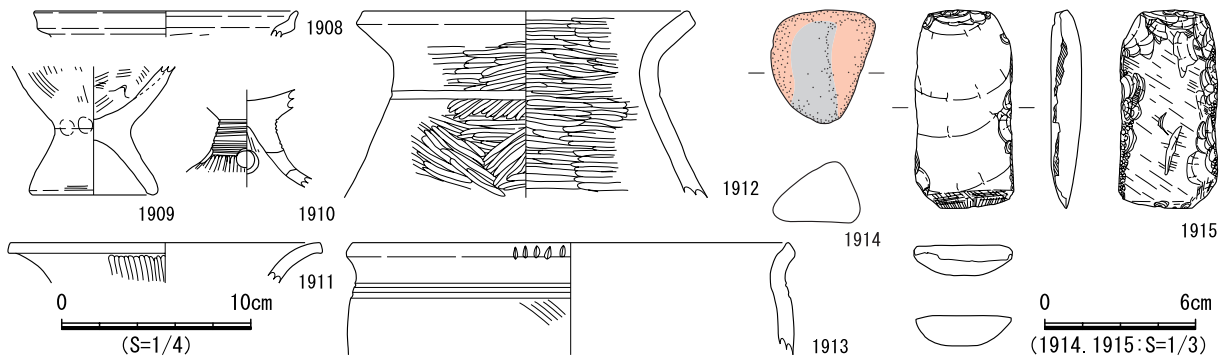


図 738 SB402 遺物実測図

SB403 (遺構：図 739・741、遺物：図 740)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB405、SB407、SB409を切り、重複する竪穴住居跡のなかで最も後出する。

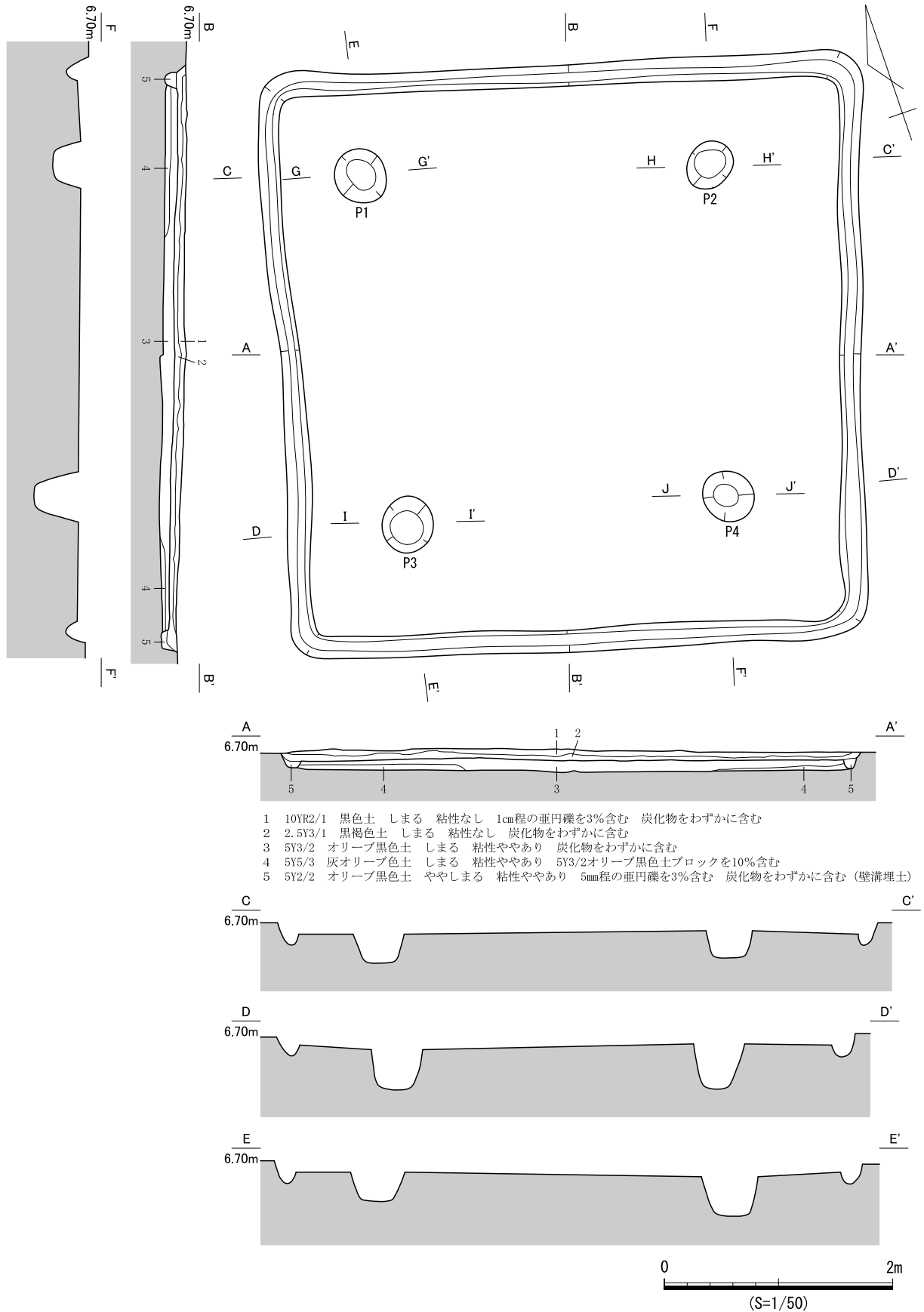


図 739 SB403 遺構図 (1)

形状 南北長約5.2m、東西長約5.1mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも直線的であり、壁面は高さ約0.1mで、その傾斜は比較的急である。

埋土 4層に分層した。床面までは2層に分層し、炭化物を含む。層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。3・4層は掘形埋土であり、3層上面が床面である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴（P1～P4）を確認し、平面的な位置関係からいずれも柱穴と考えられる。その埋土は3層～4層に分層でき、P1とP4で柱痕跡を確認した。なお、幅約0.2mの壁溝が壁面に沿って全周する。

遺物出土状況 埋土中から土器4,141点、石器類1点、小穴から土器100点、壁溝から土器281点が出土した。大半がVI期～VII期の土器片であり、I期やIV期の土器片をわずかに含む。

出土遺物 1916はVII期甕D2b類。口縁部が短く屈曲する。1917はVII期高坏H2類。細い沈線によって、4条の多条沈線の下に連弧文、2条の多条沈線を交互に施文する。



図 740 SB403 遺物実測図

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

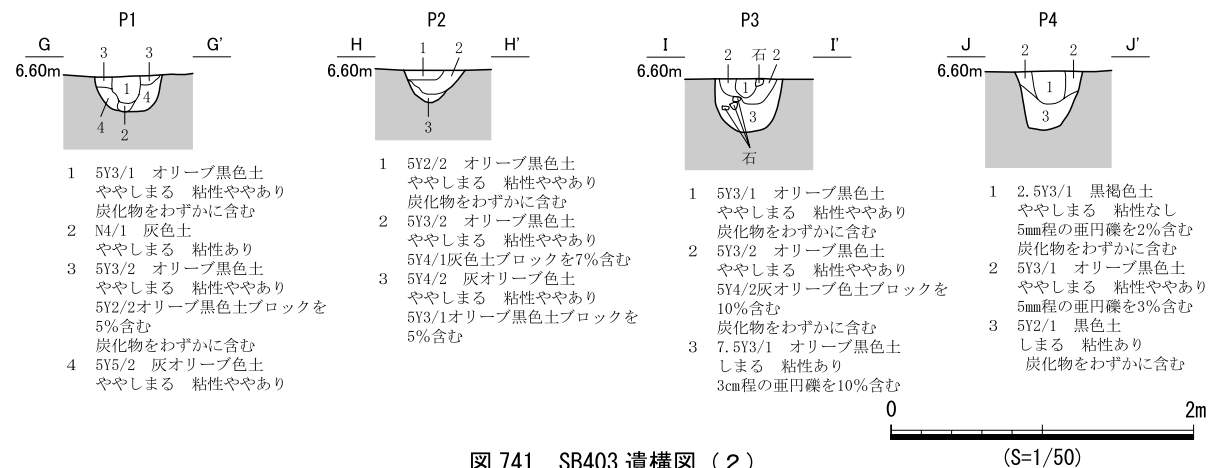


図 741 SB403 遺構図（2）

SB404（遺構：図742、遺物：図743）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB402に切られ、SB398とSB438を切る。

形状 南北長約6.9m、東西長約6.4mで、平面形は南西隅がやや張り出す長方形を呈する。壁面は高さ約0.2m～0.3mであり、その傾斜は比較的急である。

埋土 5層に分層した。1・2層は再掘削後の埋土である。3・4層はほぼ水平に堆積しているが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認し、P2とP3で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からP3とP4が柱穴と考えられるが、北側では対応する小穴を確認できなかった。なお、中央やや北東寄りの床面上で被熱した石材がまとまって出土したが、周囲やその直下に被熱した箇所は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器4,129点、石器類16点、小穴から土器28点が出土した。土器の多くはVI期～VII期のものであるが、VIII期～IX期の小片も上層からわずかに出土した。また、被熱した石材

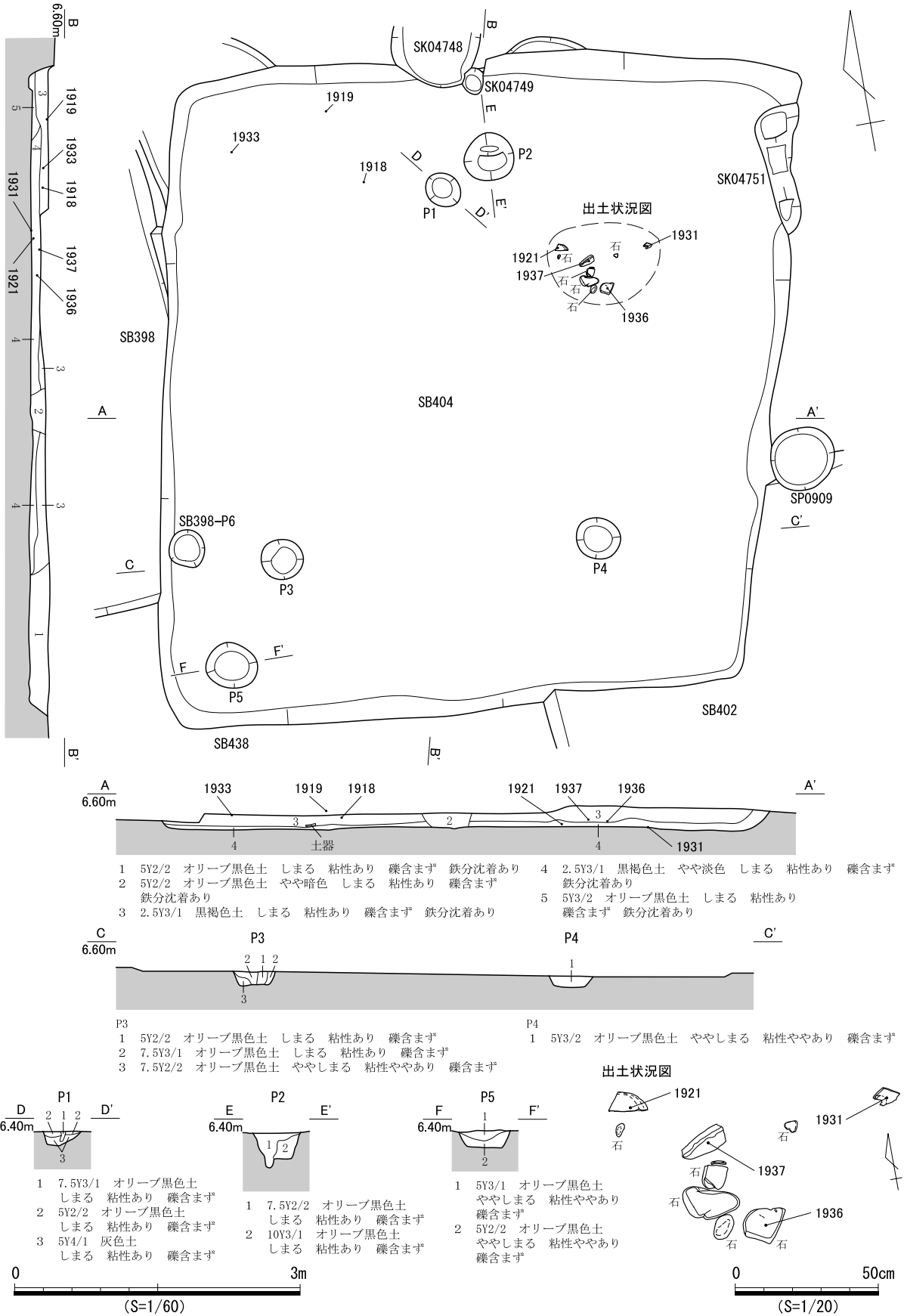


図 742 SB404 遺構図

とともに叩石（1937）と砥石（1936）が出土し、その周囲からⅦ期壺（1921）と高坏（1931）が出土した。

出土遺物 1918はⅤ期壺A1a類。口縁部が強く外反して、端部下端を下方へ拡張して外傾する。摩耗のため、文様が不明瞭である。1919はⅤ期壺A類胴部。直線文と波状文が交互に施文される。1920はⅣ期壺A類の大型品胴部。簾状文が3帯認められ、下段には円形刺突文が重複する。その下にはクシ状工具（2本1組×3）による斜格子文が認められる。1921はⅦ期壺A類胴部。赤彩が認められる。1922、1923はⅣ期壺H類胴部。1922は斜位の沈線とその下に連弧状の文様が認められる。1923は斜格子文

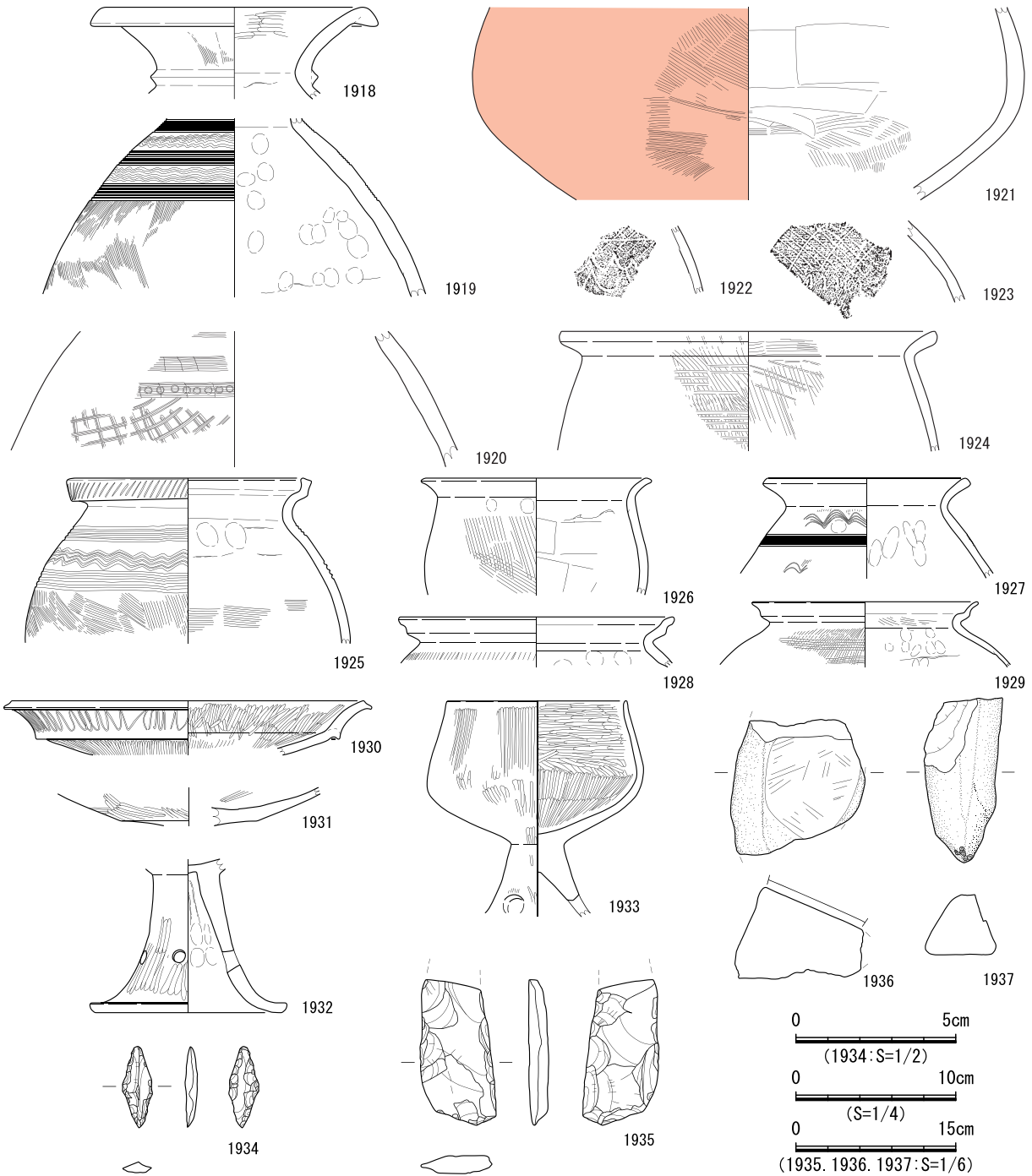


図 743 SB404 遺物実測図

と連弧文が認められる。1924はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈折して、胴部にはハケ目調整後のタタキが認められる。1925はⅤ期甕A2b類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部には凹面を形成する。口縁部に大ぶりの刺突文、頸部直下には、断面の深い直線文の間に波状文を施文する。1926、1927はⅣ期甕A1類。1926は例外的に口縁部が外反して、端部を丸くおさめる。胴部にわずかにタタキが認められる。1927は口縁部が短く屈曲して、端部が平坦である。胴部には波状文と直線文が認められる。1928はⅧ期甕D3類。口縁部が屈曲するが、内面の屈曲が弱い。1929はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲して、上段が外反する。1930はⅤ期高坏B2b類。口縁部が短く外反し、端部下端をわずかに拡張する凹面を形成する。外面にはミガキによる暗文状の波状文が認められる。1931はⅦ期高坏D類坏部。口縁部が坏底部から大きく開き、内面には段が認められる。1932はⅤ期高坏A類脚部。脚部は付根からゆるやかに外反し、裾部で強く外反する。端部には平坦面を形成する。器面全体が熱を受けて磨耗が進み、裾端部内外面に円環状の煤が付着する。1933は遺存状況のよいⅥ期高坏12類。口縁部が内湾し、端部がわずかに直立する。脚部は坏部からすぐ外反する。1934は有茎石鏃。横長剥片を素材とする有茎鏃である。1935は刃器。素材となる横長剥片の縁辺に連続する剥離を施す。1936は砥石。円礫の一面を砥面に使用している。1937は叩石。下端に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB398を切りⅦ期のSB402に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

SB405（遺構：図745、遺物：図744）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB403に切られ、SB407とSB409を切る。

形状 南北長約5.2m、東西長約4.7mで、平面形は長方形である。北辺はやや歪みがあるが、他の三辺は直線的である。隅部は北東部が丸みを持ち、壁面の傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。上下層ともに炭化物を含む。層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認した。いずれも直径約0.3m～0.5mで、P2は柱痕跡が認められる。しかし、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器2,638点、石器類1点、小穴から土器29点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物 1938はⅤ期～Ⅵ期高坏I2類。口縁部がわずかに直立して、波状文が認められる。1939はRF。背面に自然面が残り、腹面右側縁に細かい剥離が観察できる。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB403に切られⅦ期のSB407を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

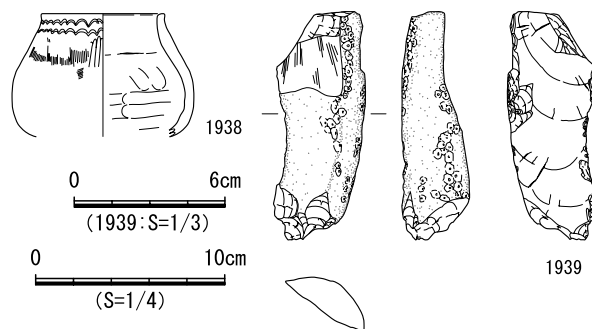


図744 SB405 遺物実測図

SB406（遺構：図746、遺物：図747）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB399、SB403、SB405に切られ、SB409を切る。重複する竪穴住居跡により、住居の南西隅部付近を確認したのみである。

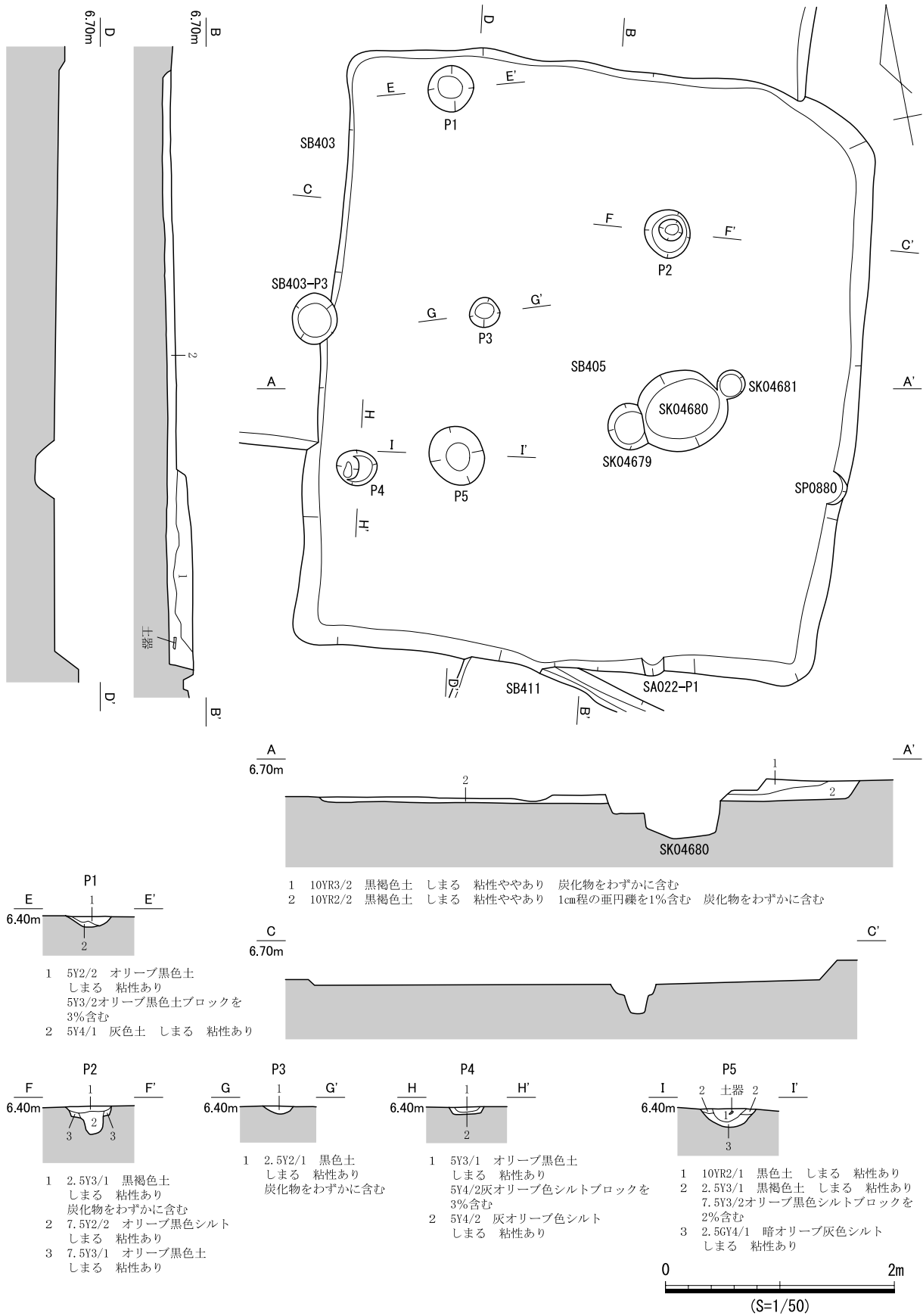


図 745 SB405 遺構図

形状 規模は不明であり、確認した東辺と南辺が直線的でほぼ直角に曲がっていることから、平面形は方形と考えられる。壁面の高さは遺存状況のよい箇所ですら約0.2mあり、その傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面で2基の小穴を確認したが、いずれも単層であり、底面は平坦である。重複する竪穴住居跡の床面の小穴を含めて柱穴配置を検討したが、その推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から土器458点、石器類1点、小穴から土器8点が出土した。大半がVI期～VII期のもので、わずかにIV期の土器片が含まれる。

出土遺物 1940はIV期壺C類。口縁部が強く外反する。口縁端部をわずかに上下に拡張させて、波状文を施文する。内面には羽状文と瘤状突起が認められる。1941はVII期壺C類。口縁部がわずかに外反して立ち上がる。1942はIV期甕A2類。大型品で口縁部がくの字に屈折する。端部にはタタキが認められ、胴部はタタキの後、ハケ目が施される。

時期 出土遺物の時期とVII期の竪穴住居跡群に切られることから、VII期と考えられる。

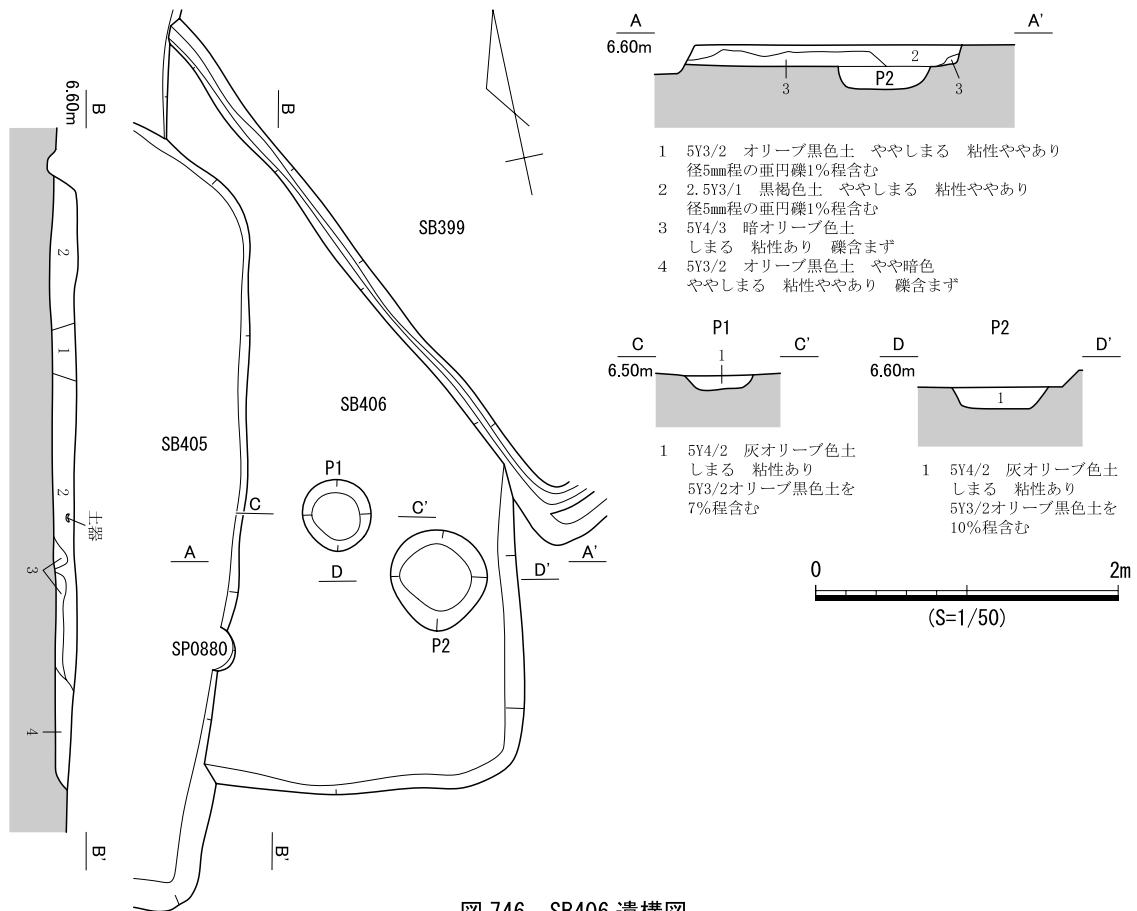


図 746 SB406 遺構図

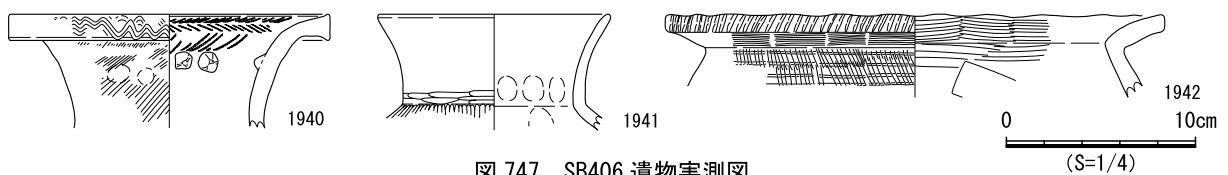


図 747 SB406 遺物実測図

SB407 (遺構：図748・750、遺物：図749)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB403、SB405、SB411、SB413に切られ、SB412を切る。

形状 南北長約6.1mで、確認できた北辺、西辺、南辺はいずれも直線的である。隅部が直角気味に

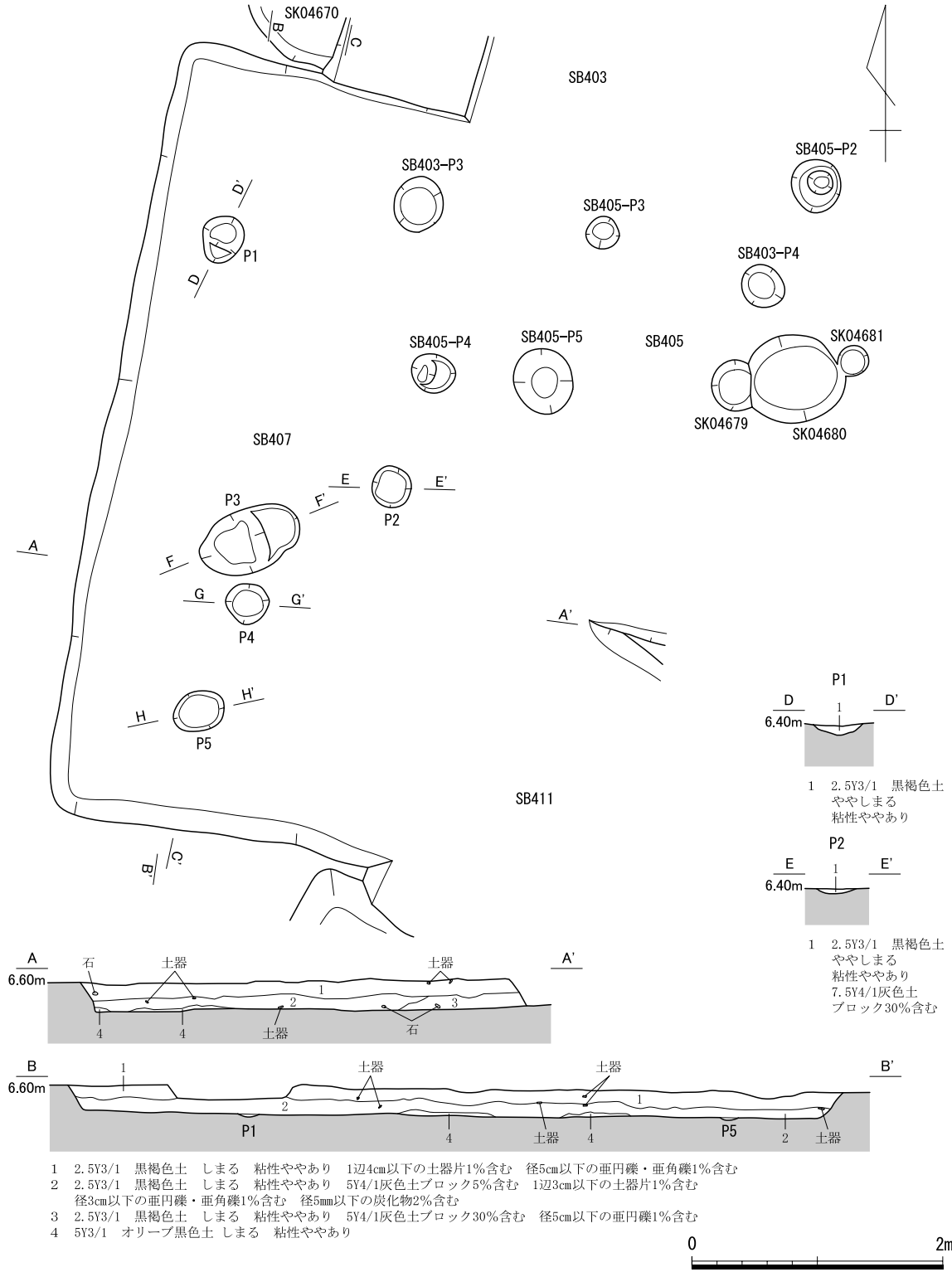


図748 SB407 遺構図(1)

曲がることから、平面形は方形と考えられる。壁高は約0.2m～0.3mあり、その傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。ブロック土の混入が多く層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面で5基の小穴を確認し、P3を除く小穴は浅く、底面が丸みを帯びている。P3の底面は西側が一段凹み、その堆積は柱痕跡状の堆積であるが、柱穴配置の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,734点、小穴から土器25点が出土した。土器の大半はⅦ期であり、わずかにⅣ期の土器片が含まれる。

出土遺物 1943はⅥ期甕D1b類。口縁部が短く屈曲し、上端が直立してから強く外方へ屈曲する。端部はわずかな凹面を形成し、外面に刺突文が認められる。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期の竪穴住居跡群に切られⅦ期のSB412を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

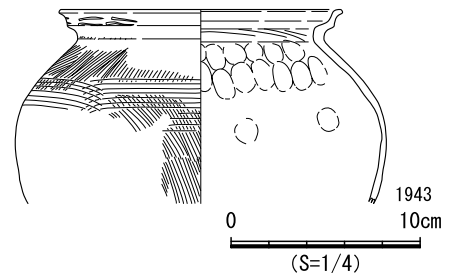


図 749 SB407 遺物実測図

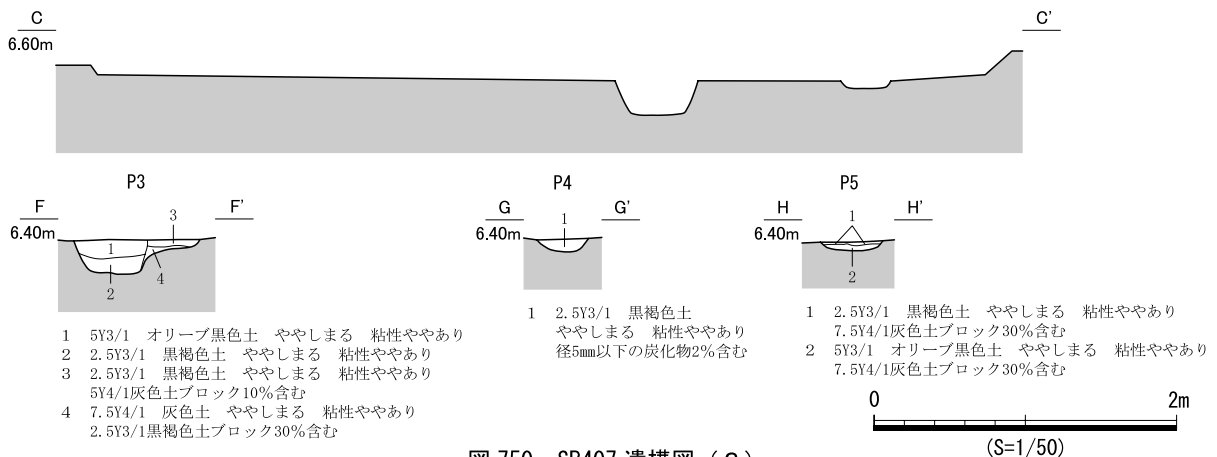


図 750 SB407 遺構図 (2)

SB408 (遺構：図 751・753、遺物：図 752)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係が著しく、SB359、SB360、SB397、SB399、SB403に切られ、SB409を切る。

形状 東西長約6.0mで、南側の平面形は不明であるが、およそ方形を呈すると考えられる。壁面は大半が遺存していないが、西壁の傾斜は比較的急であった。

埋土 2層に分層し、炭化物がわずかに混入する。埋土中にブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認した。P7を除く小穴は直径約0.5mで、P1、P4、P5では柱痕跡を確認した。P3は中央が窪む堆積であるが、平面的な位置からP1とP3が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器878点、小穴から土器39点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、二次的に被熱した土器も出土した。

出土遺物 1944はⅦ期壺C類。口縁部がわずかに外反しながら、直立する。1945はⅦ期高坏B類。

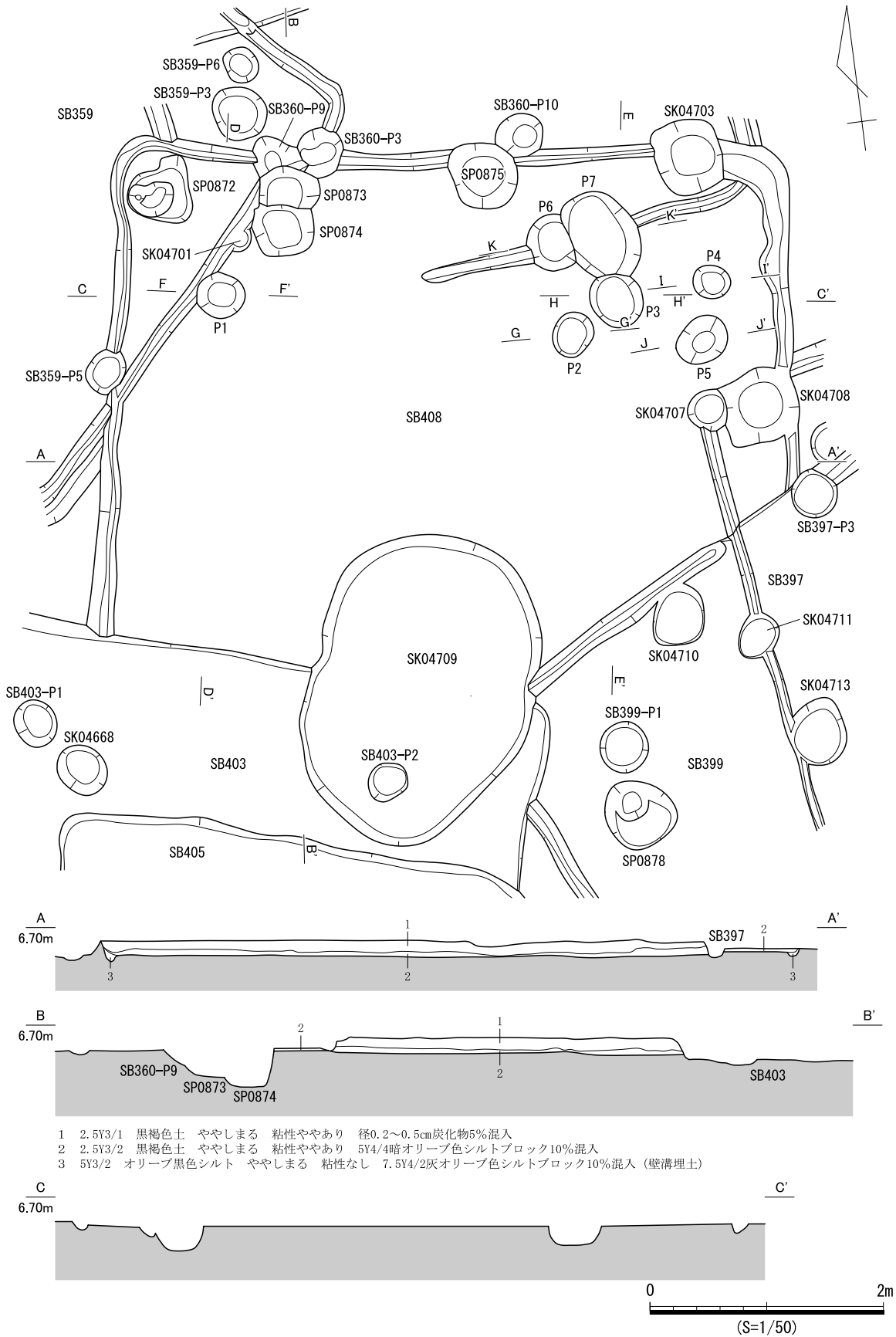


図 751 SB408 遺構図 (1)

坏底部の一部で、両側からの回転穿孔が認められる。

時期 出土遺物の時期とⅦ期の竪穴住居跡群に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

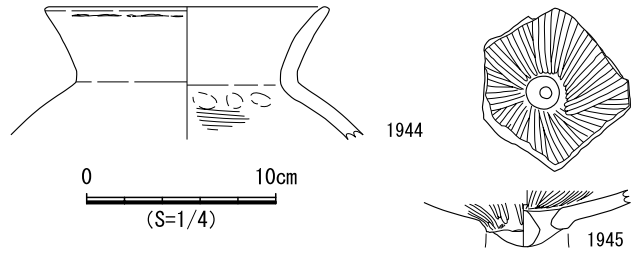


図 752 SB408 遺物実測図

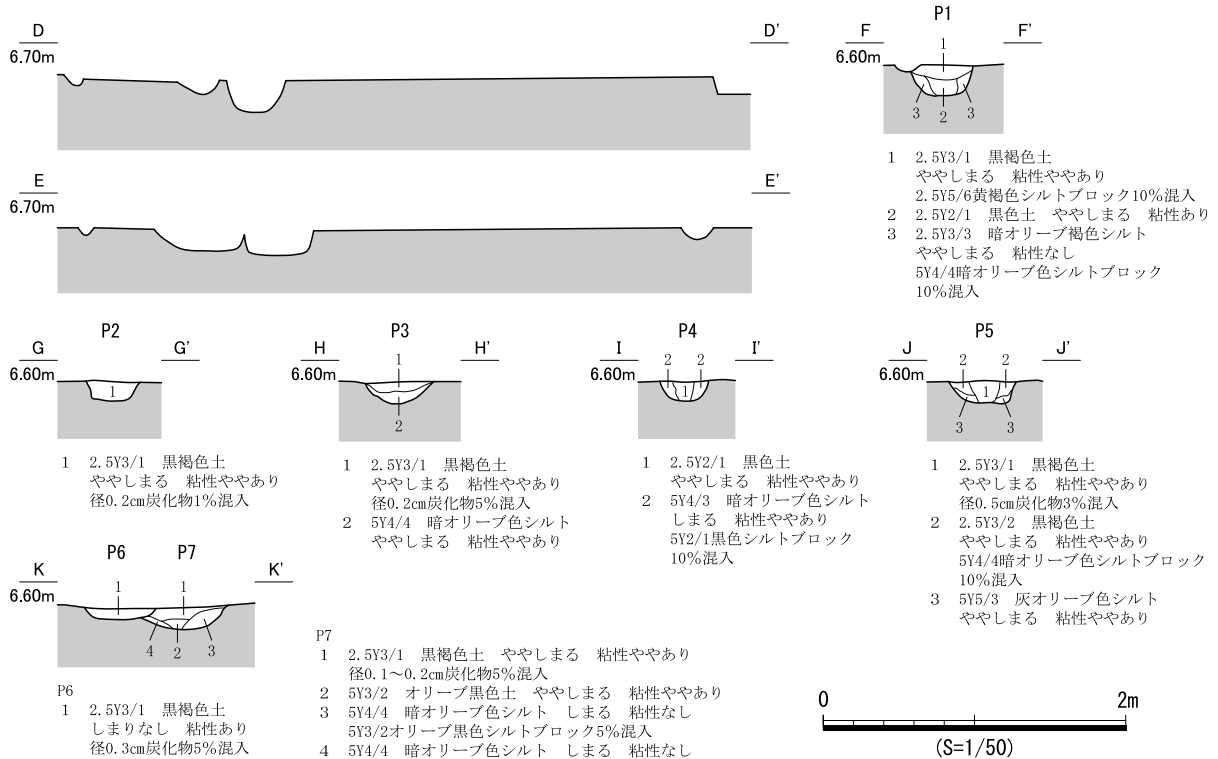


図 753 SB408 遺構図 (2)

SB409 (遺構：図 754・756、遺物：図 755)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB399、SB403、SB405～SB408に切られ、重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。

形状 南北長約5.4m、東西長約5.2mで、平面形は隅丸方形である。各辺とも比較的直線的だが、南西隅がやや外側に張り出す。隅部は北東隅部と南東隅部が直角気味で、北西隅部と南西隅部がやや丸みをもつ。壁高は約0.1m～0.2mであり、その傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認し、柱痕跡は認められなかったがP1～P4が平面的な位置関係から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器643点、小穴から土器18点が出土した。土器は大半がⅥ期～Ⅶ期に属する。なお、P1からⅠ期の甕(1946、1947)が出土した。

出土遺物 1946、1947はⅠ期甕口縁部。1946は口縁部が短く外反し、端部は平坦である。頸部に削り出しの段が認められる。1947は口縁部が短く外反し、端部は丸みをもちキザミが認められる。頸部に

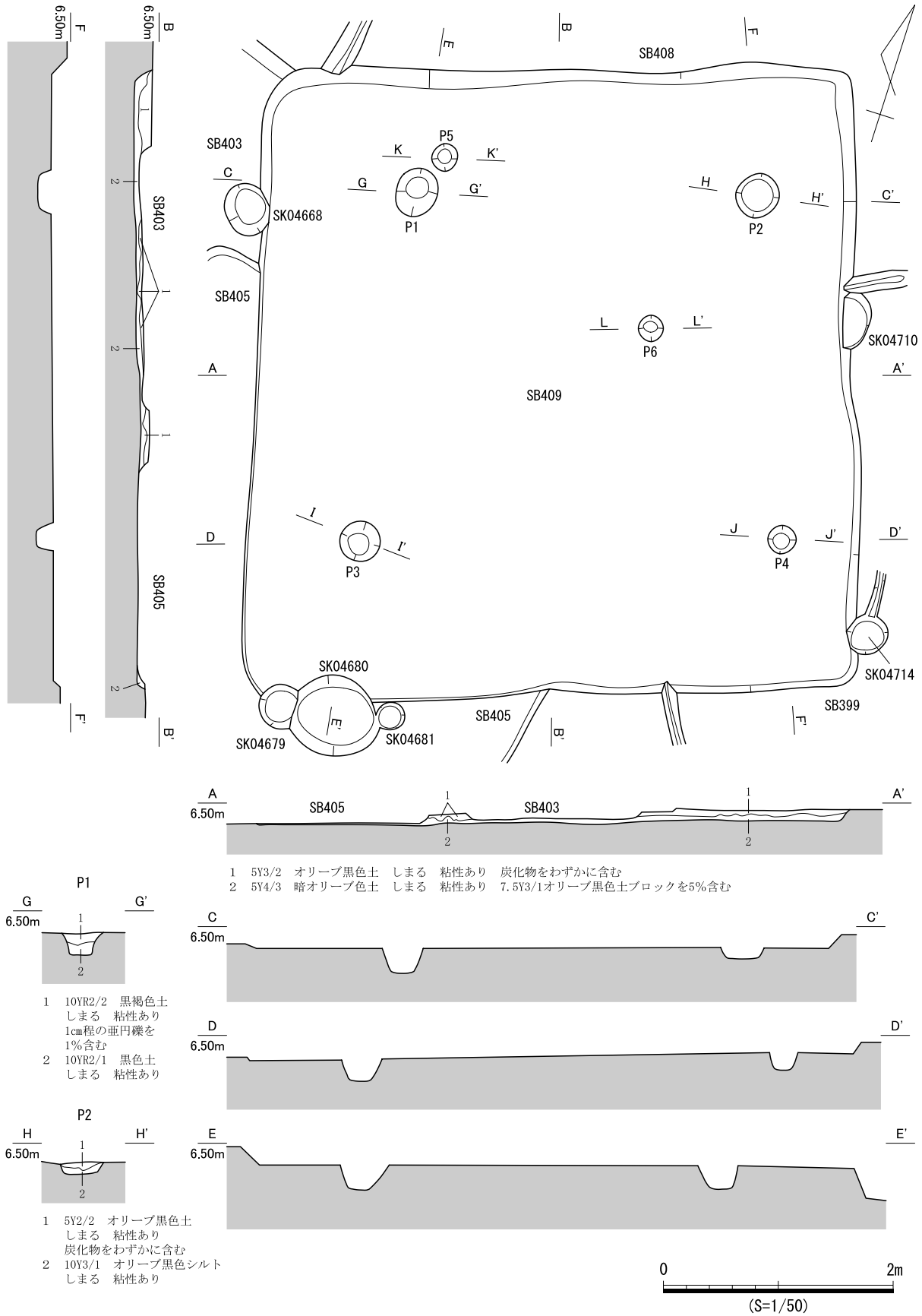


図 754 SB409 遺構図 (1)

は1本の沈線が施文され、沈線以下には細かなハケ目が認められる。

時期 出土遺物の時期とⅦ期の竪穴住居跡群に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

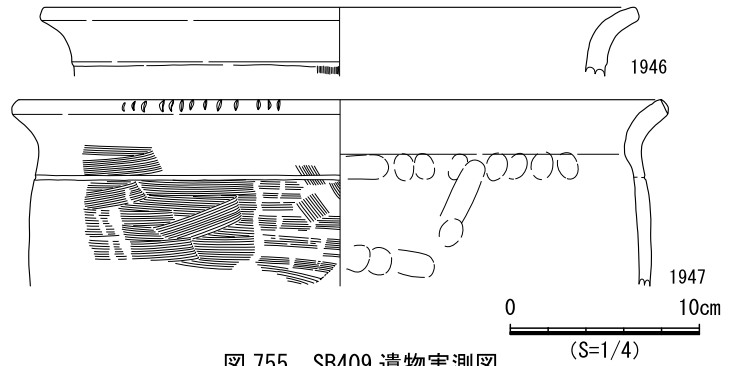


図 755 SB409 遺物実測図

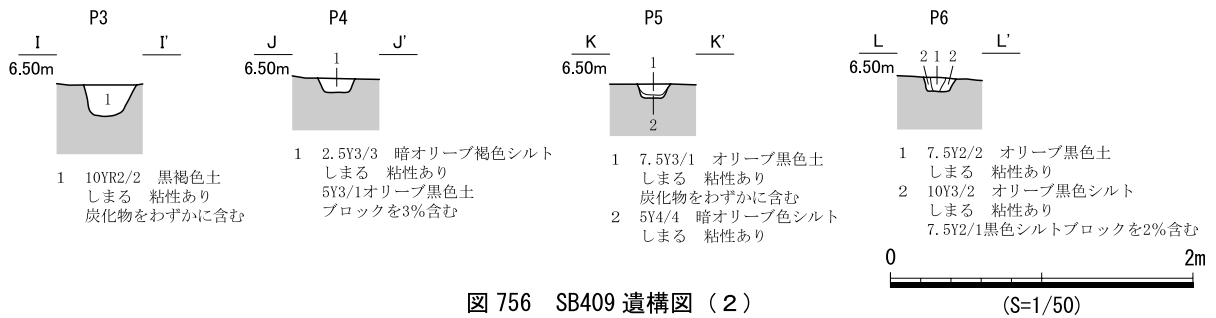


図 756 SB409 遺構図 (2)

SB410 (遺構：図 758、遺物：図 757)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB411に切られ、SB415～SB418、SB420を切る。北西側はSB411により大きく削平されている。

形状 南北長約4.7m、東西長約4.6mであり、不整形を呈する。隅部は丸みを帯び、壁面は高さ0.1mに満たないほど浅い。

埋土 単層であるが、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴を5基確認した。そのうちP1～P4は柱痕跡を確認できなかったが、平面的な位置から柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,990点、小穴から土器40点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のもので、特にⅦ期のもが目立つ。

出土遺物 1948はⅦ期壺A3類。口縁部内面に羽状文を施文する。胴部には直線文と山形文が認められる。1949はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾し、上半に多条沈線と山形文で施文する。1950はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲して、上段が直立してから強く外反し平坦面が認められる。1951はⅦ期～Ⅷ期

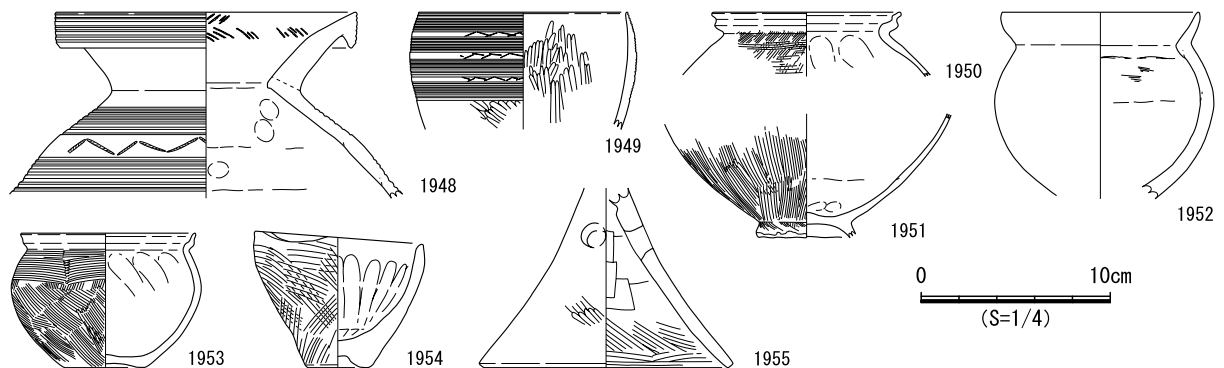


図 757 SB410 遺物実測図

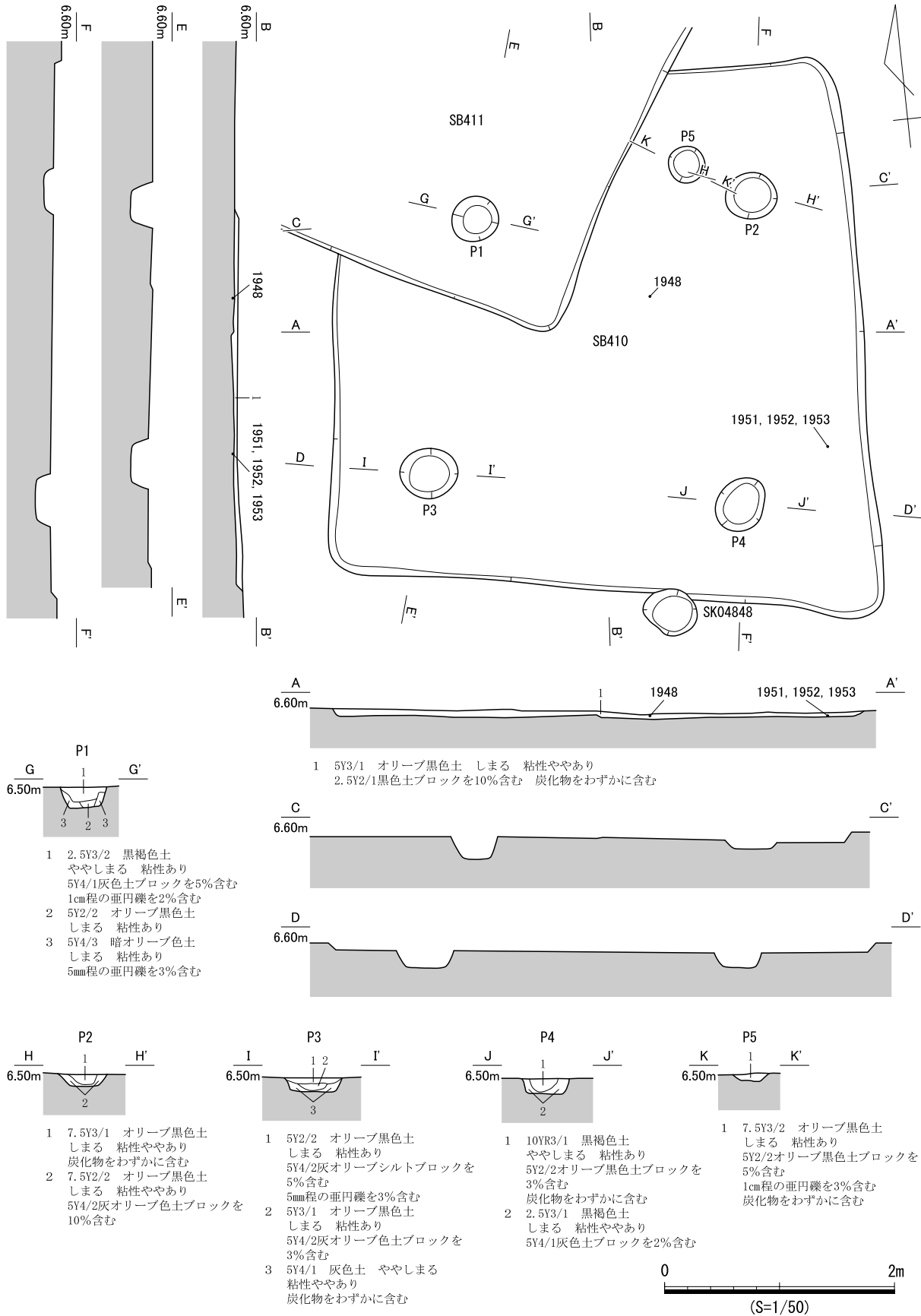


図 758 SB410 遺構図

の甕D類脚部。脚部を揃えるような打ち欠きが認められる。1952はⅦ期甕E5類。口縁部が短く内湾する。1953はⅦ期鉢H類。口縁部が短く屈曲する。脚部がないため、鉢としたがそれ以外は甕D2b類と同じである。胴部が強く張り胴部上半にはヨコハケが認められる。1954はⅦ期鉢C類。口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、打ち欠きが認められる。外面に羽状となる粗いハケ目が認められる。1955はⅦ期高坏D類脚部。脚部がわずかに外反して開く。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB411に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

SB411 (遺構：図760、遺物：図759)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB405、SB407、SB410、SB412、SB416、SB417、SB420を切り、重複する竪穴住居跡のなかで最も後出する。北辺から西辺にかけては攪乱によって滅失する。

形状 南北長約4.5m、東西長約4.2mで、平面形は隅丸長方形である。各辺とも直線的だが、東辺のみやや内側に反る。北辺は南辺と軸が揃わず、西へ向かって両辺の距離が広がっており、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 3層に分層した。床面までは単層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。2層上面が床面であり、2・3層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面で5基の小穴を確認し、そのうち平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。しかし、いずれも柱痕跡は認められず、柱間距離が狭い。なお、北壁と西壁に沿って壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器2,004点、小穴から土器100点が出土した。土器はⅥ期～Ⅷ期のもので、特にⅦ期の土器片が多い。P1付近からⅦ期器台の完形品(1956)が出土した。

出土遺物 1956はⅦ期器台C1類。口縁部が直線的に伸びる。端部下端をわずかに拡張して、1条の沈線を加える。脚部はやや外反しながら開く。

1957はⅧ期甕D3類。口縁部が短く屈曲するが、上段の屈曲が弱く、外反するのみである。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

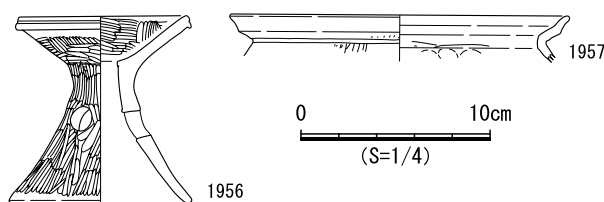


図759 SB411 遺物実測図

SB412 (遺構：図761・763・764、遺物：図762)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB407、SB411、SB416、SB417、SK04803に切られ、SB413を切る。

形状 北東－南西長約6.3m、北西－南東長約5.3mで、平面形は長方形である。南西辺は外側にやや膨らみ、北西辺と南東辺はやや蛇行している。西壁の遺存状況がよく、その傾斜は比較的急である。

埋土 5層に分層した。1～3層が床面上の埋土であり、8・9層が掘形埋土である。1～3層は炭化物を含み、ブロック土の混入が多いことから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床(整地土)があるものの、硬化面は認められなかった。床面上にて6基の小穴を検出し、P1とP2では柱痕跡を確認したが、柱穴配置の推定は困難であった。また、床面中央西

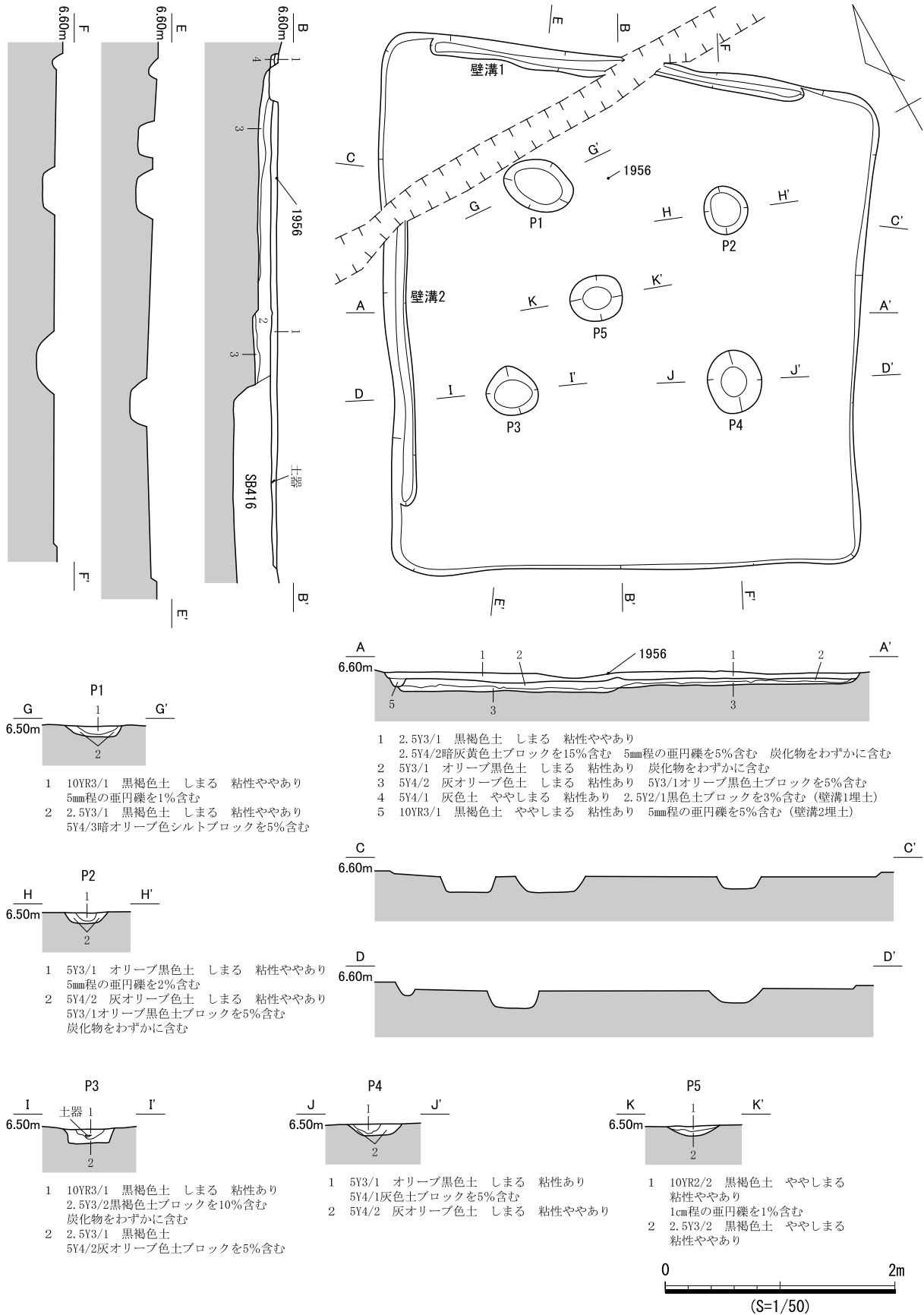


図 760 SB416 遺構図

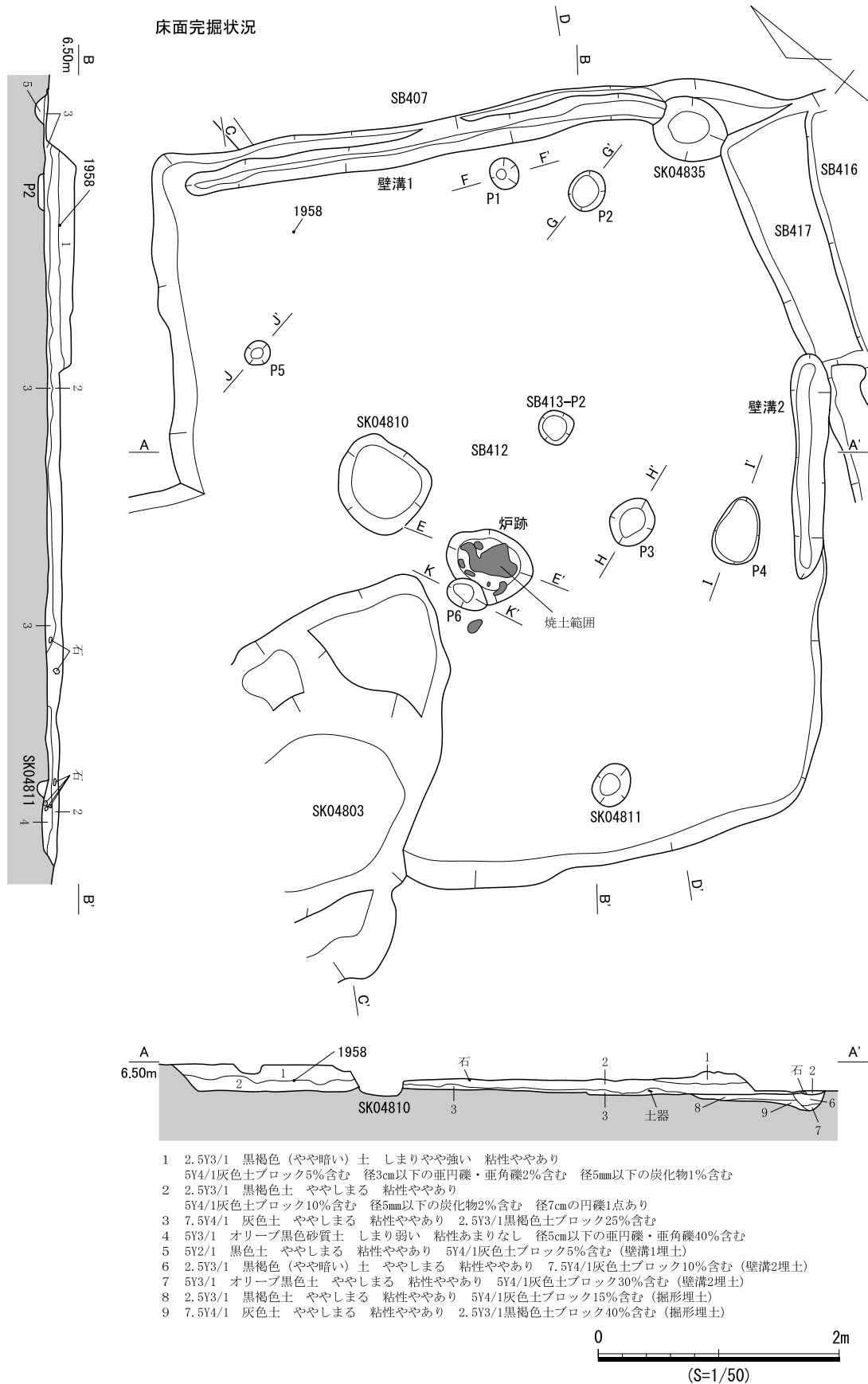


図 761 SB412 遺構図 (1)

寄りでは地床炉を検出した。焼土は長さ約0.5mの範囲内に不整形に広がり、床面からわずかに浮いている。焼土を含む範囲は浅い掘り込みがあり、焼土の周辺には灰色ブロックを含む黒褐色土を確認した。また、その掘り込みに接してP6があり、これは炉石の抜き取り痕の可能性がある。なお、壁溝は北壁と東壁に沿って検出した。

掘形 床面の南東壁沿いにて、長さ約4.9m、幅約1.0mの東西に長い黒褐色土の広がりを確認した。調査の当初は本遺構に伴わない単独遺構と判断していたが、掘削すると北西側から南東側にかけて緩やかに傾斜し、住居の南東辺に沿って立ち上がることを確認できた。そのため、これは他の竪穴住居跡の掘形で検出できる幅広の溝状掘形の残欠と判断した（SB413掘形掘削後に図化したため、図764の重複関係は矛盾している）。

埋土は2層に分層でき、西端が窪む。

遺物出土状況 埋土中から土器1,688点、石器類2点、小穴から土器16点、壁溝から土器52点が出土した。土器の大半はVI期～VII期のもので、特にVII期の土器片が多い。

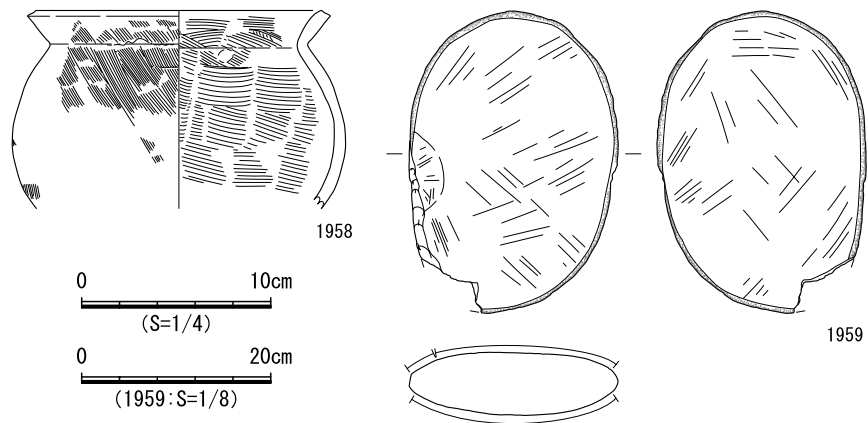


図 762 SB412 遺物実測図

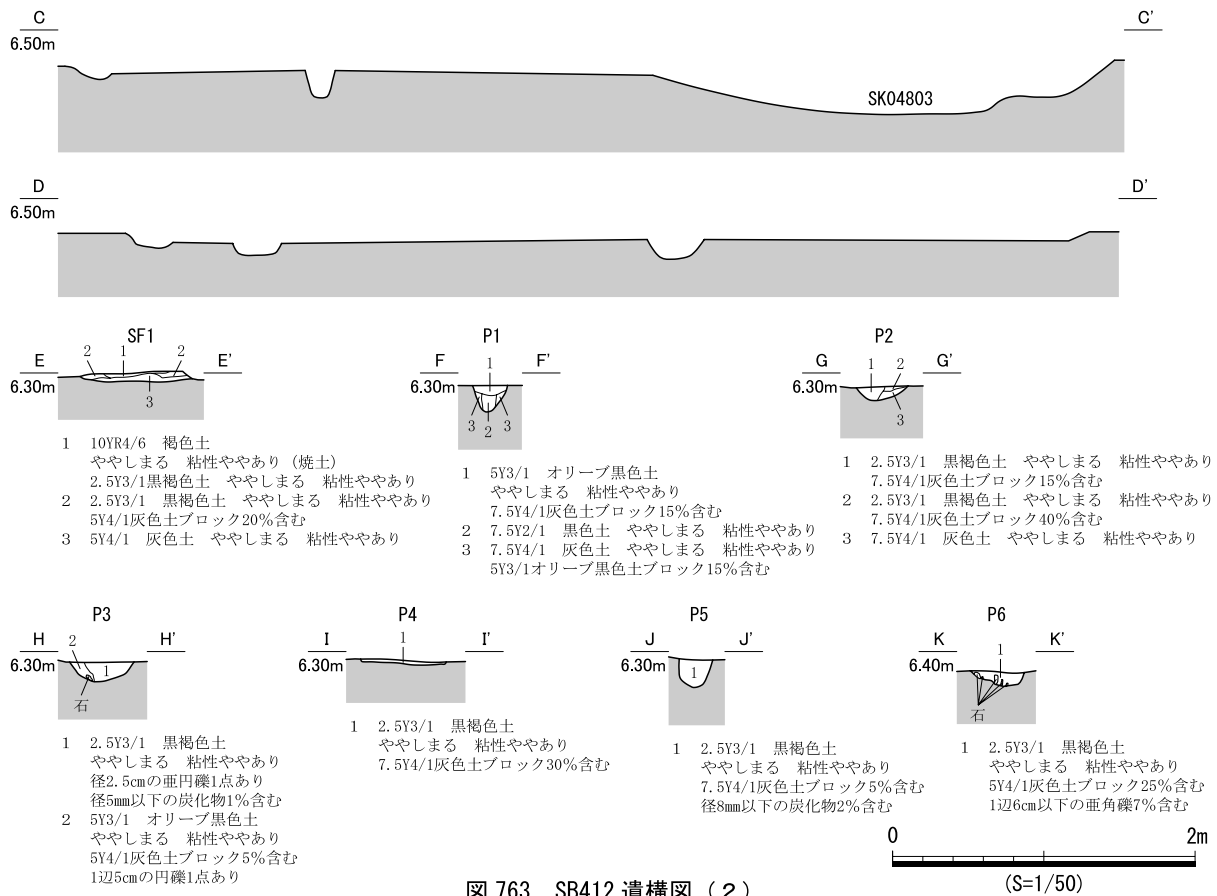


図 763 SB412 遺構図 (2)

出土遺物 1958はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部に断続的な強いナデによる平坦面が認められる。1959は砥石。扁平な円礫を素材とし、その表裏面を砥面として使用している。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB407とSB411に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

掘形完掘状況

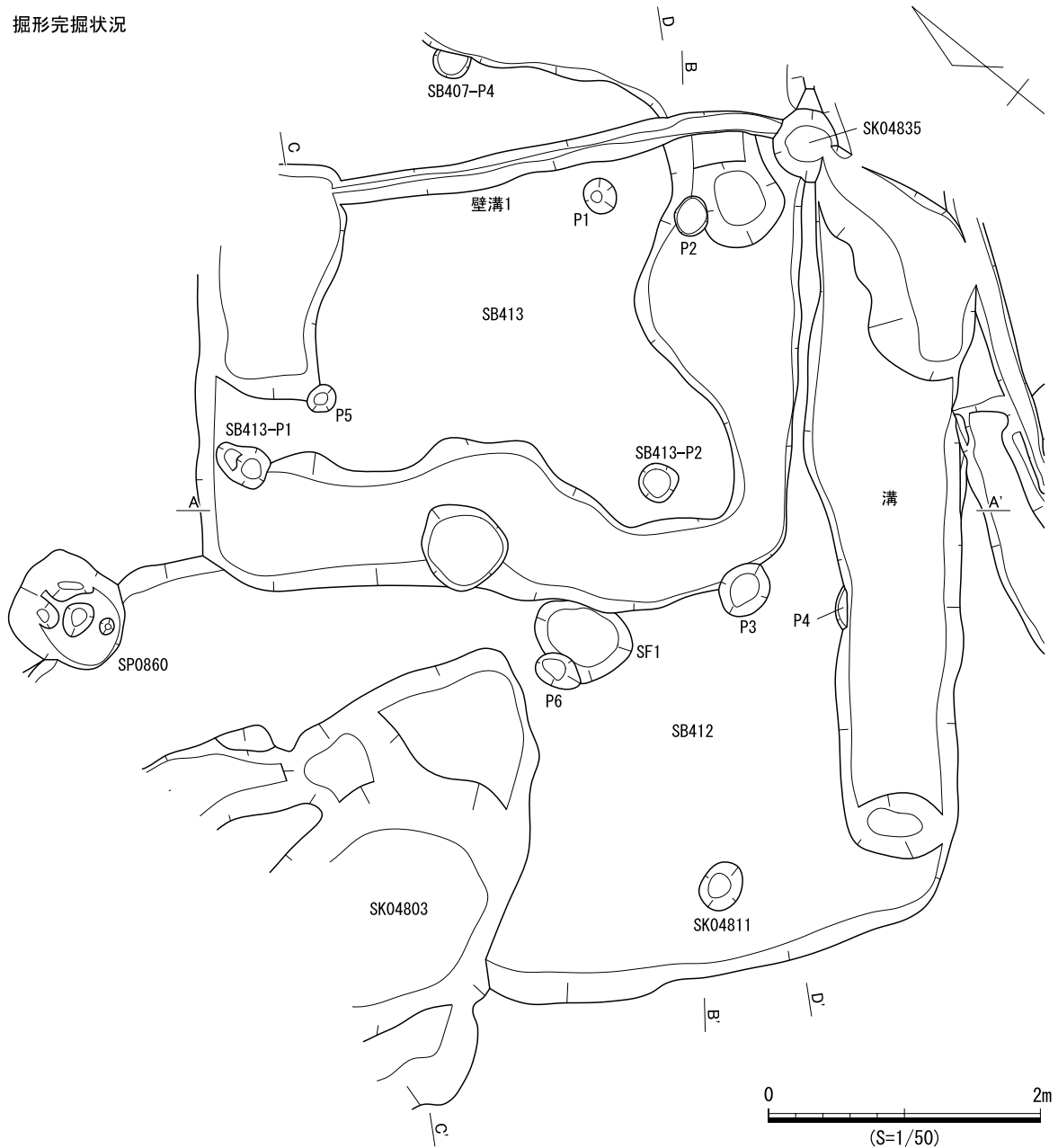


図 764 SB412 遺構図 (3)

SB413 (遺構：図 765・767、遺物：図 766)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB412とSB414に切られ、SB407、SB417を切る。

形状 北西-南東長約4.5m、北東-南西長約5.0mであり、南西辺がやや歪む不整長方形を呈する。北西壁は遺存状況が良く、高さ約0.2mを測る。

埋土 4層に分層した。1～3層は床面上の堆積土であり、4層は掘形埋土である。床面上の堆積土

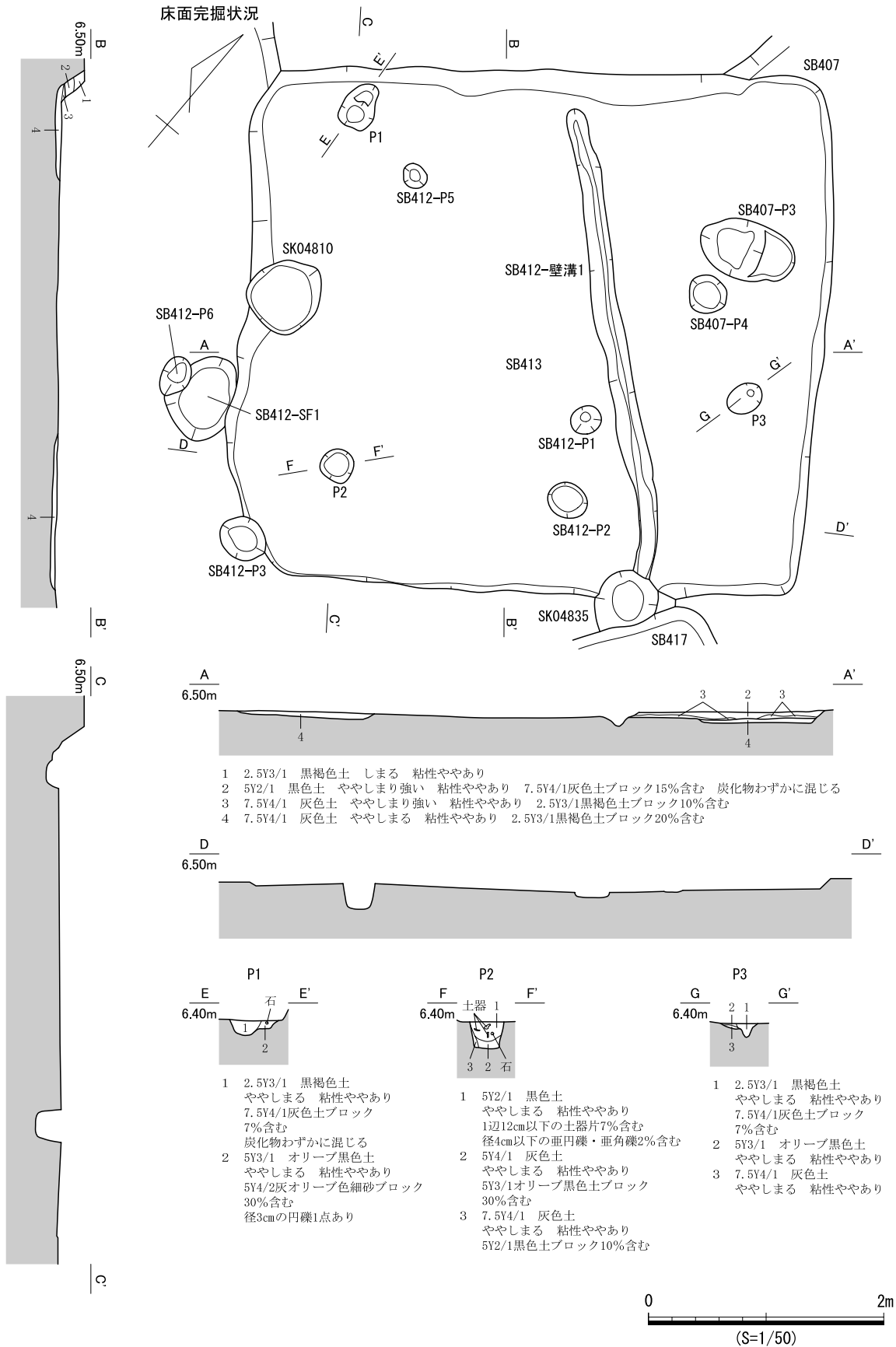


図 765 SB413 遺構図 (1)

にはブロック土が多数混入することから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて3基の小穴を検出し、P2では柱痕跡を確認した。平面的な位置から、P1とP2が柱穴と考えられる。

掘形 南西壁から南東壁、北東壁の中央付近までと北西壁中央付近に、壁面に沿う幅約0.4m～1.0m、深さ約0.05mの浅い溝状の凹みがあり、黒褐色土ブロックを含む灰色土で埋められていた。その内側のラインは蛇行しており、南隅部付近の幅が狭い。

遺物出土状況 埋土中から土器375点、小穴から土器29点が出土した。土器はVI期～VII期のものが多く、P2からVII期甕（1960、1961）が出土した。

出土遺物 1960はVII期甕D2類。口縁部がわずかに屈曲する。1961はVII期甕D2類脚部。1960の同一個体の可能性がある。

時期 出土遺物の時期とVII期SB412に切られることから、VII期と考えられる。

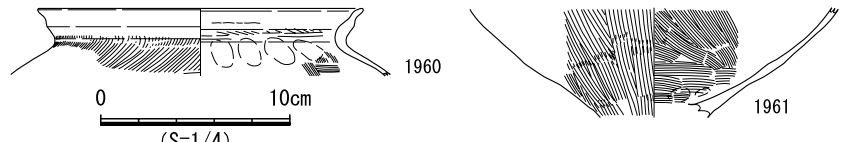


図 766 SB413 遺物実測図

掘形完掘状況

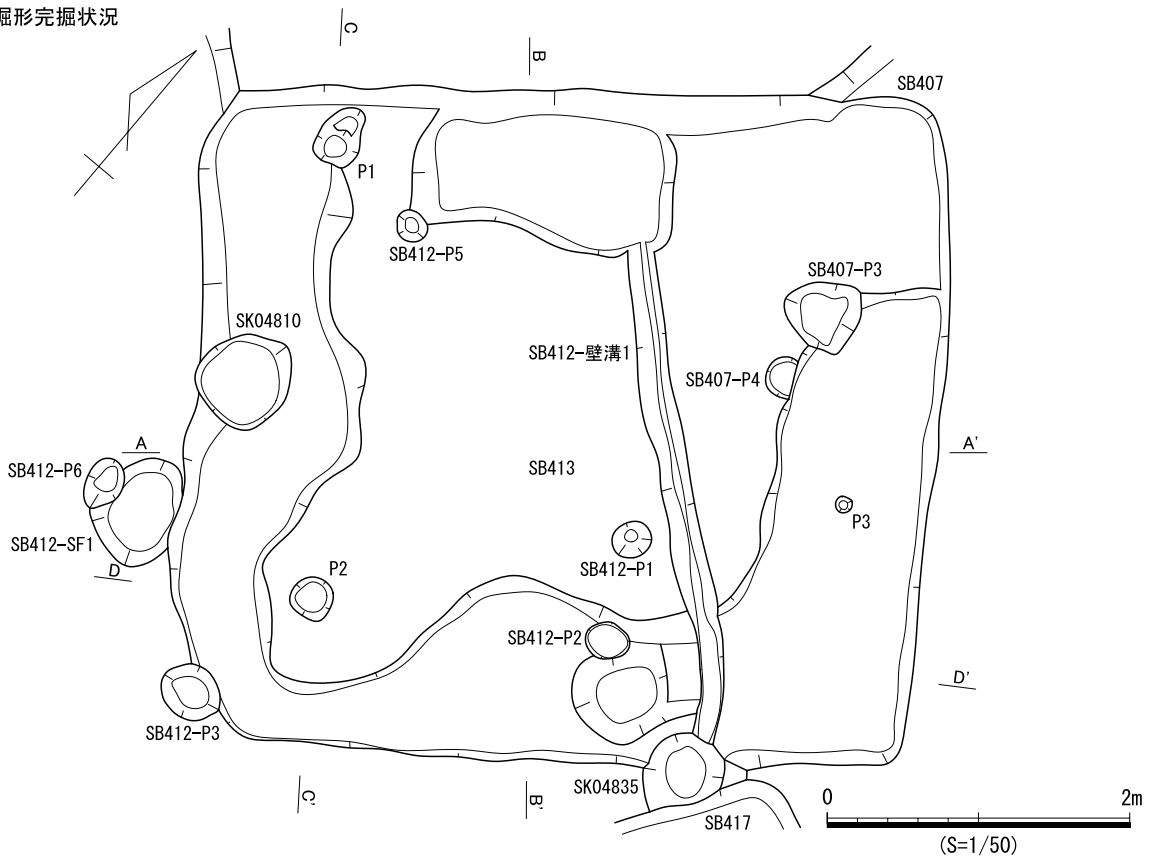


図 767 SB413 遺構図（2）

SB414（遺構：図768）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB412とSB413を切る。重複する周囲の遺構によって平面形の大半が失われ、北壁と北壁沿いの壁溝を確認したのみである。また、検出面ですでに床面がみえており、床面までの埋土は確認できなかった。

形状 東西長約3.0mであり、周辺の竪穴住居跡のなかでは小型である。平面形は隅丸方形と考えら

れ、確認できた壁面の高さは約0.2mで、その傾斜は緩やかである。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上で小穴は検出できず、北辺に沿う幅約0.2mの壁溝を検出したのみである。

掘形 埋土は単層であり、ブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から土器1点、壁溝から土器8点が出土した。土器はⅨ期の甕D類の小片である。

時期 出土遺物の時期から、Ⅸ期と考えられる。

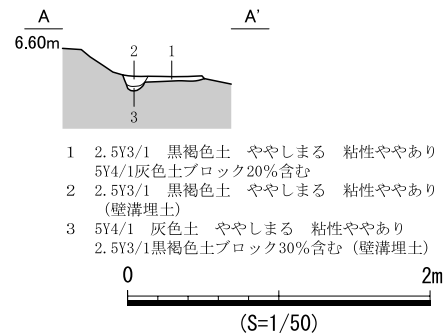
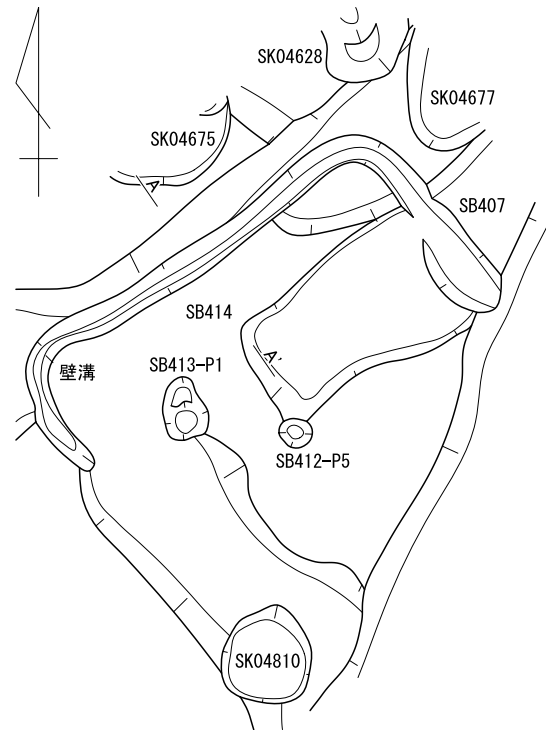


図 768 SB414 遺構図

SB415 (遺構：図 769・770、遺物：図 771)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB410、SB416、SB417に切られ、SB420を切る。北側は重複するSB410とSB417によって滅失している。

形状 東西長約5.5mであり、隅丸方形を呈する。壁面は約0.1mの高さで、東壁は直立するが、西壁と南壁の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。ブロック土の混入が多く層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて東西に伸びる溝と小穴9基を確認した。P1とP2は直径が約1.0mと大きな穴であり、底面はやや丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。埋土はいずれもブロック土の混入が目立ち、人為堆積と考えられる。また、P1とP2を繋ぐ位置に幅約0.4m、深さ約0.1mの溝を検出した。また、P4、P6、P9は深さ約0.3mの穴であり、P6では柱痕跡を確認した。他の小穴とともに、P1とP2周辺に位置する。P1とP2は柱痕跡を確認できなかったが、平面的な位置関係から二本柱の柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,305点、小穴から土器45点、石器類2点、壁溝から土器10点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のもので、特にⅦ期の土器片が多い。P1からⅥ期～Ⅶ期甕(1962)、P9からⅦ期高坏(1963)が出土した。

出土遺物 1962はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が短く直立し、端部下端に刺突文が認められる。1963はⅦ期高坏D2類。口縁端部の内傾面に多条沈線が認められる。1964はⅥ期～Ⅶ期の土製品。断面形が傘形で中央に直径0.8cmの穿孔が認められる。1965は叩石。右側面に敲打痕が残り、裏面は炭化している。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB410に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

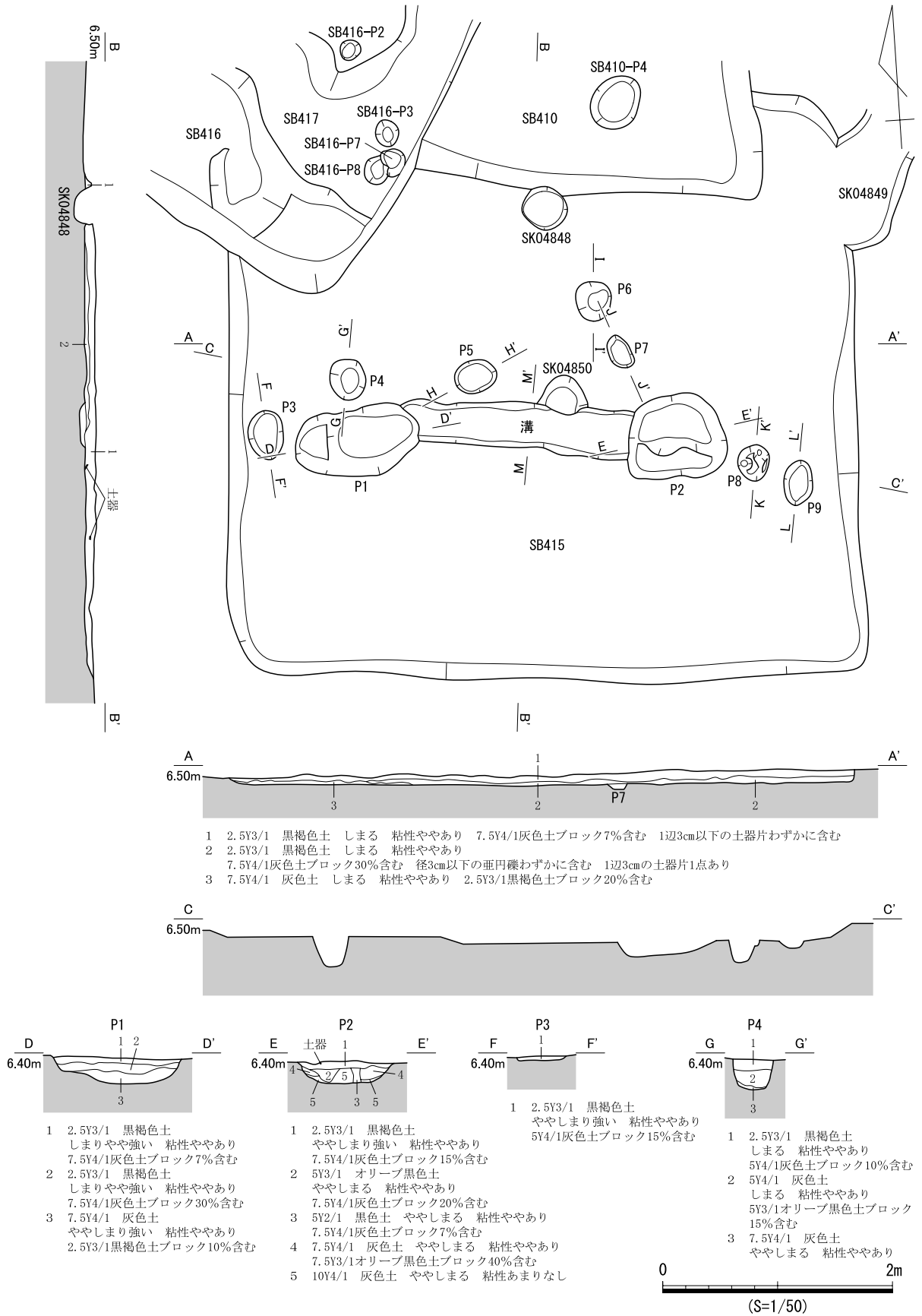


図 769 SB415 遺構図 (1)

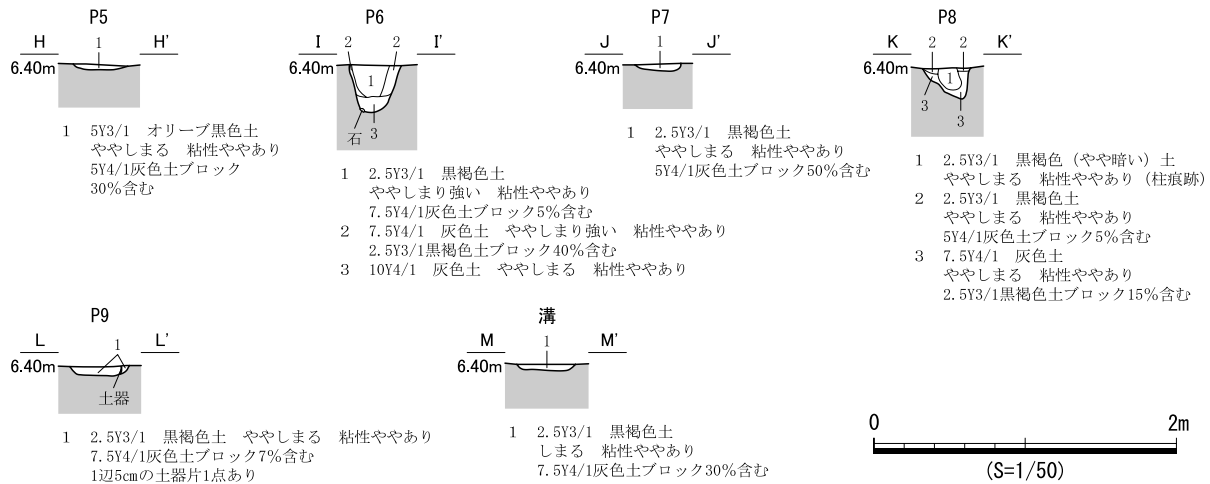


図 770 SB415 遺構図 (2)

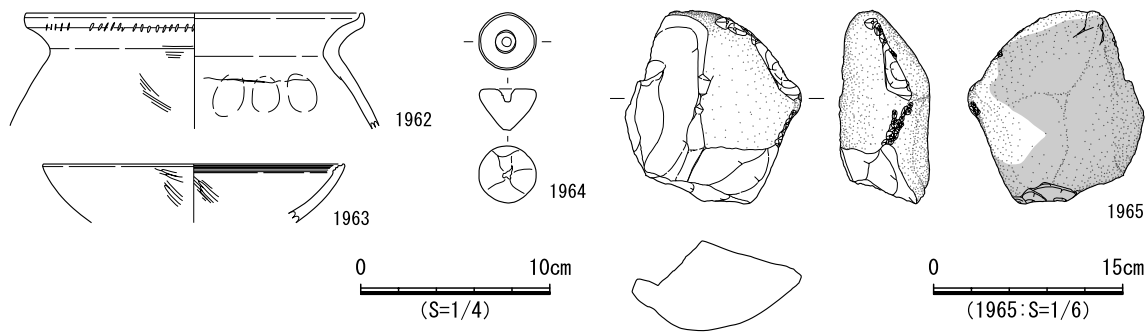


図 771 SB415 遺物実測図

SB416 (遺構：図 772・773、遺物：図 774)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB410、SB411に切られ、SB412、SB415、SB417、SB420を切る。平面形は不明瞭であった。

形状 北東－南西長約4.7m、北西－南東長約5.3mで、平面形は長方形である。各辺とも直線的で、壁面は残りがよく、その傾斜は急である。

埋土 16層に分層した。床面は15層上面であり、15・16層は掘形埋土である。床面までの堆積土にはブロック土の混入が多く、層界の凹凸も顕著であるため人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上で南北に伸びる壁溝と小穴3基を確認した。そのうち、P1とP2は浅く、P3のみ深い。柱穴配置は不明である。また、西壁と壁溝は約1.0m離れており、西壁は階段状の平坦面がある。そのうち、中段はSB417の平面形と連続するため、検出時に本遺構の平面形を誤認した可能性がある。

掘形 埋土は2層に分層でき、いずれもブロック土を含む。掘形底面では小穴6基を検出した。P7は深さ0.5mがあり、壁面が直立して、底面が平坦である。また、北東壁以外の壁面に沿ってコの字状に幅0.7m～1.0mの範囲が溝状に窪み、同一埋土(16層)で埋められている。

遺物出土状況 埋土中から土器1,842点、石器類1点、小穴から土器22点、石器類57点、壁溝から土器17点が出土した。土器はVI期～VII期のもので、わずかにI期とIV期の土器片も出土した。床面からやや上位で、南西隅部付近からVII期の高坏(1968)、襖脚部(1967)が出土し、そのすぐ北側から長さ

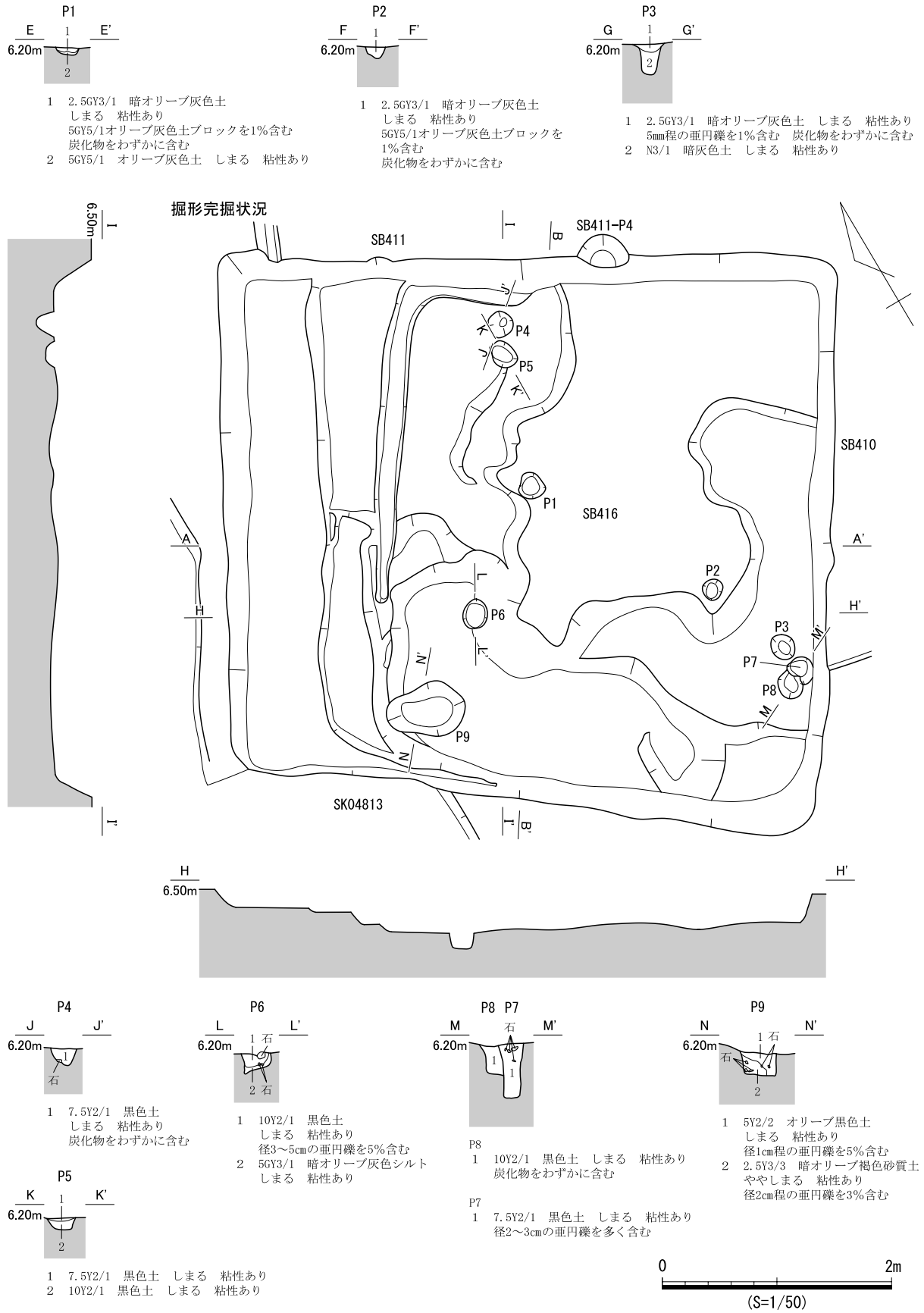


図 773 SB416 遺構図 (2)

約0.5mの範囲で粘土の広がりを確認した。

出土遺物 1966はⅥ期～Ⅶ期壺胴部。外面に線刻が認められるが、一部の残存のため全形は不明である。1967はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。脚裾部に打ち欠きが認められる。1968はⅦ期高坏D1類。口縁部が坏底部から、わずかに内湾しながら外傾する。端部は平坦である。外面の坏底部と口縁部の境は屈曲がやや弱い、内面の段は顕著である。脚部は付根からやや外反し、裾部で内湾する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

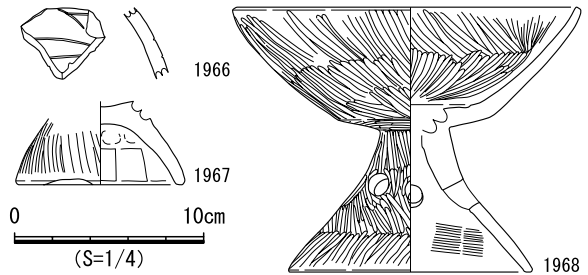


図 774 SB416 遺物実測図

SB417 (遺構：図 776・777、遺物：図 775)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB410、SB411、SB413、SB416に切られ、SB412とSB415を切る。

形状 北東－南西長約5.8m、北西－南東長約5.5mであり、隅丸方形を呈する。北西辺は直線的で、北東辺と南東辺はやや外側に膨らむ。壁面は残りのよい北壁で高さ約0.2mあり、その傾斜は急である。北東から南東側の壁面は1段の平坦面がある。

埋土 3層～5層に分層した。断面B-B'の7層は掘形埋土である。床面までの埋土中にはブロック土が含まれ、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて小穴1基と北東壁に沿う壁溝2条を検出した。壁溝は床面と上段の平坦面上で検出できたことから、住居の建て替えに際し、床面を整地し、平面形を拡大している可能性が高い。

遺物出土状況 埋土中から土器670点、小穴から土器1点、石器類1点、壁溝から土器16点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅣ期の土器片も出土した。

出土遺物 1969はⅦ期壺A3類。口縁端部下端を大きく拡張し、口縁部が内面で屈曲する。内面には羽状文と円形刺突文が認められる。1970はⅣ期甕B2類。口縁部が屈曲して直立する。端部は内傾する凹面を形成する。頸部から直線文と刺突文を交互に施文する。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB410、SB413、SB416に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

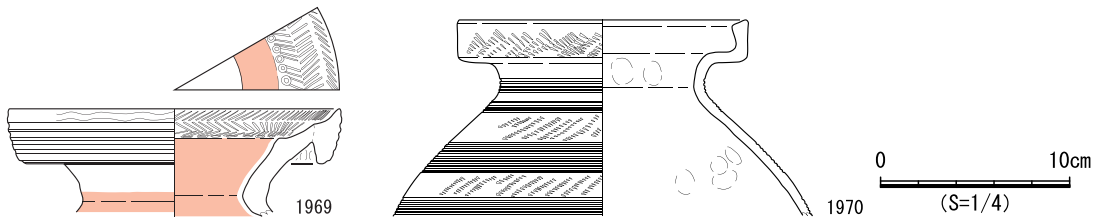


図 775 SB417 遺物実測図

SB418 (遺構：図 778～780、遺物：図 781)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB410とSB424に切られ、SB417、SB419、SB420、SB427、SB437を切る。平面形は不明瞭であった。

形状 南北長約5.3m、東西長約5.1mで、平面形はほぼ方形である。各辺とも直線的であり、壁面

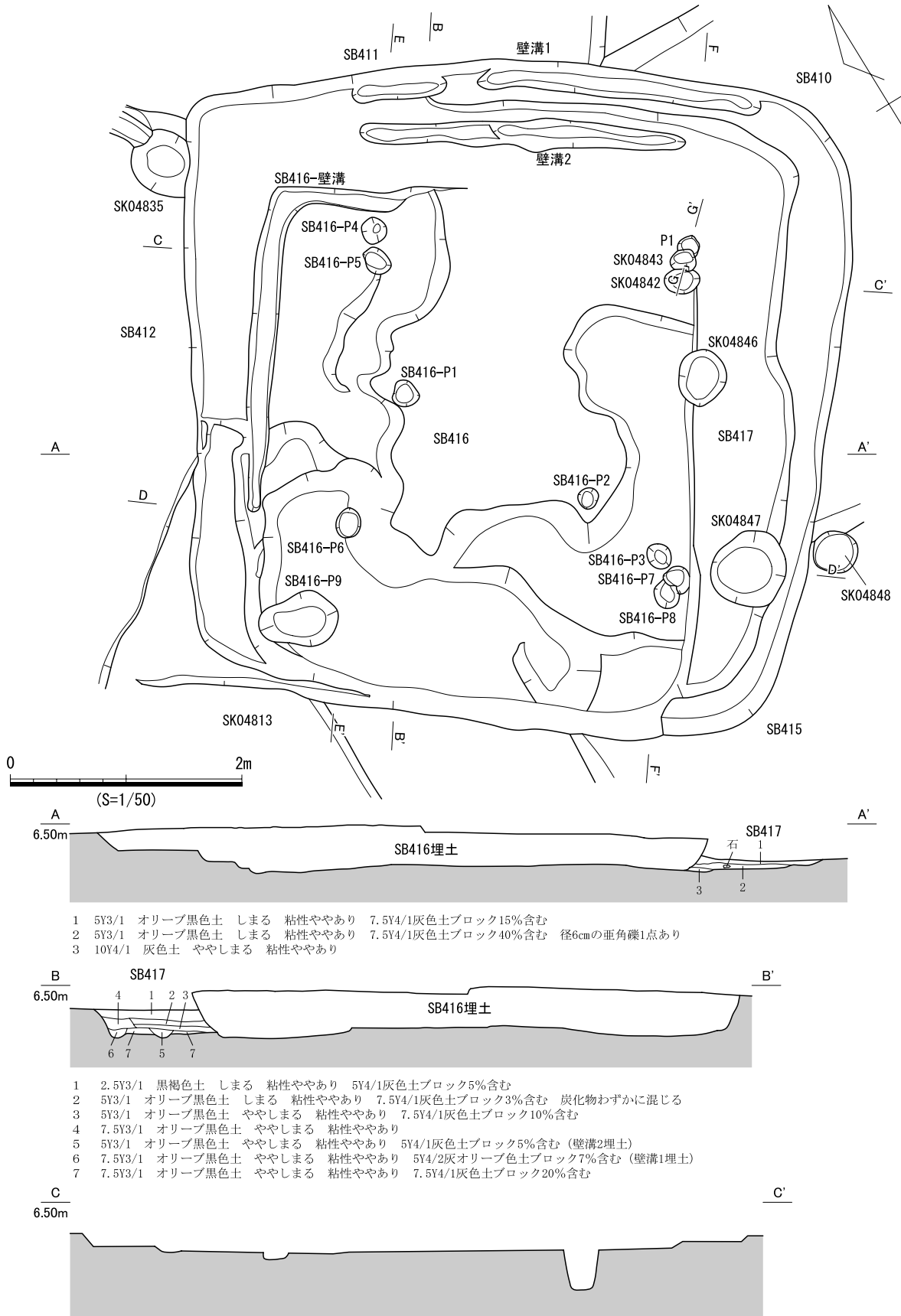


図 776 SB417 遺構図 (1)

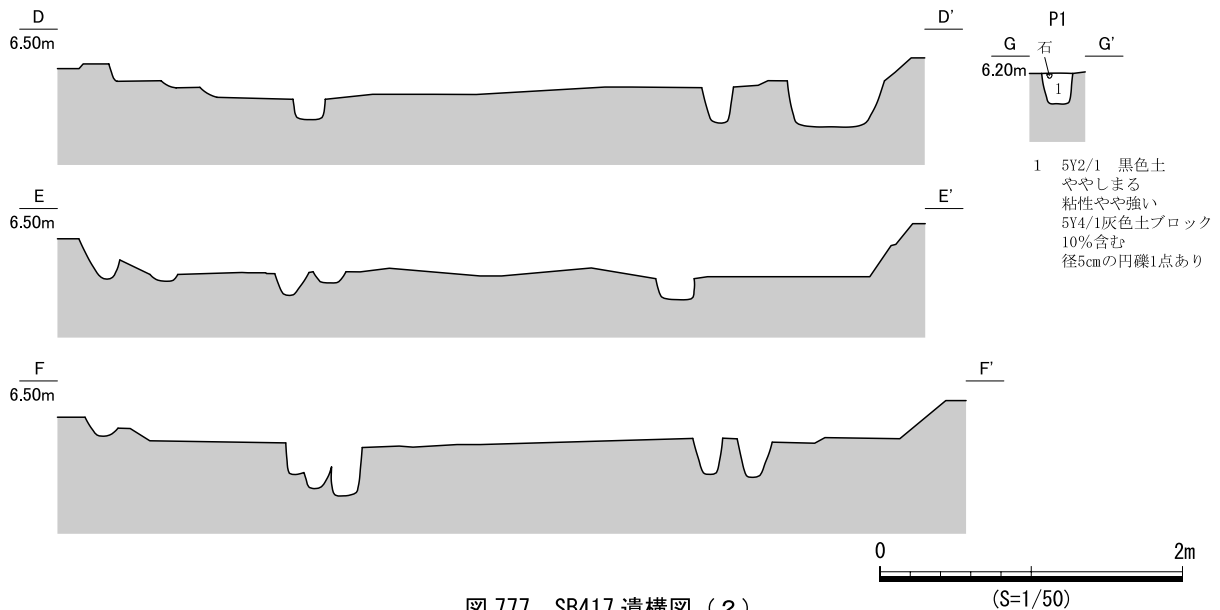


図 777 SB417 遺構図 (2)

の高さは約0.1mで、その傾斜は急である。

埋土 4層に分層した。1・2層が床面までの埋土、7・8層が掘形埋土である。床面までの埋土はブロック土の混入が目立ち層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて小穴19基を検出した。平面的な位置関係からP1～P4は柱穴と考えられ、P1、P3、P4は掘形が深い、P2のみ浅い。また、壁面に沿って、断続的に溝7条を検出した。このうち、SB421の壁溝との切り合い関係が把握できなかったため本遺構に伴う溝として掘削してしまったが、SB421掘削時に誤認であることに気付いた。よって、本住居に伴う壁溝は壁溝1～4であり、いずれも壁面よりやや内側に位置し、断続的である。なお、床面上では多数の小穴を検出したが、本住居とSB421の床面が同一面であるため、本来SB421に伴う小穴も本住居の小穴として遺構番号を付している可能性がある。

掘形 埋土は2層に分層でき、その層界の平面形はSB420の検出ラインとほぼ一致する。つまり、SB420を埋めて本住居を構築したと考えられる。掘形底面では小穴1基（P20）を検出した。長軸0.30m、深さ0.10mの楕円形を呈する穴で、Ⅶ期壺（1971、1972）が出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器3,496点、石器類1点、小穴から土器98点、壁溝から土器68点が出土した。土器の多くはⅥ期～Ⅶ期に属し、P20からⅦ期壺胴部（1971、1972）がまとまって出土した。壺は土圧によって潰れたような状態で出土し、意図的に据えられた可能性がある。

出土遺物 1971、1972はⅦ期壺B類胴部。胴部上半に赤彩と極細の沈線による精緻な文様が認められる。断面の浅い間隔が密なハケ目工具によって直線文を数帯施文し、その上に極細の沈線によって山形文、羽状文、斜格子文を施す。山形文内には赤彩が認められる。羽状文と斜格子文は同じ文様帯にあり、それぞれ胴部の2分の1程度に分けて施文される。斜格子文のほとんどの沈線で赤彩が認められ、羽状文の沈線にも部分的に赤彩が認められる。おそらく、極細の沈線内すべてに、赤彩が施された可能性が高い。極細の山形文、羽状文、斜格子文の文様帯を分割するように、クシ状工具による山形文が認められる。山形文内には赤彩が認められる。胴部下半は底部から大きく開く。赤彩が認められることから、胴部上半以下の無文帯には赤彩が全面に施されていたと考えられる。1973はⅦ期甕B3類。

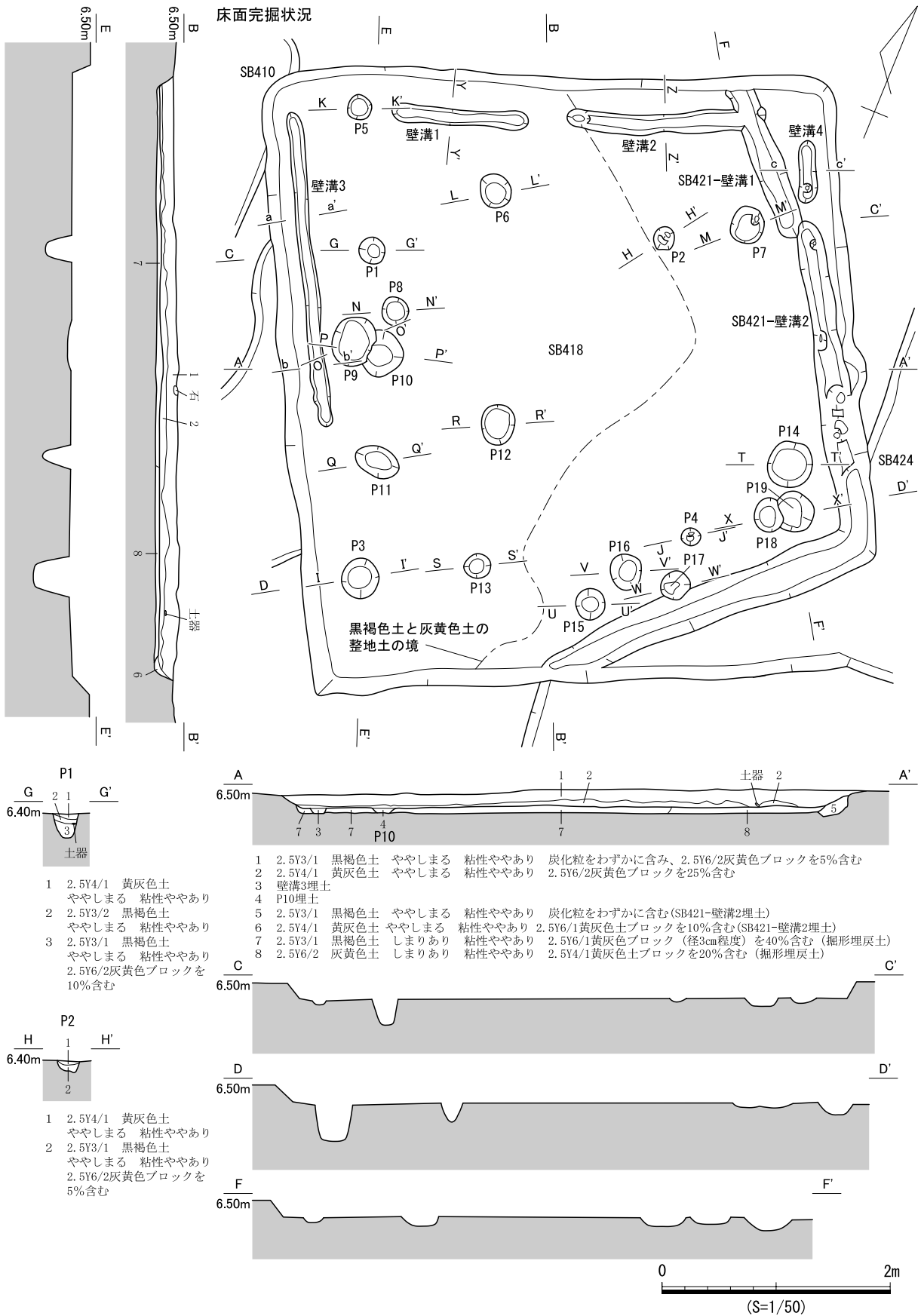


図 778 SB418 遺構図 (1)

口縁部がくの字に屈折して、端部に断続的な強いナデが認められる。内外面に粗いハケ目が認められる。1974、1975はⅦ期高坏G3c類脚部。1974は少条の多条沈線間に精緻な振幅の短い山形文を3帯施文する。下段の2帯の山形文は3～4重の施文である。1975は裾部が屈折して開き、透孔下半から屈曲部に多条沈線、屈曲部に小さな刺突文を施文する。1976は砥石。楕円礫を素材とし、その平坦面を

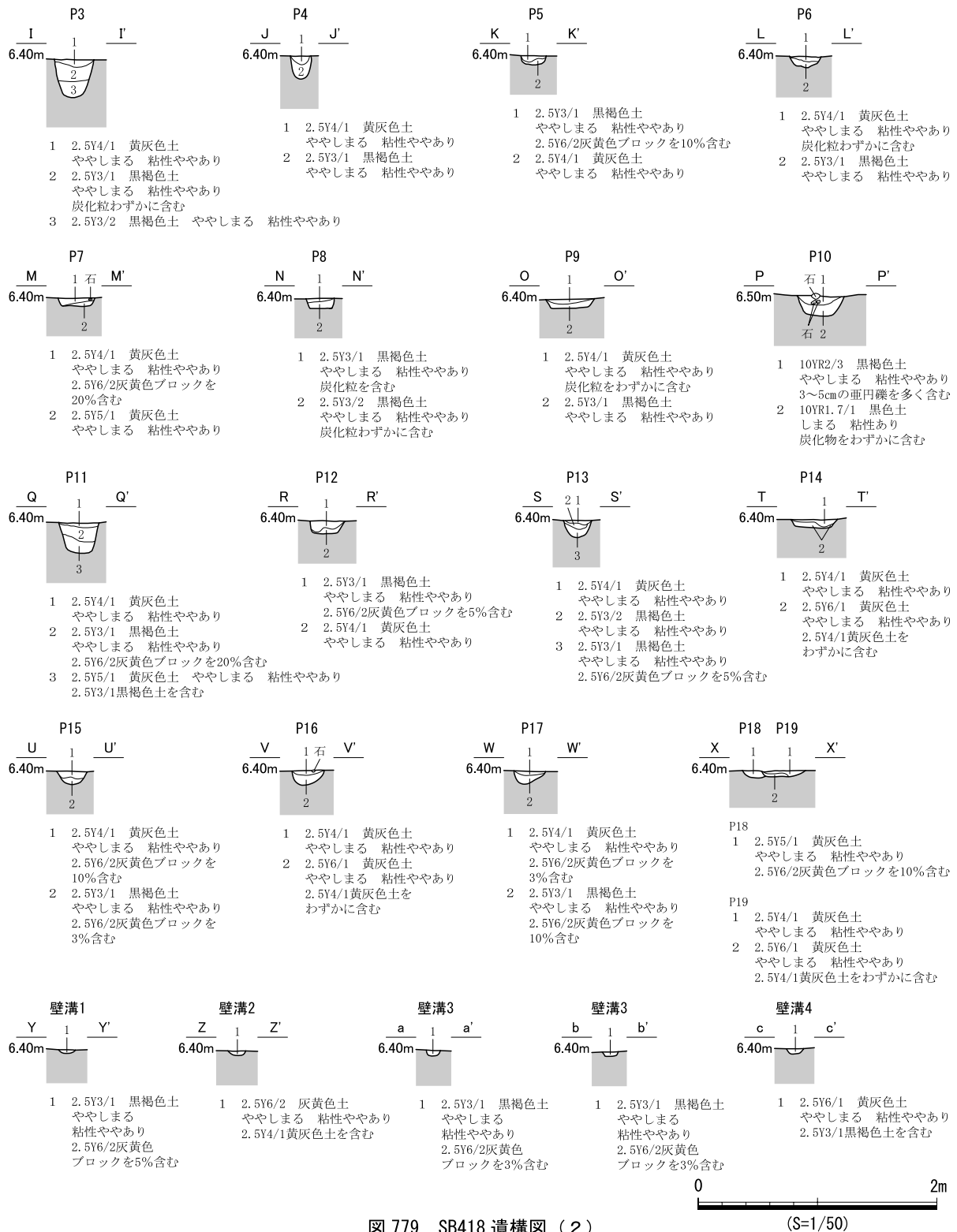


図 779 SB418 遺構図 (2)

砥面として使用している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

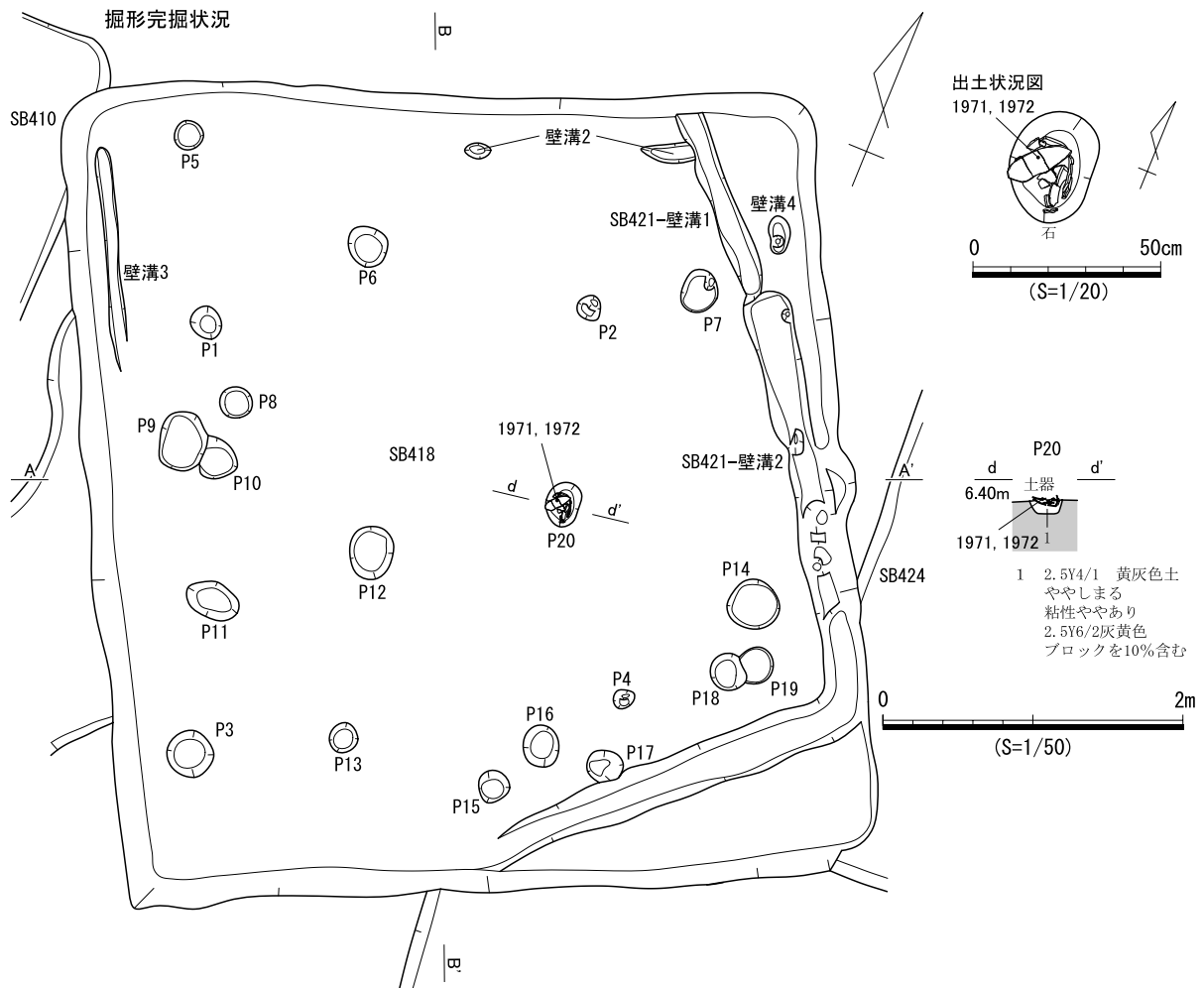


図 780 SB418 遺構図 (3)

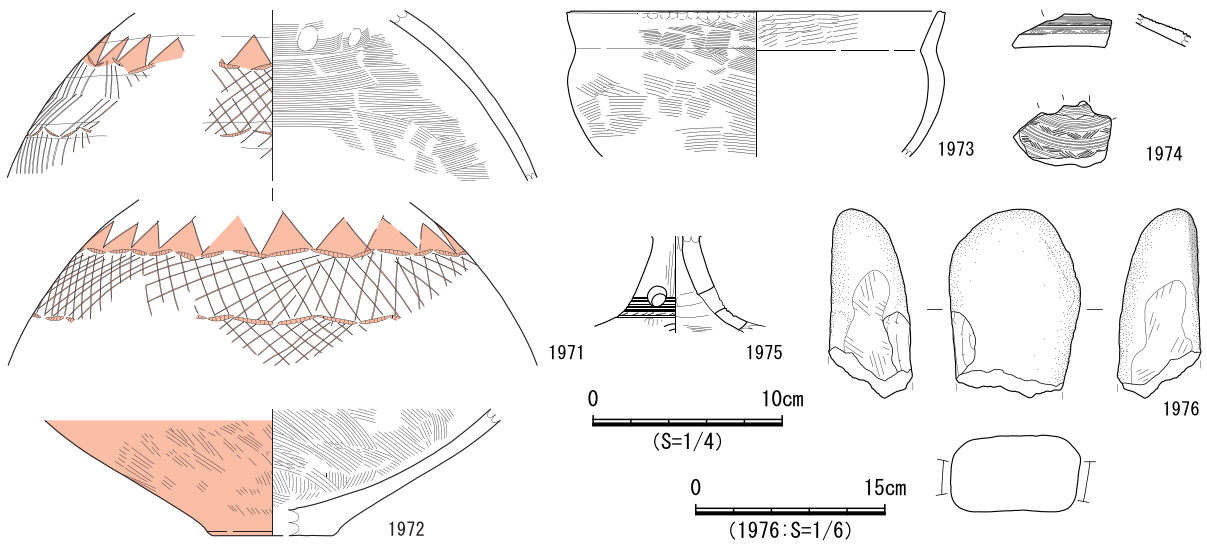


図 781 SB418 遺物実測図

SB419 (遺構：図782)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB401、SB418、SB428に切られ、SB420とSB438を切る。周囲の竪穴住居跡との重複により、北西隅部付近のみを検出した。

形状 規模は不明であり、北辺と西辺が直線的であるため平面形は方形と考えられる。壁面は高さ約0.1mで、その傾斜は急である。

埋土 2層に分層した。ブロック土の混入が顕著であり、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴3基を確認した。南東隅部と南西隅部を欠くが、P1とP2は平面的な位置関係から柱穴と考えられる。壁面に沿って幅約0.1mの壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器312点、小穴から土器5点が出土したが、小片であり図示していない。

時期 VII期以前のSB401に切られ、VI期のSB420を切ることから、VI～VII期と考えられる。

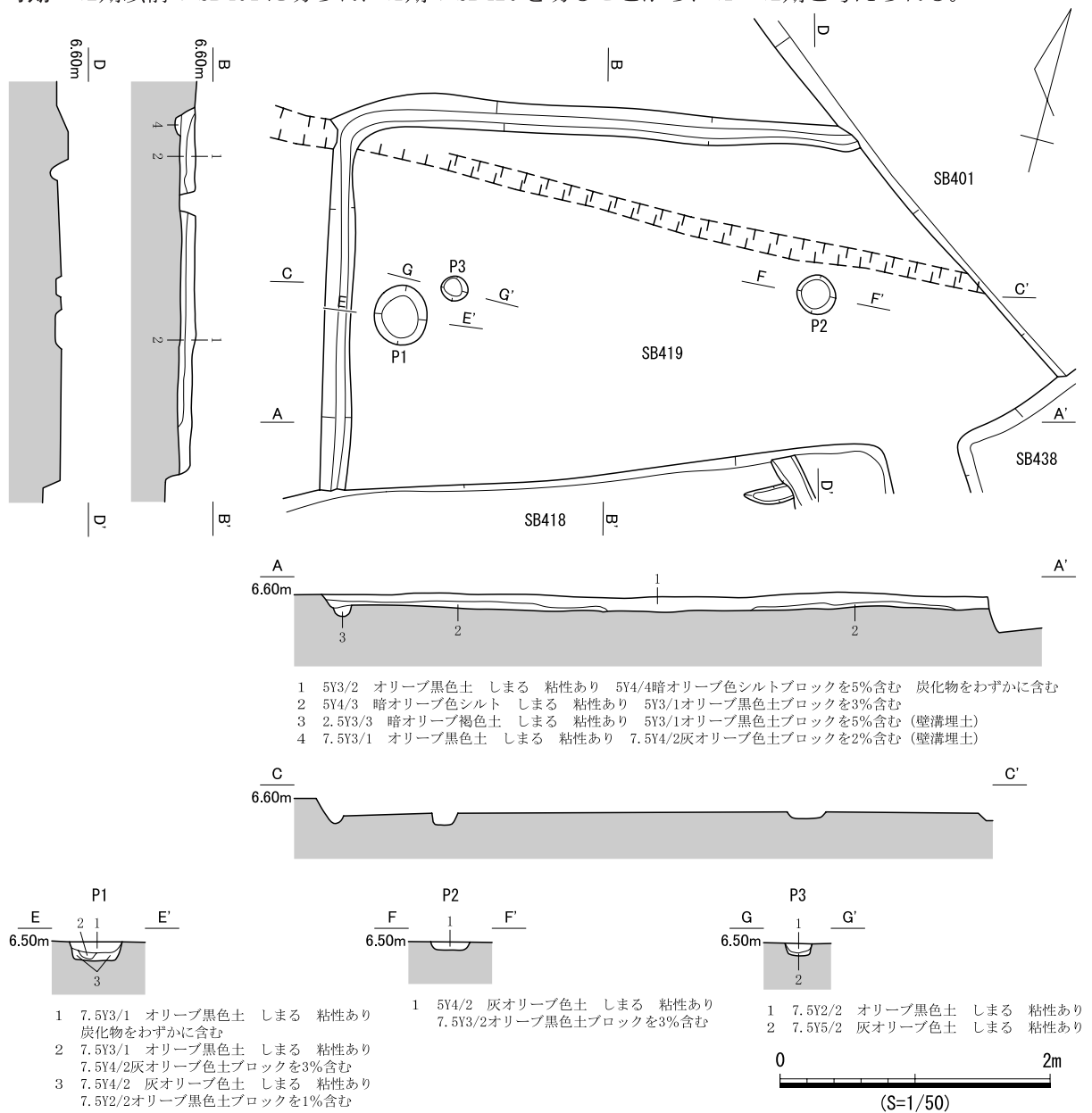


図782 SB419 遺構図

SB420 (遺構：図783・785・786、遺物：図784)

検出状況 西部東側中央の堅穴住居跡密集域に位置する。SB410、SB411、SB415、SB417～SB419に切られ、SB421を切る。西隅部を重複するSB417によって壁面が滅失している。

形状 北西－南東長約5.5m、北東－南西長約5.7mであり、隅丸方形を呈する。各辺とも直線的で、壁面は高さ0.1mに満たない。

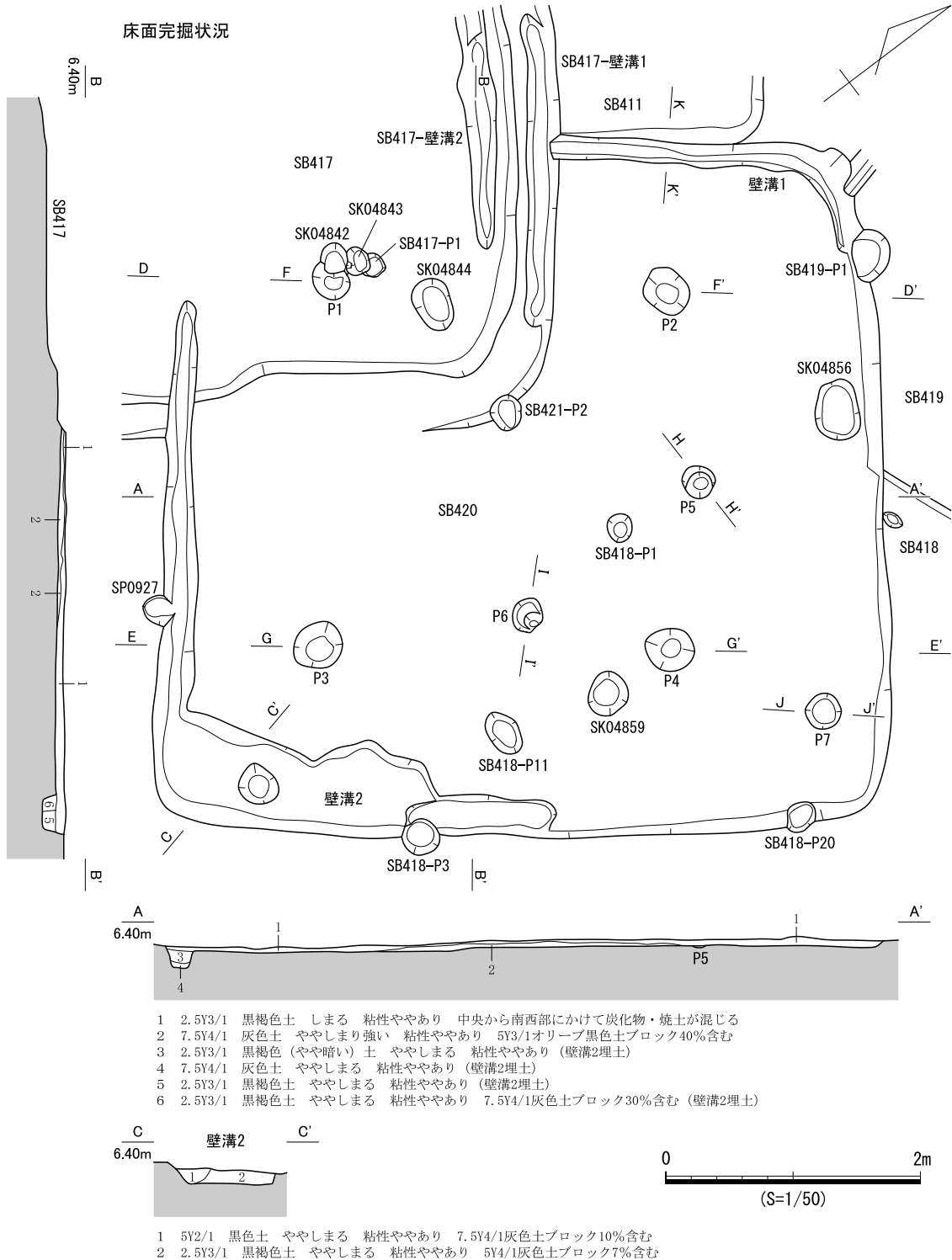


図783 SB420 遺構図(1)

埋土 床面までは2層に分層した。上層には中央から南西部にかけて炭化物と焼土が含まれている。下層はブロック土の混入が顕著であることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて小穴7基を確認し、平面的な位置関係からP1～P4は柱穴と考えられる。P1～P3は深さ約0.3mがあり、P2とP3では柱痕跡が認められる。P4は底面が丸く、やや浅い。P5～P7は直径約0.2m～0.3mの小穴である。北西壁から南西壁と南東壁中央で、幅約0.1mの壁溝を確認した。

掘形 南西壁以外の壁面に沿ってコの字状に幅0.6m～1.1mの範囲が溝状に窪み、ブロック土を含む埋土で埋められていた。壁溝1に切られるいることから、掘形埋土と判断した。

遺物出土状況 埋土中から土器368点、小穴から土器31点、壁溝から土器204点が出土した。土器の多くはⅦ期に属し、壁溝2からⅦ期壺(1977)が出土した。

出土遺物 1977はⅦ期壺G2a類。口

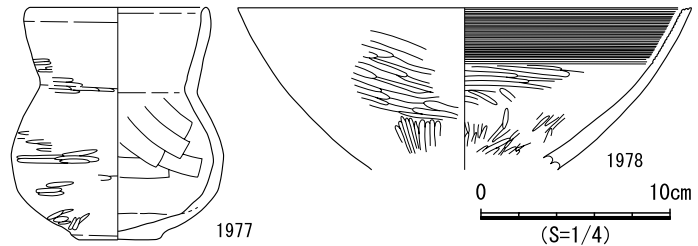


図 784 SB420 遺物実測図

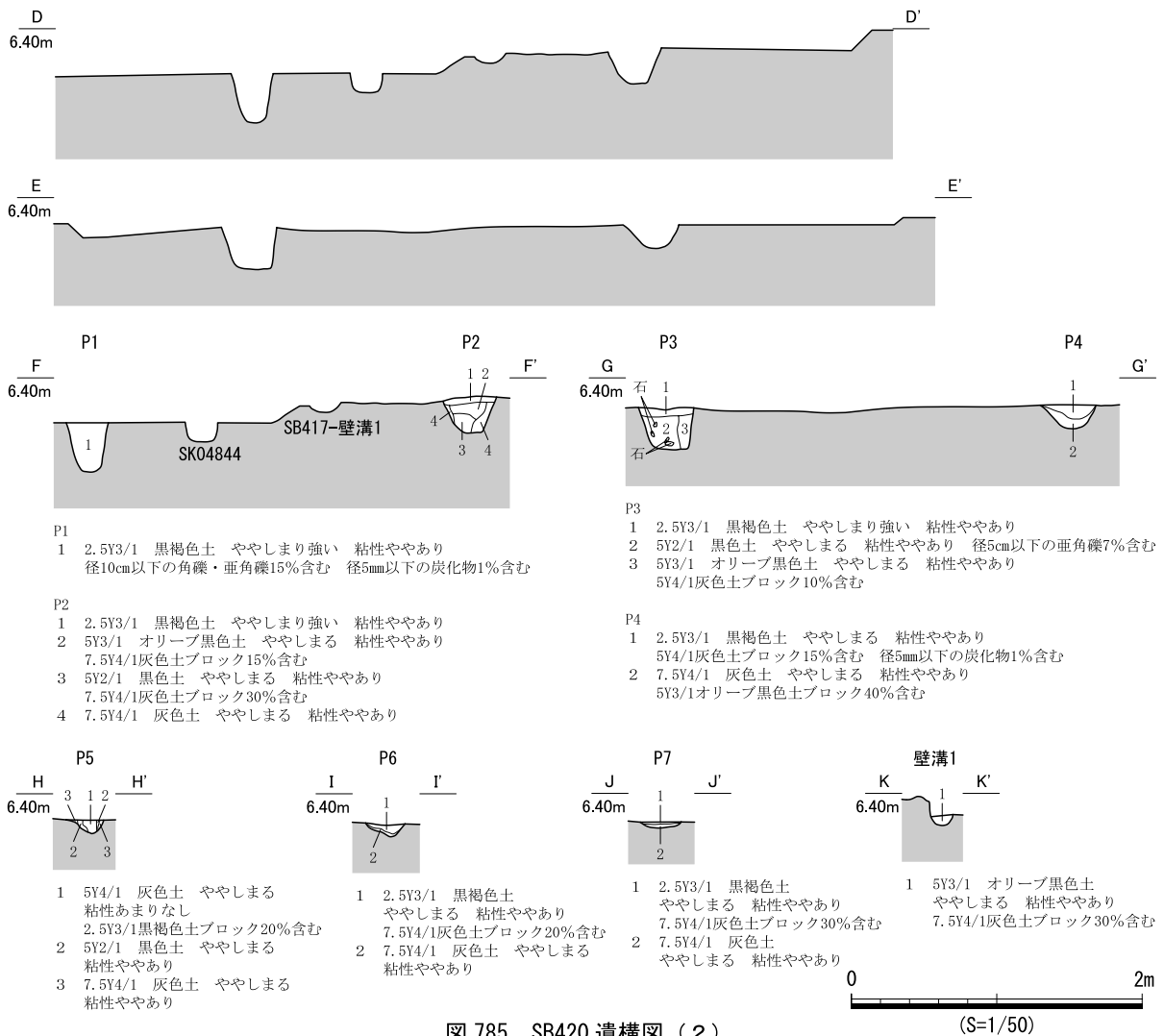


図 785 SB420 遺構図 (2)

縁部が頸部からやや内湾して、立ち上がる。胴部は球形で、底部はわずかに突出する。1978はⅦ期高坏D3類。口縁部が内湾し、端部には多条沈線を施文する内傾面が認められる。内面3分の1程度に多条沈線を施文し、最下段には太い沈線を加える。

時期 出土遺物の時期と、Ⅶ期のSB410に切られⅥ期～Ⅶ期のSB421を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

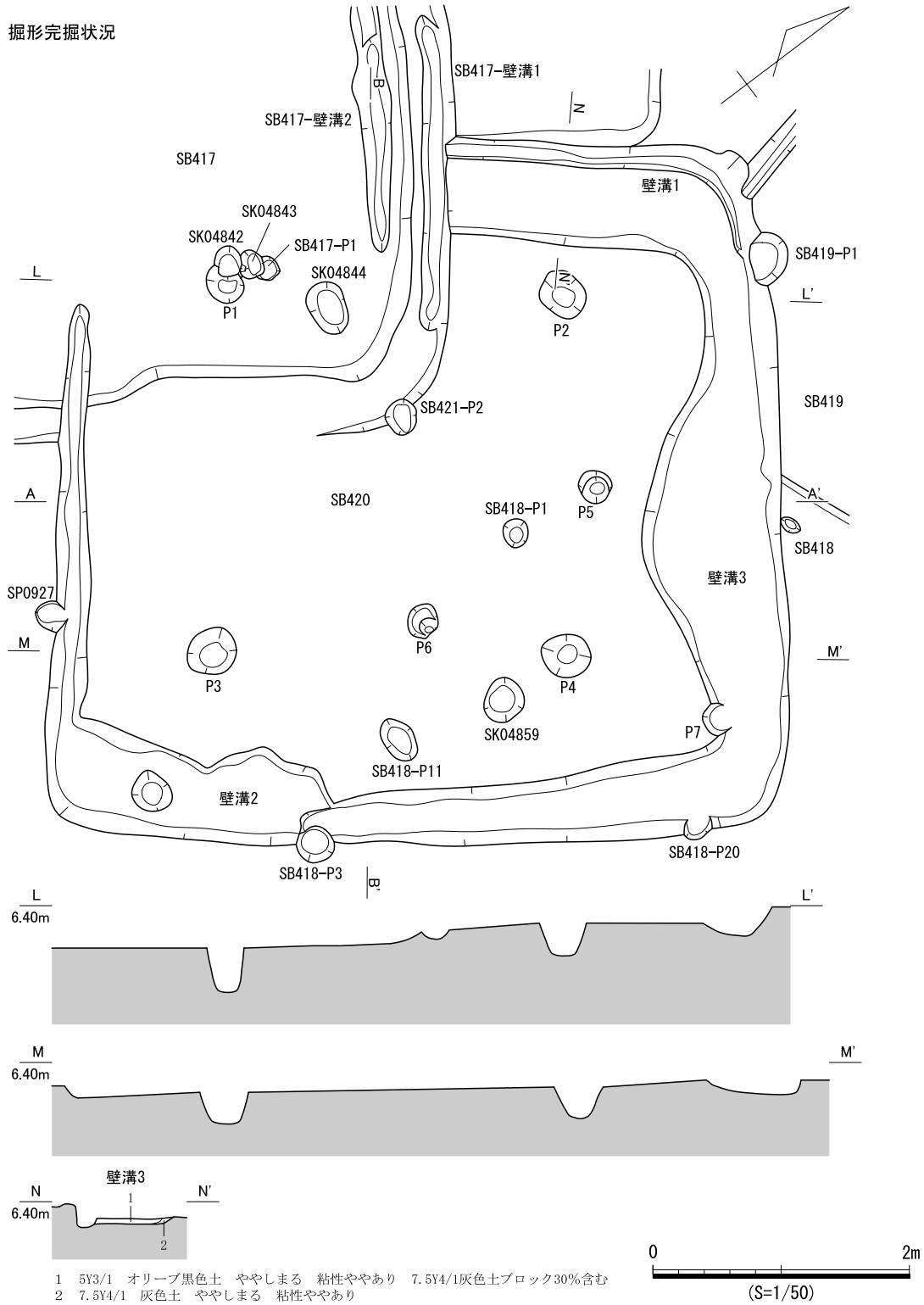


図 786 SB420 遺構図 (3)

SB421 (遺構：図 787・788)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB410、SB417、SB418、SB420、SB424、SB427に切れ、重複する竪穴住居跡のなかで最も先行する。なお、西側はSB420により大きく削平

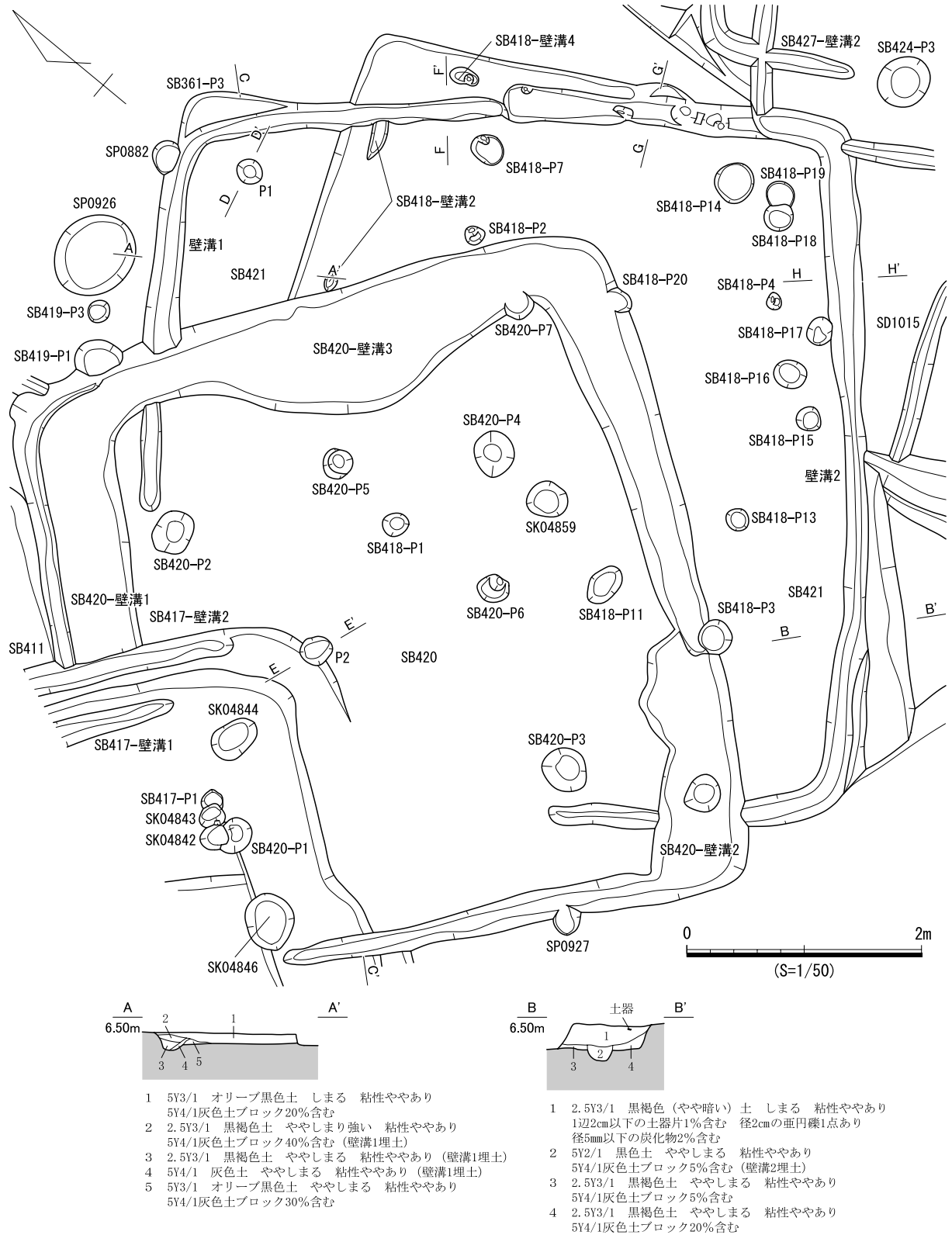


図 787 SB421 遺構図 (1)

されている。

形状 北東－南西長約6.1m、北西－南東長約5.9mで、平面形は隅丸方形と考えられる。確認した各辺の中央はわずかに膨らみ、壁面の傾斜は急である。

埋土 北西辺と南東辺のみが残存していた。床面までは単層であり、ブロック土の混入があるため人為堆積と考えられる。最下層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて小穴2基を検出し、P2では柱痕跡を確認した。しかし、竪穴住居跡の重複が著しく、本遺構に伴う柱穴の推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から土器275点、小穴から土器4点、壁溝から土器8点が出土した。土器はいずれも摩耗した小片であり、図示していない。

時期 VII期の竪穴住居跡群に先行するため、VII期以前と考えられる。

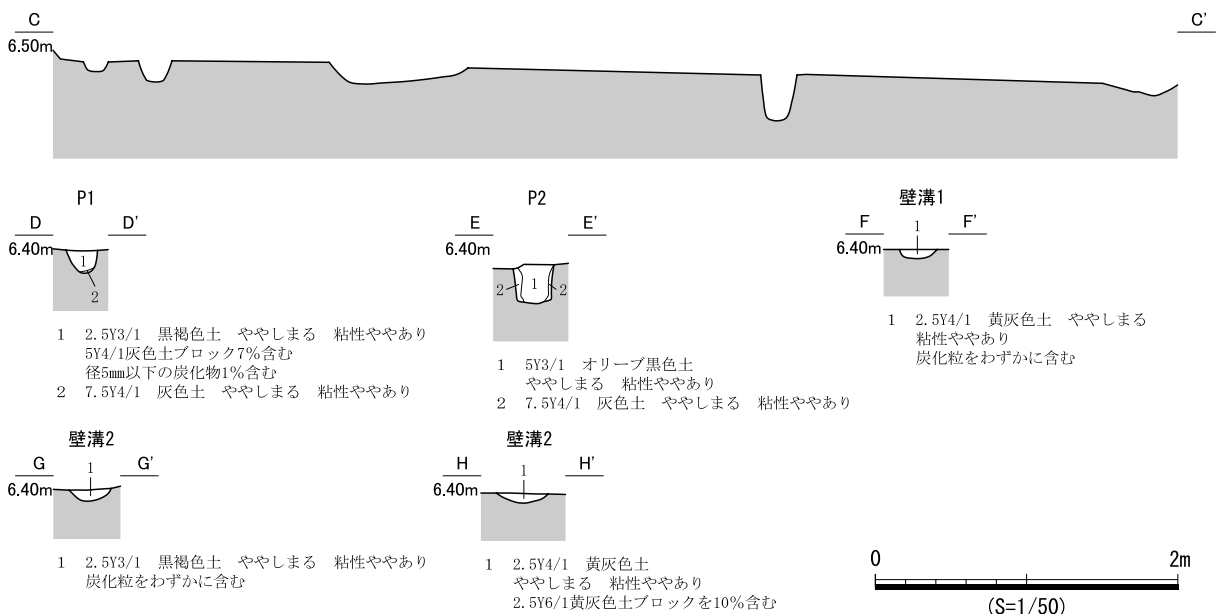


図 788 SB421 遺構図 (2)

SB422 (遺構：図 789・790、遺物：図 791)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の南西端に位置する。周囲の竪穴住居跡との重複関係はなく、単独で位置する。掘形全形を確認した。

形状 北東－南西長、北西－南東長ともに約4.6mで、平面形は隅丸方形である。深さは約0.1mと浅く、壁面の傾斜は比較的緩やかである。

埋土 床面までは3層に分層し、炭化物をわずかに含む。また、ブロック土の混入が顕著であることから人為堆積と考えられる。

床面 やや凹凸があり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認した。P1～P4が平面的な位置関係から柱穴と考えられるが、いずれも明瞭な柱痕跡は認められなかった。P5は長軸約0.5mの不整形な小穴で、埋土中に炭化物が認められた。平面的な位置から炉跡の可能性のあるものの、壁面に被熱した痕跡は認められなかった。また、幅0.1m～0.2mの壁溝が壁面に沿って全周する。

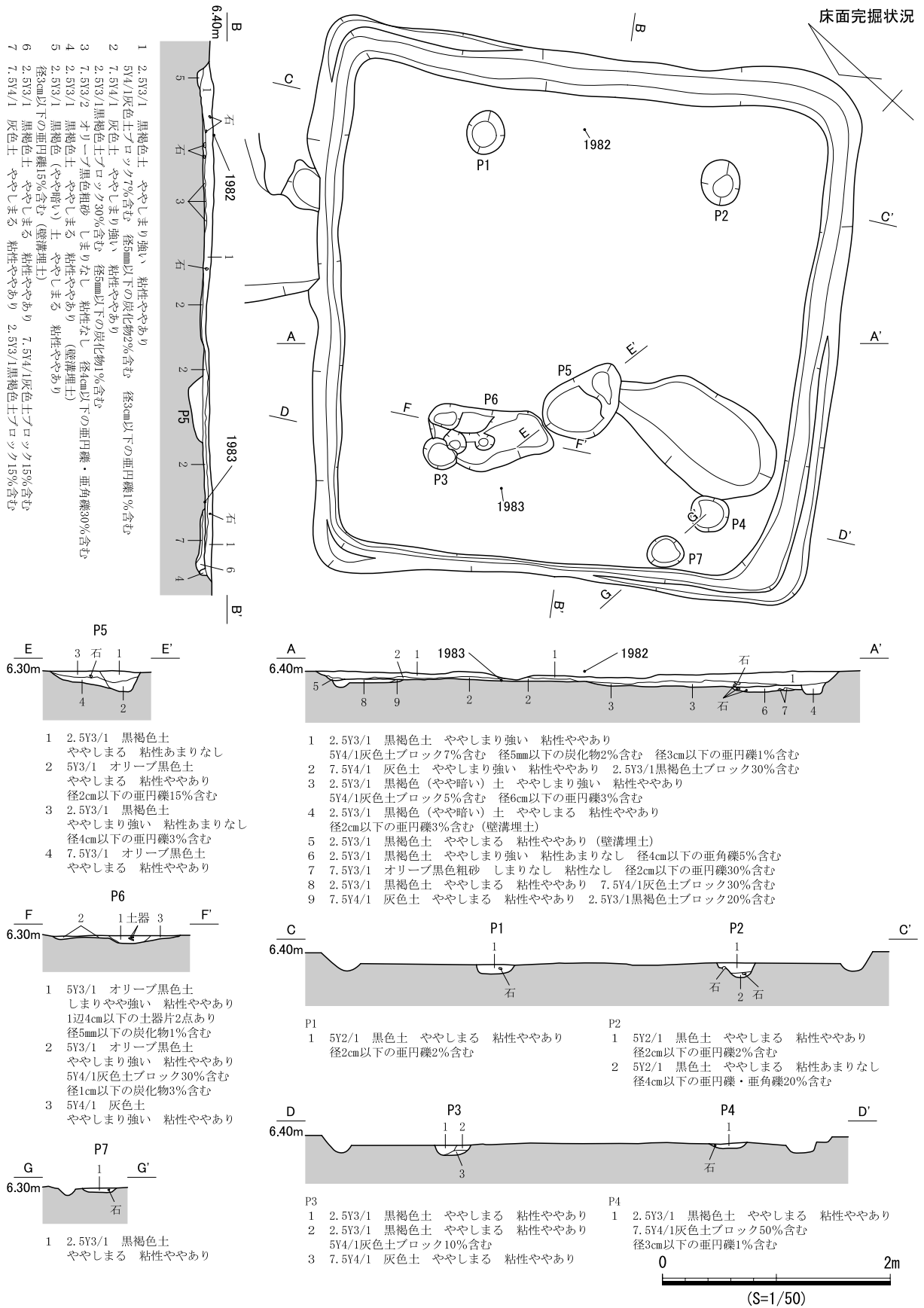


図 789 SB422 遺構図 (1)

掘形 北東壁以外の壁面に沿ってコの字状に幅0.4m～0.6mの範囲が溝状に窪み、礫やブロック土を含む埋土で埋められていた。壁溝に切られるいることから、掘形埋土と判断した。

遺物出土状況 埋土中から土器520点、石器類3点、小穴から土器54点、壁溝から土器49点が出土

掘形完掘状況

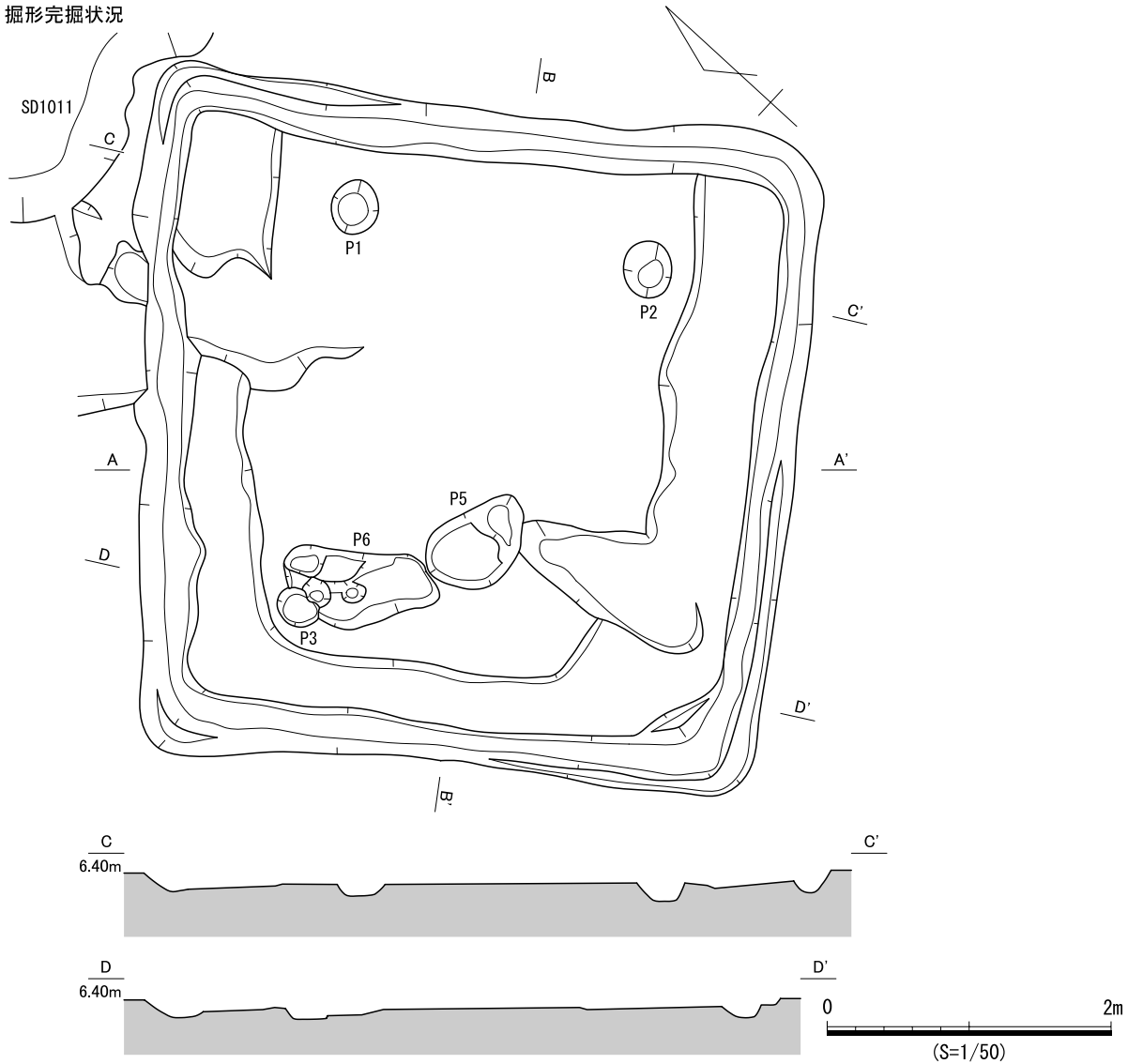


図 790 SB422 遺構図 (2)

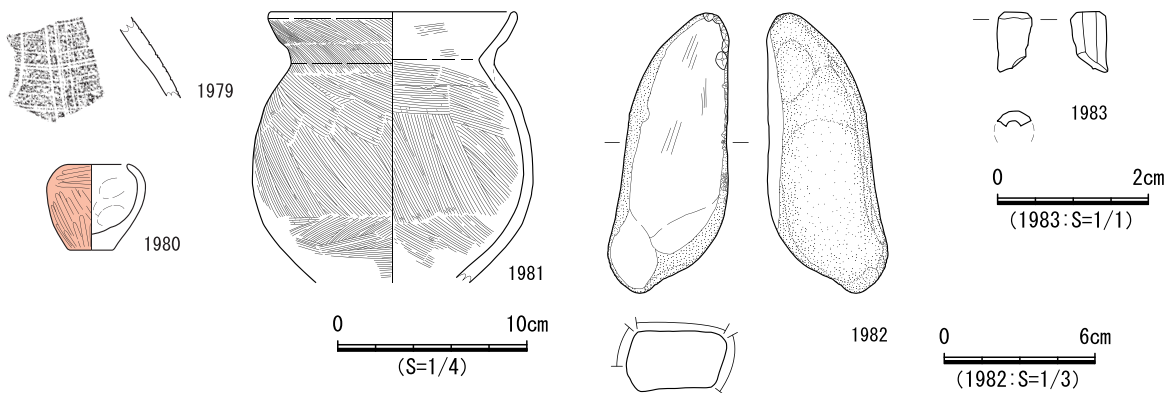


図 791 SB422 遺物実測図

した。土器の多くはⅦ期に属する。また、埋土中から、砥石（1982）や管玉（1983）が出土した。

出土遺物 1979はⅣ期壺胴部。クシ状工具（2本1組×3帯）による直線文が認められる。1980はⅤ期土製品。口縁部が内傾する合子で、外面には赤彩が認められる。1981はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。頸部が直立気味で、口縁端部がわずかにつまみ上げられる。1982は砥石。楕円礫の平坦面を砥面とし、上端に敲打痕が残る。1983は管玉。緑色凝灰岩製で、下端は欠落している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB423、SA024、SA025（遺構：図793・794、遺物：図792）

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の南西端に位置する。西側を2008年度、東側を2010年度の調査で確認した。東半分は調査区域外にある。他の竪穴住居跡と重複することなく、単独で位置する。

形状 南北長約4.1mで、隅丸方形を呈する。南辺は直線的だが、西辺は外側へ膨らみ、確認できた西壁の壁面高は0.1mにも満たない。住居の外側では、住居の平面形に沿う柱穴列（SA024、SA025）を検出した。

埋土 単層であり、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴4基を確認した。いずれも埋土は単層であり、柱穴の配置は推定できない。なお、西壁に沿って壁溝を検出した。

柱穴列 SA024は住居南壁に平行して検出した3基の柱穴列、SA025は住居西壁に平行して検出した4基の柱穴列、である。いずれも約1.0m間隔で配置されており、直径約0.2m、深さ約0.2mのものが多く、本住居と一連の施設と考えられるため、ここで報告する。

遺物出土状況 埋土中から土器67点、小穴から土器6点、壁溝から土器1点、SA024の柱穴から土器1点、SA025の柱穴から土器13点が出土した。土器はⅦ期の小片が多く、SB423-P1からⅦ期壺（1984、1985）、SA025-P4からⅦ期高坏（1987）とⅦ期甕（1986）が出土した。

出土遺物 1984はⅦ期壺底部。中型品で壺B類もしくはC類の底部であろう。底部外面には木葉痕が認められる。1985はⅦ期壺A類の胴部。直線文と山形文を施文し、山形文には赤彩が加わる。1986はⅦ期甕の胴部。粗いハケ目があり、B3類もしくはB4類であろう。1987はⅦ期高坏D類。内傾する口縁端部が認められ、多条沈線が施文される。1988はⅦ期高坏C4類の脚部。煤が付着し、断面には二次的に被熱して赤色化している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

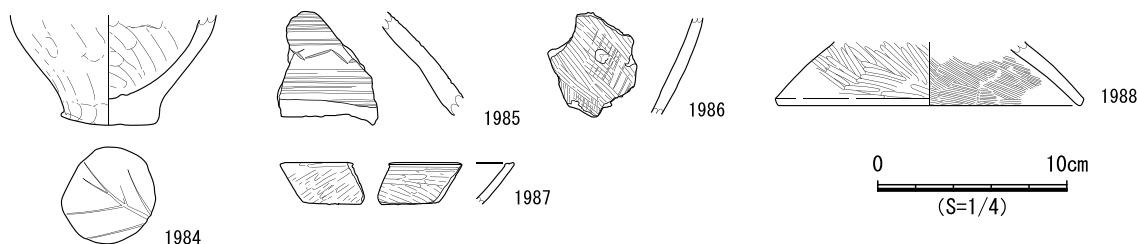


図792 SB423、SA024、SA025 遺物実測図

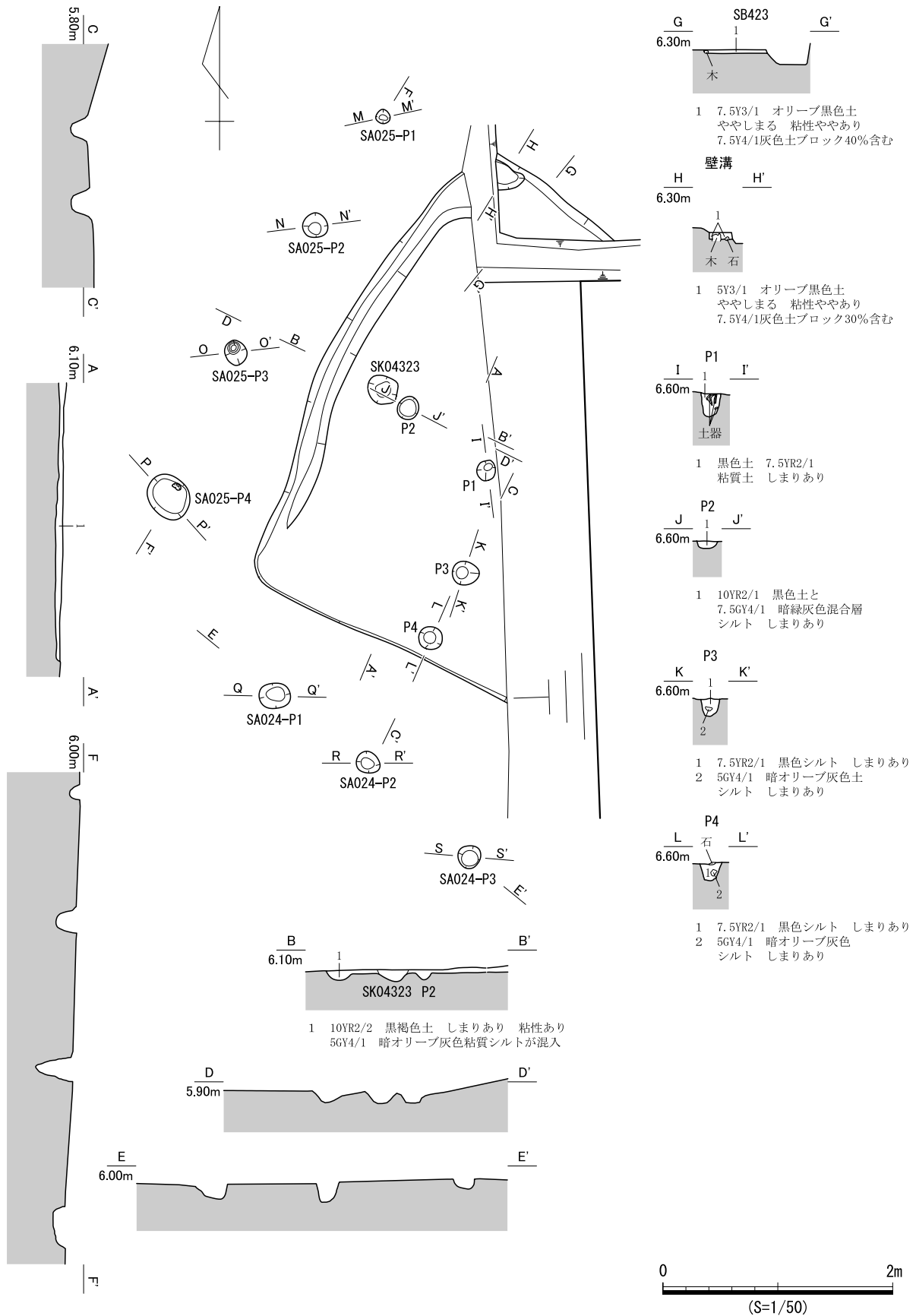


図 793 SB423 遺構図 (1)

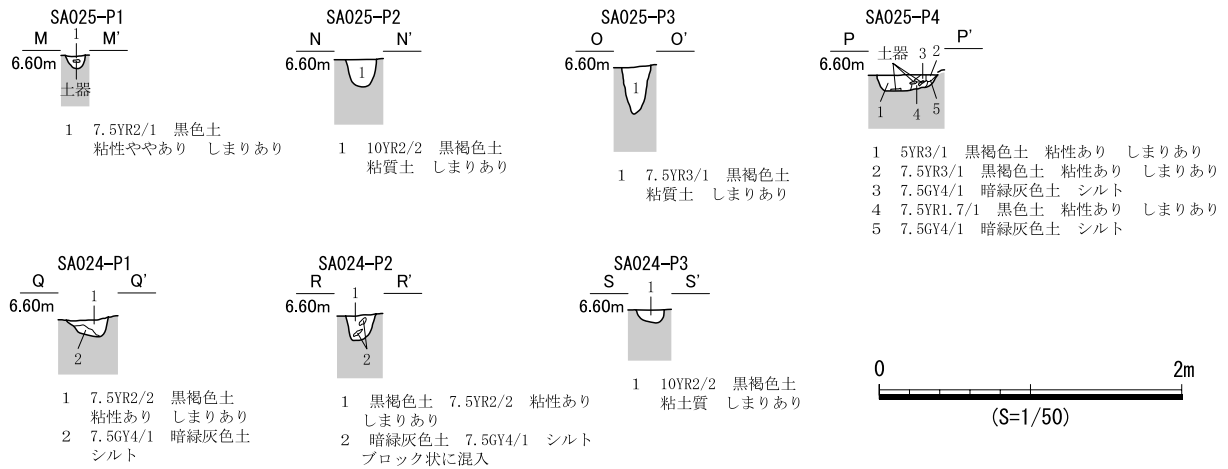


図 794 SB423 遺構図 (2)

SB424 (遺構：図 796、遺物：図 795)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB418、SB425、SB427、SB428、SB438 を切り、周囲の重複する竪穴住居跡のなかでは最も後出する。掘形の全形を確認した。

形状 南北長約 4.8 m、東西長約は 4.3 m で、平面形は長方形である。北辺と西辺は直線的で、東辺と南辺はやや蛇行する。壁面は高さ約 0.1 m で、その傾斜は緩やかである。

埋土 2 層に分層した。礫をわずかに含むが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴 3 基を確認した。いずれも直径約 0.5 m の比較的大きな穴であり、P3 がやや深い。東側に対応する柱穴を確認できなかったが、平面的な位置関係から P1 と P3 が柱穴と考えられる。

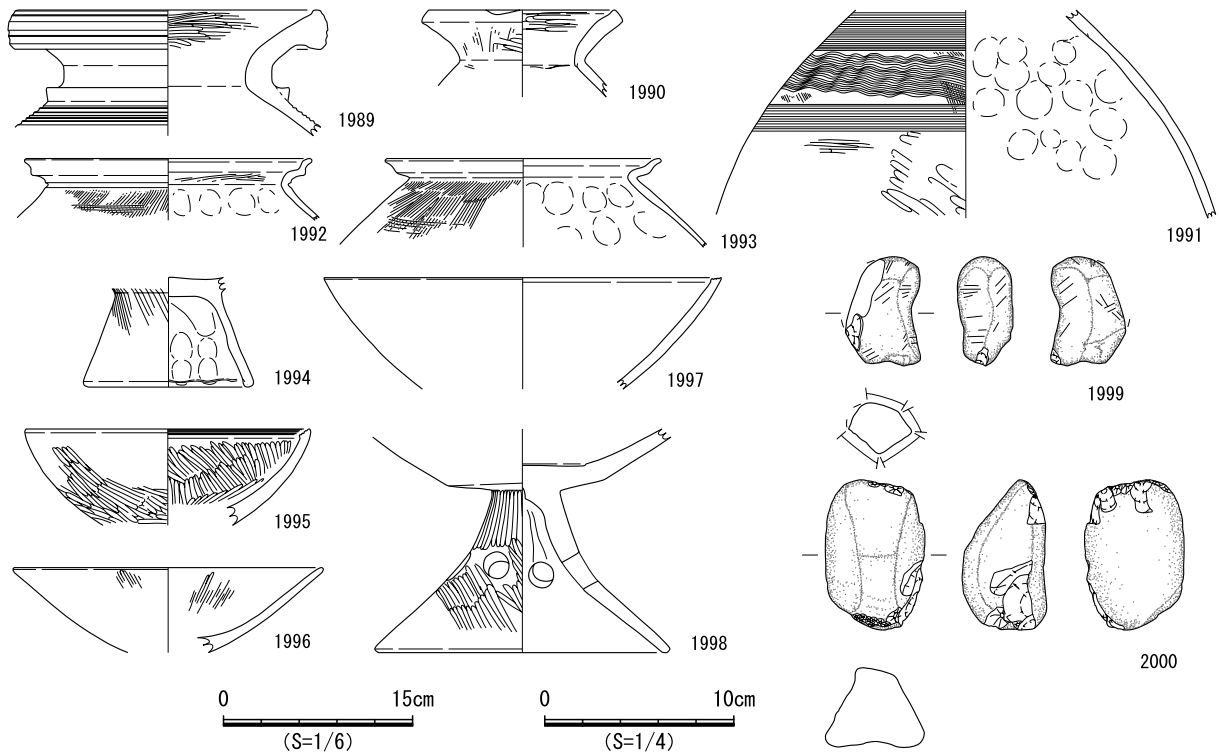


図 795 SB424 遺物実測図

遺物出土状況 埋土中から土器2,779点、須恵器1点、石器類6点、小穴から土器59点が出土した。土器はVI期～IX期までのものが出土し、大半がVII期である。P2からVII期甕（1992）が出土した。

出土遺物 1989はVI期～VII期壺A1b類。口縁部が短く外反して、端部下端を拡張する。端部と頸部との間に粘土紐を充填するが、表面には指頭圧痕が荒々しく残る。頸部には鋭い断面三角形の突帯が貼付され、周囲には赤彩の痕跡が認められる。突帯以下には直線文が認められる。1990はVII期壺B2a類。口縁部が短く外反して、端部は外傾する強い平坦面を形成する。1991はIX期壺胴部。断面の浅い直線文と波状文が認められる。1992はVII期甕D2b類。口縁部が強く屈曲して、上段が直立してから外反す

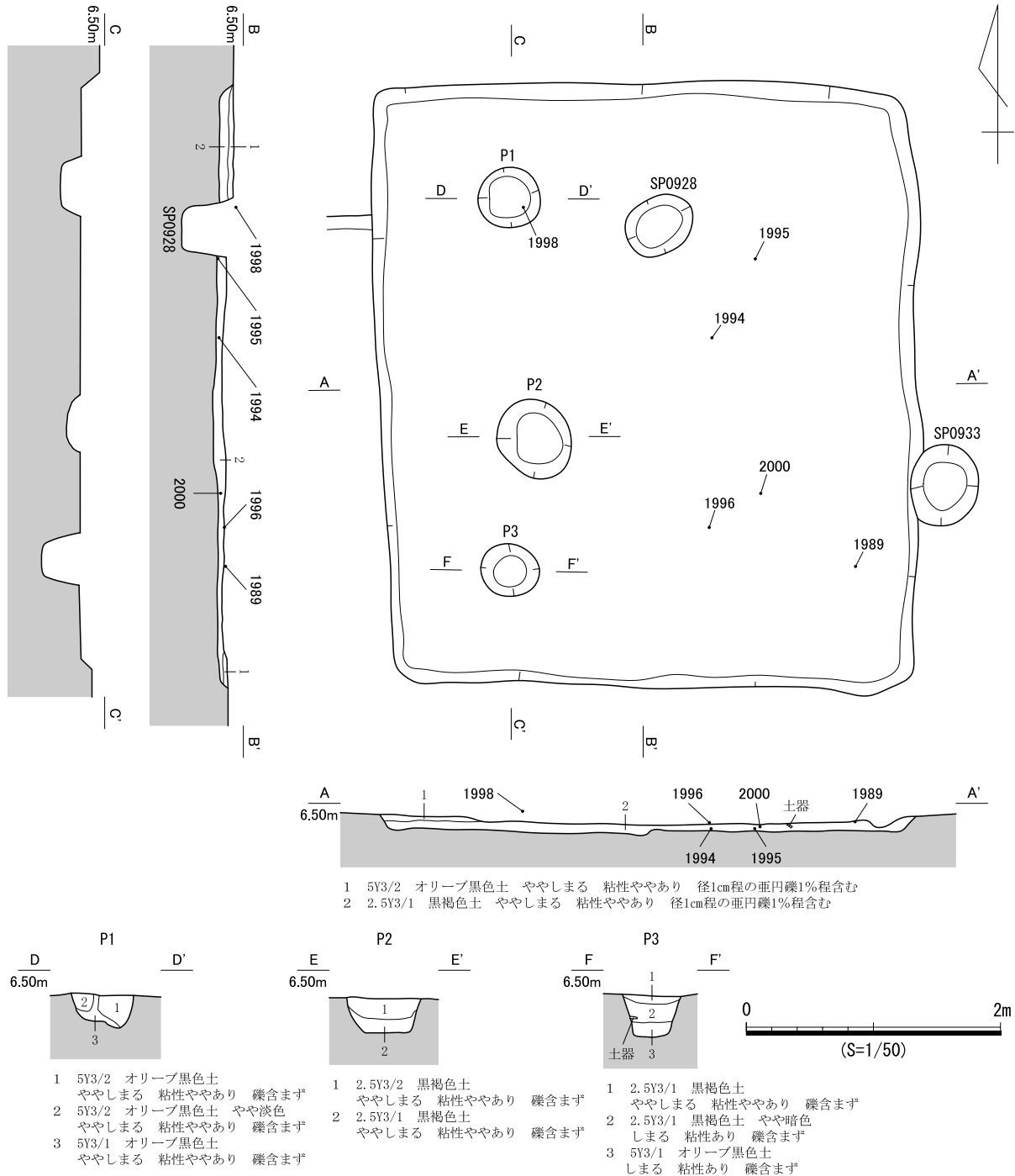


図 796 SB424 遺構図

る。1993はⅧ期甕D3類。口縁部が外方へ屈曲する。1994はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。裾端部をわずかに折り返す。1995はⅥ期～Ⅶ期高坏G2類。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾面を形成する。1996はⅨ期高坏。口縁部が直線的に外傾する。1997はⅦ期高坏D2類。口縁部が内湾しながら開き、端部に内傾面を形成して多条沈線を施文する。1998はⅦ期高坏D類脚部。坏部の径が小さく、内面には顕著に段が認められる。脚部は付根から外反気味に広がり、裾端部でわずかに内湾する。1999は砥石。円礫素材の小型品である。2000は叩石。下端に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅸ期と考えられる。

SB425 (遺構：図 797・799、遺物：図 798)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB402とSB424に切られ、SB426、SB428、SB438を切る。掘形の全形を確認した。

形状 南北長約4.6m、東西長約5.9mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。東辺、西辺、南辺は直線的で、北辺のみやや歪んでいる。壁面は高さ0.2m～0.3mが残り、その傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。埋土中の混入物は少ないが、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考え

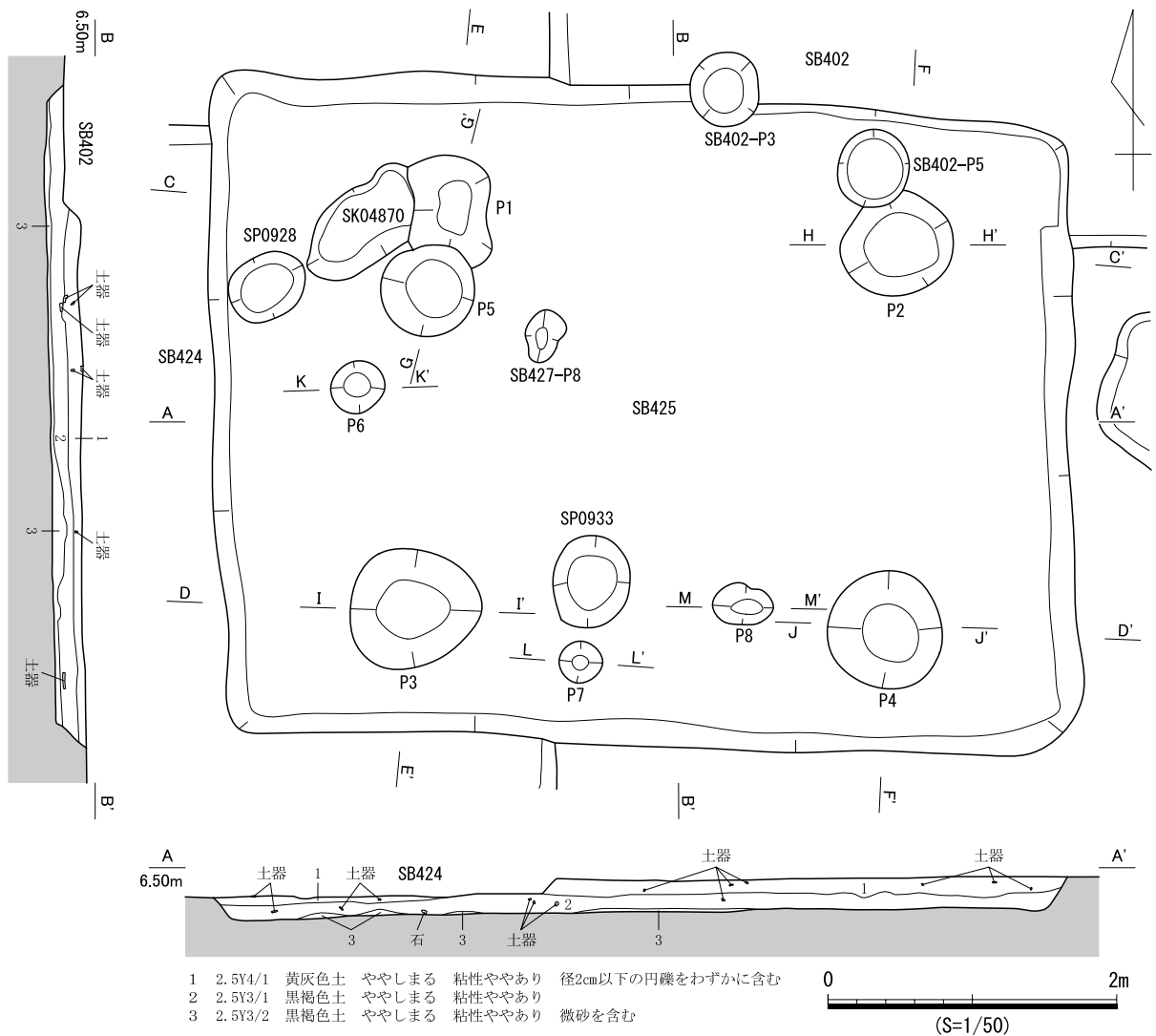


図 797 SB425 遺構図 (1)

られる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴8基を確認し、それらは直径約0.7mと直径約0.3mの規模に分かれる。P1～P5は規模が大きく、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられるが、いずれも柱痕跡は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器3,370点、石器類1点、木製品1点、小穴から土器

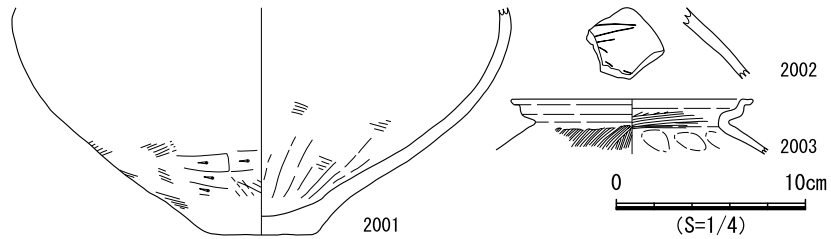


図 798 SB425 遺物実測図

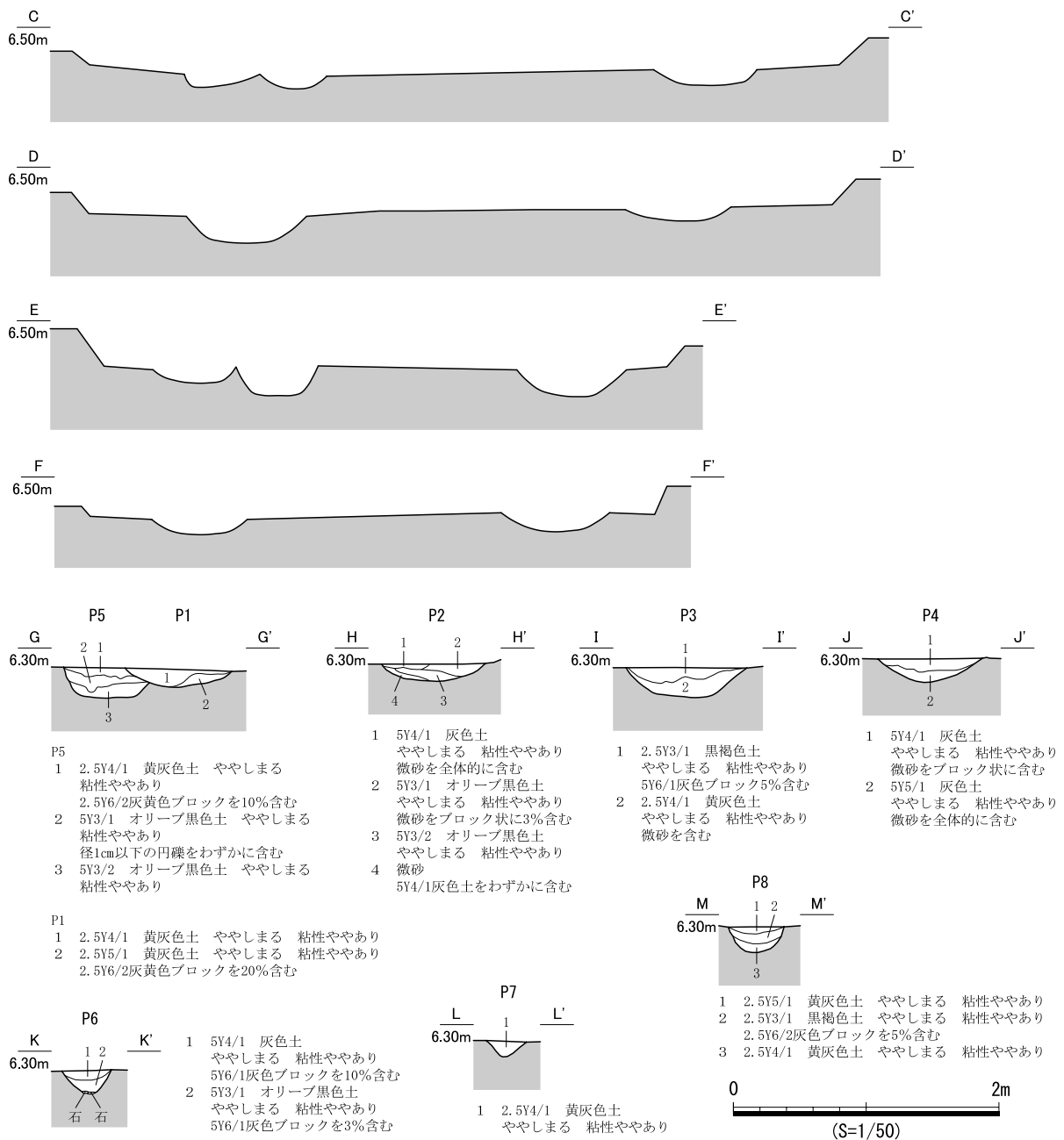


図 799 SB425 遺構図 (2)

99点が出土した。土器は大半がVI期～VII期のものである。

出土遺物 2001はVI期～VII期壺B類。2002はVI期～VII期の線刻のある壺胴部。2003はVII期甕D2b類。口縁端部を外上方へ引き出す。

時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

SB426 (遺構：図800、遺物：図801)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB424、SB425、SB427に切られ、SB428を切る。重複する竪穴住居跡によって、北側の約半分を滅失しており、平面形は不明瞭であった。

形状 東西長約4.8mであり、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面は約0.3mであり、その傾斜は急である。

埋土 4層に分層し、炭化物をわずかに含む。層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴3基確認したが、いずれも明瞭な柱痕跡は認められず、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,395点、小穴から土器19点が出土した。土器の多くはVI期～VII期で

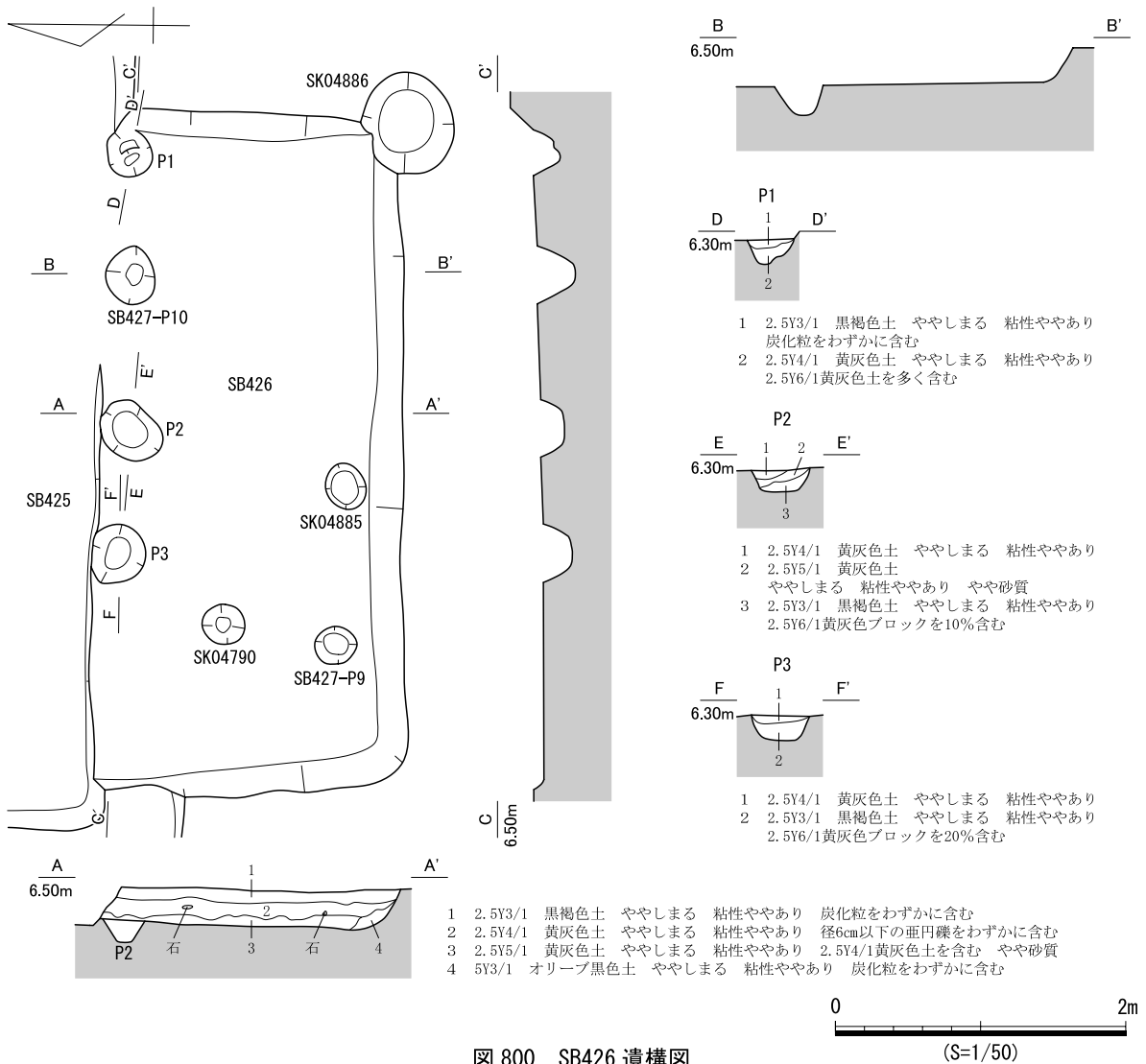


図 800 SB426 遺構図

あり、わずかにIV期も出土した。

出土遺物 2004はVII期壺H2b類。口縁部が内湾して、上半に繊細な文様が認められる。上段は多条沈線、下段は多条沈線間を上下に振幅の小さい山形文を配し、そのなかを2条の多条沈線と刺突文を交互に施文する。刺突文は互いに向きかえ、羽状文的である。2005はVII期高坏G3c類。多条沈線と対向山形文による精緻な文様が認められる。

時期 出土遺物の時期とVII期のSB425に切られることから、VII期と考えられる。



図 801 SB426 遺物実測図

SB427 (遺構：図 802・803、遺物：図 804)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB418、SB424～SB426、SB429に切られ、SB421、SB428、SB437を切る。中央にSB425とSB426が重複しており、床面の多くは滅失している。

形状 南北長は壁溝2、壁溝3の間ともに約5.8m、東西長は壁溝2の間で約8.0mあり、平面形は隅丸長方形である。壁面を確認したのは南東壁付近のみである。深さは約0.2mで、その傾斜は緩やかである。

埋土 部分的にしか確認できていないが、3層に分層した。ブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

床面 確認できた床面は平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。コの字状を呈する壁溝を3条確認した。南側から東側にかけては確認できなかったが、重複する竪穴住居跡によって滅失したと考えられる。小穴は床面上にて15基を確認した。そのうち、明瞭な柱痕跡が認められるのはP2のみである。床面で検出した遺構の新旧関係（以下、A>BはAがBを切ることを示す）は、壁溝3>壁溝2、壁溝3>P5、P5>P2、P6>P3である。壁溝の重複関係から2回以上の建て替えが推定でき、遺構の新旧関係と平面配置から、住居構築時は壁溝1とP1～P3、1回目の建て替え時は壁溝2とP4～P6、2回目の建て替え時は壁溝3とP7～P10が、それぞれ存在していたと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器2,256点と白色粘土塊、小穴から土器69点、壁溝から土器131点が出土した。多くの土器片がVII期にあたる。P3に近接してVII期壺底部(2006)が、P10に近接してVII期甕(2008)が、P12からVII期高坏(2013)が、それぞれ出土した。

出土遺物 2006はVII期壺B類底部。小さな底部から胴部が大きく開き、粗いハケ目が認められる。2007はIV期甕A2類。口縁部が短くくの字屈曲する。端部は強いナデによる凹面を形成し、下端にはタタキの痕跡が残る。胴部には刺突文が認められる。2008はVII期甕B3類。口縁部がくの字に屈折して、端部は断続的な強いナデによって外傾面を形成する。胴部はなだらかに膨らみ、最大径は口径とほぼ同じである。胴部下半にはケズリが認められる。脚部はやや内湾する。2009はVII期甕A3類。口縁部が屈曲して、胴部が強く膨らむ。2010はVII期甕E3類。口縁部が短くくの字に屈曲して、端部には断続的な強いナデによる外傾面を形成する。胴部はなだらかに膨らみ、最大径は口径をやや上回る程度で、胴部中位に位置する。底部は平底で、例外的な資料である。2011はVI期～VII期甕D類胴部。2012はVI期～VII期高坏G2類。口縁部が内湾して、端部下端を肥厚させた内傾面を形成する。2013はVII期高坏D4類。内面を多条沈線と山形文で施文する。2014はVII期高坏D類。破断面に強く煤が付着する。2015はVI期～VII期手捏ねC類。口縁部に打ち欠きが認められる。2016、2017はVI期～VII期手捏ねB類。

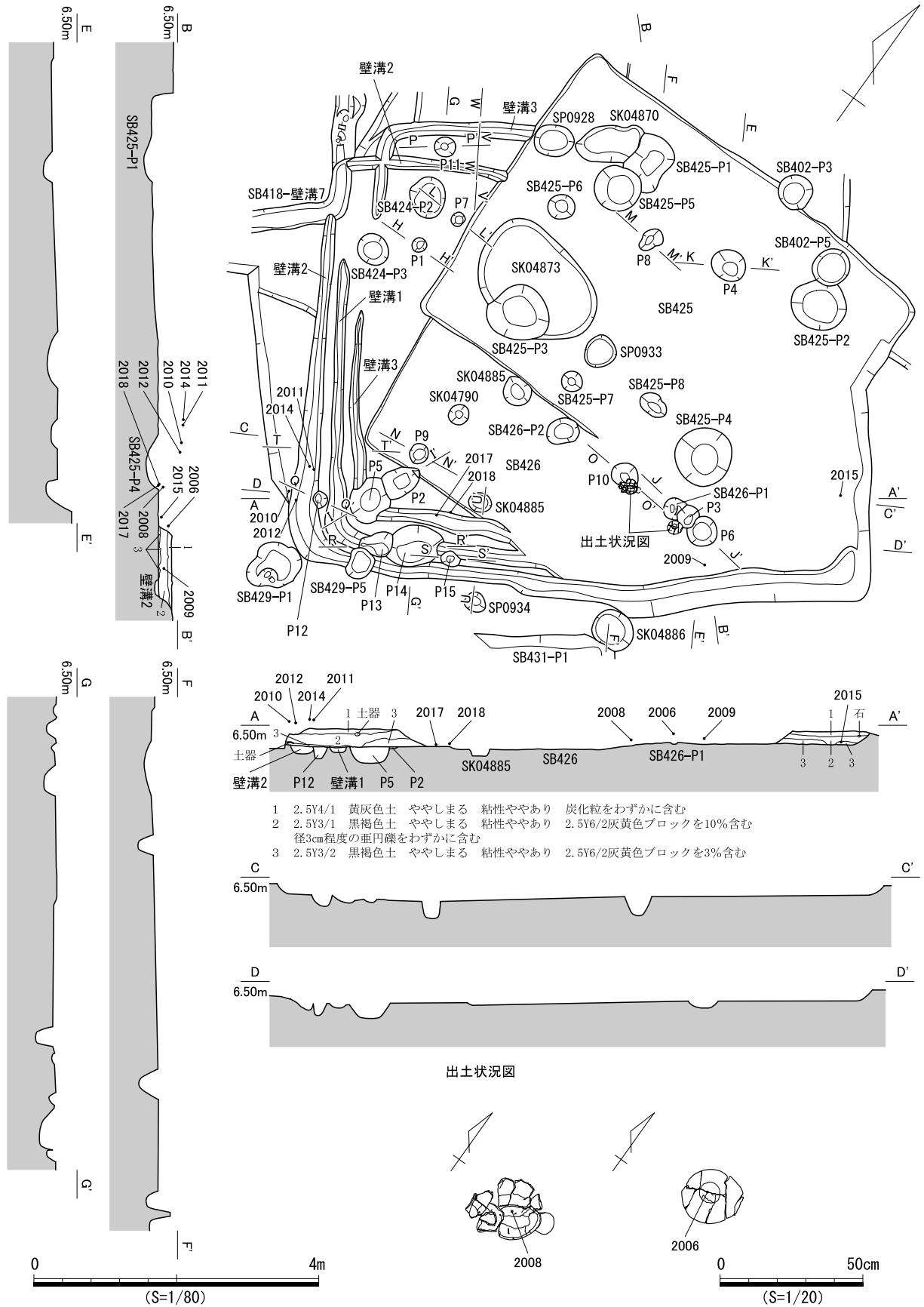


図 802 SB427 遺構図 (1)

2016はやや大型品。2018はⅥ期～Ⅶ期手捏ねE類。口縁部が短く屈曲し、壺形を呈する。丁寧な整形である。2019は連弧状の線刻にみえる文様が認められる。胎土はⅣ期の土器に類似するので、Ⅳ期の土器の文様の一部かもしれない。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

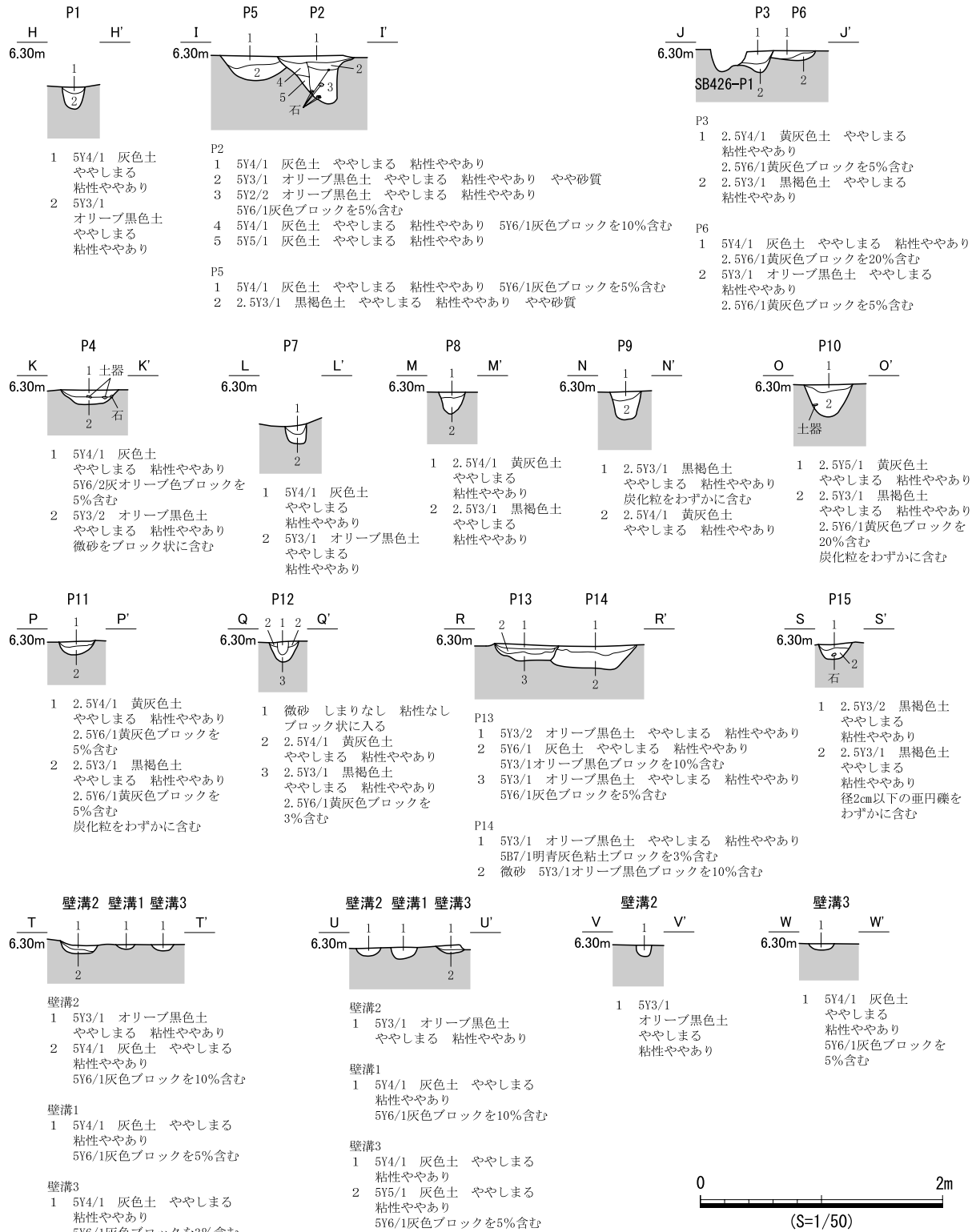


図 803 SB427 遺構図 (2)

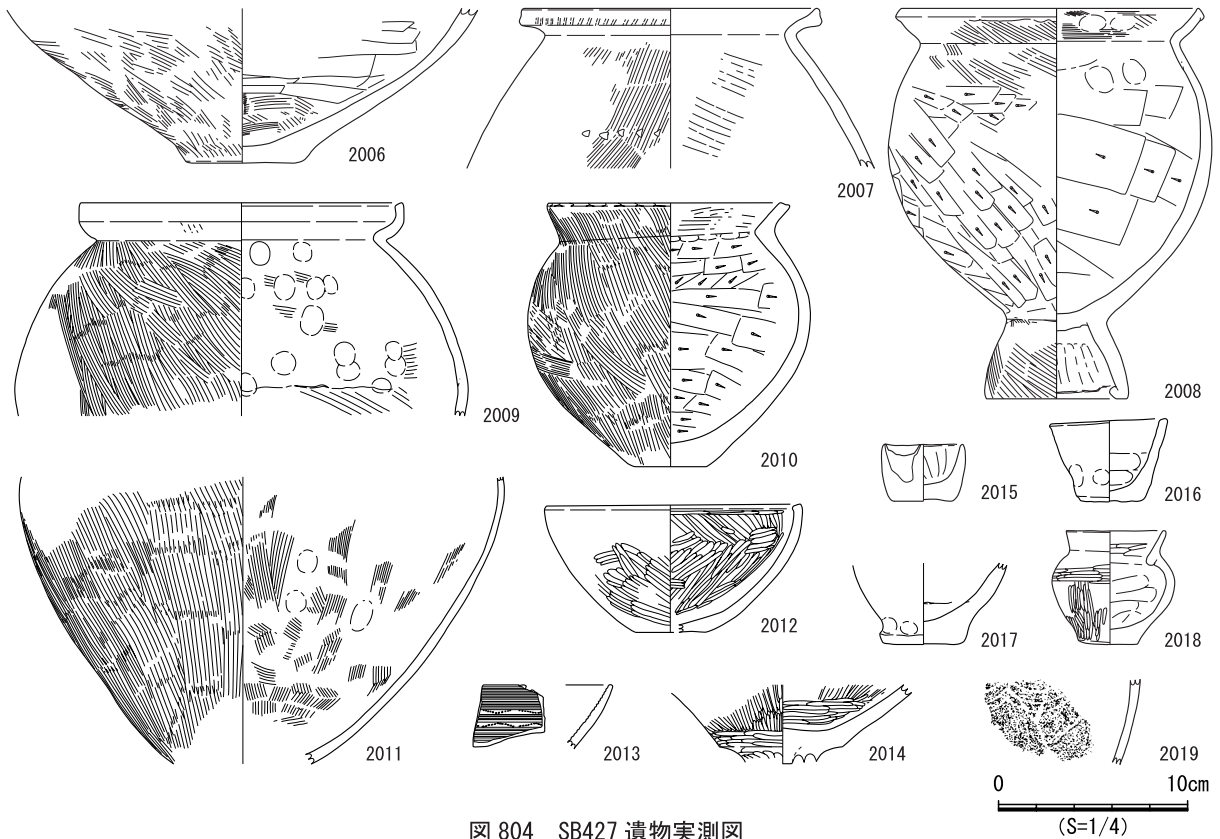


図 804 SB427 遺物実測図

SB428 (遺構：図 806・807、遺物：図 805)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB402、SB404、SB424～SB427に切られ、SB401とSB419を切る。南辺は重複する竪穴住居跡によって失われている。

形状 東西長約5.9mであり、隅丸方形を呈する。北辺、東辺、西辺ともにやや歪んでおり、西辺は南側が外側へわずかに膨らむ。壁面は北壁の遺存状況がよく、ほぼ直立する。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土が混入し、層界の凹凸がみられることから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴を1基のみ確認したが、その性格は不明である。また、重複する竪穴住居跡の床面で検出した小穴も含めて検討したが、柱穴の推定は困難であった。

遺物出土状況 埋土中から土器1,619点、石器類1点、小穴から土器3点が出土した。土器の多くはVI期～VII期のもので、わずかにIV期の土器が出土した。

出土遺物 2020はVII期甕A2b類。口縁部が強く屈曲する。胴部には粗いハケ目が認められる。2021はVI期～VII期甕脚部。脚部が直線的に伸びる。

時期 出土遺物の時期とVII期の竪穴住居跡群に切られることから、VII期と考えられる。

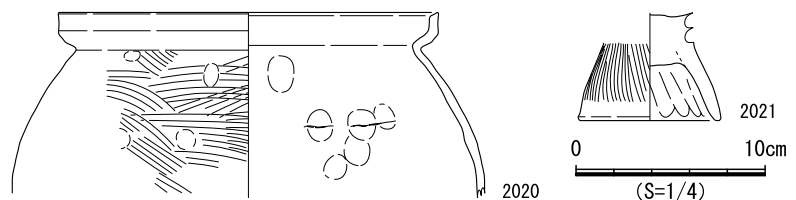


図 805 SB428 遺物実測図

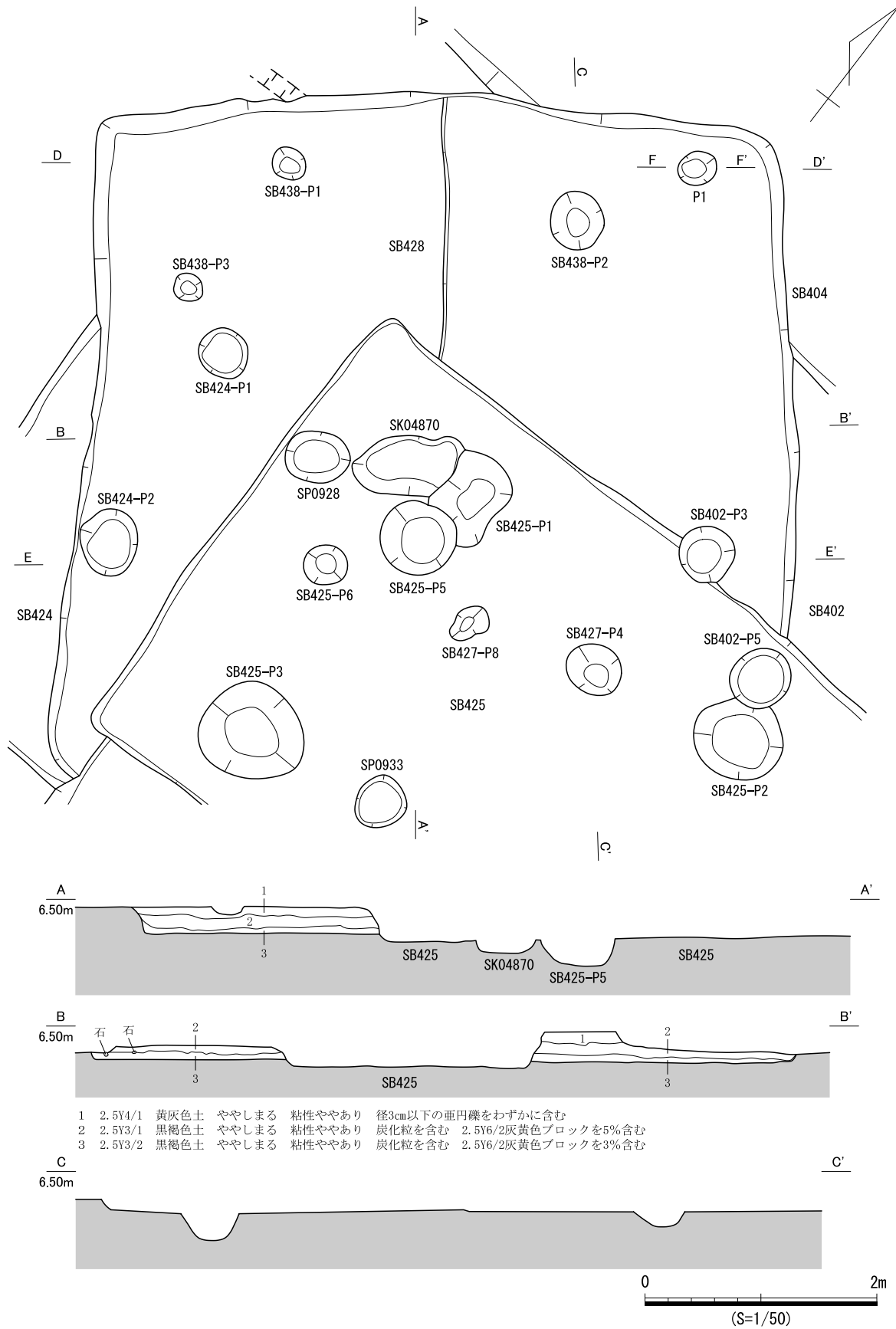


図 806 SB428 遺構図 (1)

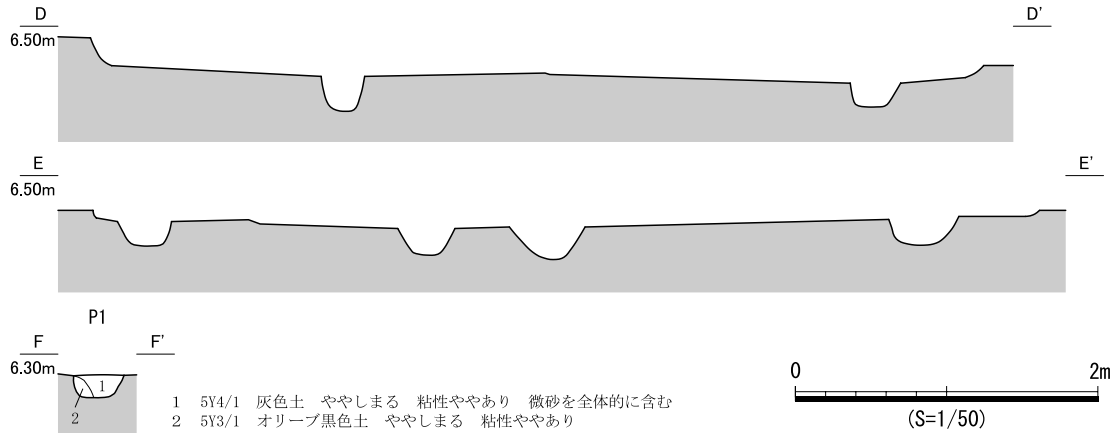


図 807 SB428 遺構図 (2)

SB429 (遺構：図 808～810、遺物：図 811・812)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB427、SB431、SB432、SB435～SB437を切り、周辺の重複する竪穴住居跡なかでは最も後出する。掘形の全形が確認でき、壁面の残りの良い住居跡である。

形状 南北長約 5.3 m、東西長約は 5.2 m で、平面形は隅丸方形である。西辺と南辺は直線的で、北辺と東辺はやや歪む。深さ約 0.2 m～0.3 m であり、西壁と南壁の傾斜はほぼ直立するが、北壁と東壁の傾斜は緩やかである。

埋土 8層に分層し、下層は炭化粒を含む。ブロック土の混入が顕著であることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上で3ヵ所の炭化物集中と、24基の小穴を確認した。平面的な位置関係からP2～P4が柱穴と考えられ、P3では柱痕跡を確認した。P8～P10は平面形が不整形な楕円形を呈し、深さが0.1 mにも満たない。調査時に炉跡の可能性を検討したが、底面や壁面に被熱痕は認められなかった。P7の底面では砥石(2059)が横位で出土した。

遺物出土状況 埋土中から土器 6,850 点、石器類 13 点、小穴から土器 529 点、石器類 2 点が出土した。遺物の多くは上層からの出土であり、土器は大半がⅦ期のものである。また、床面上の遺構では、P6からⅤ期の壺(2022)、P7底面から砥石(2059)、P16からⅦ期壺(2024)とⅦ期高坏(2049)、P24からⅦ期高坏(2041)が出土した。

出土遺物 2022、2023はⅤ期壺K類。2022は生駒西麓産で口縁端部下端を拡張して、円形浮文が認められる。2023は脚付壺の胴部。突帯を2条貼付して棒状浮文が認められる。2024はⅦ期壺A3類。頸部がやや屈曲し、口縁端部を拡張する。内面には羽状文を施文する。2025はⅦ期壺C類。口縁部がやや外反しながら、直線的に伸びる。2026はⅦ期壺H2a類。口縁部が内湾する。2027、2028はⅦ期甕D2類。2029～2031はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が直立してから外反し、端部は凹面を形成する。2030の胴部は肩部が強く張り、倒卵形を呈する。2032はⅦ期甕E3類。口縁部が短く屈折して、端部には断続的な強いナデが認められる。2033、2034はⅦ期甕脚部。2033は外反気味で、2034は脚部が短く内湾する。2035はⅦ期甕D類脚部。直線的に脚部が伸び、端部には打ち欠きが認められる。2036はⅦ期鉢G類。口縁部が短く外反する。外面には丁寧なミガキが認められる。小さな底部から口縁部

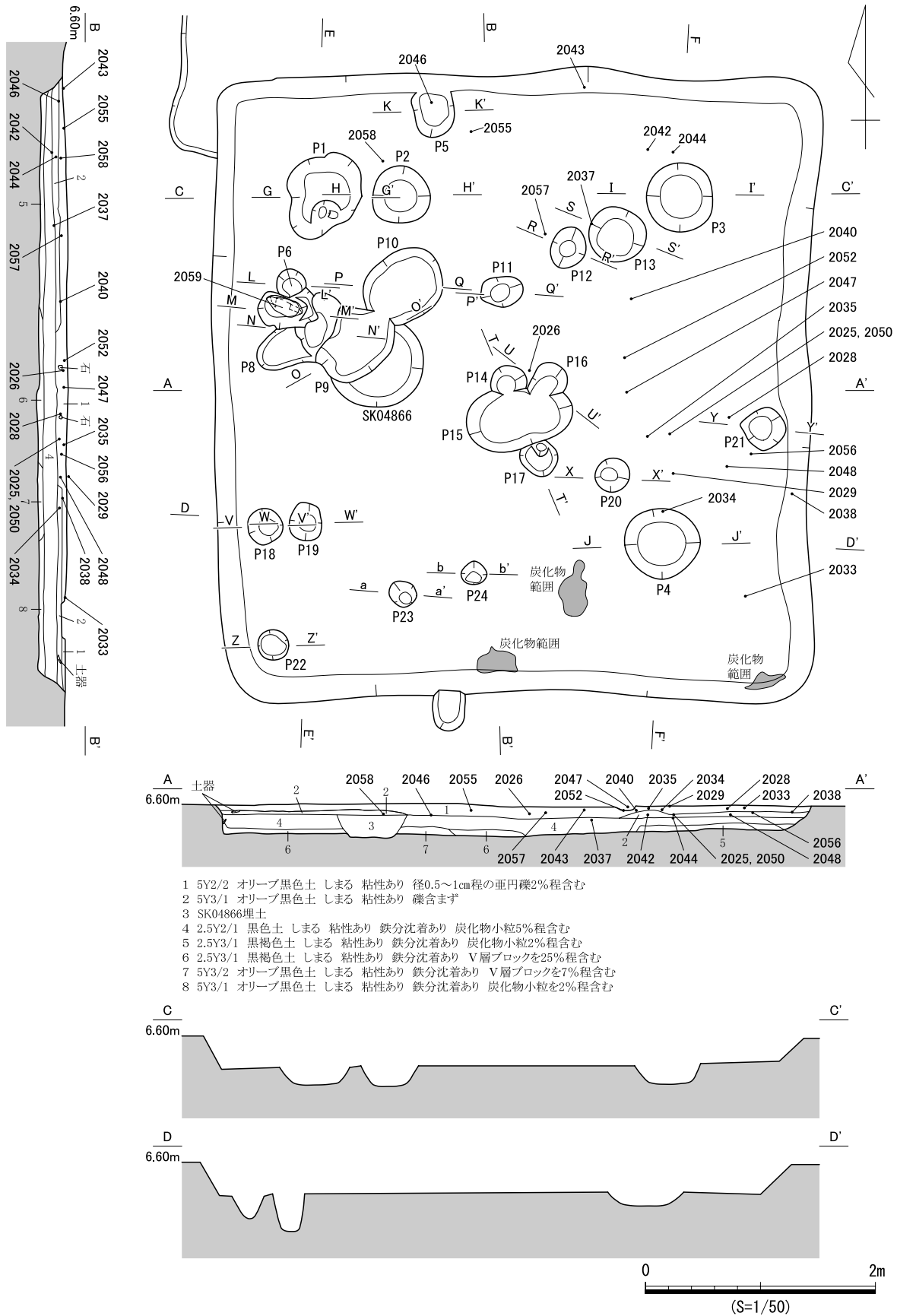


図 808 SB429 遺構図 (1)

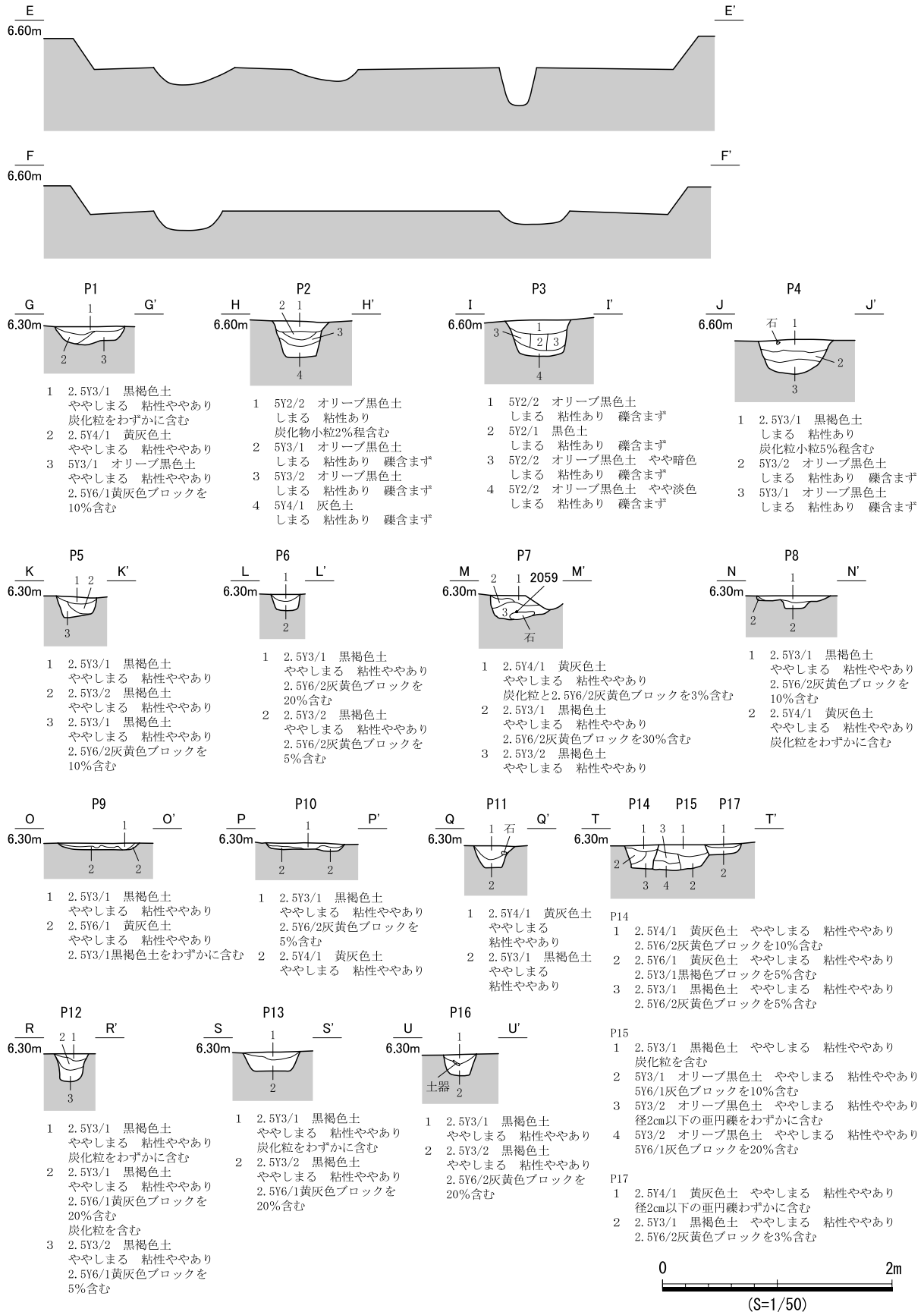


図 809 SB429 遺構図 (2)

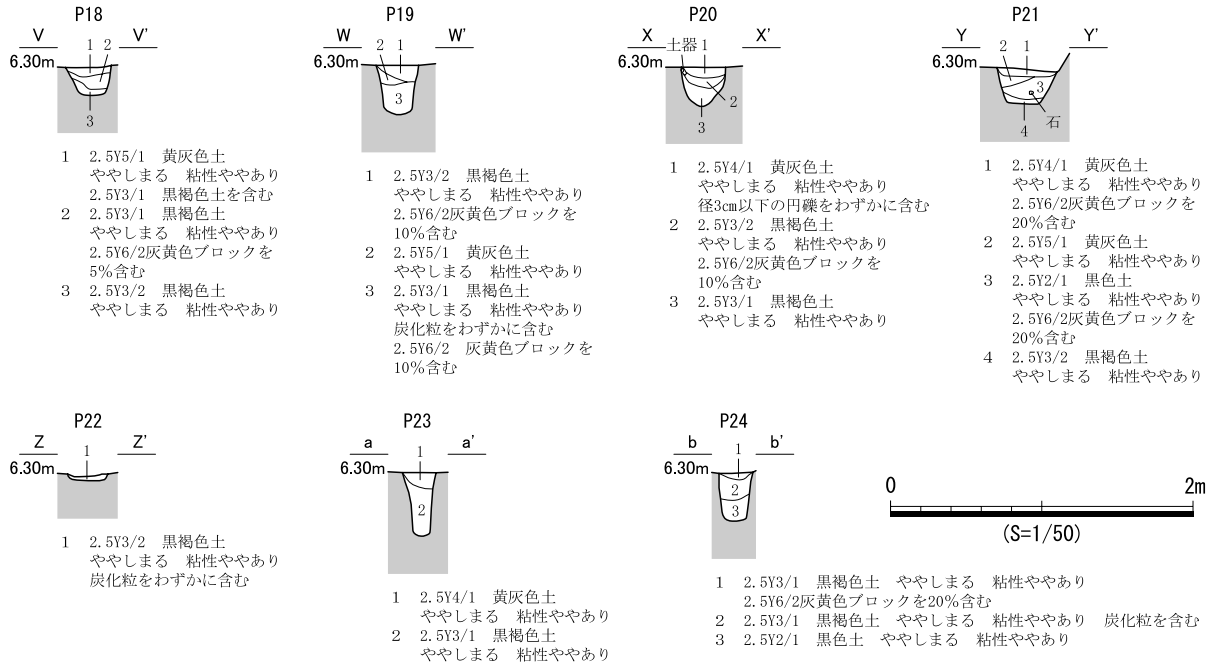


図 810 SB429 遺構図 (3)

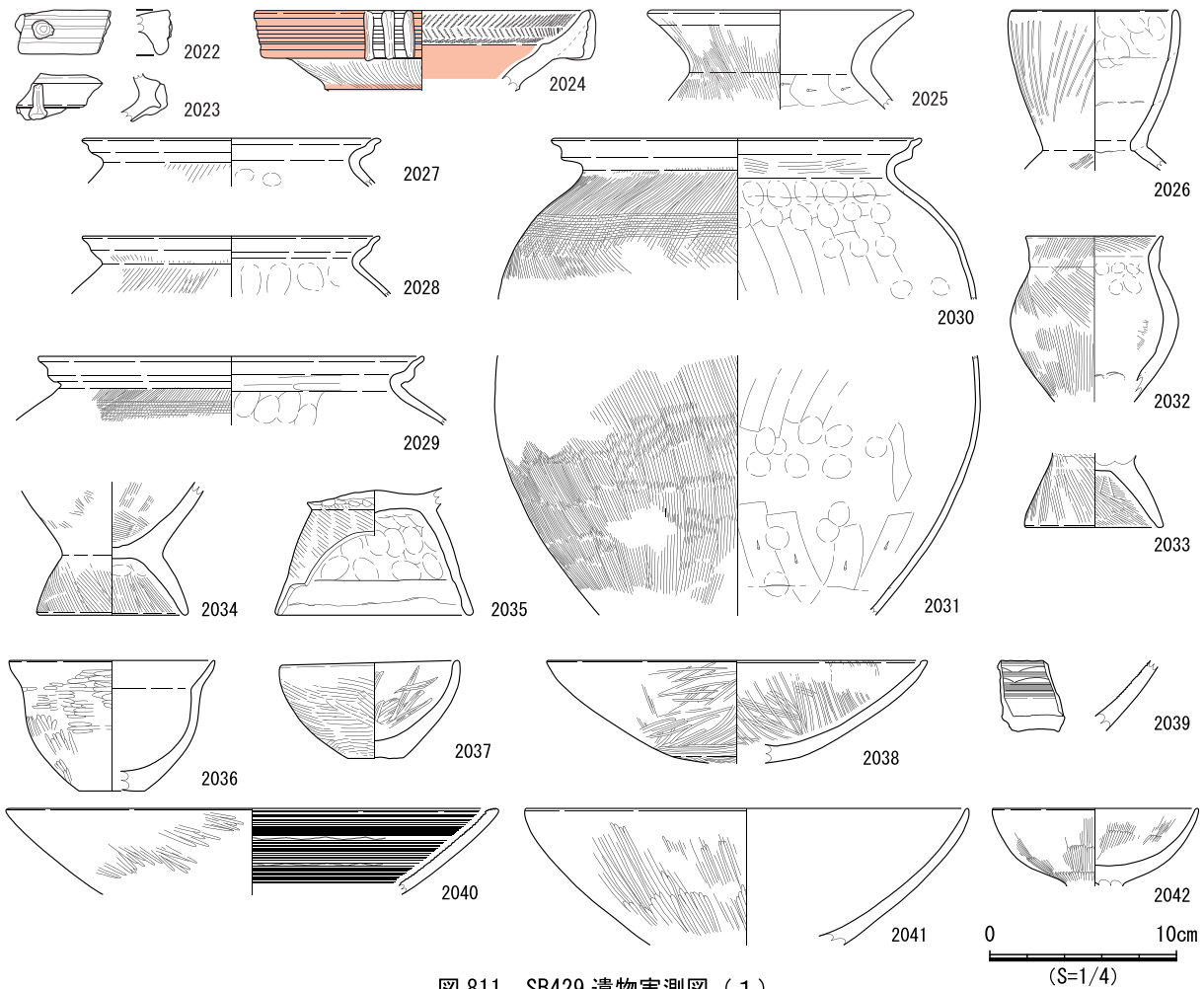


図 811 SB429 遺物実測図 (1)

が内湾して立ち上がる。外面には粗いハケ目が認められる。2037はⅦ期鉢F類。2038はⅦ期高坏D1類。口縁部がやや内湾しながら大きく開く。坏底部にはわずかに残る段が認められる。内外面、破断面に煤が付着する。2039はⅦ期高坏D5類。2040はⅦ期高坏D4類。口縁端部の内傾面の多条沈線を施文し、その下にも多条沈線と山形文を交互に施文する。2041はⅦ期高坏C4a類。口縁部がやや内湾しながら立ち上がる。2042はⅥ期～Ⅶ期高坏H1類。口縁部が内湾する。内外面には丁寧なミガキが認められる。2043はⅤ期高坏B類脚部。裾部に透孔が位置する。2044、2045はⅦ期高坏D類脚部。2045は内面に煤が付着する。2046はⅦ期高坏G脚部。脚部が裾部で屈折する。内面に煤が付着する。2047はⅦ期高坏D類坏底部。口縁部が大きく開き、内面にわずかに残る段が認められる。2048、2050はⅦ期高坏D類脚部。脚部は付根からやや外反気味に広がり、裾部で内湾する。坏底部には段が認められる。2049はⅦ期高坏C類脚部。裾部が内湾する。2051はⅦ期器台C2類。口縁部が短く伸び、端部は丸くおさめる。2052はⅦ期手捏ねE類。器台に類似する。2053はⅦ期手捏ねB類。2054～2056は叩石。敲打痕の

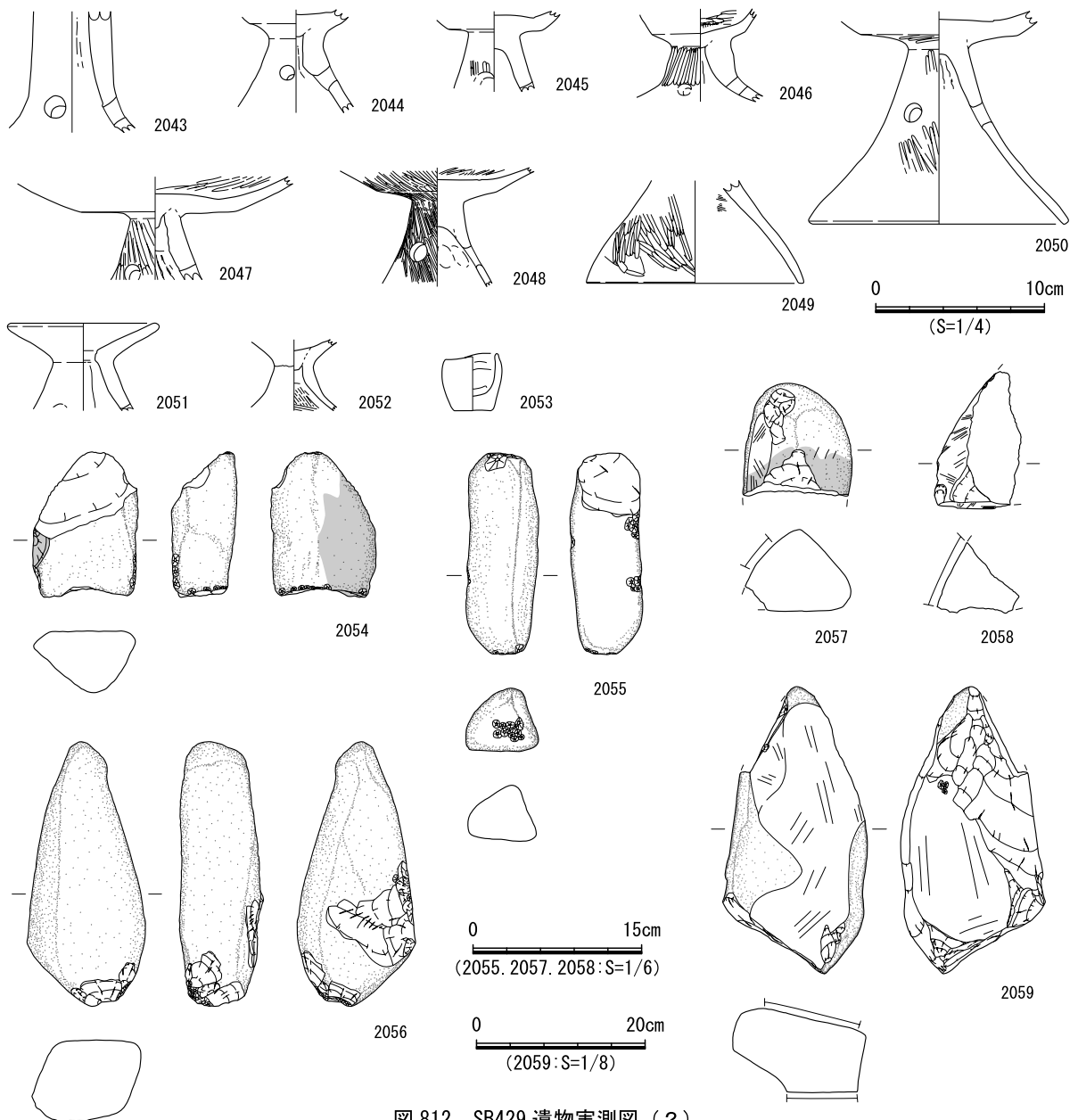


図 812 SB429 遺物実測図 (2)

位置は、2054が側面から下端に、2055が上下端部と側面に、2056が下端に確認できる。2057～2059は砥石。1～2面の砥面が観察でき、2057は被熱のため部分的に赤変しており、2059は長さ33.9cmの大型砥石である。なお、2059には自然面が残る。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB430 (遺構：図814・815、遺物：図813)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB429、SB439、SB440に切られ、SB431とSB435を切る。北辺はSB429によって滅失し、南西隅部は調査区域外にある。

形状 北東－南西長約6.1mであり、確認した各辺は直線的で平面形は方形を呈する。壁面は高さ約0.2mで、その傾斜は急である。

埋土 3層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて小穴17基を確認した。P15を除いて柱痕跡は認められず、柱穴配置の推定は困難である。なお、P15は検出面中央に多くの礫が表出しており、明らかに他の小穴とは異なっていた。

遺物出土状況 埋土中から土器3,397点、石器類3点、小穴から土器180点が出土した。土器の多くはⅥ期～Ⅶ期のもので、わずかにⅠ期の土器片が出土した。土器片には二次的な被熱痕跡があるものや、打ち欠きのあるものが認められた。なお、P14からⅦ期高坏(2064)が出土した。

出土遺物 2060はⅦ期壺A類の小型品。口頸部を欠損するが、胴部はほぼ完存する。胴部は下膨れで、上半がなだらかに内湾する。胴部上半3分の1程度に精緻な直線文と連弧文を交互に施文する。2061

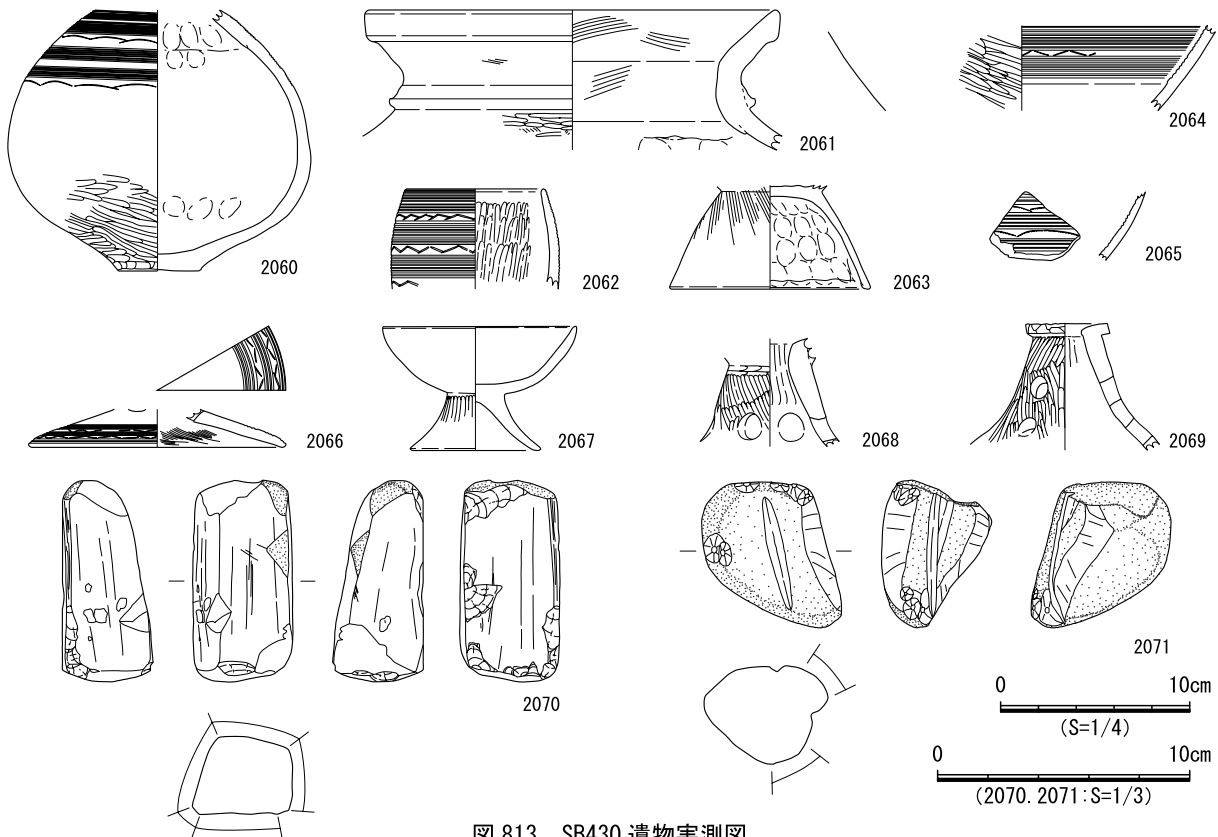


図813 SB430 遺物実測図

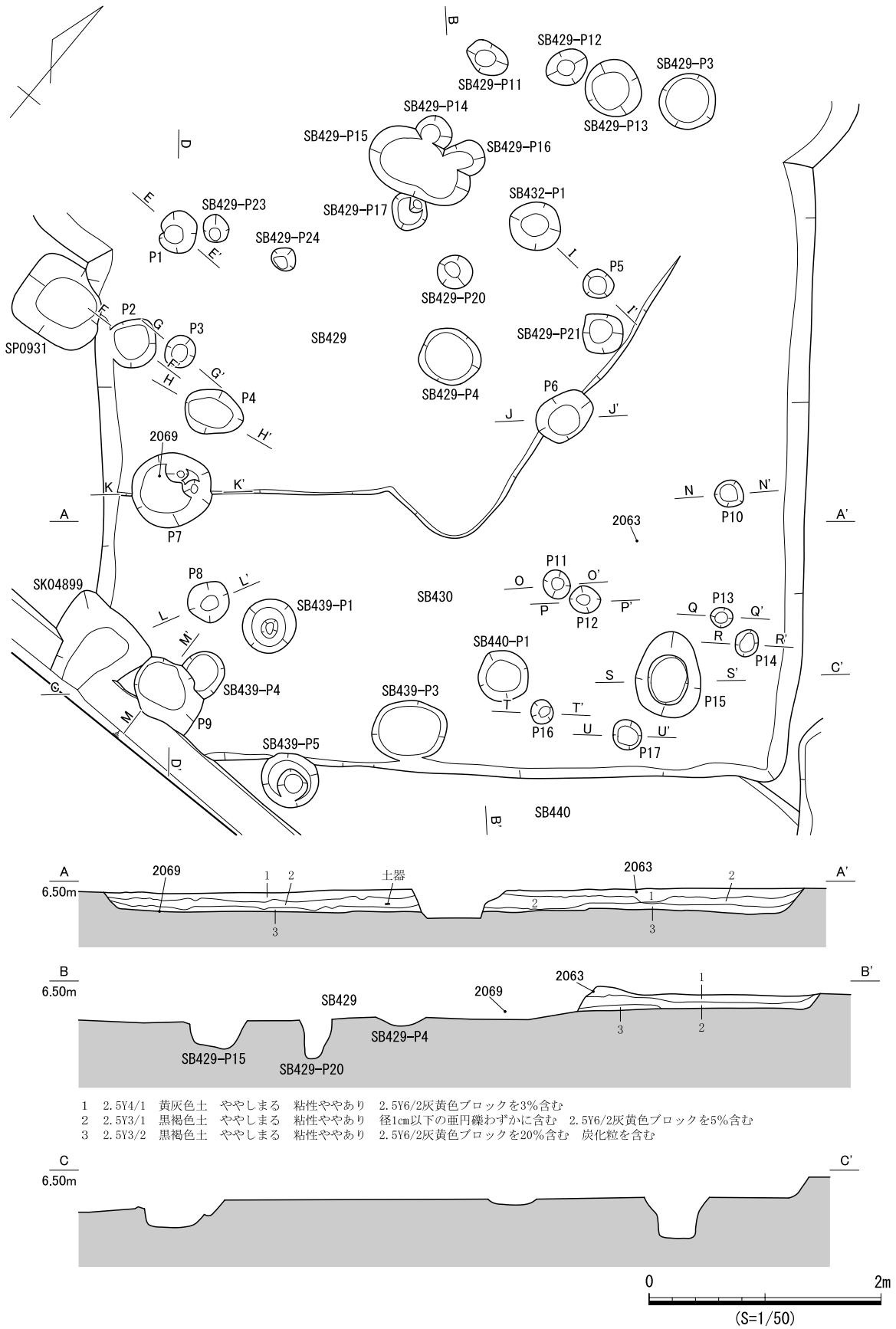


図 814 SB430 遺構図 (1)

はⅦ期壺A1b類。頸部にややつくりの雑な断面三角形の突帯を貼付する。2062はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾し、多条沈線と山形文が施文される。2063はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。脚裾端部をわずかに折り返す。2064はⅦ期高坏C3d類。内面に多条沈線と振幅の小さい山形文が施文される。2065はⅦ期高坏D5類。内面に少条の多条沈線と貝による連弧文を交互に施文する。連弧文は2回の押圧によって、



図 815 SB430 遺構図 (2)

1 単位の連弧文を構成する。2066はⅦ期高坏G3c類脚部。少条の多条沈線間に振幅の小さい山形文を施文する。2067はⅦ期高坏H1類。口縁部が内湾し、脚部が短く外反する。2068、2069はⅥ期高坏C類脚部。2068には並列する穿孔、2069は縦位に配置される穿孔が認められる。2069の内外面に煤が付着する。2070、2071は砥石である。2070は断面方形で砥面は4面である。2071は小さな垂円礫を素材とする筋砥石である。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB431 (遺構：図816)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB429、SB430、SB433に切られ、SB432を切る。SB430などの重複する竪穴住居跡によって、掘形の西半分程度を失っている。

形状 北西-南東長約5.3mで、不整形を呈する。壁面は北壁と南壁が高さ約0.1m～0.2mで、その傾斜は緩やかである。

埋土 3層のに分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて8基の小穴を確認した。P8で柱痕跡を確認したが、他の小穴は底面が丸く、深さが約0.2mと浅い。住居の全形が不明であるため、柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況 埋土中から土器1,288点、小穴から土器21点が出土したが、いずれも小片であり図示していない。

時期 Ⅶ期のSB429、SB430に切られ、Ⅶ期のSB432を切ることから、Ⅶ期と考えられる。

SB432 (遺構：図817・819～822、遺物：図818)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB429～SB431、SB439、SB440に切られ、重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。検出時には西壁南側が残っていなかったが、掘形底面によりほぼ全形を確認した。

形状 南北長約5.6mで、東西長約5.4mで、隅丸方形を呈する。北辺、東辺、南辺はわずかに外側へ膨らむが、西辺は直線的で、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 床面までは2層に分層した。炭化粒とブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。3～5、11層は掘形埋土である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床は認められなかった。床面上にて17基の小穴(P1～P17)を検出した。いずれも土層断面で柱痕跡を確認できなかったが、平面的な位置関係からP1、P4、P430-P4(あるいはP1、P5、P14)の3基が柱穴と考えられる。また、中央南寄りで長さ0.52m、深さ0.05mの地床炉を検出した。検出面は被熱による硬化が顕著であったが、底面の硬化は認められなかった。

掘形 北壁東側以外の壁面に沿って幅0.5m～1.5mの範囲が溝状に窪み、ブロック土を含む埋土で埋められていた。その上面では複数の小穴を検出していることから、掘形埋土と判断した。掘形の底面はほぼ平坦であるが、西壁と南壁沿いでは幅0.1m～0.2mの溝状の凹みがある。掘形埋土に覆われているので、溝状掘形の一連の凹みと考えられる。なお、この溝底面から9基の小穴(P18～P26)を検出した。P26の位置は床面で検出した柱穴の南東隅に該当するため、床面検出時に平面形を見逃

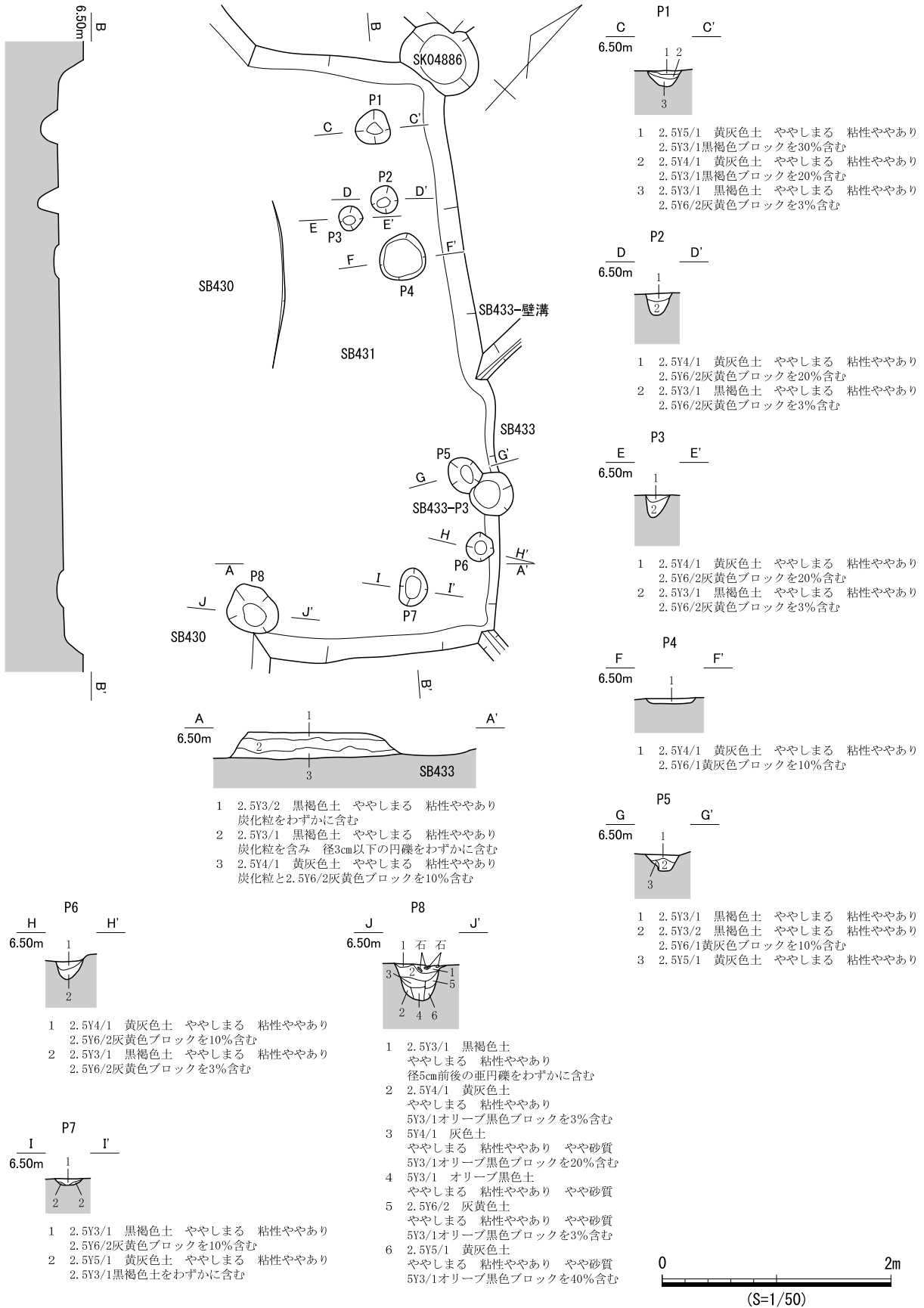


図 816 SB431 遺構図

していた可能性もある。また、住居中央部分もわずかに貼床（整地土）があり、それを掘削した後に4基の小穴（P27～P29）を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器649点、小穴から土器114点、壁溝から土器232点、石器類1点が出土した。土器は主にVI期～VII期のものであり、掘形埋土からVII期の土器片（2072、2073）が出土した。

出土遺物 2072はVII期壺A3類。口縁部が外反する。内面は一旦、屈曲する部位が認められ、端部には擬凹線が認められる。2073はVII期鉢A1類。口縁部が外反して、端部にやや拡張した平坦面が認められる。

時期 掘形出土遺物の時期とVII期の竪穴住居跡群に切られることから、VII期と考えられる。

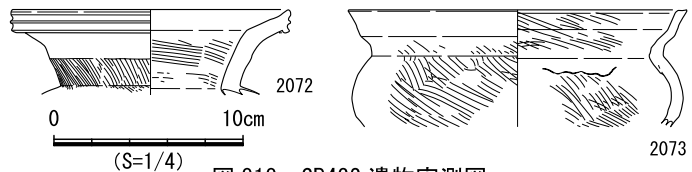


図 818 SB432 遺物実測図

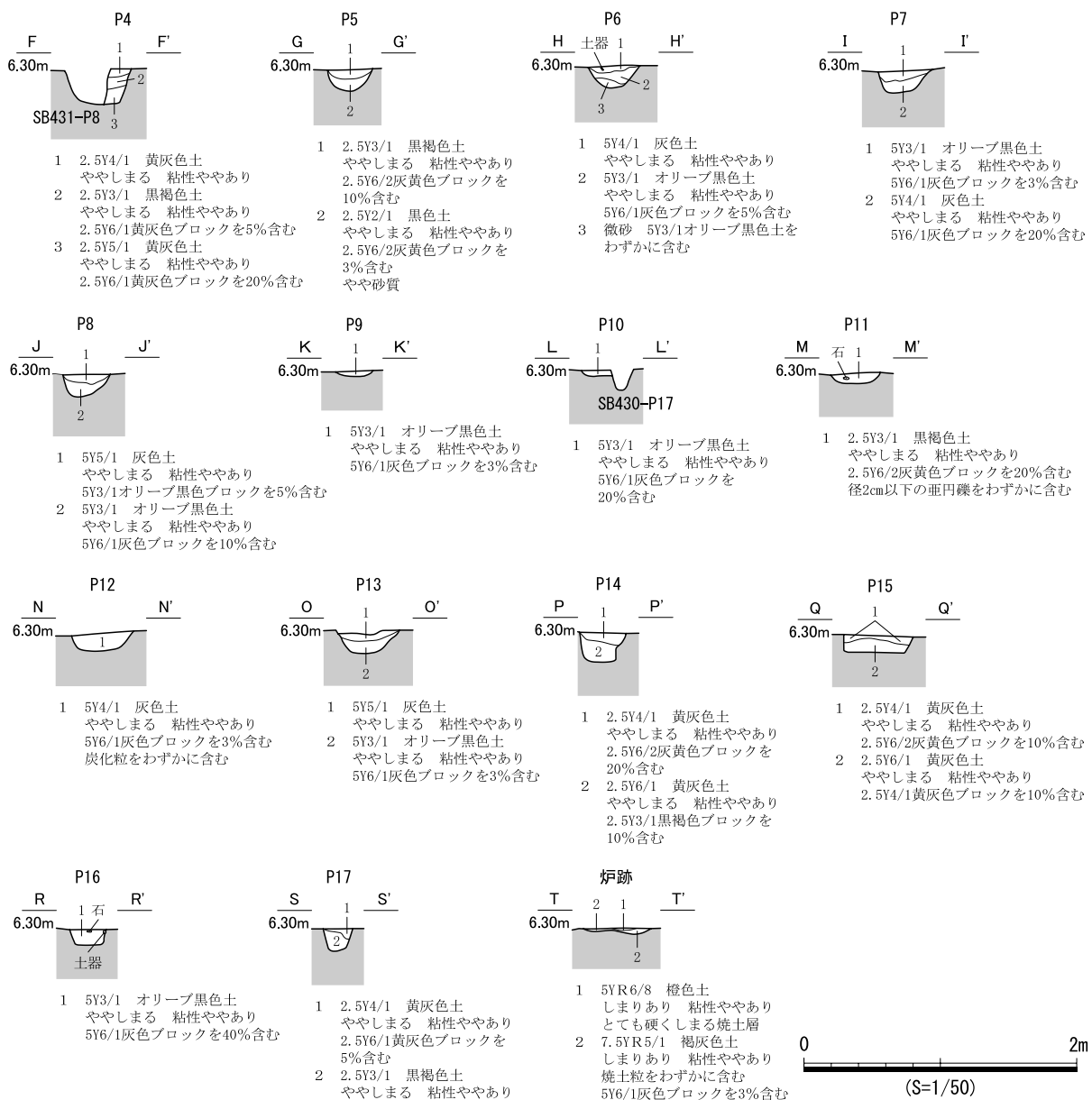


図 819 SB432 遺構図（2）

掘形完掘状況(溝完掘後)

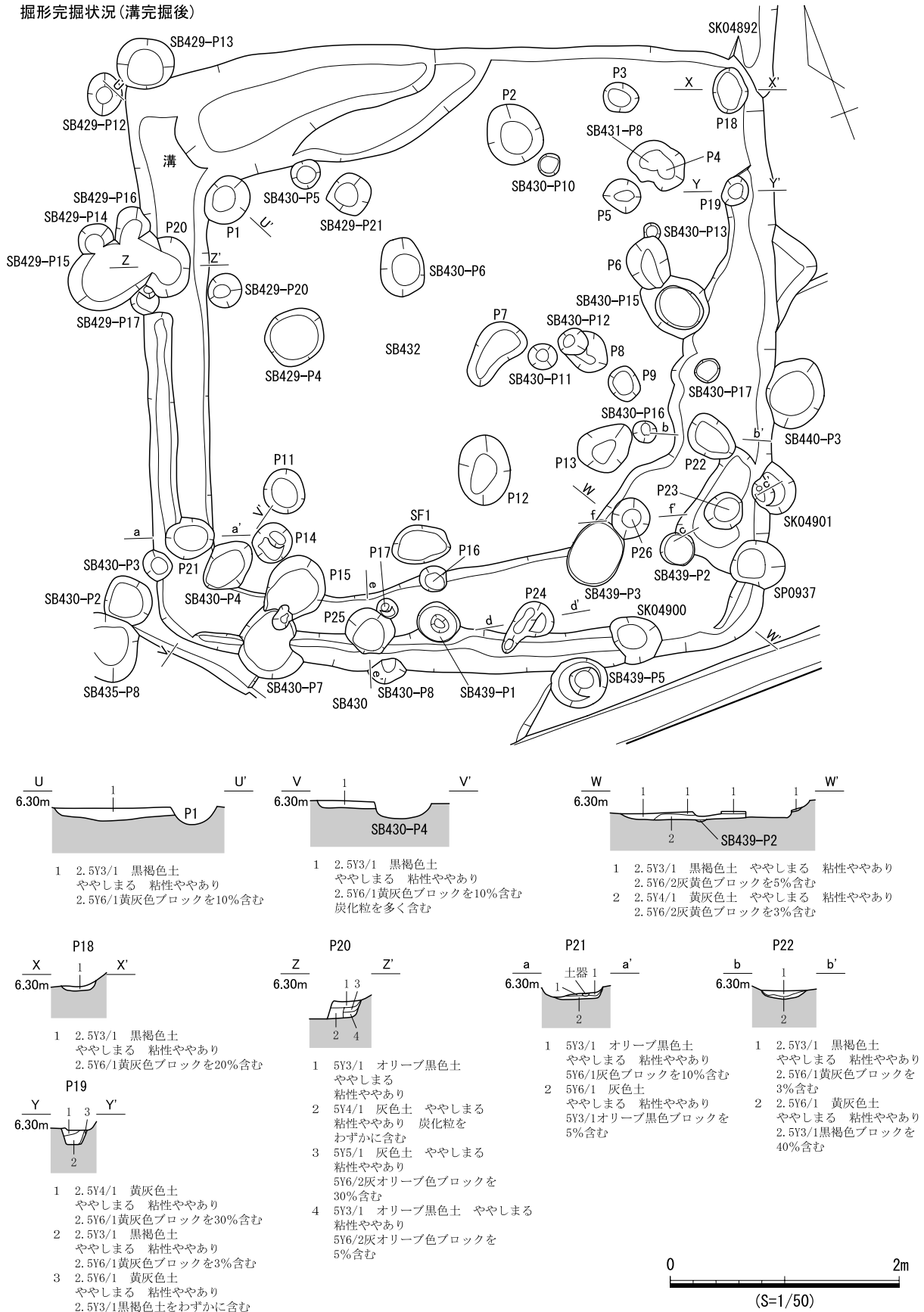


図 820 SB432 遺構図 (3)

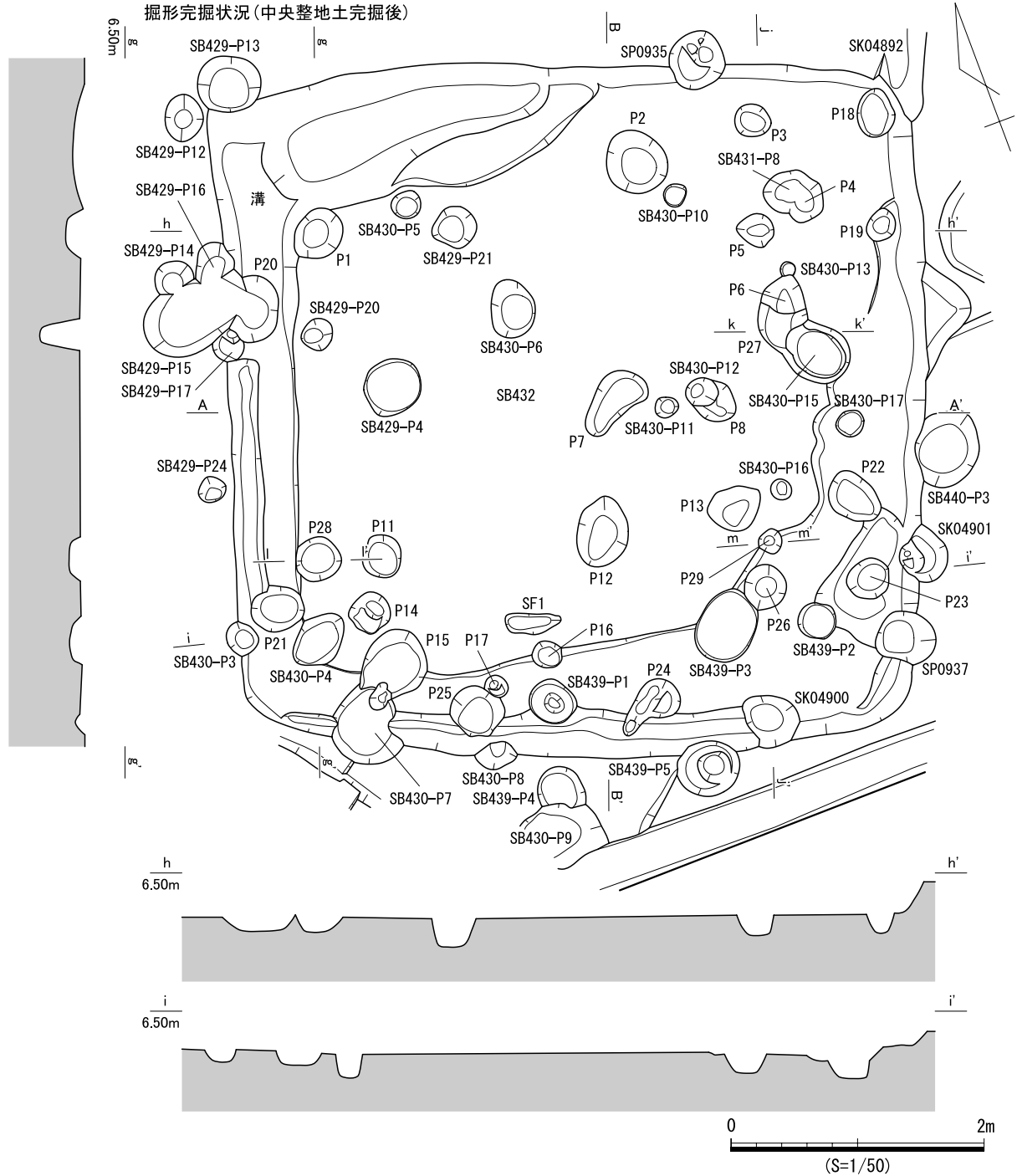
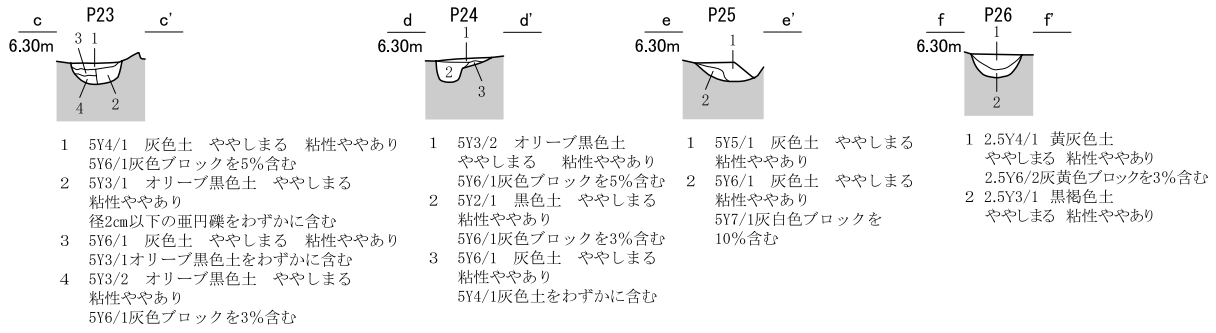


図 821 SB432 遺構図 (4)

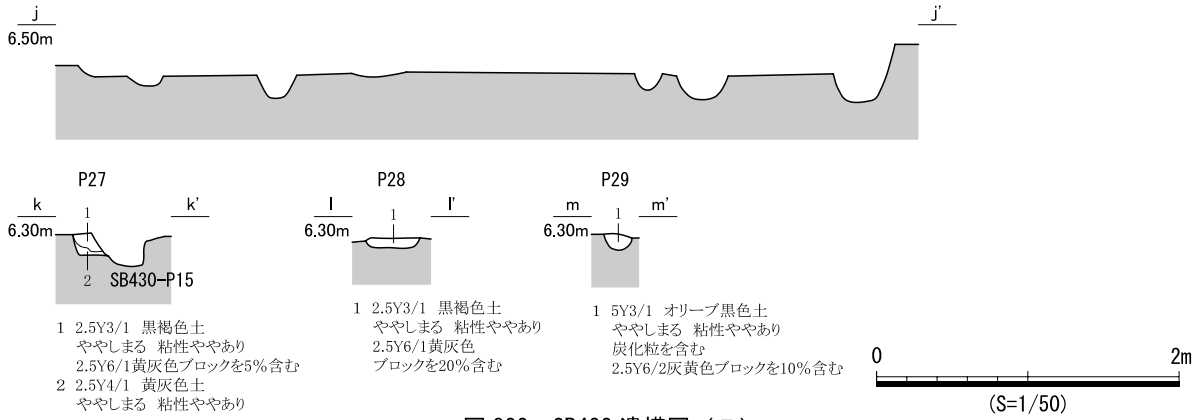


図 822 SB432 遺構図 (5)

SB433 (遺構：図 823・824、遺物：図 825)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB431を切り、東半分は調査区域外にある。

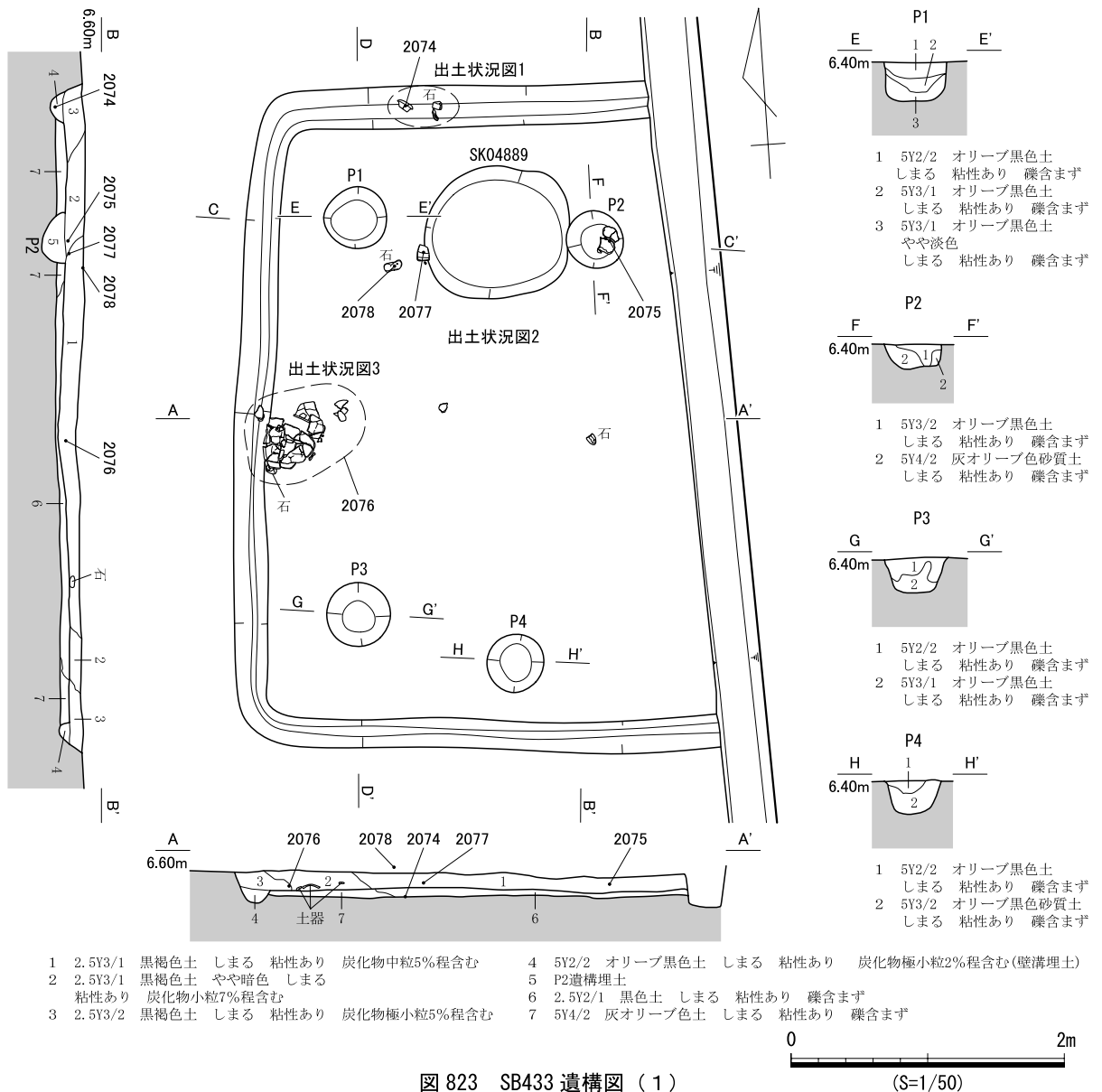


図 823 SB433 遺構図 (1)

形状 南北長約4.9mであり、隅丸方形を呈する。確認できた各辺は直線的であり、壁面の高さは0.1mで、その傾斜はやや急である。

埋土 5層に分層した。1～3層が床面までの堆積土で、6・7層が掘形埋土である。床面上の埋土には炭化物粒が多く含まれ、壁際から堆積が進んでいる。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。硬化面や炉跡は認められなかった。床面上にて4基の小穴を確認した。いずれも直径約0.4m、深さ約0.3m～0.4mで、底面が平坦である。明瞭な柱痕跡は認められなかったが、平面的な位置からP1とP3が柱穴と考えられる。なお、確認した壁面に沿って、幅約0.2mの壁溝が全周している。

遺物出土状況 埋土中から土器1,076点、石器類2点、小穴から土器47点、石器類1点、壁溝から土器67点、石器類1点が出土した。土器の多くはIV期～VII期であるが、V期の土器もわずかに出土し、床面付近で遺存状況のよいIV期壺（2075）、IV期甕（2076）が出土した。2076は大型の甕で、胴部の一部を欠損するのみである。本遺構の下に同時期のSZ150が位置するため、SZ150に伴う土器が何らかの理由で混入した可能性が高い。床面上でVII期高坏（2077）、壁溝からV期～VI期の壺（2074）が出土した。

出土遺物 2074はV期壺A1b類。磨耗が著しく、文様は不明である。頸部が直立気味で、口縁部は強く外反して、端部下端を拡張する。2075、2076はIV期甕A1類。口縁部が短くくの字に屈折する。端部は上下端がやや肥厚する外傾する凹面を形成する。2075は胴部には3段の刺突文が認められる。2076

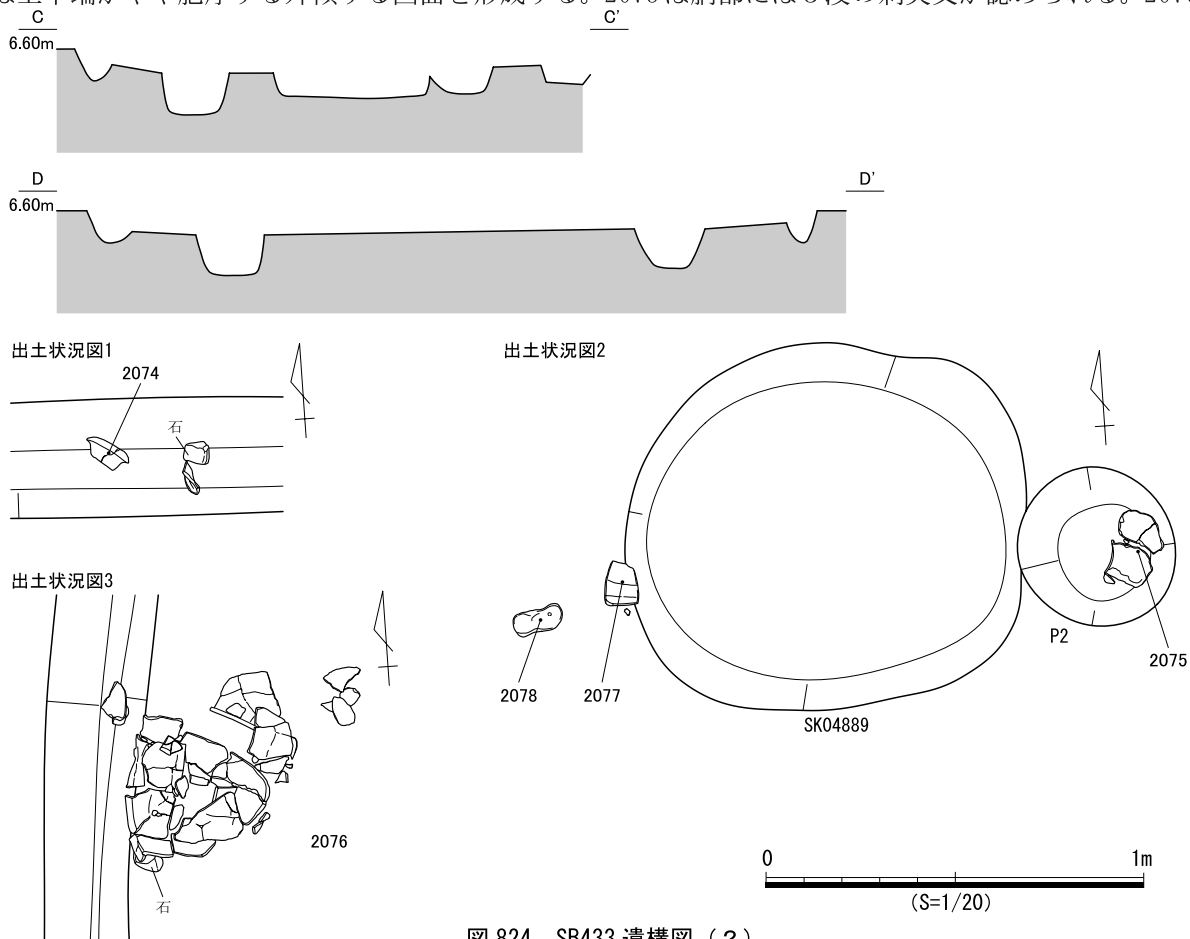


図 824 SB433 遺構図（2）

は頸部から口径を超えない程度に膨らむ。胴部最大径は頸部のすぐ下に位置し、下半は直線的に底部に向かう。他の同類と比べると、胴部上半の形状が異なる。胴部外面には胴部上半にヨコ方向、胴部下半は右下がりのタタキが認められる。内面は底部から胴部中央までケズリが及ぶ。底部外面にはハケ目が認められる。2077はⅦ期高坏D4類。内面に多条沈線と山形文を交互に施文し、文様帯最下段は段ではなく、太い沈線を1条加える。2078は砥石。砥面は2面で、側縁に敲打痕が残る。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

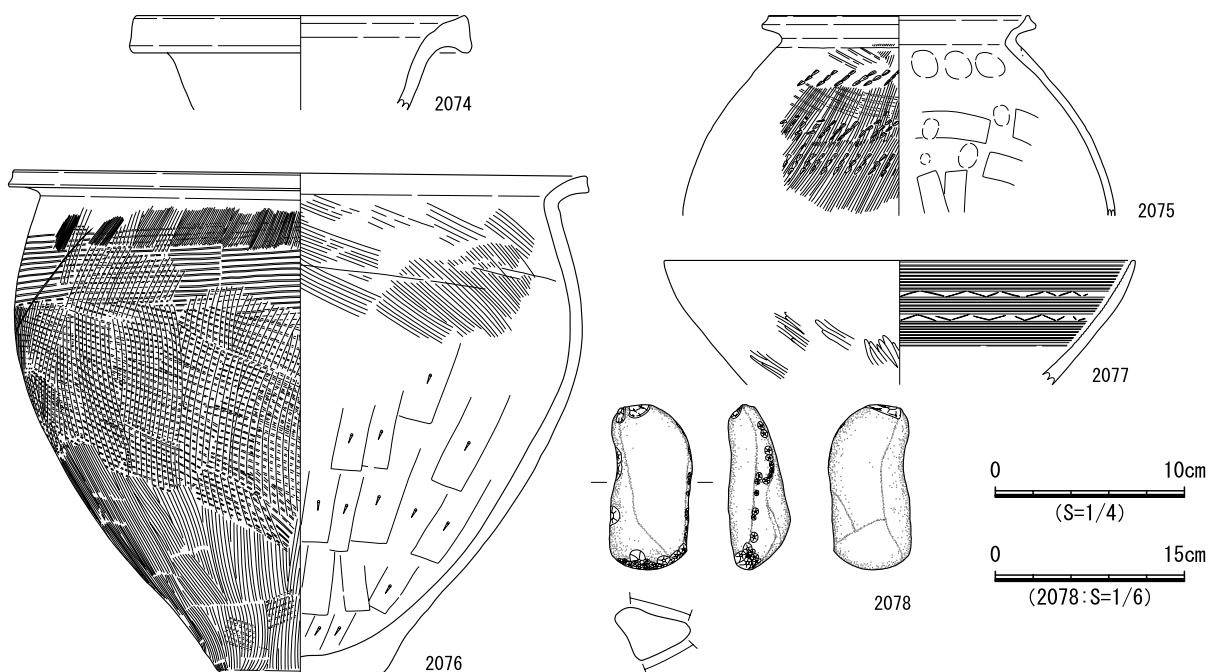


図 825 SB433 遺物実測図

SB434 (遺構：図 826)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB440を切る。確認できたのは北西隅部付近のみで、残り部分は調査区域外にある。

形状 規模は不明であるが、確認できた北辺と西辺は直線的で、北西隅部は丸みをもつことから、隅丸方形と考えられる。壁面は約0.2mの高さが認められ、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて7基の小穴を確認し、そのうちP3とP5で柱痕跡を確認した。住居の平面形が不明であるため柱穴の推定は困難であるものの、いずれかが柱穴の可能性はある。また、床面上では幅約0.8m、深さ0.05mの溝を確認した。その埋土にはブロック土が多く混入するため、人為堆積と考えられる。本遺構の掘形に沿う位置で検出したため、調査中は幅広の溝の掘形と考えたが、北辺より北側へ膨らむことや南西壁から離れていることなどから、本遺構に伴わない可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器1,098点、小穴から土器35点、壁溝から土器152点が出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のもので、わずかにⅣ期の土器片が含まれる。しかし、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB435 (遺構：図 827)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB429、SB430、SB437に切られ、SB436を切る。また、重複する竪穴住居跡によって、東側の約半分を滅失している。

形状 南北長約6.4mで、確認できた西辺は直線的であることから、平面形は方形と考えられる。壁面は高さ約0.2mで、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土を含み、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて9基の小穴を検出し、そのうちP6で柱痕跡を確認した。柱穴の配置は重複するSB429、SB430、SB437の床面で検出した遺構を含めて検討したが、推定できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器770点、小穴から土器34点が出土した。土器の多くはVI期～VII期のものであるが、いずれも小片であるため図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とVII期の竪穴住居跡群に切られることから、VII期と考えられる。

SB436 (遺構：図 828・829)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB429、SB435、SB437に切られ、SB436を切る。重複する竪穴住居跡なかで最も先行し、平面形は不明瞭であった。

形状 規模は不明であるが、壁溝がほぼ直角に屈曲することから平面形は方形と考えられる。壁面の高さは約0.2mで、ほぼ直立する。

埋土 埋土は西側のみが残存している。3層に分層し、1・2層は床面までの堆積土、4層は掘形埋土である。床面までの堆積土にはブロック土が含まれることから、人為堆積と考えられる。

床面 重複する竪穴住居跡の床面との標高差がほとんどないので、所属遺構の判別が困難である。本住居跡の床面上では小穴8基を検出し、そのうちP3で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係からSB436-P1、SB437-P9、SB429-P11、SB430-P1の4基が、柱穴として適当な位置にある。このうち、SB436-P1以外は掘形が深く、壁面の傾斜が急である。なお、西壁から南壁に沿って、断続する壁溝を検出した。

遺物出土状況 埋土中から土器367点、小穴から土器32点が出土した。土器の多くはVI期～VII期に属するが、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期とVII期の竪穴住居跡群に切られることから、VII期と考えられる。

SB437 (遺構：図 831、遺物：図 830)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB418、SB427、SB429、SB436に切られ、SB435とSB436を切る。重複する竪穴住居跡によって確認できたのは、南側の一部のみである。

形状 規模は不明であり、平面形は不整形を呈する。壁面の高さは約0.1mであり、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ブロック土が混入し、層界の凹凸がみられることから人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて10基の小穴を確認した。

柱痕跡が認められるのがP3で、柱穴状の断面形が認められるのがP8～P10である。それぞれ柱穴の

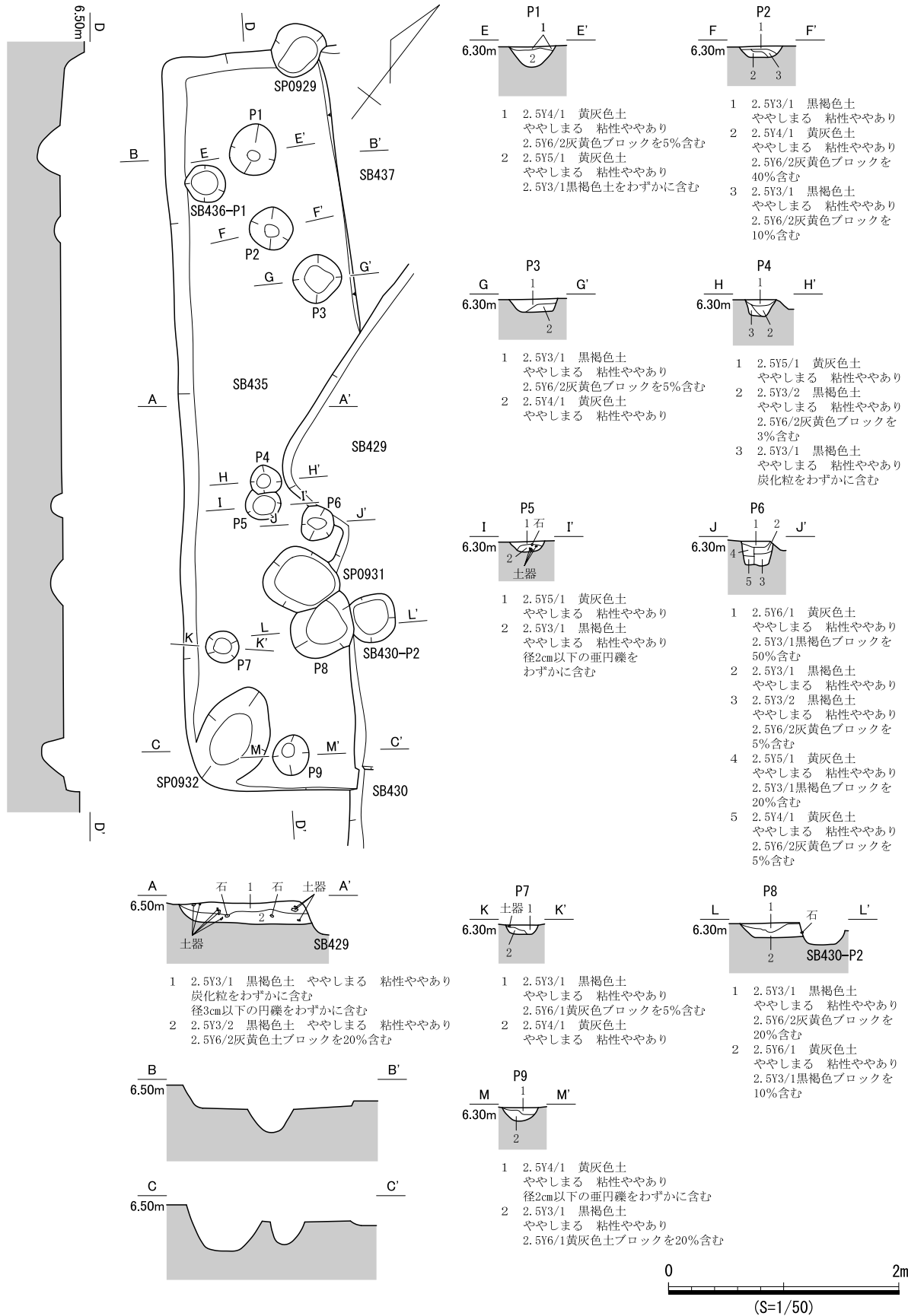


図 827 SB435 遺構図

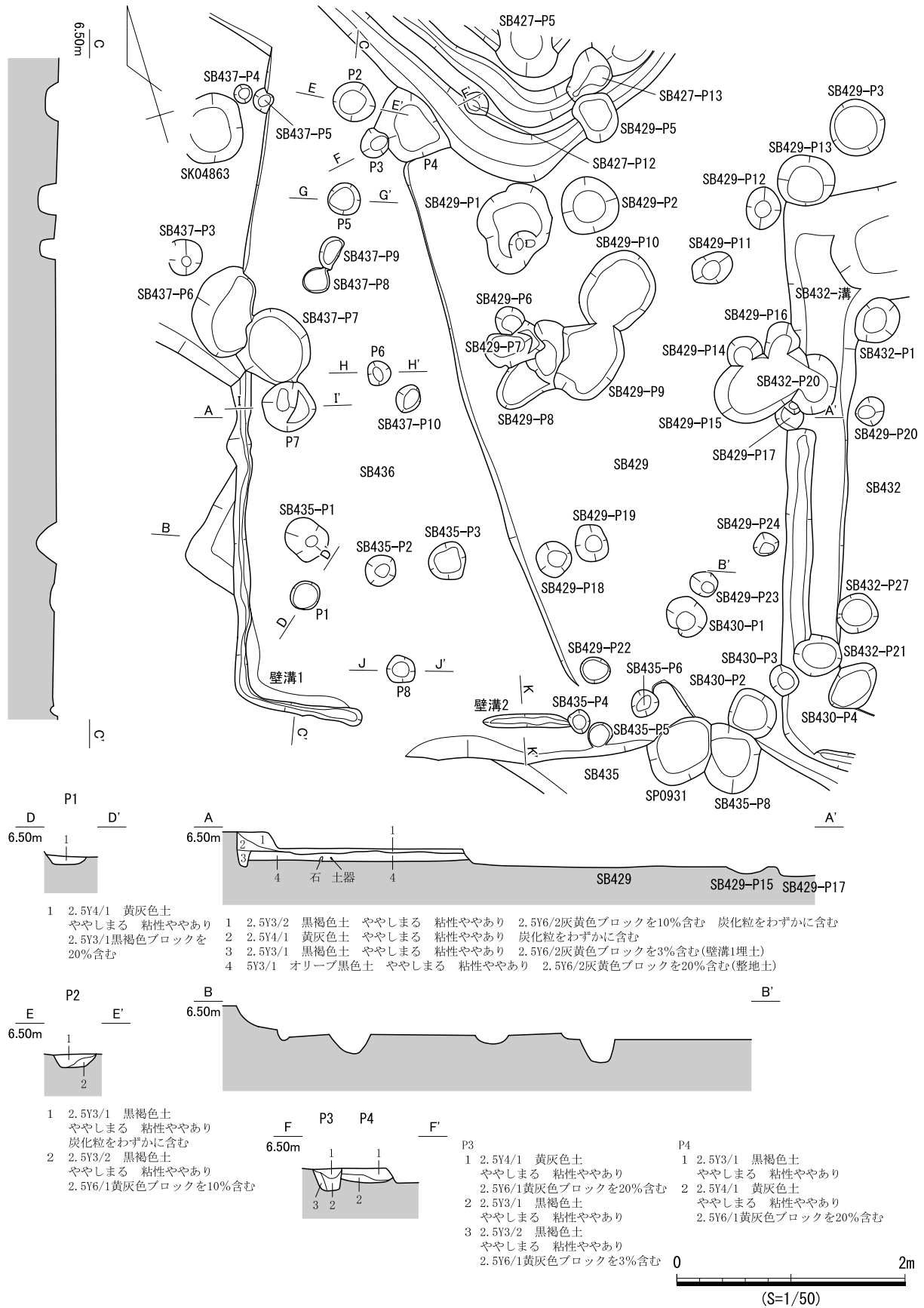


図 828 SB436 遺構図 (1)

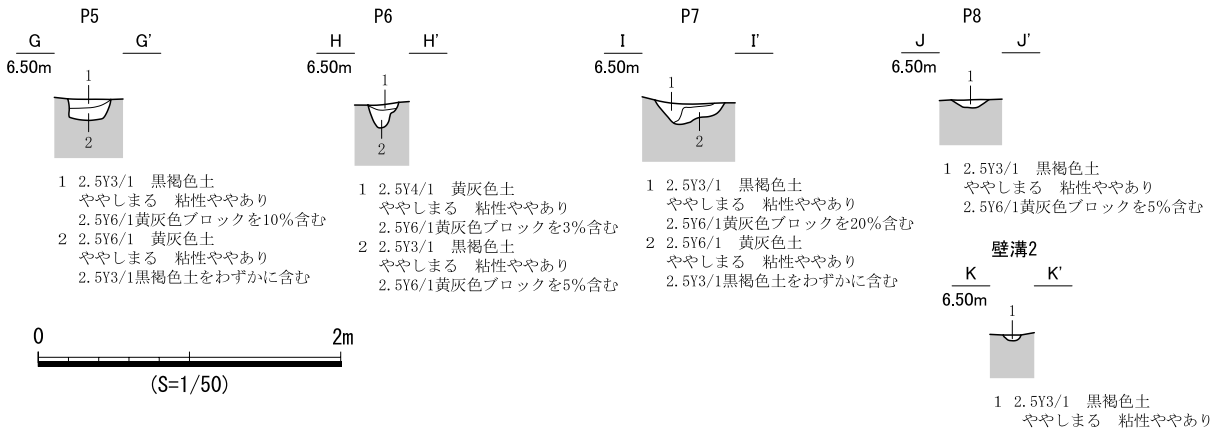


図 829 SB436 遺構図 (2)

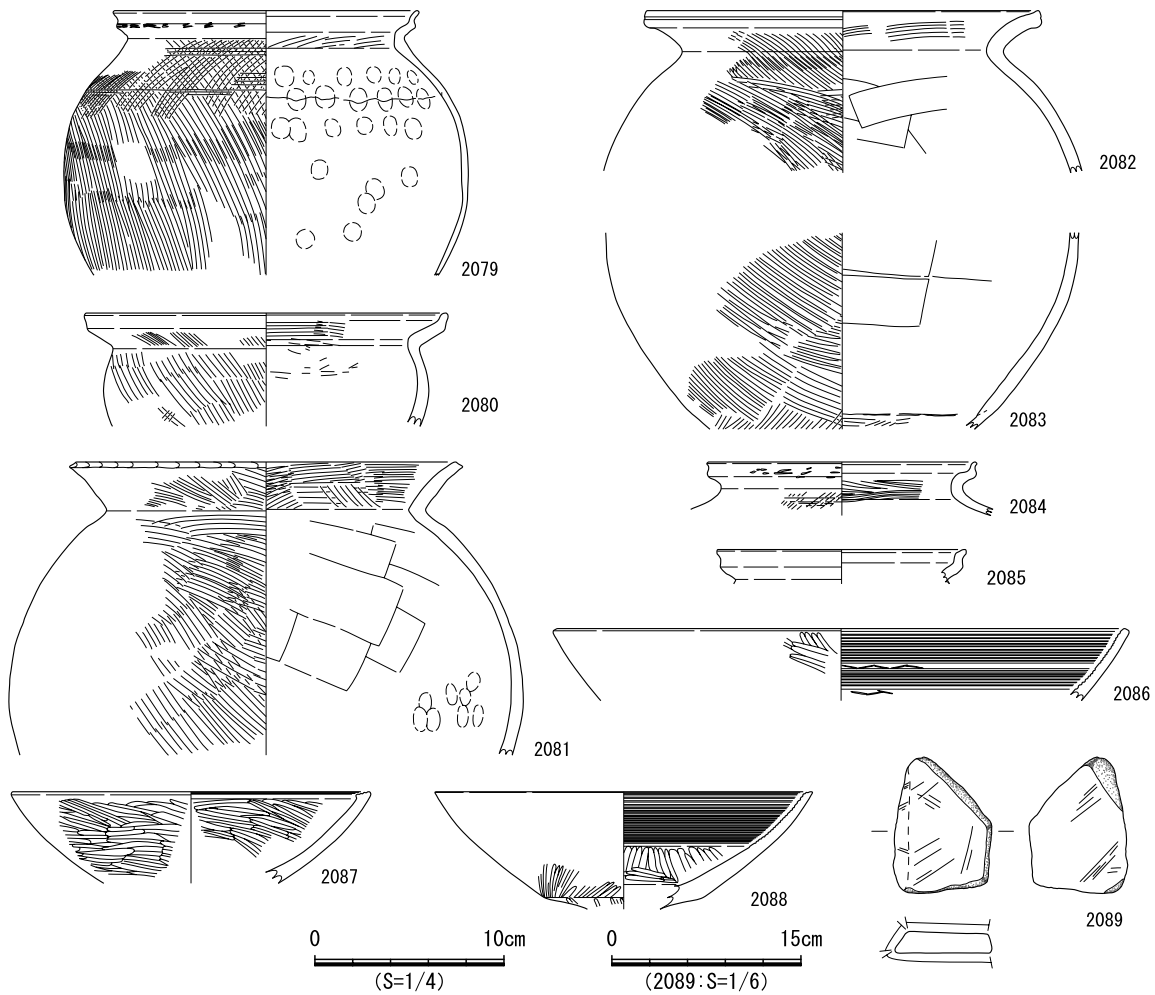


図 830 SB437 遺物実測図

可能性があるものの、対応する小穴を確認できない。P1は壁面に沿って確認した。壁溝にもみえるが、壁溝より幅が広いので小穴とした。P6、P7は深さが0.3m以上あり、規模が他の小穴と比べて大きく、いずれも埋土に炭化物が混じる。

遺物出土状況 埋土中から土器1,041点、小穴から土器685点が出土した。多くの土器片がⅦ期にあたり、P6からⅥ期甕(2079)、P7からⅥ期甕(2084)、Ⅶ期甕(2080、2082、2083、2085)、Ⅶ期高坏(2086、2087)が出土した。

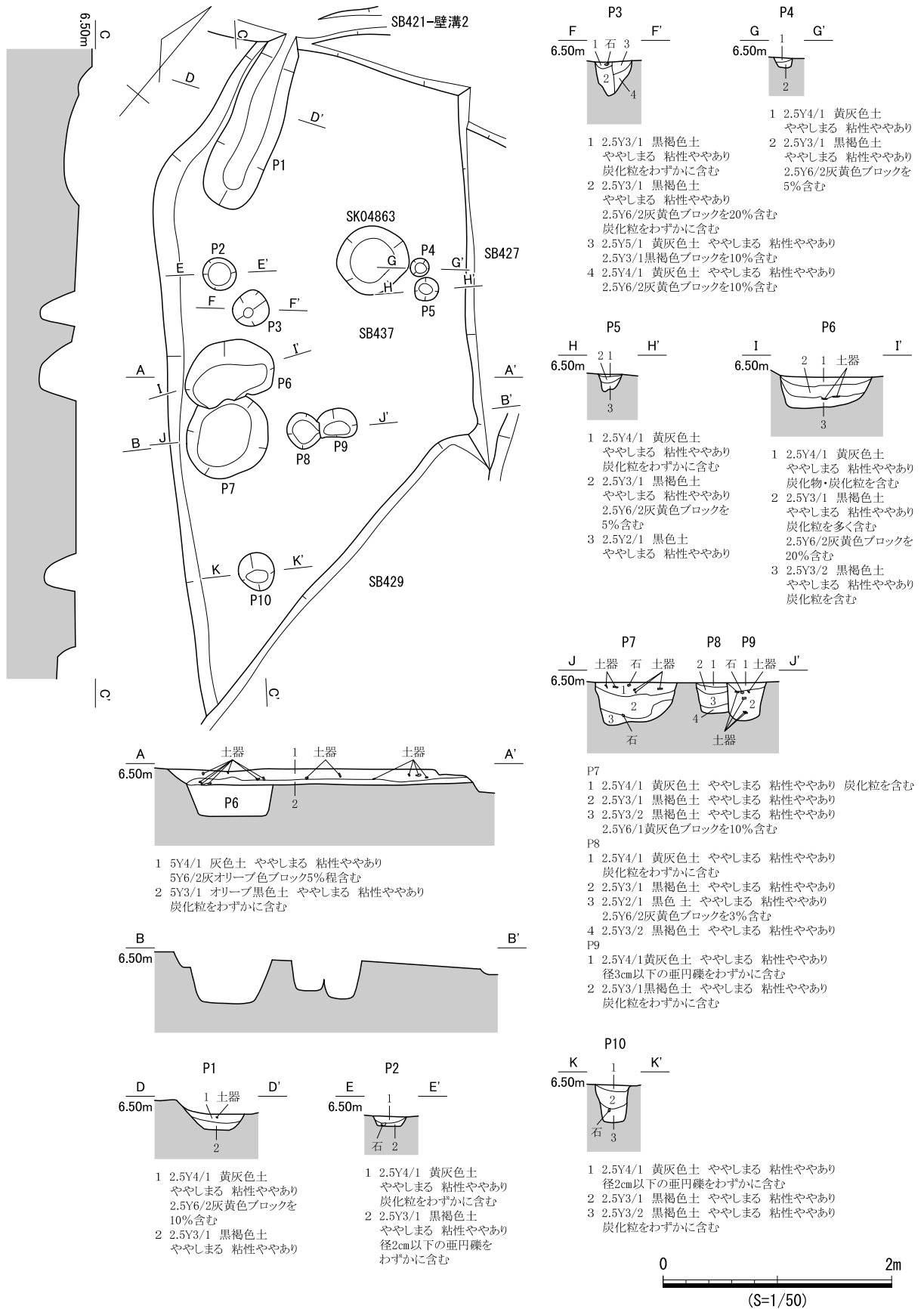


図 831 SB437 遺構図

出土遺物 2079、2084はⅥ期甕D1b類。口縁部が鋭く屈曲して、上段が直立して端部かわずかに外反する。外面に刺突文が認められる。2080はⅦ期甕A3類。口縁部が短く直立する。2081はⅦ期甕B3類。口縁部が外反し、端部は断続的な強いナデによって外傾面を形成する。胴部はなだらかに膨らむ。2082、2083はⅦ期甕B2類。口縁部が頸部で屈曲して外反し、端部は平坦である。胴部は肩部が強く張る。2085はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲して、上段は強く外反する。2086はⅦ期高坏D4類。内面を多条沈線と山形文を施文する。2087はⅦ期高坏D2類。口縁端部の内傾面に多条沈線を施文する。内外面に煤が付着する。2088はⅦ期高坏D3類。口縁部が大きく開き、端部は内傾面を形成して多条沈線が認められる。端部以下の口縁部2分の1程度に多条沈線が施文される。2089は砥石。扁平な石材を素材としている。

時期 出土遺物の時期と遺構の重複関係から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB438 (遺構：図832・833)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB407、SB412、SB417、SB424、SB425、SB427に切られ、周辺の重複する竪穴住居跡なかでは最も先行する。重複する竪穴住居跡によって、床面や壁面の大半は失われ、掘形の周囲をめぐる溝の平面形から竪穴住居跡と判断した。

形状 南北長約5.7m、東西長約5.4mであり、平面形は長方形を呈する。

埋土 北壁付近のみ埋土を確認した。4層に分層でき、最下層は掘形埋土と考えられる。

掘形 他の竪穴住居跡との重複により、掘形底面のみを検出した。南壁西側以外を壁面に沿って幅0.4m～0.8mの範囲が溝状に窪み、ブロック土を含む埋土で埋められていた。他の竪穴住居跡の掘形周縁で検出した溝に類似することから、壁溝ではなく掘形に伴う溝と判断した。また、その内側では小穴3基を検出した。本住居跡に伴うものと判断したが、規則的な配置は認められず、重複する竪穴住居跡の小穴が混在する可能性もある。P1とP2が溝との平面的な位置関係から柱穴と考えられるが、対応する南側の小穴は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土器73点、小穴から土器14点、壁溝から土器198点が出土した。土器の大半はⅥ期～Ⅶ期のものであるが、いずれも小片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期とⅦ期の竪穴住居跡群に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

SB439 (遺構：図835・836、遺物：図834)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB432とSB440を切り、南半分は調査区域外にある。

形状 東西長約4.0mで、周辺の竪穴住居跡のなかでは小型である。北辺、東辺、西辺とも直線的で、隅部は丸みを帯びることから、平面形は隅丸方形と考えられる。壁面は高さ約0.1mで、その傾斜は緩やかである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、その成因は不明である。

床面 平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて6基の小穴を確認し、P1、P2、P3、P5で柱痕跡を確認した。このうち、平面的な位置からP1とP2が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器720点、石器類6点、小穴から土器196点が出土した。土器の多くは

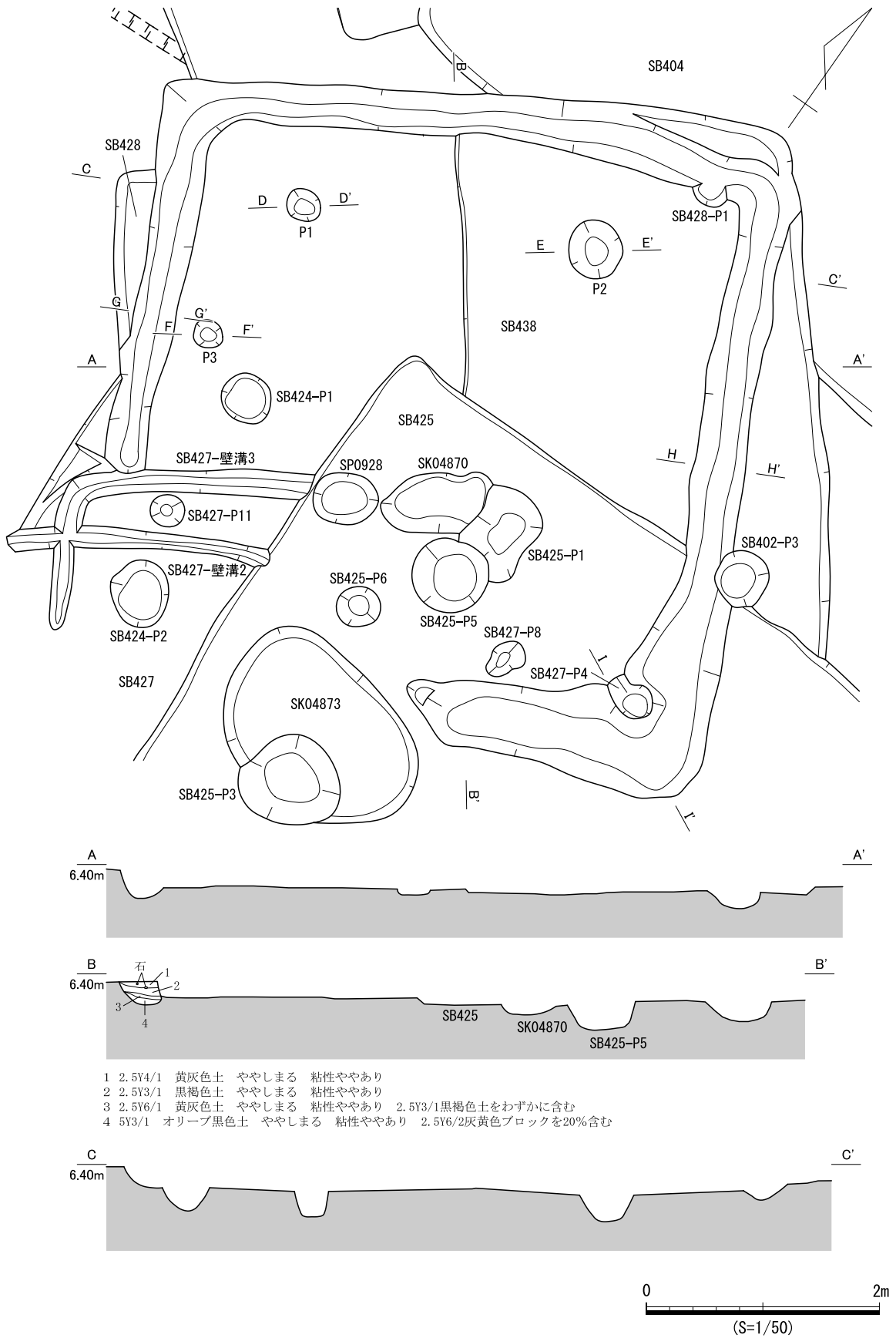
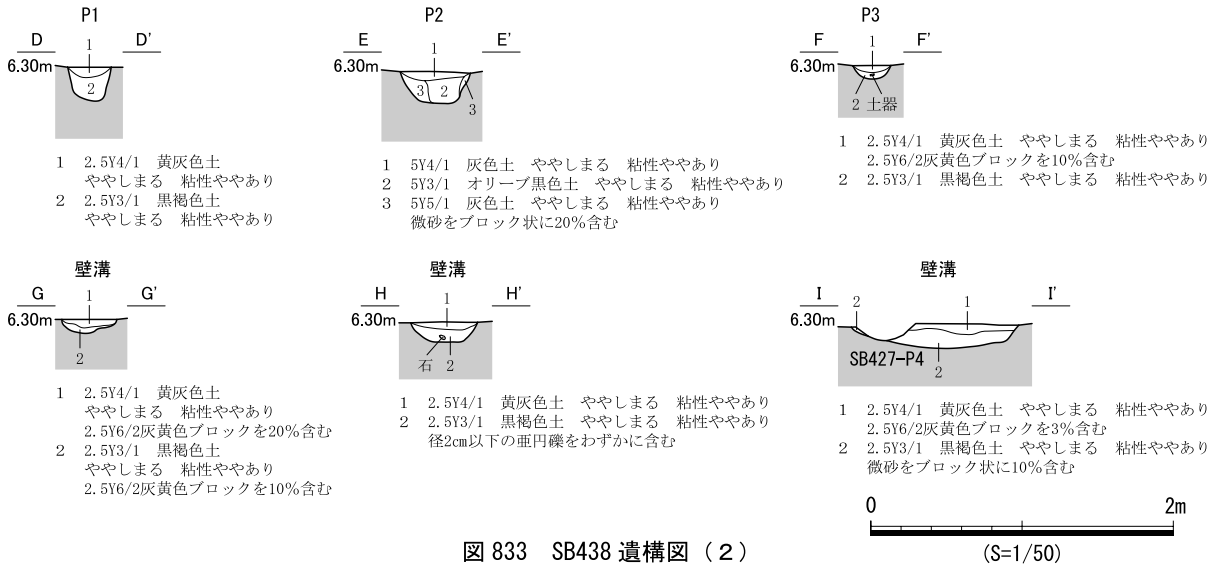
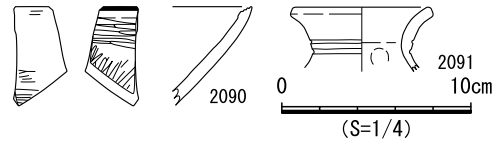


図 832 SB438 遺構図 (1)

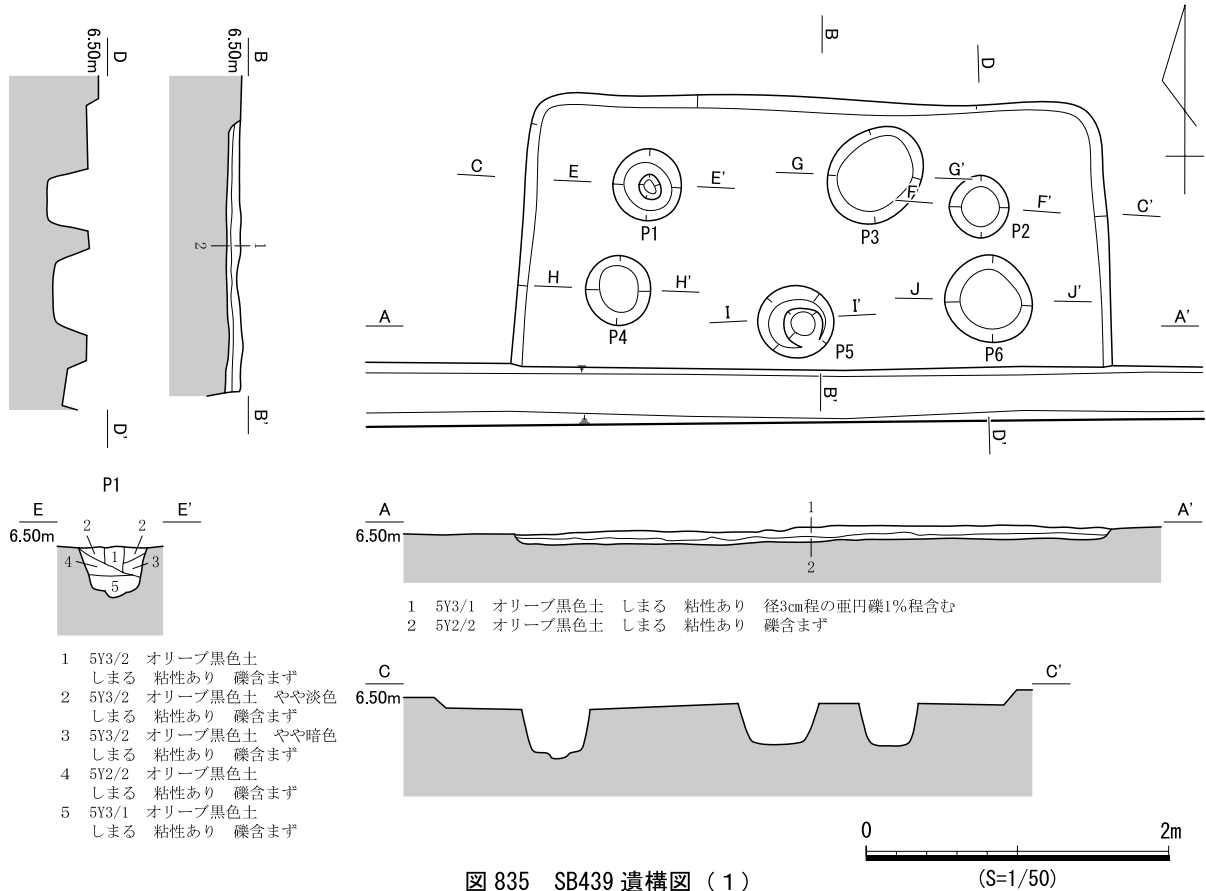


VI期～VII期のものであるが、I期の土器片も出土した。また、P5からVII期高坏（2090）が出土した。出土遺物 2090はVII期高坏D2類。口縁部が内湾しながら開き、内傾する端部に多条沈線を施文する。内外面、破断面に被熱が認められる。2091はI期壺の小型品。口縁部が短く外反して、頸部には2条の沈線が認められる。



時期 出土遺物の時期から、VII期と考えられる。

図 834 SB439 遺物実測図



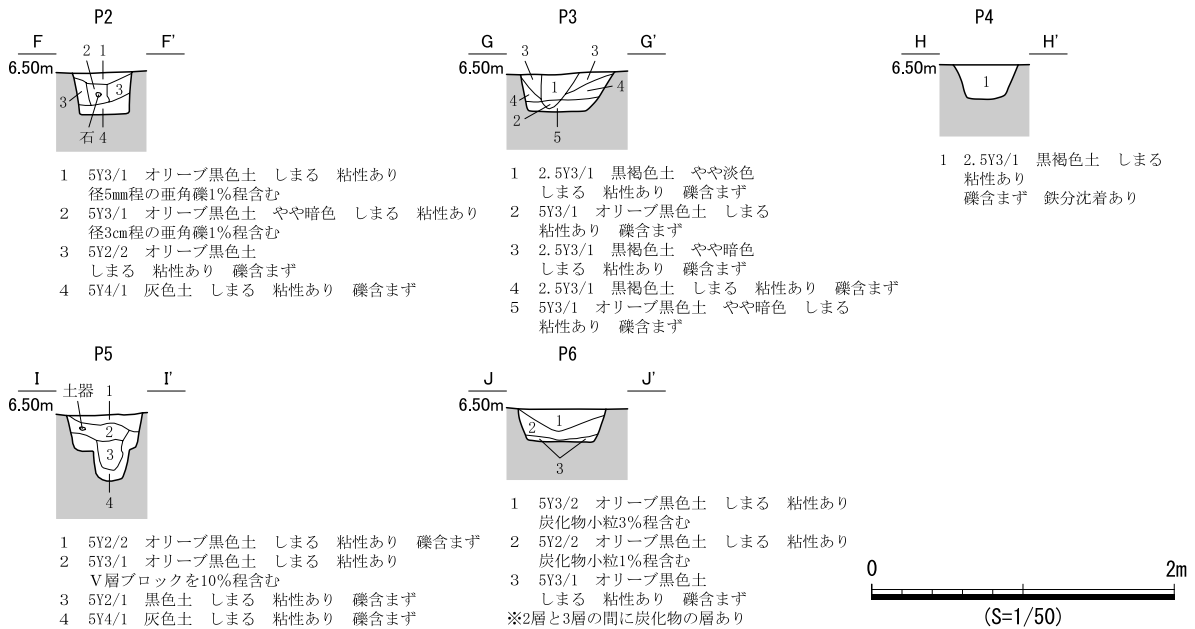


図 836 SB439 遺構図 (2)

SB440 (遺構：図 837)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。SB434とSB439に切られ、SB430とSB432を切る。南半分は調査区域外にある。

形状 東西長約4.8mであり、北辺と東辺が直線的で直角気味に曲がることから、平面形は方形と考えられる。壁面は高さ0.1mにも満たず、その傾斜は緩やかである。

埋土 4層に分層した。埋土1層は上部からの掘り込みであるが、埋土2層直下にP5が位置することから、P5が本住居に伴わないか、あるいは埋土3・4層が整地土である可能性がある。

床面 埋土をすべて掘削した面を床面とした。平坦であり、硬化面や貼床、炉跡は認められなかった。床面上にて5基の小穴を確認し、平面的な位置からP1とP2が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器711点、小穴から土器61点が出土した。土器は大半がVI期～VII期のものであるが、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期と、VII期のSB434とSB439に切られることから、VII期と考えられる。

SB441 (遺構：図 838)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域の南西端に位置する。発掘調査の最終段階にてV層ではない黄灰色土の堆積を確認し、掘削すると炉を検出したため竪穴住居跡と判断した。しかし、周辺はすでにSZ152とSZ153を掘削しており、南側は調査区域外にあるため、住居の全形は不明である。

埋土 2層に分層した。黒褐色土と黄灰色土が混在するため、人為堆積と考えられる。

床面 やや凹凸があり、硬化面や貼床は認められなかった。床面上にて2基の小穴を確認した。いずれも径0.5mを超える大きな小穴である。炉は長さ0.43m、深さ0.11mの浅い不定形の掘り込みを有し、検出面では焼土が全体的に広がっていた。

遺物出土状況 埋土中から土器101点、小穴から土器26点が出土した。土器は主にV期～VII期のもの

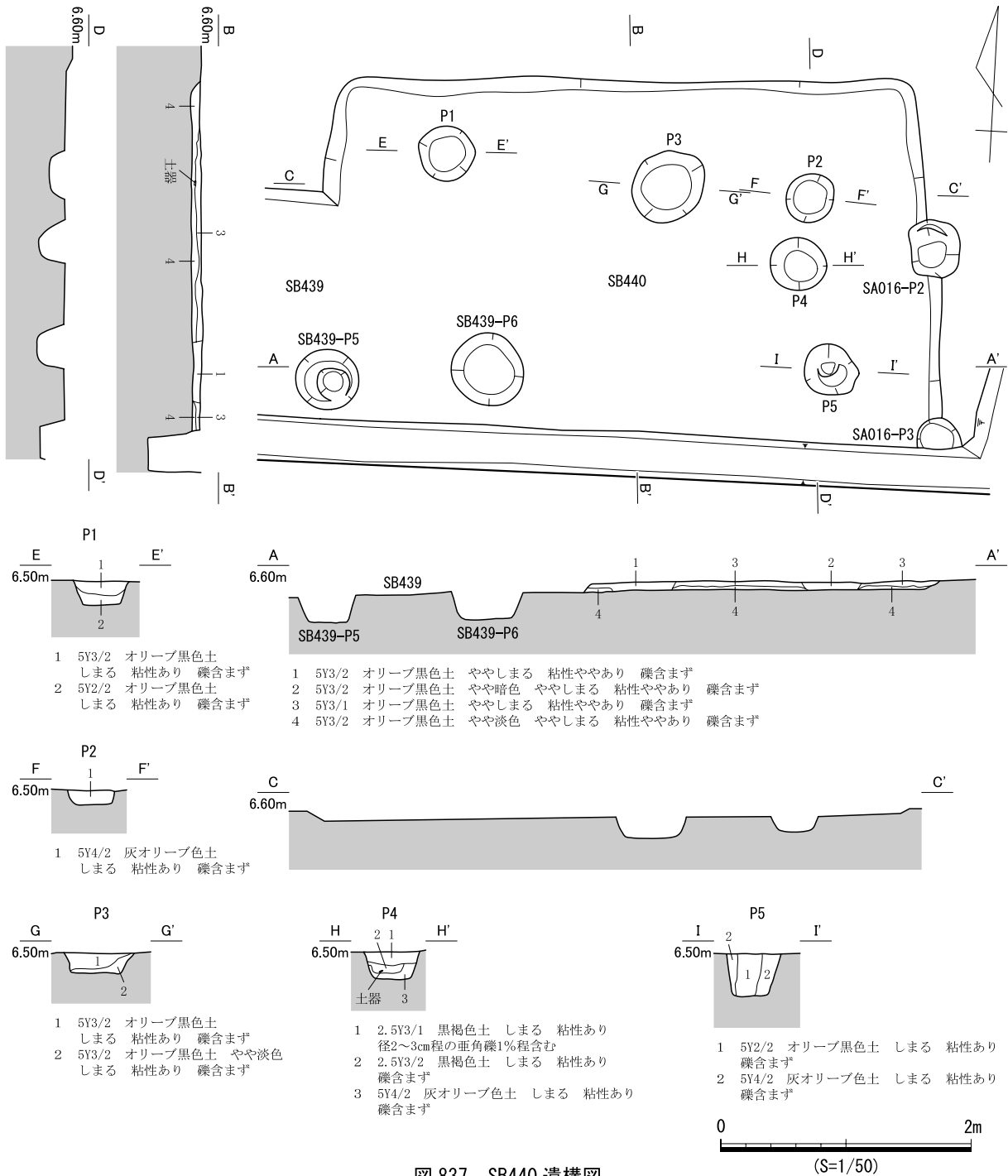


図 837 SB440 遺構図

ので、わずかに I 期と IV 期の土器片が出土した。しかし、いずれも小片であり図示していない。

時期 出土遺物の時期から、VII 期と考えられる。

SB442 (遺構：図 840、遺物：図 839)

検出状況 西部東側中央の、NR002 へ向かって傾斜する緩斜面上に位置する。焼土を中心に小穴が配置されたような位置関係にあることから、竪穴住居跡の可能性があると判断した。なお、P4 は SK4454 の底面で検出した。

形状 6基の小穴が、長さ約3.5mの範囲内に円形あるいは多角形状に並ぶ。小穴はいずれも0.10m～0.15mの深さである。その埋土は1～3層に分層でき、そのうちP2は柱痕跡のような堆積を確認した。底面はいずれも平坦であり、壁面の傾斜が急であることから、これらの小穴は柱穴と考えた。また、柱穴検出面にて、柱穴列のほぼ中央で長さ約1.0mの範囲に焼土を確認した。焼土は厚さ3～4cmで2箇所に分かれている。しかし、焼土に伴う明確な掘形は確認できなかった。また、本遺構の西側には

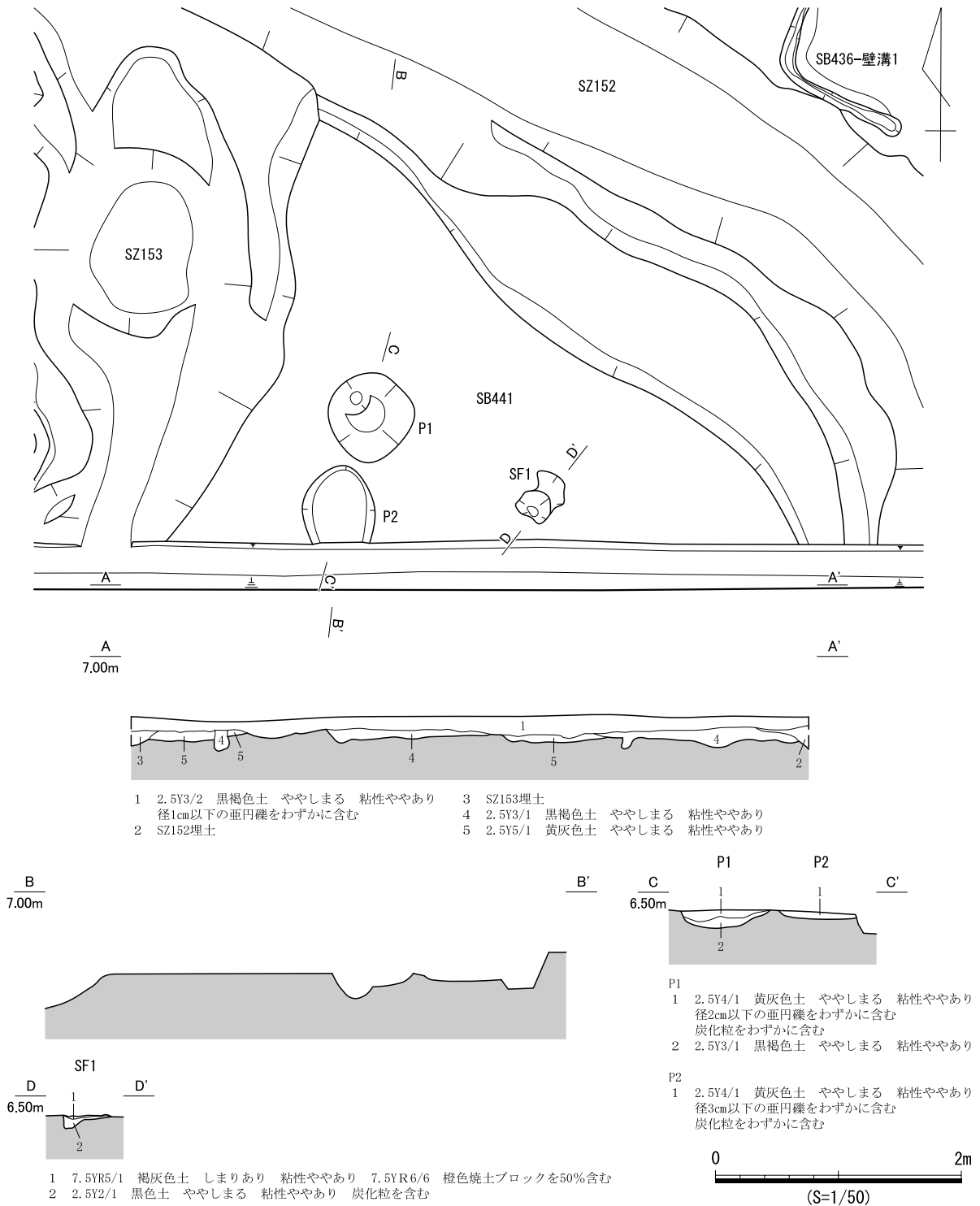


図 838 SB441 遺構図

焼土及び炭化物の混入が顕著であるSK04452が位置し、いずれも焼土が多く出土しているため、何らかの関係があるかもしれない。

遺物出土状況 小穴から土器31点、炉跡から土器10点、石器類2点が出土した。土器はいずれも細片であるが、P4から器台(2092)が出土した。

出土遺物 2092はⅦ期器台C3類。口縁端部が尖り気味に成形される。

時期 P4出土遺物の時期と遺構の重複関係から、Ⅶ期と考えられる。

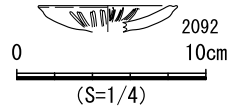


図 839 SB442 遺物実測図

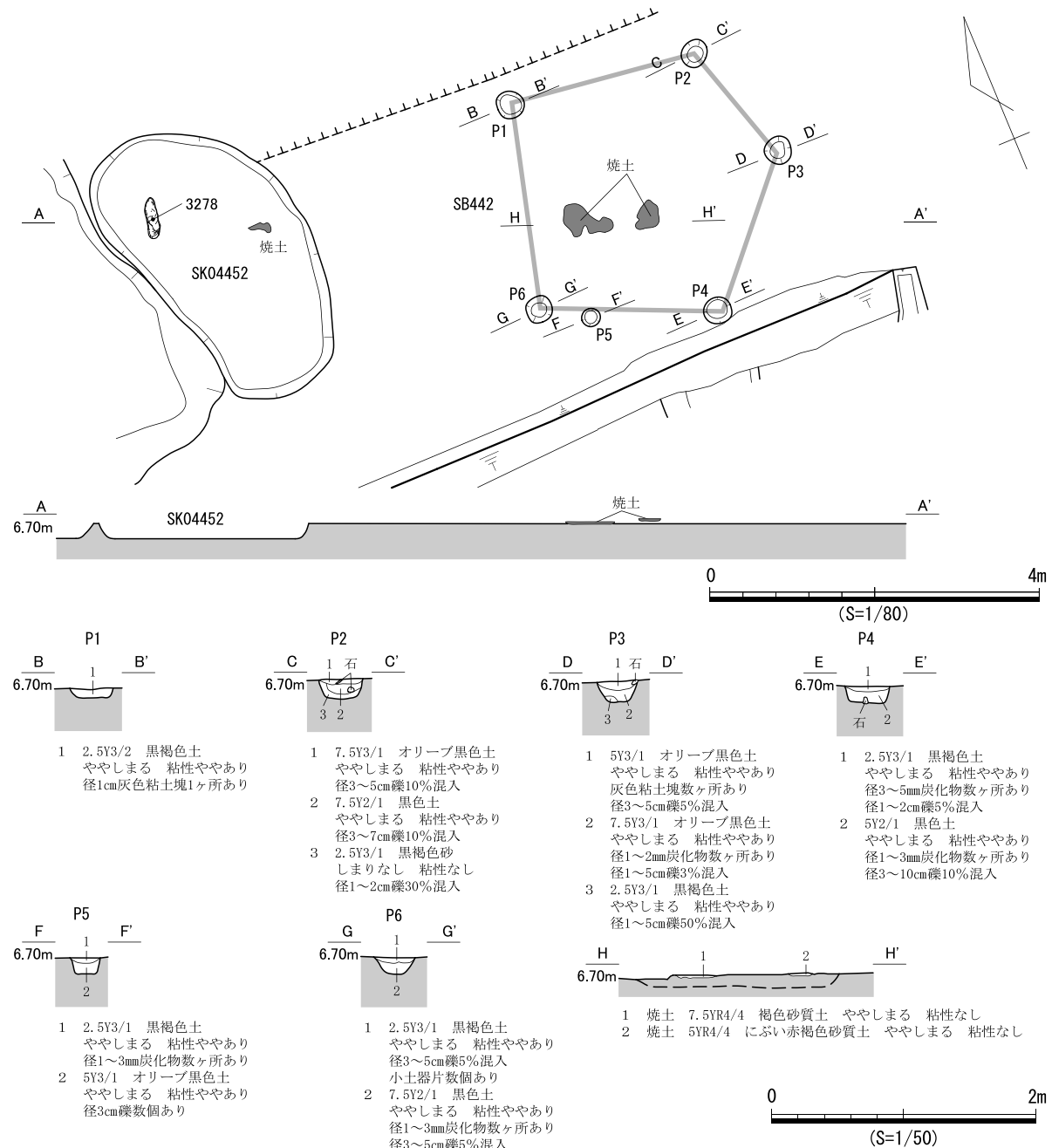


図 840 SB442 遺構図

SB443 (遺構: 図 841・842 遺物: 図 843)

検出状況 西部西側南寄りのNR012東側に位置する。SK05034完掘後、その壁面で水平堆積層を確認し、それが途切れていたため平面的に精査をしたところ、不明瞭ではあるものの方形の平面形を確認

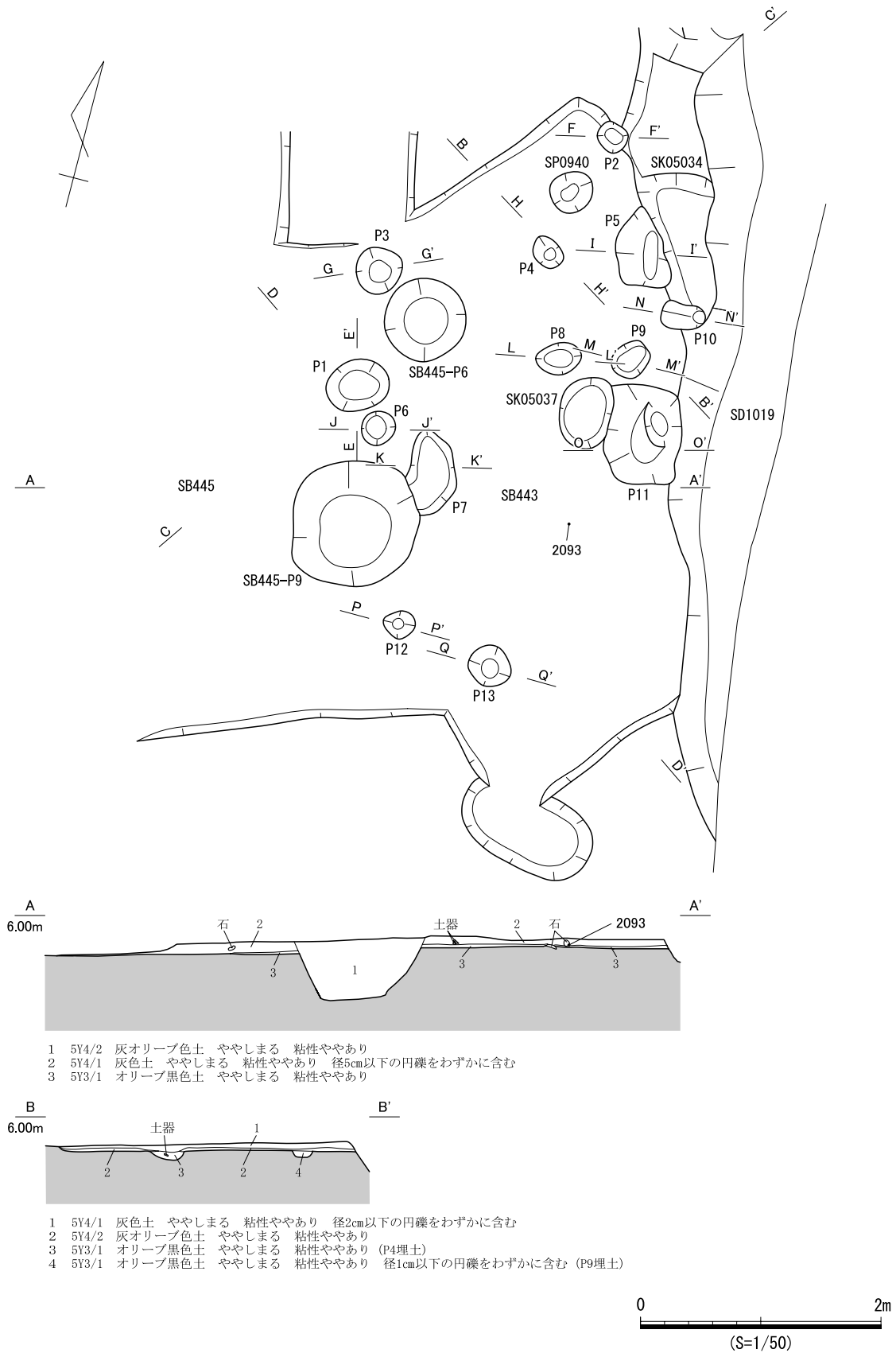


図 841 SB443 遺構図 (1)

できた。西側でSB445に、東側でSK05034とSD1019に切られている。

形状 東西側が別遺構に切られるため全形は不明であるが、残存した形状から方形もしくは長方形と考えられる。壁高は約0.1m以下で、その傾斜は緩やかである。

埋土 埋土は2層に分層した。ほぼ水平堆積であり、礫をわずかに含むが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて13基の小穴を検出した。いずれも浅く、1層又は2層に分層したが、柱痕跡は確認できなかった。平面的な位置関係からP4とP13が柱穴となる可能性があるものの、断定はできない。なお、SP0940は本遺構埋土上面で検出した柱穴である。

遺物出土状況 埋土中から土器131点、小穴から土器22点が散在して出土した。土器はV～VII期の小片である。

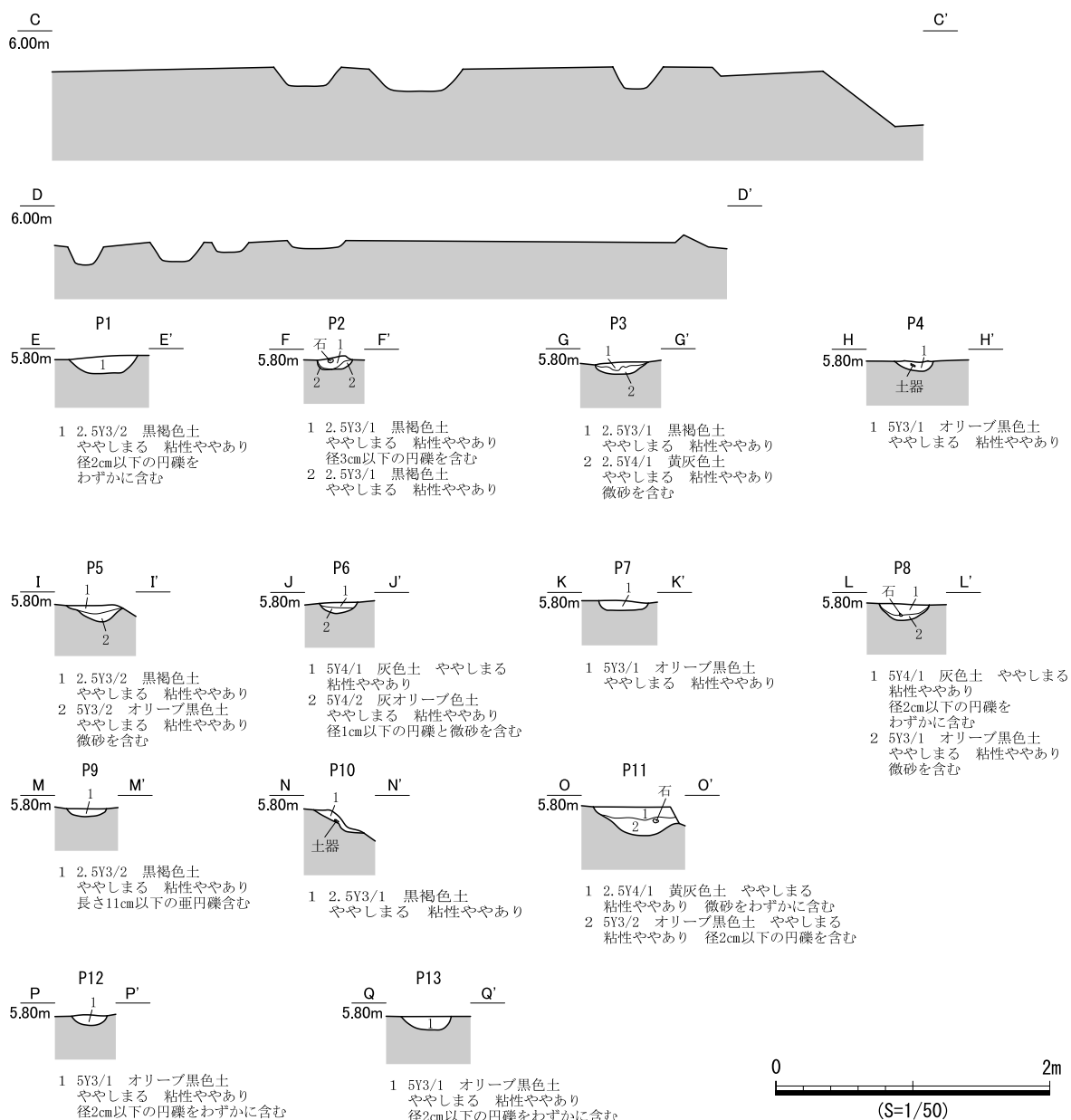


図 842 SB443 遺構図 (2)

出土遺物 2093はⅦ期鉢G類。口縁部を頸部で貼付して形成するため、口縁部わずかに屈曲して外方に伸びる。外面の屈曲は貼付後のナデのためわずかに残る程度だが、内面は貼付後、未調整のため屈曲が強い。2094はⅤ期高坏B3類。口縁部が強く外反し、端部をやや尖り気味におさめる。坏底部と口縁部の境は粘土が貼付し、下方へ突帯状のように強調され、その部位に振幅の短い粗雑な波状文が施文される。2095は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部は肥厚し、その下にある貼付突帯上に○字状の押圧が認められる。

時期 Ⅶ期のSB445に切られることと出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅶ期と考えられる。

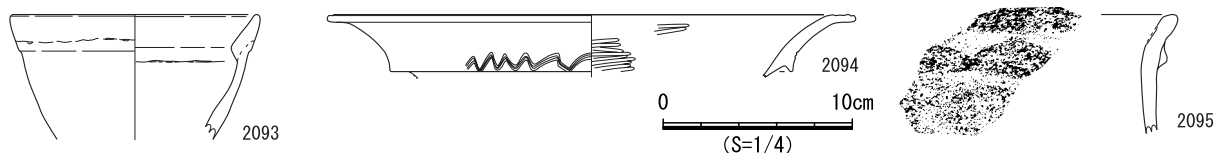


図 843 SB443 遺物実測図

SB444 (遺構：図 844・845、遺物：図 846)

検出状況 西部西側南寄りのNR012東側に位置し、北西角と南辺の平面形は不明瞭であった。西辺は溝SD1035とSK05134に、北辺はSK05119に切られている。

形状 南北長約5.8mで、方形もしくは長方形と考えられる。壁面の高さは0.1m以下で、その傾斜はほぼ垂直である。

埋土 単層であり、直径約2～5cmの円礫がわずかに混入する。床面の北東側では、ブロック土が混入する層厚約1～2cmの土の広がりを確認し、部分的な整地土と判断した。

床面 ほぼ平坦であり、部分的な貼床（整地土）がある。炉跡や壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴10基を確認した。いずれも浅く、1層から2層に分層したが、柱痕跡は確認できなかった。平面的な位置関係から、P1～P3が柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器985点、石器類9点、木製品8点、小穴から土器13点が出土した。土器は北西隅と中央東寄りで多く出土し、Ⅶ期の土器片が目立つ。また、わずかに出土したⅨ期の土器は混入の可能性がある。中央東寄りでは土器群の下から竹材が南西から北東方向を向いて出土したが、その用途は不明である。

出土遺物 2096はⅤ期～Ⅵ期壺A3類。磨耗が著しいものの、内外面に赤彩が認められる。口縁端部下端を下方へ大きく拡張し、内面には羽状文が認められる。2097はⅦ期壺B2a類。口縁部が頸部から外反するが、内面はやや直立してから屈曲気味となる。端部は丸みをもつが、平坦気味である。2098はⅦ期壺B3類。口縁部が頸部から強く外反し、胴部が強く膨らむ。端部は強いナデのため、下端がやや拡張気味となる。2099はⅨ期甕脚部。粗いハケ目が認められる。2100はⅥ期～Ⅶ期甕D類脚部。脚部に打ち欠きが認められ、破断面に被熱が認められる。2101はⅦ期甕B類脚部。やや径の小さい付根から脚部がハの字に開く。裾部に打ち欠きが認められる。2102はⅦ期高坏D3類。口縁部が内湾し、端部は内傾面を形成する。内面には幅広で1本あたりの幅の狭い多条沈線が施文される。2103はⅦ期高坏D4類。口縁部が内湾しながら大きく開く。内面には幅広の多条沈線3帯の間に振幅の小さい山形文を施文する。2104、2106はⅦ期高坏D類脚部。2105はⅦ期高坏G類。坏底部が平坦で、脚部が付根から外反する。2107はⅦ期器台B類脚部。2108はⅤ期～Ⅵ期高坏I類脚部。裾部が強く外反し、端部が

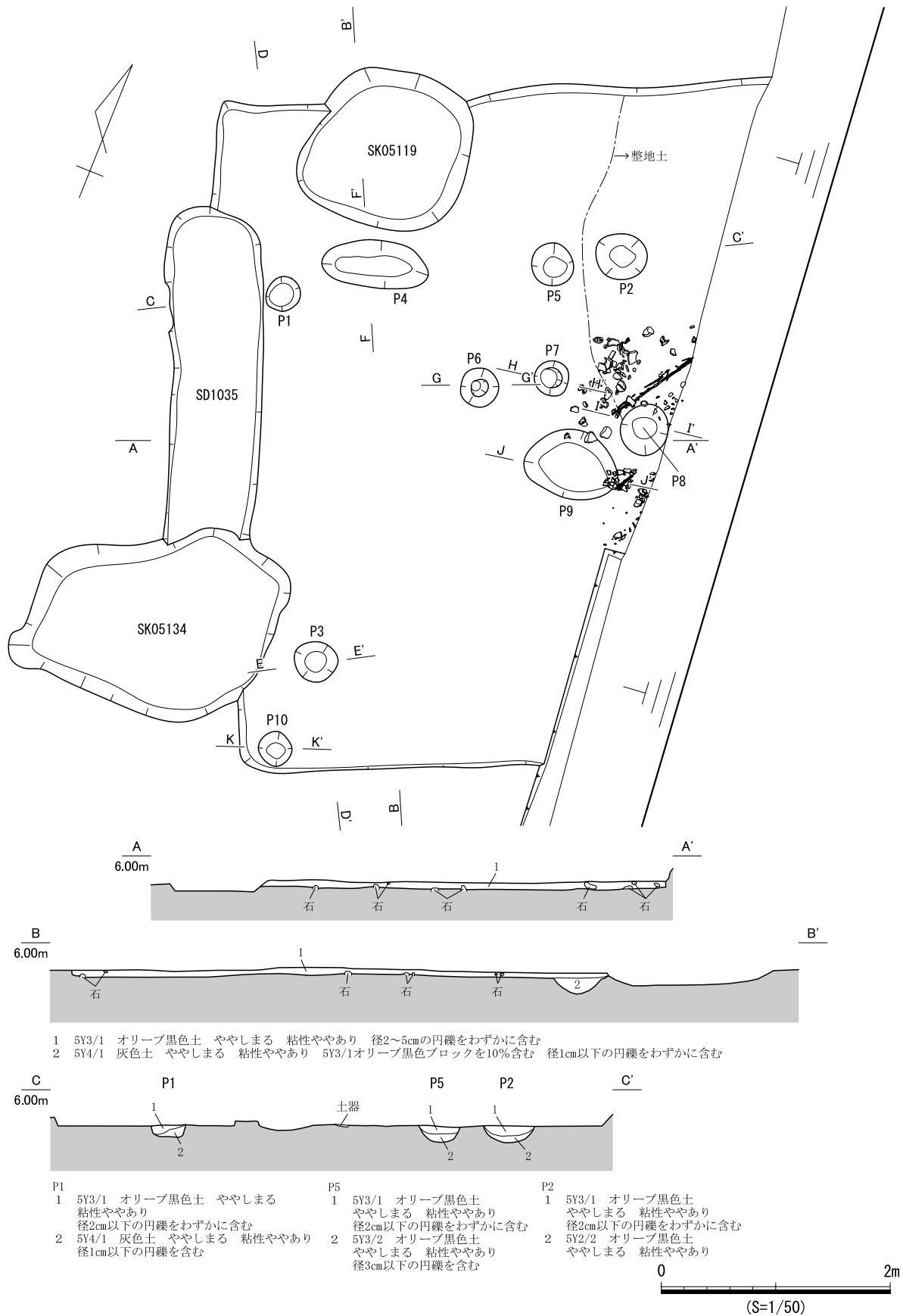
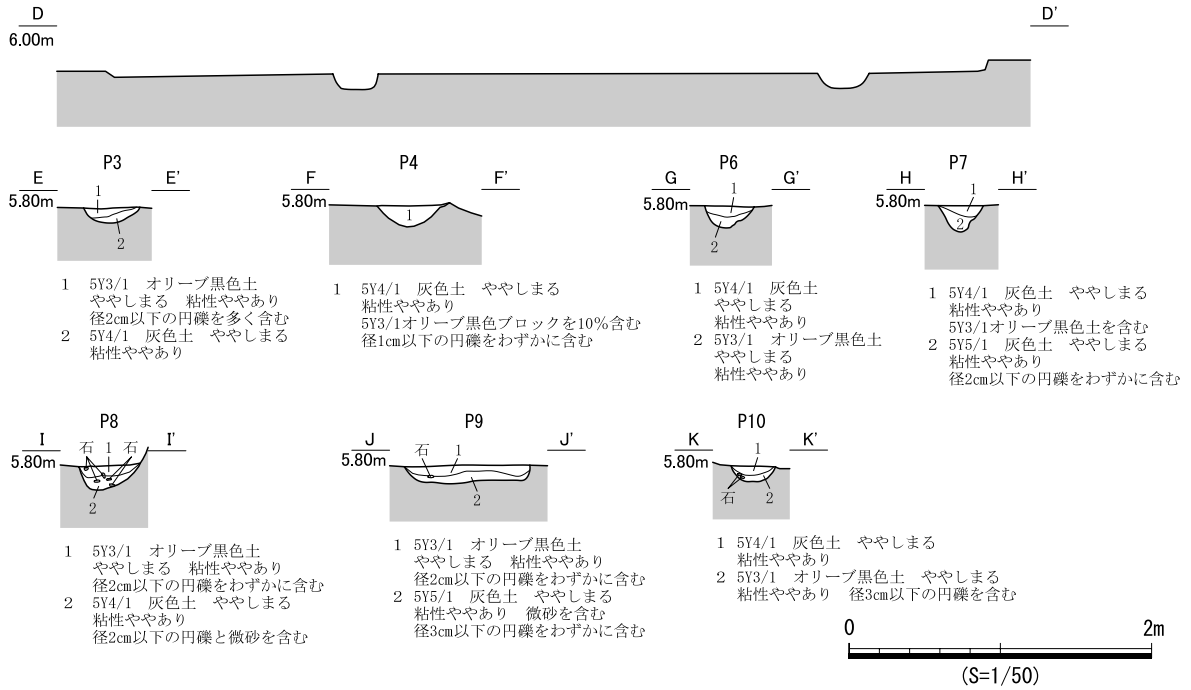


図 844 SB444 遺構図 (1)

やや平坦である。2109は刃器。扁平な円礫の一侧縁を表裏から剥離し、刃部を作出している。2110は叩石。長楕円礫を素材とし、側縁の一部に敲打痕が残る。2111は砥石。下半が折損している。砥面は1面で、砥面周縁から側面にかけて敲打痕が残る。2112は板材。裏面が平坦であり、本来は板材であった可能性がある。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。



出土状況図

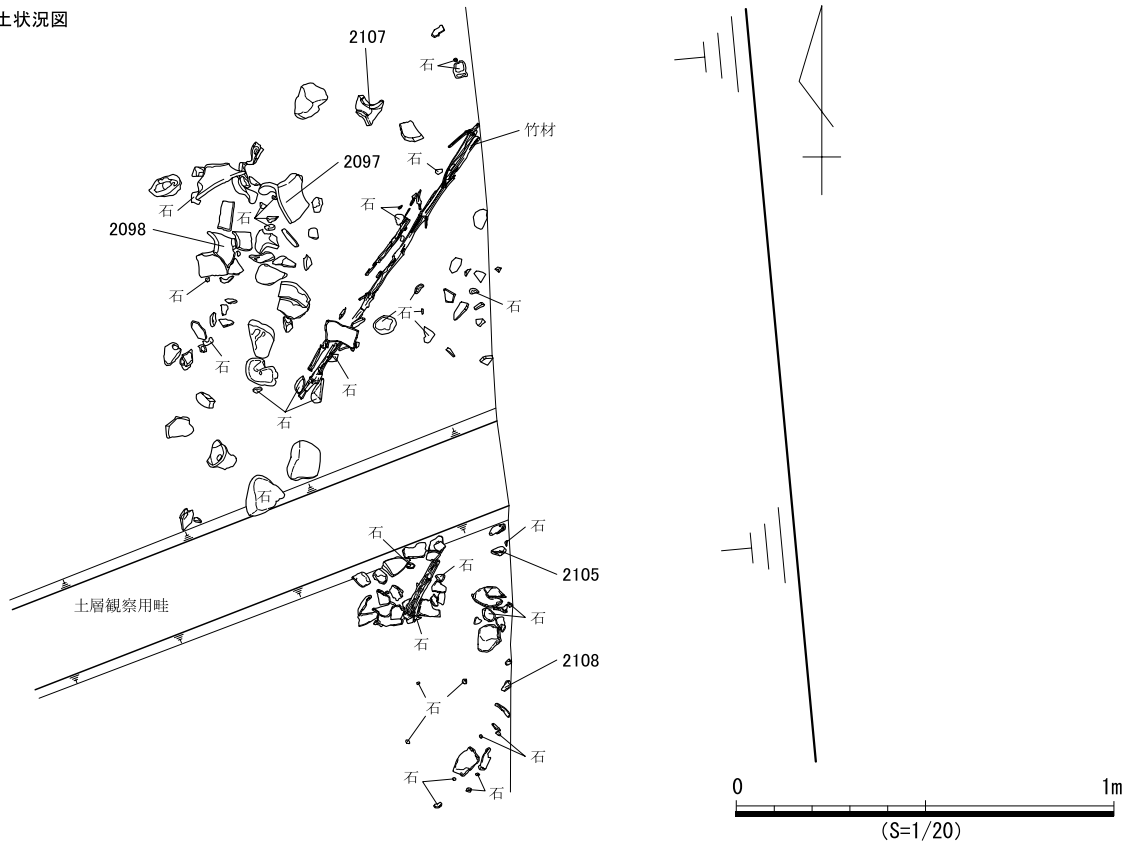


図 845 SB444 遺構図 (2)

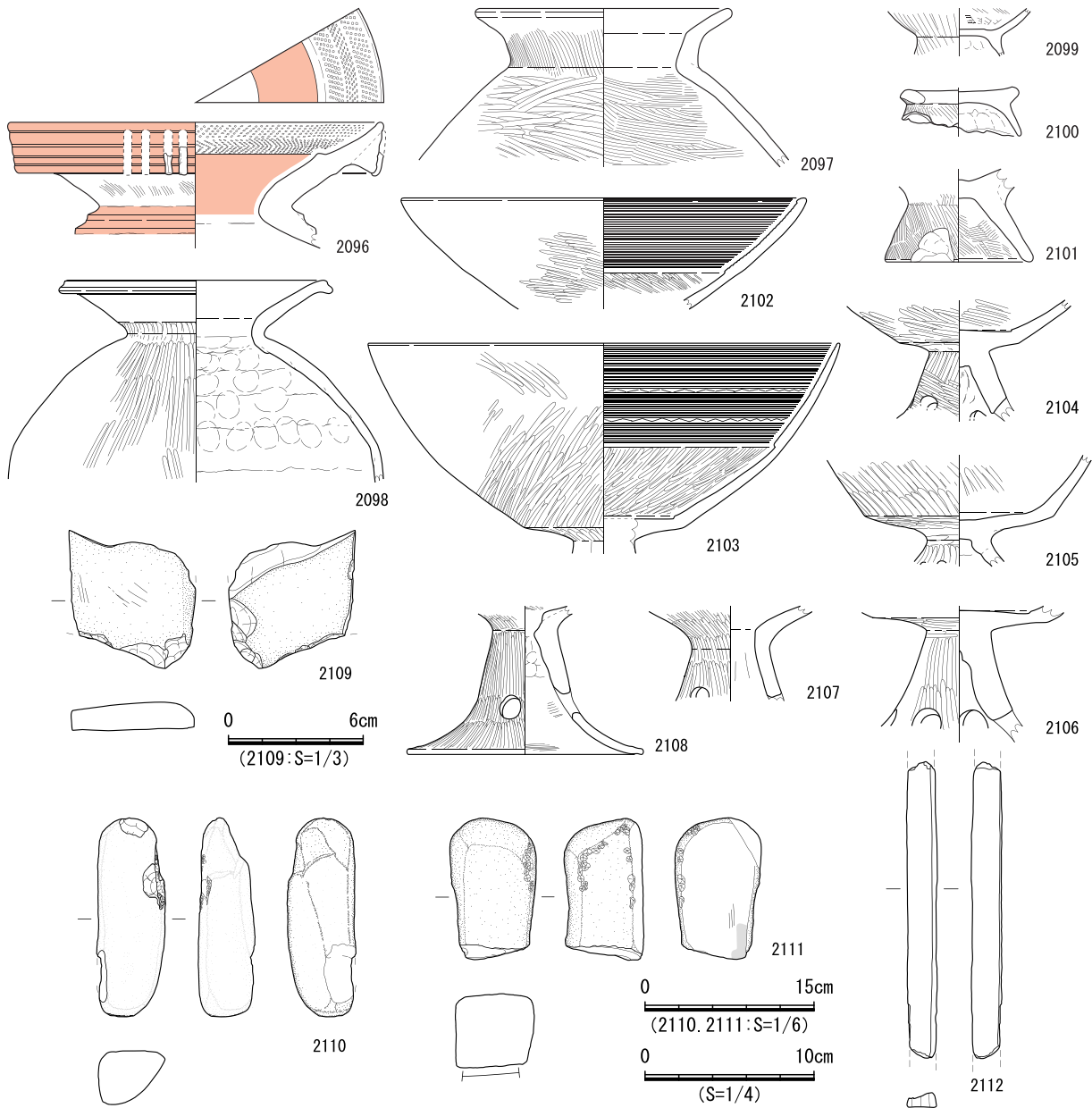


図 846 SB444 遺物実測図

SB445 (遺構：図 847・848、遺物：図 849)

検出状況 西部西側南寄りのNR012東側に位置する。平面形は南辺と東辺は明瞭であったが、北辺は不明瞭であった。また、西辺はNR012との切り合い関係の把握が困難であったが、NR012に切られると判断した。なお、東側でSB443を切る。

形状 南北長約3.9mで、方形もしくは長方形と考えられる。壁面の高さは約0.1mで、その傾斜はほぼ垂直である。

埋土 2層に分層し、上層が住居埋土、下層が掘形埋土である。上層は円礫を含むが、その成因は不明である。床面の中央から北東側にかけて、ブロック土が混入する層厚約2cm以下の土の広がりを確認し、部分的な整地土(掘形埋土)と判断した。しかし、北側は厚みがほとんど認められない程薄い堆積である。なお、整地土を掘削すると底面にてP13を検出した。

床面 ほぼ平坦であり、貼床(整地土)がある。壁溝や炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴

床面完掘状況

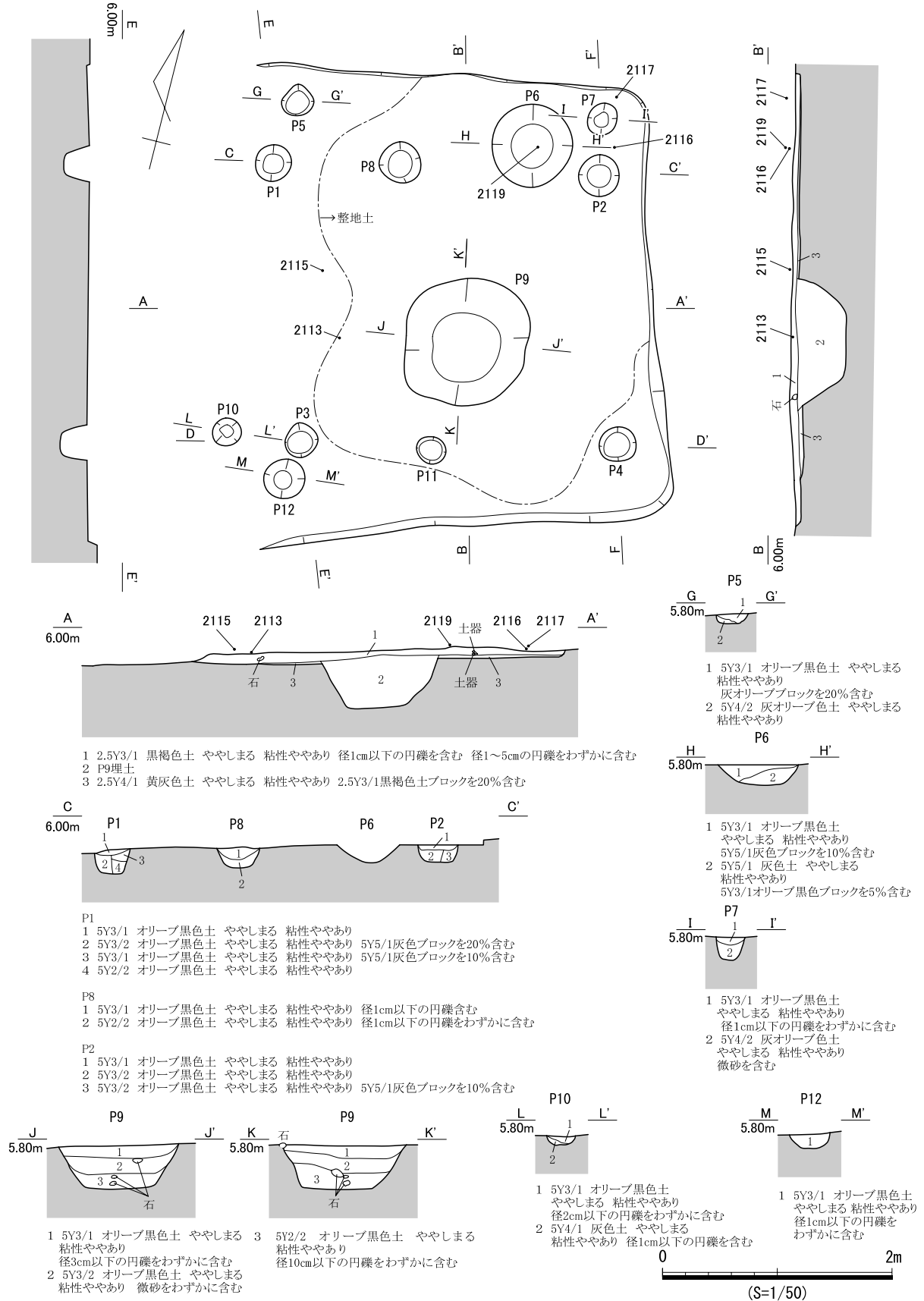
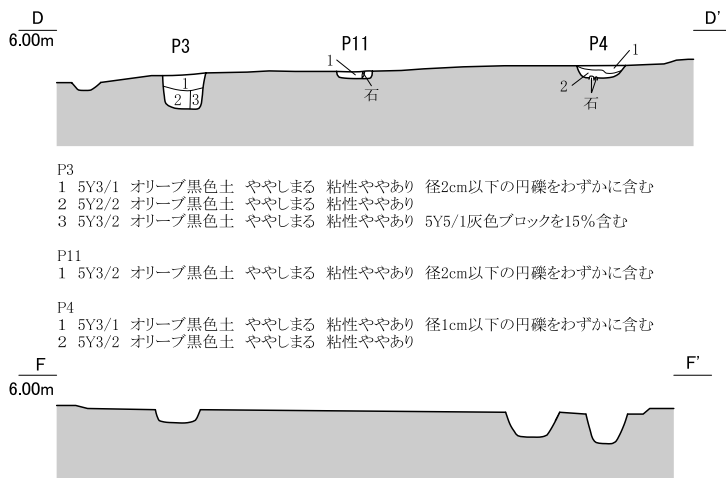


図 847 SB445 遺構図 (1)

12基を検出した。P6とP9は直径が大きいものの他は直径約0.3mの穴であり、そのうちP1～P3で柱痕跡を確認した。小穴の平面的な位置関係から、P1～P4が柱穴と考えられる。P9は中央やや南寄りに位置する不整円形を呈する穴であり、埋土はほぼ水平堆積であった。底面は平坦で壁面の傾斜は比較的急であるが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土から土器558点、石器類1点、小穴から土器23点が出土した。土器はV期～VII期のものが目立ち、P9埋土からVII期甕(2114)が出土した。

出土遺物 2113は口頸部が内湾するVII期壺H2類。上約半分に多条沈線と山形文を交互に施文する。2114は口縁端部が直立するVII期甕D2類。2115はVI期甕脚部。直線的に脚部がハの字に開く。2116はV期鉢A類。肩部がやや屈曲し、肩部より上に直線文、刺突文を施文する。2117、2118はV期高坏B類。2117は坏底部が大きく、脚部は基部からゆるやかに外反する。2118は脚部が柱状で透孔付近から、



掘形完掘状況

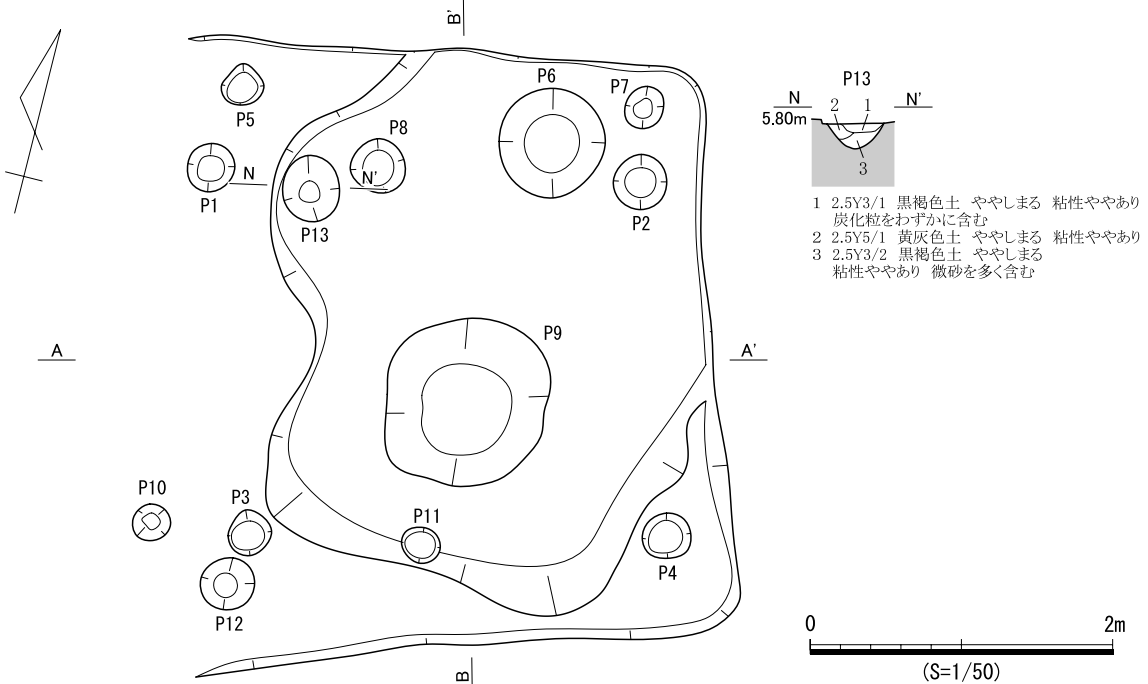


図 848 SB445 遺構図 (2)

裾部が強く外反する。2119はV期器台A類。基部が太くやや直立気味で口縁部、裾部とも強く外反して開く。2120はVII期高坏D類。脚部が強く外反する。2121は砥石。垂円礫の平坦面を砥面として使用しており、裏面は大半が剥離しているものの、わずかに砥面が残っている。

時期 出土遺物の時期差があるものの、V期～VII期のSB443を切ることで、P9出土遺物の時期、埋土の最新遺物の時期などから、VII期と考えられる。

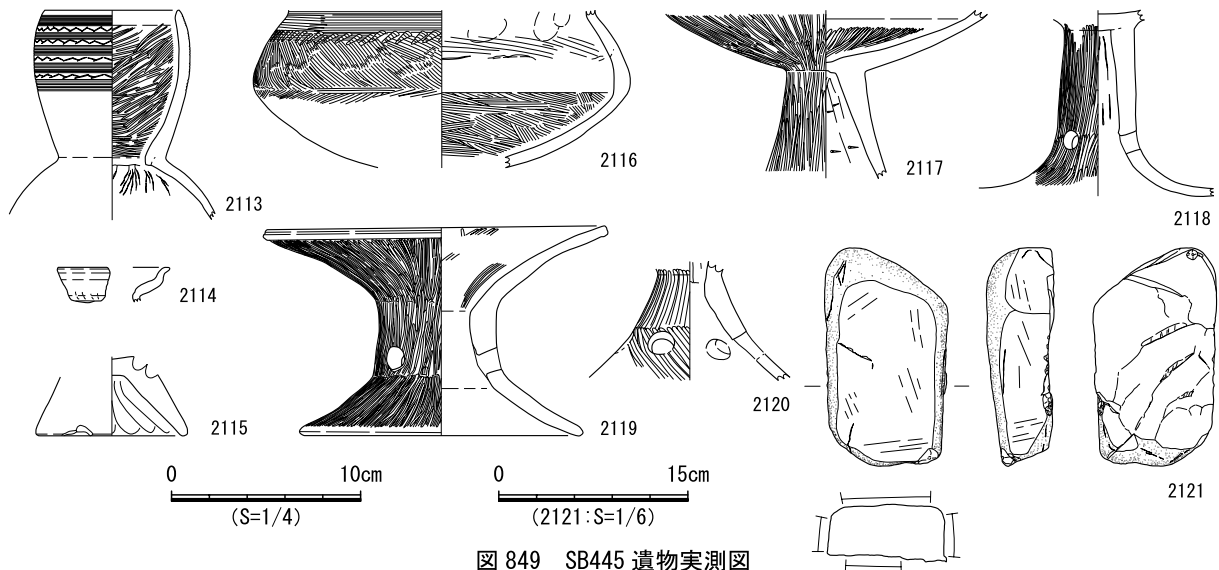


図 849 SB445 遺物実測図

SB448 (遺構：図 850、遺物：図 851)

検出状況 西部東側南寄りに位置し、北側をSK05289に切られる。竪穴住居跡の埋土は確認できず、検出面において壁溝と小穴を検出した。なお、平面形は明瞭であった。

形状 遺構の大半は調査区外へとのびるため規模は不明であるが、壁溝の配置から方形と思われる。

床面 平坦であり、貼床は確認できず、床面にて1基の小穴を検出した。P1は壁溝を切っていると判断したが、両遺構の検出時の埋土の差はほとんど識別できず、ほぼ同時に埋没した可能性が高い。P1は不整楕円形を呈し、検出時から中央部分がより黒く見えた。遺構の周縁部は平坦面があり、中央部分のみ楕円形状に深く、そこからVII期壺(2122)と鉢(2123)、高坏(2124)が出土した。

遺物出土状況 壁溝から6点、小穴から257点の土器片が出土した。土器はVII期のものが主体である。

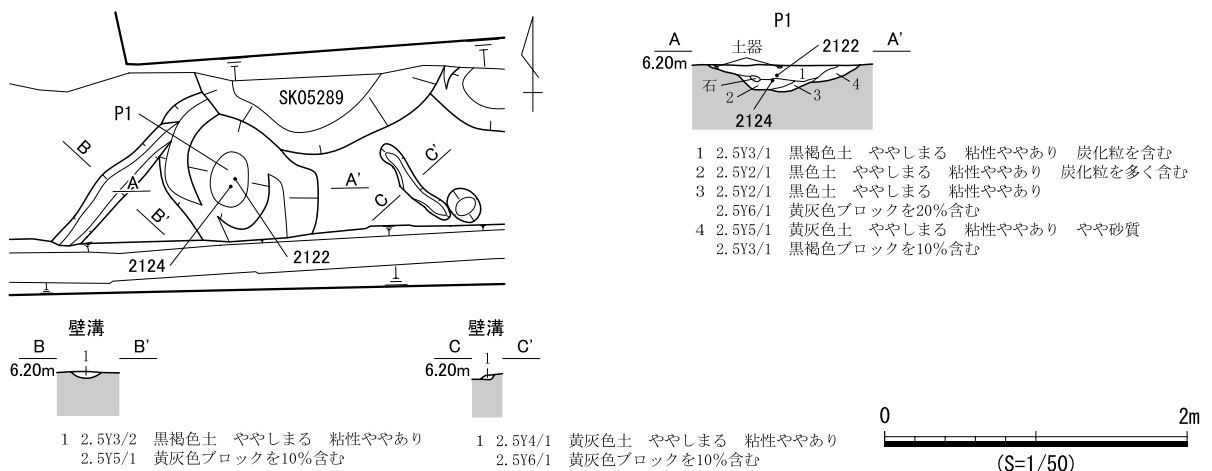


図 850 SB448 遺構図

出土遺物 2122はⅦ期壺G類脚部。脚部はやや外反気味に開き、裾部を欠損する。透孔が3方向に配置される。裾部付近には段が形成され、それより下に多条沈線、2孔1対の穿孔が上部に位置する穿孔の下にも配置される。2123はⅦ期鉢G類。口縁部が弱く屈曲する。外面の屈曲は内面と比べると痕跡的である。2124はⅦ期高坏C4b類。口縁端部が内傾して少条の多条沈線を施文する。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

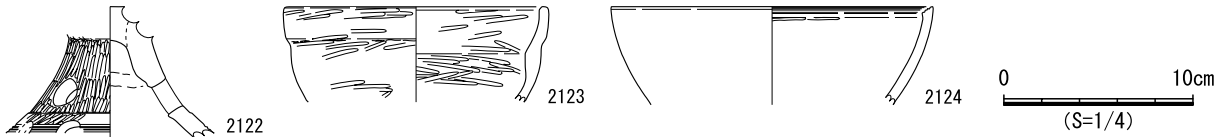


図 851 SB448 遺物実測図

SB449 (遺構：図 852、遺物：図 853)

検出状況 西部東側南寄りに位置する。南東部は攪乱により滅失し、北側が調査区域外にある。本遺構周辺は遺物包含層掘削中から土器が多く出土しており、平面形は明瞭であった。

形状 全形や規模は不明であるが、わずかに検出できた竪穴住居跡の南西隅の形状は丸みを帯びている。深さは約0.2mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 2層に分層した。6層が住居埋土、14層が掘形埋土である。住居埋土はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

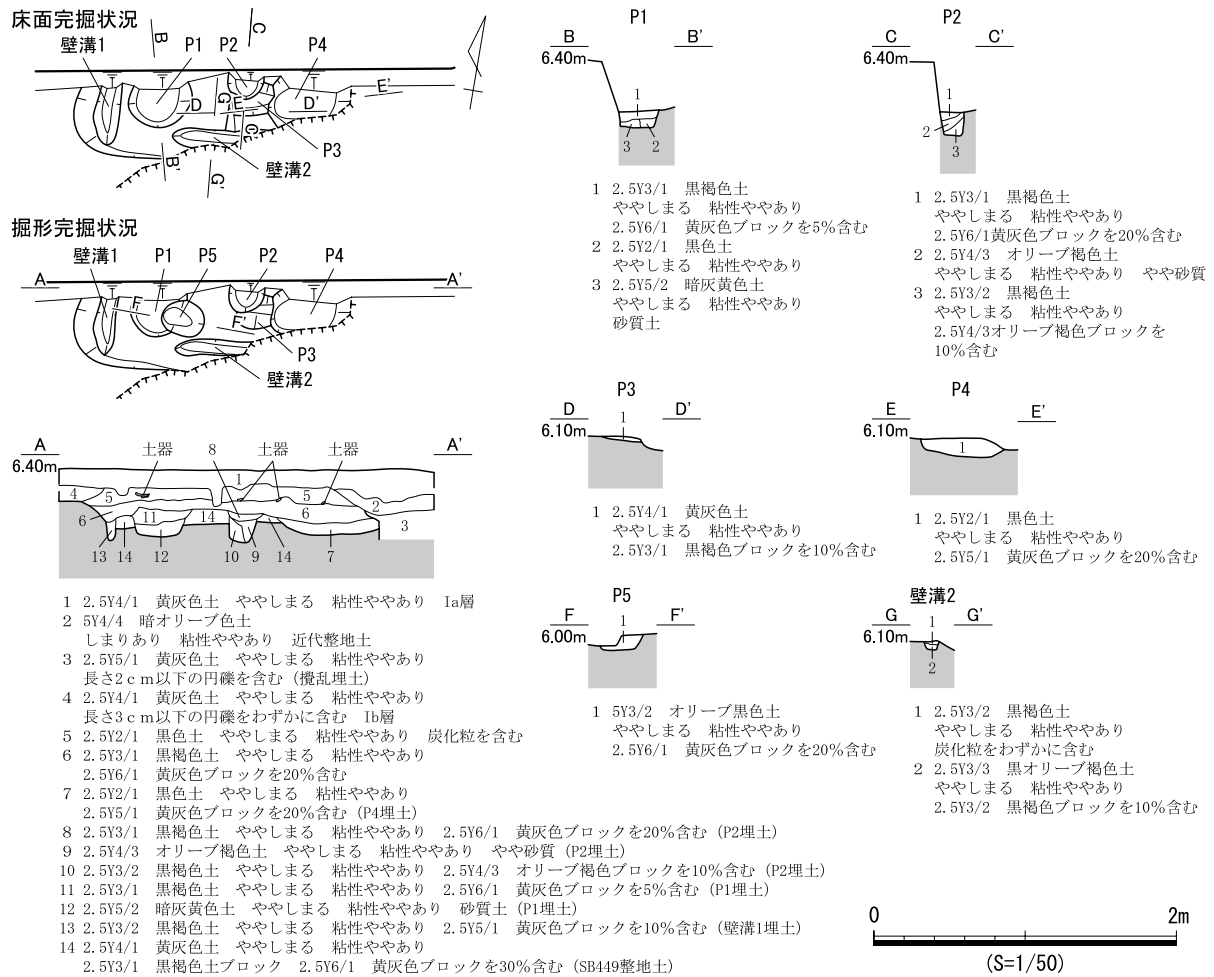


図 852 SB449 遺構図

床面 狭い範囲であるが、床面には高低差があった。床面にて4基の小穴を検出し、その埋土を1～3層に分層したが柱痕跡は確認できず、その性格は不明である。また、西壁と南壁沿いで壁溝と考えられる溝を検出したが、南西隅では途切れていた。床面には明確な硬化面を確認できなかったが、床面を構成する土は黄灰色ブロック土を比較的多く含んでいたため、整地していると判断した。その土を掘削すると小穴を1基(P5)検出した。P5は長軸長約0.3mの楕円形を呈する小穴であり、埋土は単層である。

遺物出土状況 埋土中から155点、小穴と壁溝から52点の土器片が出土した。土器は5層と6層の層境から多く出土し、Ⅶ期のものが主体となる。また、小穴からは甕D2類や壺A3類などのⅦ期の土器が出土している。

出土遺物 2125はⅦ期壺A3類。口縁部内面に段が形成され、口縁上端が上方に拡張される。内面には羽状文が施文され、内外面に赤彩が認められる。2126は打製石鏃未製品。チャート製であり、側辺の形態は丸みを帯び、その剥離調整がまだ不十分である。基部の抉入も浅い。2127は砥石。楕円礫の平坦面と側面を砥面として使用している。

時期 出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

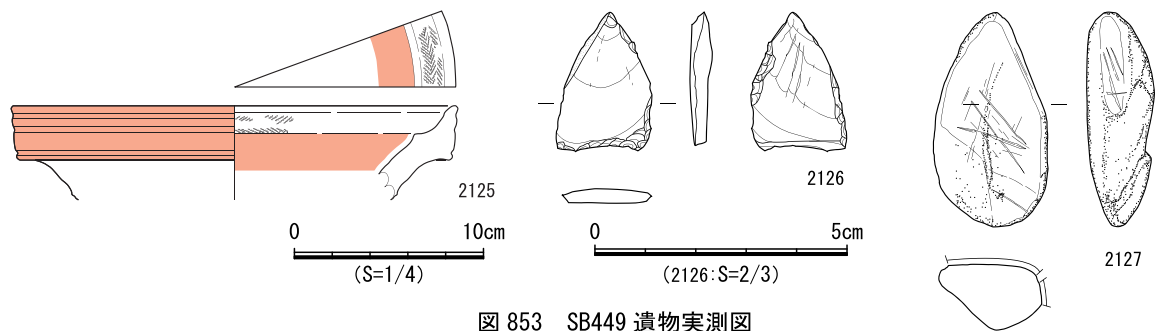


図 853 SB449 遺物実測図

SB450 (遺構：図 855、遺物：図 854)

検出状況 西部東側南寄りに位置する。遺構の上部には攪乱が広がっており、部分的に本遺構の床面まで削平が及んでいる。平面形は遺構の西辺と北辺のみ確認でき、南側は調査区域外へのび、中央をSD1050に切られる。

形状 規模は不明であるが、全形は方形と考えられ、北西隅はやや鋭角気味である。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土 1層が住居埋土、2層が掘形埋土である。遺構検出面から約3cm掘削すると、小穴などの遺構を検出できたため、そこを床面とした。1層は炭化粒をわずかに含む。

床面 平坦であり、貼床(整地土)がある。床面上で小穴7基を検出したがいずれも柱痕跡を確認できず、柱穴と推定できる小穴は確認できていない。壁溝は北壁沿いで明瞭に確認できた。床面では明確な硬化面を確認できなかったが、床面を構成する土は灰色ブロック土を含んでいたため、整地していると判断した。その土を掘削すると、重複する小穴を3基(P8～P10)検出した。P8～P10は長軸長約0.5m～0.7mであり、いずれも埋土中にブロック土を含むが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から62点、小穴と壁溝から57点の土器片が出土したが、いずれも細片である。埋土中からの出土土器はⅥ期～Ⅶ期が主体であり、わずかにⅠ期とⅣ期の土器片も出土した。

出土遺物 2128、2129はVI期甕D1b類。2128は口縁部が短く直立し、端部は内傾する平坦面を形成する。2130はVII期甕C2類。口縁部がやや内湾し、端部に内傾面が形成される。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

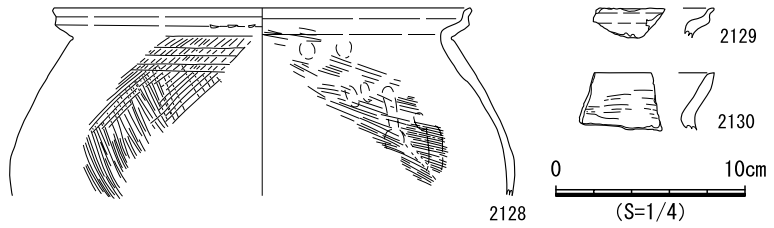
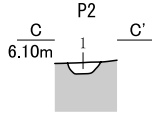
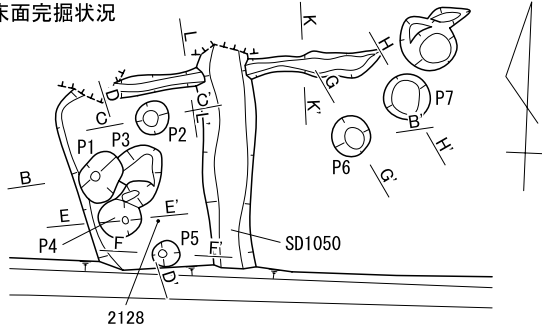
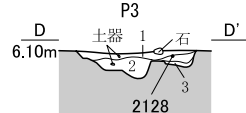


図 854 SB450 遺物実測図

床面完掘状況

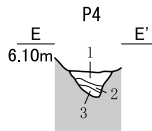
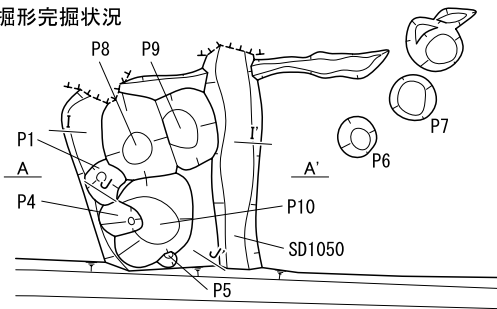


- 1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒を含む
5Y6/1 灰色ブロックを30%含む

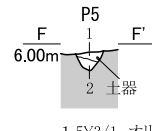


- 1 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5Y4/3 オリーブ褐色ブロックを30%含む 炭化粒を含む
2 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒を含む
3 2.5Y4/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5Y2/1 黒色ブロックを5%含む

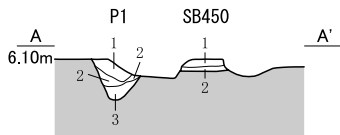
掘形完掘状況



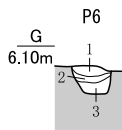
- 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒を含む
2 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを5%含む
3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む



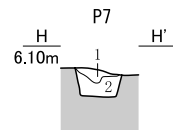
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色土を全体的に含む



- P1
1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを30%含む 炭化物を含む
2 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
3 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y2/1 黒色ブロックを5%含む

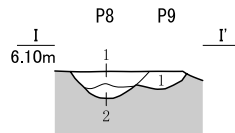
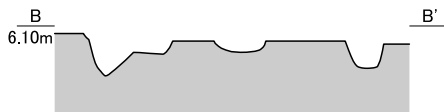


- P6
1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 長さ2cm以下の円礫をわずかに含む
2 2.5Y5/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 砂質土
3 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 砂質土

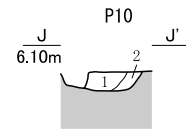


- P7
1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒をわずかに含む
2 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 微砂を多く含む

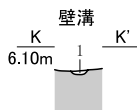
- SB450
1 2.5Y4/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 炭化粒をわずかに含む
2 2.5Y5/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む(整地土)



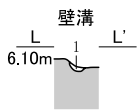
- P8
1 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y2/1 黒色ブロックを3%含む
2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y5/1 灰色ブロックを10%含む



- P10
1 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを20%含む 炭化粒を含む
2 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを30%含む



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを20%含む



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む

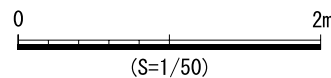


図 855 SB450 遺構図

SB451 (遺構：図 857・858、遺物：図 856)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東西側は攪乱により滅失しており、SB453を切る。平面形は北辺が明瞭、南辺が不明瞭であった。

形状 検出した北辺は直線的にのび、南辺はやや歪んでいるが、ほぼ平行することから、全体形は方形を呈すると考えられる。南北長約6.5m、深さ約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 3層に分層した。1層は炭化物が点在し、2・3層はブロック土が含まれる。ブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床は確認できなかった。床面上では小穴を15基確認した。そのうち、柱痕跡と思われる土層を確認できた遺構はP6、P10、P13、P14であり、それ以外で掘形が深い遺構はP1、P3、P12である。これらの配置に規則性は見出せず、いずれかが本遺構の柱穴となる可能性があるものの確証はない。また、床面中央付近ではP5を検出した。P5は不整形を呈し、底面は西側で楕円形状の平坦面があり、東側はやや高く、壁面の傾斜は比較的急である。埋土は6層に分層でき、ブロック土の混入が目立つことから人為堆積と考えられる。P5埋土中程からⅦ期高坏(2132)とⅥ期～Ⅷ期甕(2134～2136)、炭化材などが出土した。2136は口縁部が北端で、体部がほぼ半分に割れた状態で、中央北寄りと南寄りの離れた場所で出土した。

遺物出土状況 埋土中から192点、小穴から544点の土器片が出土した。小穴のうち、P5からは405点の土器片が出土している。埋土中からの出土土器はⅥ～Ⅶ期が主体であり、P5からはⅥ期～Ⅷ期の土器片(2132、2134～2136)が出土した。

出土遺物 2131はⅥ期壺A1a類。口縁端部を下方に拡張し、やや幅広の擬凹線を2条施文する。2132はⅦ期高坏C3c類。内面に多条沈線が認められる。2133はⅥ期～Ⅶ期甕E1類。口縁部が短く外反し、端部が平坦である。2134、2135はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。2135は裾部がわずかに内湾する。2136はⅧ期甕。脚部を除く、口縁部から胴部はほぼ完存する。口縁部が頸部から短く屈曲して、端部が強く外反し尖り気味である。胴部は肩部が強く張り、倒卵形を呈す。肩部よりやや上半にヨコハケが認められる。底部には穿孔が認められる。

時期 小穴出土遺物の時期と、Ⅵ期～Ⅶ期のSB453を切ることから、Ⅵ期～Ⅷ期と考えられる。

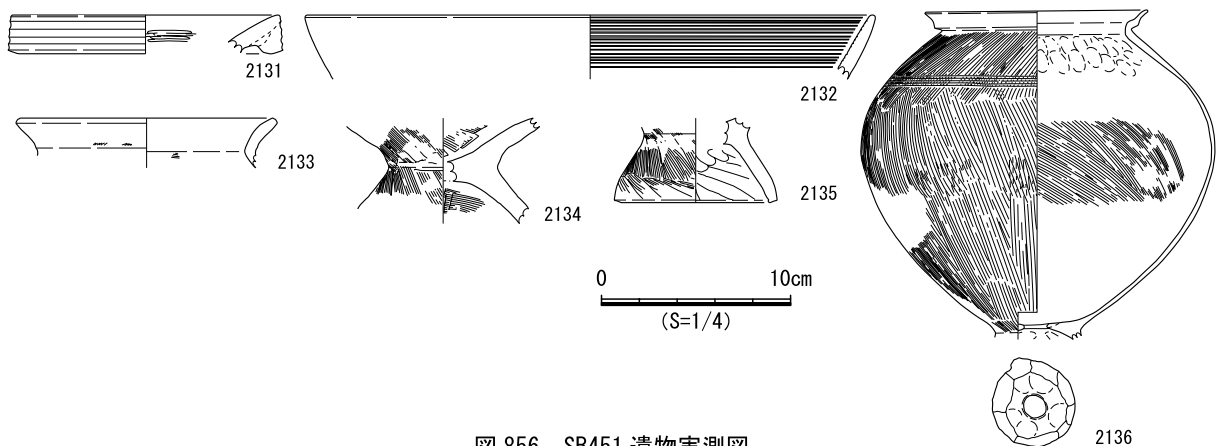


図 856 SB451 遺物実測図

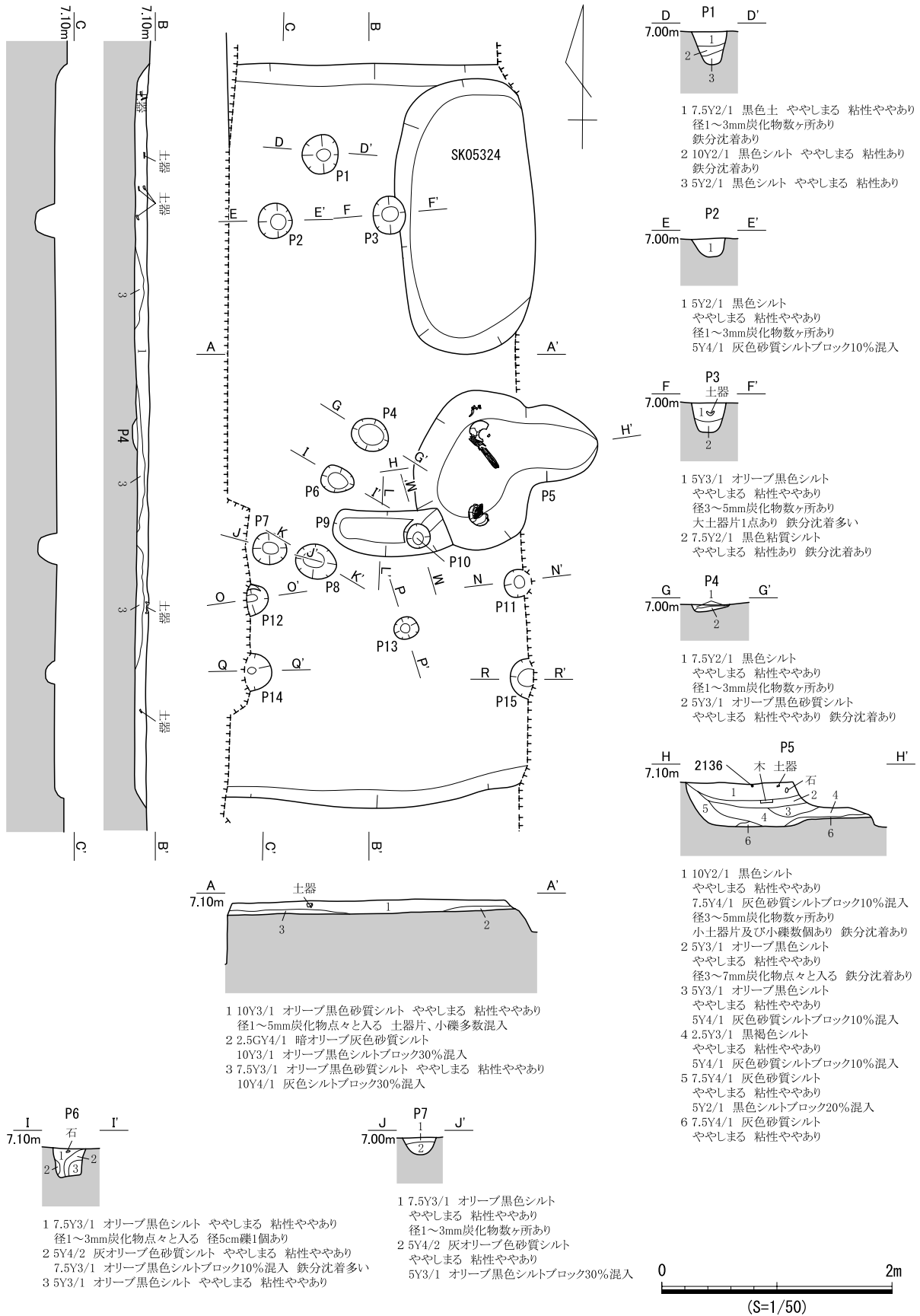


図 857 SB451 遺構図 (1)

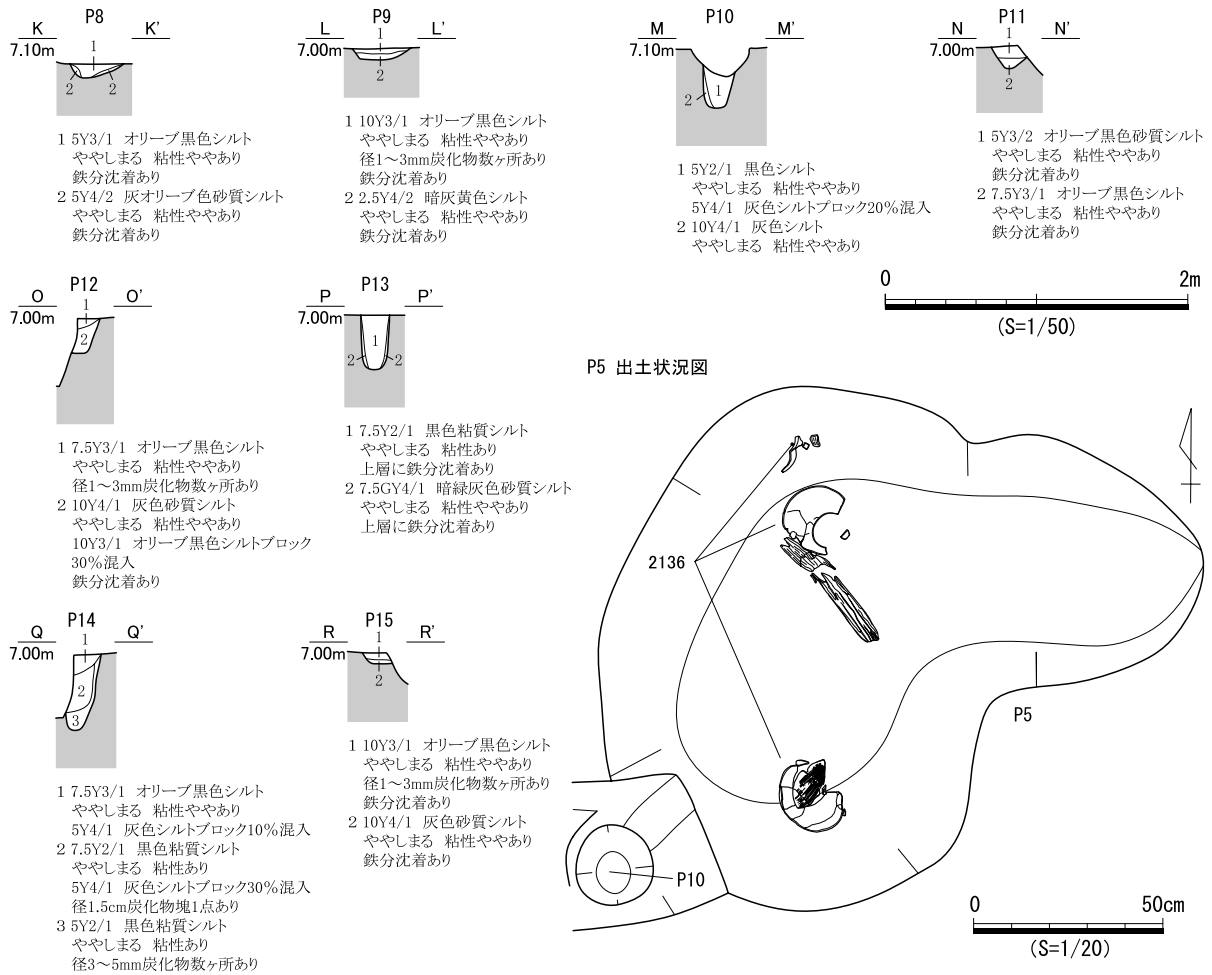


図 858 SB451 遺構図 (2)

SB452 (遺構：図 860、遺物：図 859)

検出状況 西部西側南寄りのNR012東側に位置する。西側をSK4996、南側をSB445に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状 部分的な検出であるため全形は不明であるが、遺存した範囲から方形もしくは長方形と考えられる。なお、検出した範囲の壁面の傾斜はやや緩やかである。

埋土 単層である。礫をやや多く含む土であるが、その成因は不明である。

床面 ほぼ平坦であり、貼床や炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴3基を検出した。そのうちP1では柱痕跡を確認し、平面的な位置からも柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土から土器39点、石器類1点、小穴から土器9点が出土した。土器はⅦ期のものが少量確認できた。

出土遺物 2137はⅦ期器台B4類。口縁端部を垂下させ、その外面に多条沈線を施す。

時期 出土遺物の時期とⅦ期のSB445に切られることから、Ⅶ期と考えられる。

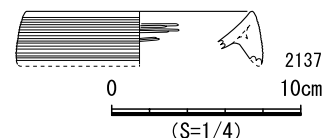


図 859 SB452 遺物実測図

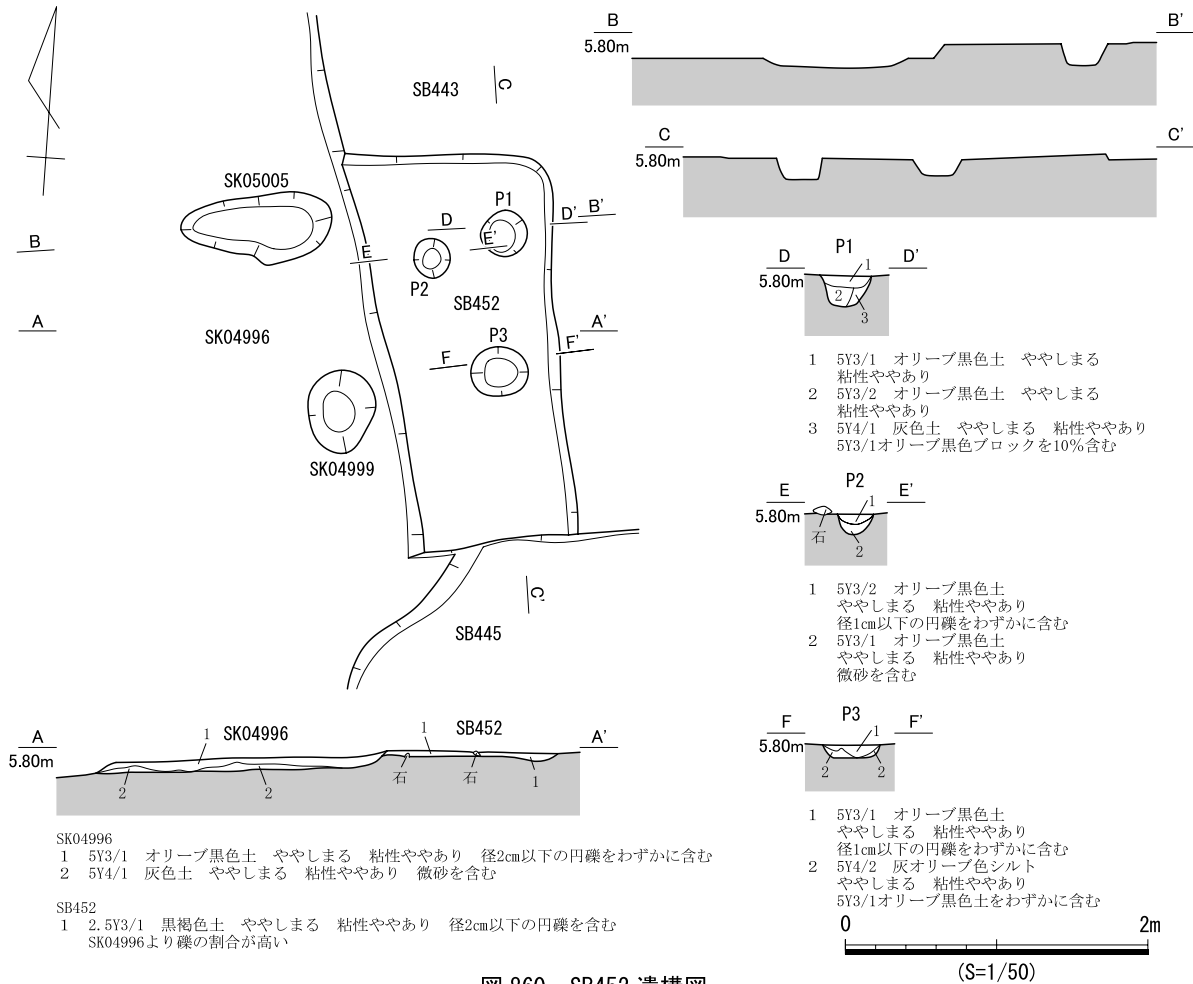


図 860 SB452 遺構図

SB453 (遺構：図 862・863、遺物：図 861)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は攪乱により滅失している。北西側をSK06042に、南西側をSK05326に切られている。本遺構の北側はSB451床面で検出でき、平面形は明瞭であった。

形状 南北長約3.7mで、隅丸方形を呈する。深さは約0.1mで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土 8層に分層した。上層から下層までブロック土の混入が目立つことから、人為堆積と考えられる。

床面 平坦であり、貼床は確認できなかった。床面上にて小穴を15基確認した。小穴のうちP3では柱痕跡を確認し、P1、P2、P4は掘形が深く、壁面はほぼ垂直である。平面的な位置関係から、P3とP4が柱穴と考えられる。また、P5は住居北東隅にある楕円形を呈する小穴であり、P3はP5の底面で検出した。

遺物出土状況 埋土中から377点、小穴から343点の土器片が出土した。埋土中からの出土土器はVI～VII期のものが多く、P5では検出面からやや下位で3つの小粘土塊が出土した。

出土遺物 2138は小型のVII期壺A4類。頸部が直立して、口縁部が短く水平に伸びる。口縁部が他の同類

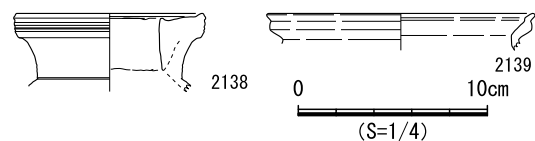


図 861 SB453 遺物実測図

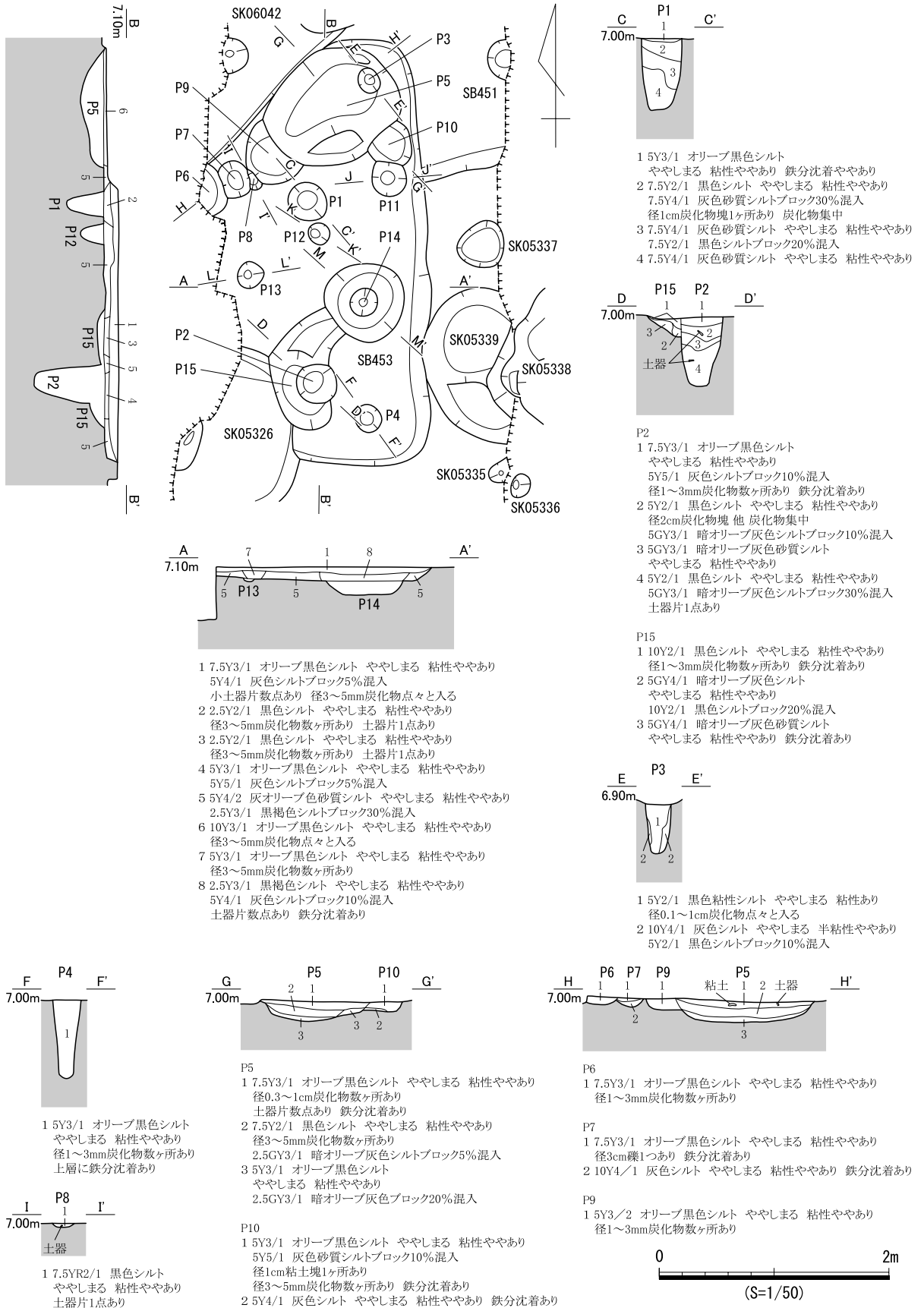


図 862 SB453 遺構図 (1)

に比べると極端に短い例である。2139はVI期甕D1b類。口縁部が短く直立してから端部が強く外反し、凹面を形成する。外面に磨耗の著しい刺突文が認められる。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

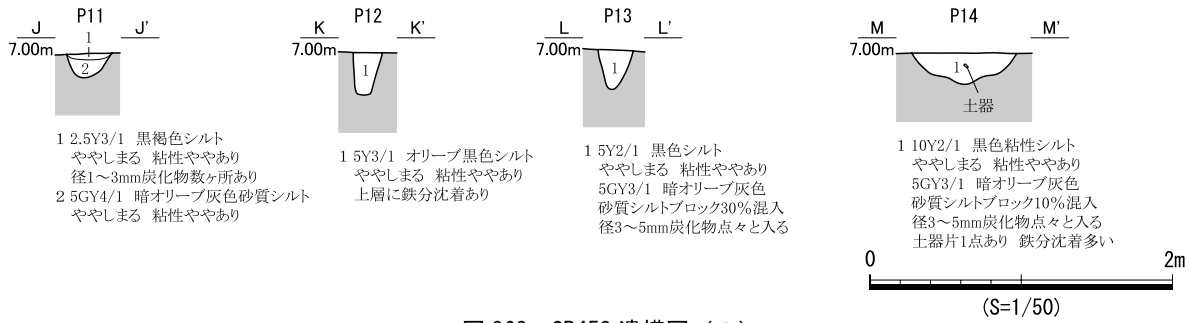


図 863 SB453 遺構図 (2)

SB454 (遺構：図 864・865)

検出状況 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は攪乱により滅失している。SK05363、SK05379、SD1070に切られるが、平面形は不明瞭であった。

形状 北西-南東長約3.6m、北東-南西長約4.0m以上であり、北東から南西に長い長方形を呈する。深さは約0.1mであり、壁面の傾斜は比較的緩やかである。

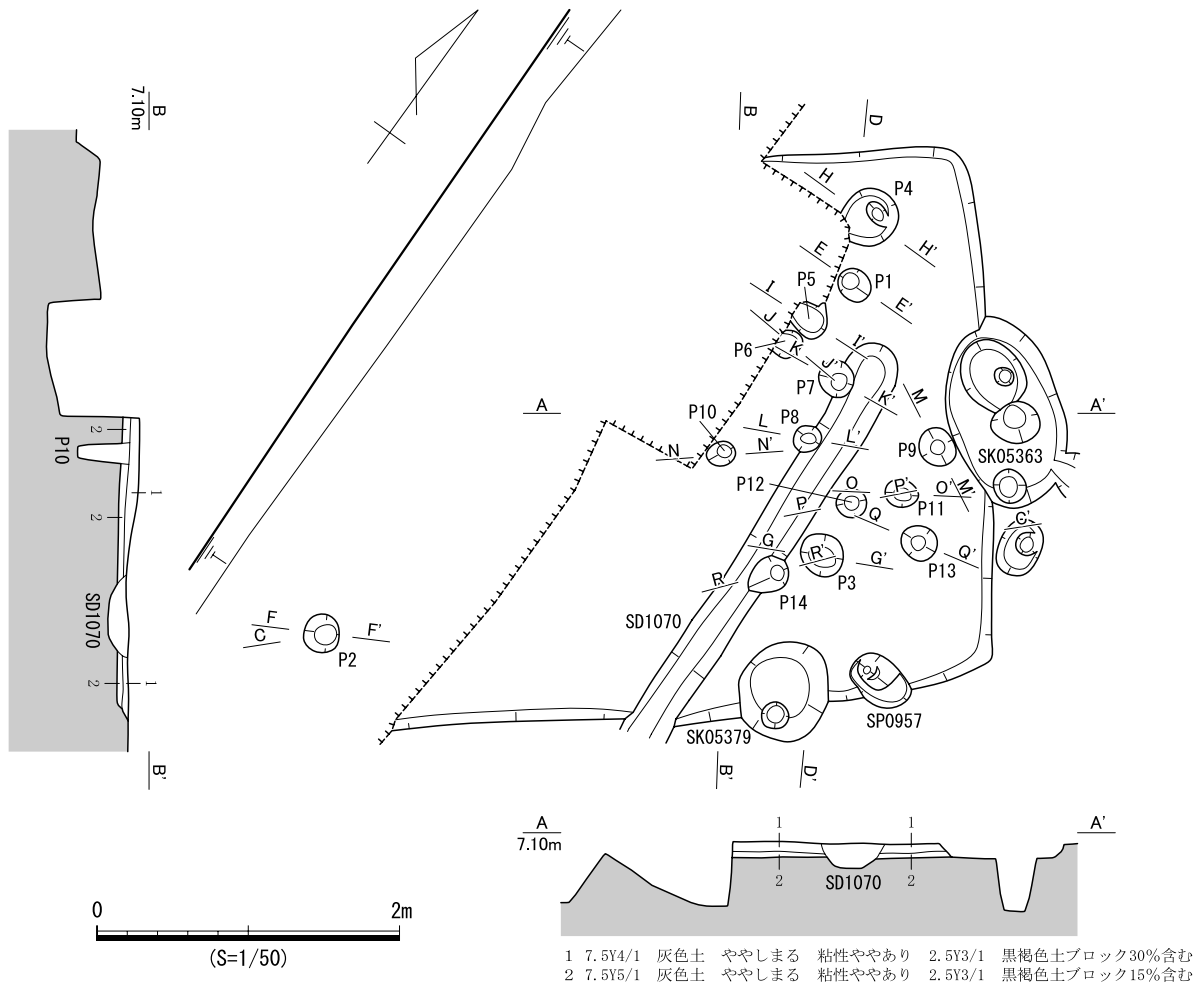


図 864 SB454 遺構図 (1)

埋土 2層に分層した。1層が住居埋土、2層が掘形埋土である。住居埋土はブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。なお、掘形底面で遺構は検出できなかった。

床面 平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上では小穴を14基検出し、そのうちP1、P3、P8～P11の6基は土層断面で柱痕跡を確認した。この6基は住居中央東寄りに集中しており、平面的な位置関係からP1とP3が柱穴と考えられる。また、P2は攪乱下での検出であるが、底面標高はP1やP3よりわずかに低く、柱穴となる可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から359点、小穴から104点の土器片が出土した。土中からの出土土器はVI～VII期が主体となるが、いずれも細片であり図示しなかった。

時期 出土遺物の時期から、VI期～VII期と考えられる。

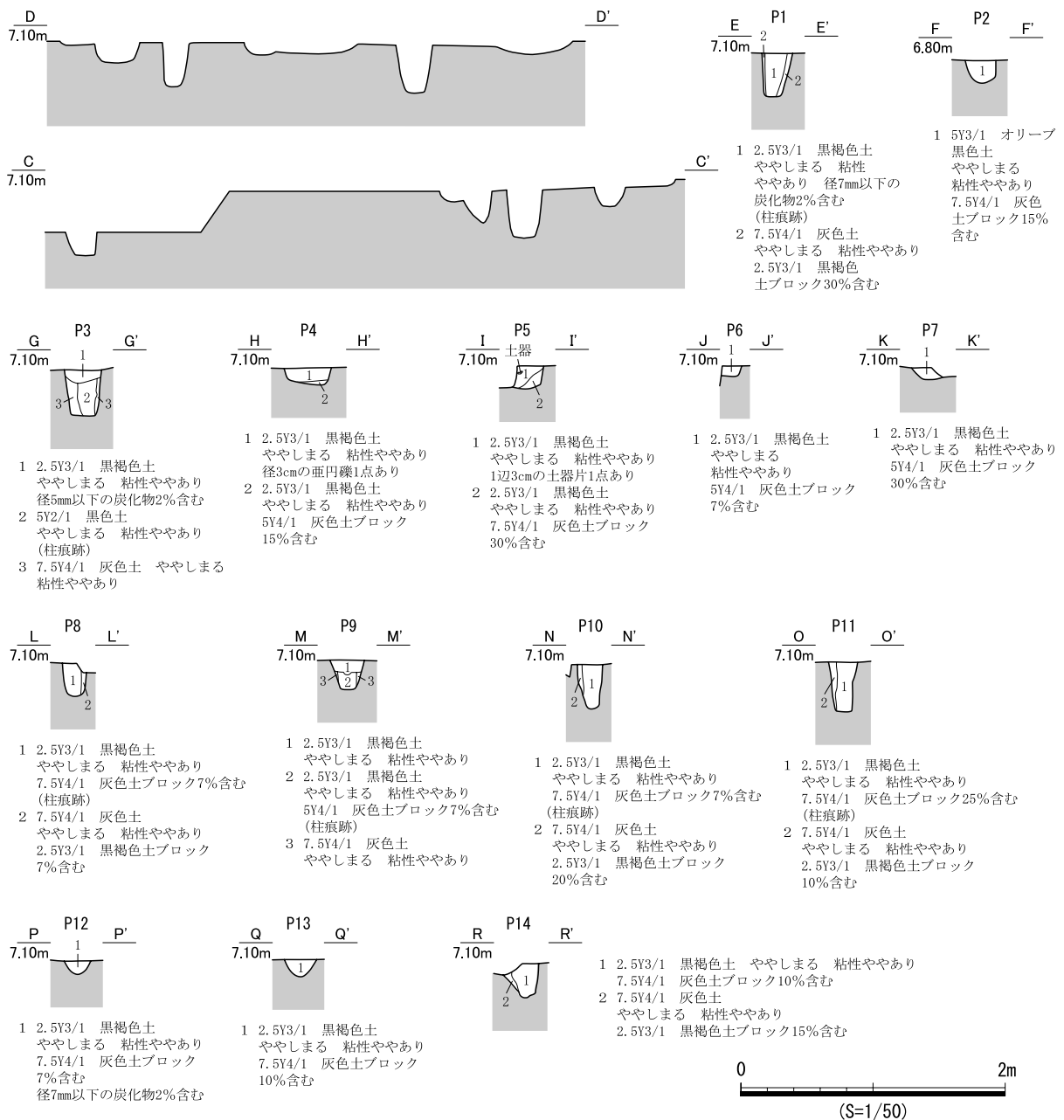


図 865 SB454 遺構図 (2)

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集

荒尾南遺跡B地区Ⅱ
(第2分冊)

2015年3月13日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとしんさつ